

広大科研

20

16520418

0100465932

植民地後期ジャワ住民煙草産業史研究

16520418

平成16年度～平成19年度科学研究費補助金
(基盤研究(C)) 研究成果報告書

平成20年5月

研究代表者 植村泰夫

広島大学大学院文学研究科教授

広島大学図書

0100465932



植民地後期ジャワ住民煙草産業史研究

課題番号16520418

平成16年度～平成19年度科学研究費補助金
(基盤研究(C))研究成果報告書

平成20年5月

<はしがき>

本研究は、19世紀初頭～1930年代末の時期のジャワ住民煙草産業を(a)農民の商業的農業としての側面、(b)流通・商業的側面、(c)クレテック煙草産業を中心とした住民工業的側面、(d)住民の消費的側面、の4つから検討することを目的とした。(a)については、中ジャワ山間部とレンバン理事州の事例から、①内地市場向けの栽培・加工方式は19世紀初から20世紀前半まで基本的に変わっておらず、②それらは輪作形態や施肥、家畜飼育との結合などから見て稲作と比較しても高い技術水準にあった、③内地市場向け煙草栽培は概して農家経済にとって有利だったこと、④ヨーロッパ市場向け煙草栽培が併存する地域では、農民は市況を見て販売先を切り替えてきたこと、などを明らかにした。(b)では、①煙草取引では華人商人が圧倒的優位にあったが、②前貸しの存在にもかかわらず、商人が生産者を一方的に支配する関係ではなかった、③原料煙草のジャワ内流通は1910年頃までは中ジャワ山間部産が北海岸経由で西向きに、レンバン煙草は東向きという市場分割状況が見られたが、④スマラン・チェリボン蒸気軌道などの鉄道開通とクドゥスを中心としたクレテック産業の発展により、ケドゥー煙草が本格的に東に向かい始め、それまでの市場分割が崩れたこと、などが解明された。(c)と(d)については、①ジャワでの製品煙草製造開始は1850年代前後だが、本格化は1910年代で、輸入シガレットと現地産シガレット、ストローチェが激しい競争を演じたこと、②1930年代には恐慌の影響で高価な輸入シガレットは激減し手作りシガレットとストローチェが増したが、さらに安価な手巻きシガレット、手巻きストローチェの挑戦をうけたこと、などが明らかになった。以上の諸点の詳細は以下に掲げた雑誌論文及び本報告書で述べたが、これらの解明はこの経費を利用して調査を実施したオランダ国立文書館所蔵の鉄道会社文書の利用によって、初めて可能になったものである。

[研究組織]

研究代表者： 植村泰夫 (広島大学大学院文学研究科教授)

交付決定額 (配分額)

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成16年度	1,100,000	0	1,100,000
平成17年度	1,000,000	0	1,000,000
平成18年度	1,000,000	0	1,000,000
平成19年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,700,000	180,000	3,880,000

広島大学図書

0100465932



[研究発表]

(ア)雑誌論文

植村 泰夫「植民地後期ジャワ住民煙草産業史研究序説」(『文化交流史比較プロジェクト研究センター報告書』2号、査読無、2005年、pp.11-38)

植村 泰夫「植民地後期ケドゥーにおける内地市場向け煙草の生産構造」(『広島東洋史学報』10号、査読無、2005年、pp.59-93)

植村 泰夫「植民地後期ケドゥーにおけるヨーロッパ市場向け煙草栽培に関する覚書」(『広島大学大学院文学研究科論集』65巻、査読無、2005年、pp.1-19)

植村 泰夫「植民地後期ジャワ製品煙草研究序説」(『広島東洋史学報』11号、査読無、2006年、pp.37-64)

植村 泰夫「植民地後期トゥバンにおける住民煙草産業」(『文化交流史比較プロジェクト研究センター報告書』4号、査読無、2007年、pp.1-19)

植村 泰夫「植民地後期レンバン煙草の生産と流通をめぐって」(『広島東洋史学報』12号、査読無、2007年、pp.21-53)

植村 泰夫「植民地後期バニユマス理事州における内地市場向け煙草の生産と地域経済」(『史学研究』259号、査読有、2008年、pp.27-47)

(イ)学会発表

植村 泰夫「植民地期ケドゥー(中ジャワ)における内地市場向け煙草の生産構造」

(東南アジア史学会中国・四国地区例会、2005年10月1日、広島市女性教育センター)

目次

序章	3
I, インドネシア概観	3
II, 植民地経済の構造と住民煙草産業	9
第1章 植民地後期ジャワ住民煙草産業史研究序説	10
はじめに	10
I, 世界の中のインドネシア産原料煙草の位置	12
II, ジャワ煙草栽培小史	14
III, ジャワにおける製品煙草	21
おわりに	29
第2章 植民地後期ジャワ製品煙草研究序説	29
はじめに	29
I, ジャワにおける製品煙草製造の開始から第一次世界大戦まで	30
II, 第一次世界大戦期のジャワ製品煙草産業の発展	34
III, 1920年代の事態の発展	38
IV, 1930年代における製品煙草の推移	43
おわりに	51
第3章 植民地後期ケドゥーにおける内地市場向け煙草の生産構造(2005年執筆)	52
はじめに	52
I, ケドゥーにおける内地市場向け煙草栽培の発展	53
II, ケドゥーにおける煙草栽培・加工の特徴	58
III, 煙草栽培の経済学	68
おわりに	75
第4章 植民地後期バニユマス理事州における内地市場向け煙草の生産と地域経済	77
はじめに	77
I, 内地市場向け生産の発展とその特徴	77
II, バトゥール煙草の取引	82
III, 煙草と地域の農民経済	84
おわりに	89
第5章 植民地後期トゥバンにおける住民煙草産業	89
はじめに	89
I, トゥバン住民煙草産業小史	90
II, 原料煙草の生産	92
III, 原料煙草の流通	96
IV, トゥバンにおける葉巻製造業の発展	100
おわりに	102

第6章 植民地後期レンバン煙草の生産と流通をめぐって	104
はじめに	104
I, レンバン煙草小史	104
II, 生産の特徴	112
III, レンバン煙草の流通	120
おわりに	126
第7章 植民地後期における中部ジャワ山間煙草の流通をめぐって	127
はじめに	127
I, 従来 of 流通経路	128
II, 鉄道・軌道開通による煙草流通経路の変化	137
III, クレテック・ストローチェ産業発展の影響	145
おわりに	147
引用文献目録	148
表	

序章

この報告書ではオランダ植民地下にあったジャワの住民煙草産業を、19世紀~20世紀前半の時期を対象に検討する。それに先だって、インドネシアに関する基礎的なことがらをいくつか述べておきたい。

I, インドネシア概観

[国土面積] 1,948,732km² (日本の5.5倍)

インドネシアは赤道をはさみ北緯6度~南緯11度(南北1,888km)、東経95度~141度の間(東西5,510km)に位置し、ほぼヨーロッパ大陸に匹敵する広大な海域に5つの主要な島(スマトラ、ジャワ・マドゥラ、カリマンタン、スラウェシ、イリアンジャヤ)、30あまりの小さな島、無人島まで全て含めると17,508(1993年版のIndonesia, Official Handbookによる。従来は13,667といわれていた。)の島からなる島嶼国家である。このうち、人の住むのはほぼ3,000程である。

[気候]

インドネシアの気候は熱帯の2つのシーズンに分けられる。乾季(6~9月)にはオーストラリア大陸から乾燥した空気が東モンスーンによって運ばれてくる。これに対して雨季(12~3月)には、インド洋からの湿った空気が西モンスーンとなって到来し、雨を降らせる⁽¹⁾。このことが古くからインドネシアの農業を規定してきた。平均気温は沿岸平地部で28度、内陸部と山間部で26度、高地では23度で、平均湿度は70~90%である。

(1)ただし、中部マルクの気候は例外的であり、雨季は6~9月、乾季は12~3月である。

[人口]

人口は1997年に2億を越え、中国、インド、アメリカ合衆国に次ぐ。71年以来のセンサスは表J-1に示したとおりであるが、問題はこの大人口の60%近くが面積比が6.89%しかないジャワ・マドゥラ(日本の本州の約2/3)に集中していることであり、人口密度(表J-2)は900人を越えた。とりわけ首都ジャカルタを中心としたジャカルタ特別区への集中はすさまじい。これに対しインドネシア東部は人口が過疎であり、特にパプア(かつてのイリアンジャヤ)はジャワ人の移民増加でこの間に人口が急増しているにもかかわらず、なお密度は6人程度である。

このようなジャワにおける大人口は、19世紀以来の急速な増加によるものであるとされている。19世紀初頭の統計によると、ジャワの人口は約360万人(1802年)ないし450万人(1815年)と推定されており、これが1900年のセンサスでは2850万人となっている。1930年の人口調査では4172万人、戦後の1961年調査では6299万人、1985年センサスでは9950万人(753人/km²、ちなみにこれに次ぐのはバリの474人であり、逆にイリアン・ジャヤは3人、カリマンタンは14人と小さい)である。こうして見ると、特に19世紀の100年間には6~8倍の人口増があったことになる。

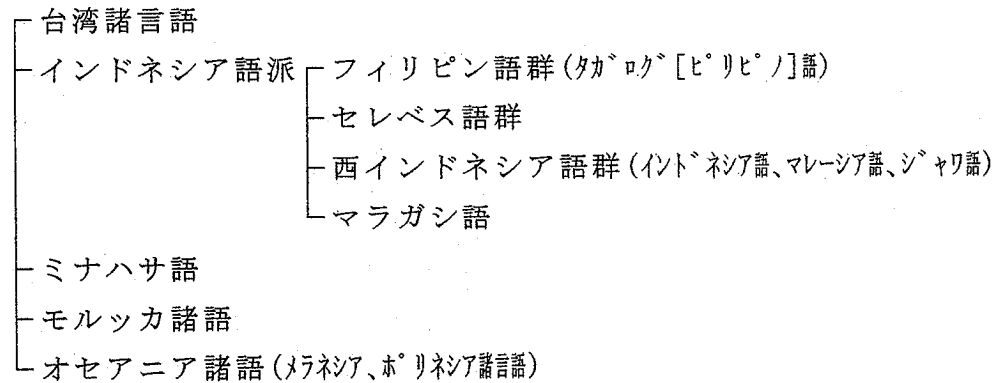
[言語・民族]

インドネシア共和国は「多様性の中の統一」という国是を持つ。このスローガンはインドネシアの言語状況をよく示している。多様性とは国内で数百の地方語(Bahasa Daerah)と方言が話されている状況を示し、その中の統一とは現在の国語であるインドネシア語(Bahasa Indonesia)による統一である。地方語の中で最大のものは、国民の約40%が使用するジャワ語(中~東ジャワ)である。これに続いてスダ語(西ジャワ、約15%)、ムラユ語(東

スマトラ、約 12%)、以下、マドゥラ語(マドゥラ島及びジャワ東端地方)、ミナンカバウ語(西スマトラ)、プギス語(南スラウェシ)、バタック語(スマトラ北東部)、バリ語(バリ)、バンジャル語(南カリマンタン)などが、主要な地方語である。

こうした地方語間では、日本に於ける方言間の関係とは異なってお互いの対話が不可能である。例えば、ジャワ人がジャワ語でしゃべるのを西スマトラのミナンカバウ人は理解することが出来ないし、逆も同様である。こうしたことが今世紀の初め、民族主義運動の中で共通語＝インドネシア語を作る努力を生んだ原因となった。インドネシア語は、言語学的にはマレー語であり、オーストロネシア語族(マレー・ポリネシアン語族：マレー半島、インドネシアからフィリピン、台湾の先住民、太平洋諸島に分布)インドネシア語派に属する。

オーストロネシア語族の諸言語を分類するとほぼ次のようになる。



インドネシア語のもとになった言葉は、元来、マレー半島、スマトラ東岸地方などマラッカ海峡をはさむ地方に分布していた言葉であった(現在のムラユ語が最も近い)が、この海峡を本拠に群島部に交易網を張り巡らして勢力を誇ったスリウィジャヤ、マラッカ王国の手で各地に広められ、商業語として一種の共通語となった。こうした基礎の上に、民族運動の中でこの言葉が国語としての地位を確立していったのである。

現在、インドネシア語は、小中高、大学での教育はじめ、いっさいの公的活動、新聞、ラジオ、テレビ、出版に使用されている。したがって、インドネシアの人々はいわゆるバイリンガルであり、公的な場ではインドネシア語を使用するが、同じ地方語集団内部では地方語を使用することになる。

以上に述べたような言語の多様性は、この国の民族集団の多様性の反映である。インドネシア共和国を支えるナショナリズムの観念に従うならば、インドネシアには1つの民族(bangsa)＝インドネシア民族しか存在しない。しかし、その内部には上に述べたような言語の違い、生活習慣の違いを持つ、またそれぞれが一体意識を持つ多くのエスニックグループが存在する。インドネシア語では、これらを **suku bangsa** とよぶ。こうしたグループは数百は存在すると考えられているが、基層文化の上では広い共通性を有するものの、それらを一つの国民に統合するという事は容易ではない。

そして、さらに問題を複雑にしているのが、華人の存在である。華人は現在では独立したカテゴリーとして数えることは行われておらず、また定義によってその数が大きく異なるので、公の人口統計はないが、ある推計では 1997 年現在で 731 万人(世界で最も華人が多い)、全人口の 3%強と見られる。彼らは基層文化の共通性はもちろんなく、しかもイ

インドネシアの経済の中で極めて大きな比重を占める。

[宗教]

次に、文化の中でも人々の生活に大きな影響を持つ宗教の事情について概観しておく。インドネシアの人々は、日本などとは異なり、一般には信仰心篤い人々である。現在、インドネシア国民の約 87.2%はイスラーム教徒であるといわれている。人口から単純に計算するとおよそ 1 億 7000 万人余りがイスラムを信仰していることになる。今、世界のイスラム教徒の総人口は約 11 億とされるので、インドネシアのムスリムは約 15%を占め、この国は世界最大のイスラム国である。

もっとも、イスラームは国教ではない。インドネシアは 17 世紀初め以来、オランダの植民地支配を受けた後、1942-45 年の日本軍政を経て、1945 年 8 月 17 日に独立した。その時に建国 5 原則（パンチャシラ）⁽²⁾が定められたが、その第一原則では「唯一至高神への帰依」が唄われ、また 1945 年に定められ現在も有効な憲法の 29 条は、「国民の信教の自由及び宗教的義務遂行の自由の保証」を規定している。

(2)パンチャシラの正文は 45 年憲法＝現行憲法の前文中に記載されているが、その内容は次の通り。①唯一神への信仰、②公平で文化的な人道主義、③インドネシアの統一、④協議と代議制において英知によって導かれる民主主義、⑤インドネシア全人民に対する社会正義。

政府は、イスラムとともにカソリック、プロテスタント、ヒンドゥー教、仏教の 5 つを国家公認の宗教として定め、平等に憲法に定めた権利保証の対象にする基本方針を採っている。公認以外の宗教や無宗教は許されず、国民は公認宗教のいずれかを選び、住民登録や国政調査の際に申告する。こうした国民の宗教問題を統括するのが、中央政府に 1946 年以来設けられている宗務省である。宗務省は、公認宗教に対して宗教教育、礼拝設備、出版活動などの面で財政補助を行い、ムスリムのメッカ巡礼を組織する。宗務省の管轄下にイスラム法の適用を行うイスラム宗教裁判所が州・県レベルに設けられ、イスラム教徒の結婚、離婚、相続などの処理にあたっている。宗務省の地方機関である宗務事務所は郡レベルまであり、ムスリムの結婚、離婚はここに登録される。村レベルでは村の役人の中に宗務担当のポストが設けられており、郡の宗務事務所の指導の下に村民の宗教生活の指導にあたっている。教育の中でも、普通学校のカリキュラムには週 3 時間の必修の宗教の時間があり、宗務省職員である宗教教師が生徒・学生の信仰する宗教に従って授業を行う。この他、プサントレン、マドラサなどのイスラム教育機関は至るところにあり、多くの子供達がイスラムを学んでいる。また、高等教育機関としてはイアイエン (IAIN: Institut Agama Islam Negeri) = 国立イスラム高等学院という宗務省管轄の大学レベルのイスラム高等教育機関、カトリックのセミナー、プロテスタントの神学校などがあり、これらの多くは政府からの助成を受けている。

インドネシアの宗教事情に特徴的なことは、地域的な差異である。先に述べたようにインドネシアの最大の宗教はイスラムであるが、バリ（多数派はヒンドゥー教）、東チモール（カソリック）東ヌサ・トゥンガラ（プロテスタントとカソリック）、北スラウェシ（プロテスタント）、イリアン・ジャヤ（プロテスタントとカソリック）ではイスラムは少数派である。また、各地に住む華人の中では儒教（道教）の信仰が多いが（但し、インドネシアの公式な区分では仏教とされる）、1965 年以降はキリスト教への改宗が増えている。

イスラム(87.2%)：アチェ、西スマトラ、南スマトラ、ブンクル、西ジャワ、中ジャワ、東ジャワ、南カリマンタン、南東スラウェシ、西ヌサトゥンガラは95%超

プロテスタント(6.0%)：北スマトラ(27.96%)、西カリマンタン(11.07%)、中カリマンタン(15.4%)、北スラウェシ(49.1%)、中スラウェシ(20.3%)、東ヌサトゥンガラ(27.6%)、マルク(40.9%)、イリアン・ジャヤ(63%)、

カソリック(3.6%)：西カリマンタン(19.11%)、東ヌサトゥンガラ(54.2%)、イリアン・ジャヤ(20%)、東チモール(91.4%)

ヒンドゥー(1.8%)：中カリマンタン(15.8%)、バリ(93.18%)

仏教(1.0%)：リアウ(7.3%)

その他(0.3%)

[植民地化以後のインドネシア史概略]

インドネシアは1942年までオランダの植民地支配下におかれていたが、この地域にオランダ人が初めて来たのは1596年のことで、ハウトマン(Houtman)率いる艦隊が西ジャワ・バンテン港に到来し、その後ジャワ北岸を経由してバリに至り、オランダへ戻った。『ハウトマン、ファン・ネック東インド諸島への航海』(岩波書店、大航海時代叢書、第2期10、1981年)はその航海記である。

これ以降、オランダ人は争って東インドへ赴き、やがてそれは1602年のオランダ東インド会社(V.O.C.)設立に繋がった。当時、モルッカ諸島(現在のマルク)でしか産出しなかった丁字(クローブ)とニクズクを中心とした香料はヨーロッパ市場で最も珍重され利益の上がる産物であり、ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリスなどがその交易の独占を目指して激しく争ったが、最終的にオランダが勝利を収め、17世紀中頃にはこの地域の貿易独占をほぼ完成した。それは同時に、15世紀以来の「商業の時代」(the age of commerce)の終焉を意味した。

V.O.C.時代のオランダは、初期には海上商業支配を行うのみで、領土支配を展開したのはモルッカなどごく一部、それも商館周辺に限られていた。しかし、18世紀に入るとV.O.C.の貿易は次第に不振に陥り、このため陸上支配が進められることになる。それはジャワで先行し、オランダは世紀末までにはジャワ全域を支配下に収めた。もっとも、この段階での統治は、在地の有力首長をレヘント(regent：本来はオランダの地方行政長官)に任命して支配末端に取り込み、彼らを通じて間接的に支配する方式だった。しかし、西ジャワ・プリアンゲルで、コーヒーをはじめとする熱帯特産物の栽培を強制する義務供出制度を施行し、現地社会に大きな影響を及ぼした。

V.O.C.は18世紀末に倒産し、東インド植民地はオランダ植民地政庁によって統治されるようになった。これ以降、植民地統治が社会の基底部にまで及ぶ直接統治が行われるようになり、ジャワは熱帯特産物生産地へと社会経済を再編されていくようになる。その大きな画期となったのが、1830年に導入された強制裁培制度(Cultuurstelsel)だった。この制度では、権力と統治機構を総動員してコーヒー、砂糖、藍などの栽培がジャワの農民に強制された。その産物はオランダ商事会社(Nederlandsch Handel Maatschappij)の手でオランダへ運ばれて販売され、極めて巨額の利益を上げた。オランダ本国の資本主義発展のための、本源的蓄積過程であったということができよう。

強制裁培制度はオランダにおける資本主義発展に伴って次第に批判を浴びるようになり、1870年の農地法(Agrarische Wet)を契機に廃止された。これ以降、ジャワ開発の担い手は民間資本に移り、糖業や煙草農園などが大きく発展した。

他方、ジャワ以外の地域は外領と呼ばれたが(この場合、ジャワにマドゥラを加えてジャワ・マドゥラとして、これを外領と対比させるのが普通である)、外領へオランダの実効的な支配が及んでいくのは1840年代以降のことだった。外領は広大であり、その全てが植民地支配下に入り、蘭領東インド植民地(Nederlandsch-Oost Indië)が成立するのは1910年代半ばのことだった。外領の自然条件や社会経済には地域差が大きく、東スマトラなどではプランテーション開発が大きく進んだが、対照的に東部インドネシアの開発は遅れた。

20世紀初めになるとこうして成立した蘭領東インド植民地全体を1つの国民国家として独立させることを目指すインドネシア民族主義が形成され、様々な団体が運動を展開した。こうしてインドネシアは1942~45年の日本軍政時代を経て、1945年8月17日(日本の敗戦の翌々日)早朝に初代大統領スカルノが独立宣言を読み上げ独立した。しかし、植民地支配の復活を企図したオランダとの間で49年末まで独立戦争を戦わねばならなかった。インドネシアは国際世論の支持のもとで戦いを進め、ハーグ円卓会議の結果、49年末インドネシア連邦共和国に主権が委譲され、さらに翌年8月、単一のインドネシア共和国が再発足した。インドネシアが実質的に独立し、国際的にも認知されたのは、この戦争終結後の1950年以降のことである³⁾。

(3)これまで述べてきた時期のインドネシア史に関する基本的な史料については、「インドネシア 後期」(『アジア歴史研究入門』5巻所収)の中で述べておいた。もっとも同文を執筆して既に30年近くが経ち、インドネシア史研究をめぐる史料状況は激変しており、大幅な増訂が必要になっている。

独立後のインドネシアは、大きくは旧体制 Orde Lama(~1965年)、新体制 Orde Baru(1965年~1998年)、改革の時代(1998年~現在)と区分できる。

1950年代のインドネシアでは議会制民主主義の政治が展開し、50年憲法に基づき政党内閣が国政を担当した。55年の最初の総選挙、57年の地方選挙を通して、国民党、マシユミ党、ナフダトゥル・ウラマ党、共産党が4大政党として登場した。この間、55年にはアジア・アフリカ会議(バンドン会議)を主催するなど、外交面ではインドネシアは新興独立国のリーダーの一つとしての役割を果たしたが、国内の政治は不安定であり、早くも50年代末には各地で反中央政府反乱が起こった。このことは、国民統合が如何に難しい課題であるかを示している。

これらの鎮圧後、1959年にスカルノ大統領は共産党と軍の支持を背景にして、大統領に強い権限を認める45年憲法に復帰し、「英知に導かれる民主主義」(指導制民主主義)を掲げ、民族主義、宗教、共産主義を統合するナサコム体制を敷き、オランダ系企業の接収や西イリアン解放、マレーシアとの対決(63年以降)、国連脱退(65年1月)などの反帝路線を押し進めた。こうした体制をインドネシアでは Orde Lama(旧体制)と呼ぶが、この過程でスカルノが軍と共産党という2大勢力の均衡を図るといふ権力構造が形成されていた。しかし、こうした政治路線のための莫大な対外債務の累積、生産の停滞、激しいインフレは国内経済を破綻に追い込み、やがてスカルノの健康問題が取りざたされるようになると、軍と共産党、イスラム勢力と共産党との対立が先鋭化した。

この対立は1965年9月30日、9.30事件（肅軍クーデターとその鎮圧）として爆発した。スハルト將軍の率いる陸軍はクーデターの背後に共産党がいたとしてこれを徹底的に弾圧し、67年にはスカルノを退陣に追い込み、68年3月には正式に第2代大統領に就任した。スハルト政権は「新秩序（Orde Baru）」を唱え、「開発」を国家目標にし西側陣営との結びつきを強め、外資導入による経済・社会開発を優先する政策を展開してきた。

この結果、インドネシアはめざましい経済発展を遂げてきたが、極めて強権的な政治手法のもとで貧富の差の拡大、汚職（ファミリービジネス）の問題など矛盾が拡大し、97年の経済危機をきっかけに反スハルトの運動が盛り上がった。スハルト大統領は98年5月21日に辞任を表明せざるを得なくなり、同政権はついに崩壊した。その後、大統領はハビビ（98年5月21日～10月20日）、ついでインドネシア最大のイスラーム団体であるナフダトゥル・ウラマーの代表だったアブドゥル・ワヒド（～2001年7月23日）を経て、スカルノの娘であるメガワティ（～2004年10月20日）、さらにユドヨノへと受け継がれてきている。

このポスト・スハルトの時代は、改革 *reformasi* がスローガン、あるいはキーワードである。45年憲法の部分的改正作業をも含め、政治的には一定の民主化が進んだ。政権と癒着し、政商（チュコン）と呼ばれた華人財閥の中には、大きな打撃を受けて没落する者も出てきている。しかし、経済はなかなか危機的状況を脱することが出来なかった。ここ1～2年、ようやく回復してきたと報じられる。

しかし、国民統合の点から見れば、なお困難な状況がある。既に東チモールは分離独立したが、まだ紛争中の地域もある。このうちアチェでは大津波をきっかけにして、独立派とインドネシア政府の間でついに和平協定が成立したが、問題が根本的に解決したわけではない。また、イリアン・ジャヤでも深刻な問題がある。これらは、しかし観点を変えてみれば、インドネシアという国民国家に本来的に内在する矛盾が現れた、政治の民主化が進んだことによって現れることが可能になったと考えるべきかもしれない。

いずれにせよ、われわれがインドネシアを語る時、オランダ植民地支配下でインドネシアの独立と統合を掲げて運動し、インドネシア国民国家を作り上げた民族主義とその後の国民統合を、完全にプラスの価値とすることを無条件の前提にしたかつての（1960年代頃）のインドネシア研究のような立場にたつことは出来ない。むしろ多様性に注目して、そのありのままの姿を描き出すことが求められている。

[インドネシアを知るための参考文献]

1、「民主化」以後の政治経済に関する参考書

『東南アジア研究』45-1、2007年6月（〈特集〉インドネシア政治への新たな視座）

『アジア遊学90 ジャカルタのいまを読む』（勉誠出版、2006年8月）

松井和久・川村晃一編著『インドネシア総選挙と新政権の始動 メガワティからユドヨノへ』（明石書店、2005年）

本台進編著『通貨危機後のインドネシア農村経済』（日本評論社、2004年）

見市建『インドネシア イスラーム主義のゆくえ』（平凡社、2004年）

佐藤百合編『インドネシアの経済再編』（アジア経済研究所、2004年）

松井和久編『インドネシアの地方分権化』（アジア経済研究所、2003年）

佐藤百合編『民主化時代のインドネシア』（アジア経済研究所、2002年）

佐藤百合編『インドネシア資料データ集』（アジア経済研究所、2001年）

2. スハルト政権時代の政治・経済に関する参考書

安中章夫・三平則夫編『現代インドネシアの政治と経済—スハルト政権の30年—』（アジア経済研究所、1995年）

梅澤達雄『スハルト体制の構造と変容』（アジア経済研究所、1992年）

3. イスラームに関する参考書

見市健『インドネシア イスラーム主義のゆくえ』（平凡社、2004年）

タウフィック・アブドゥルラ、白石さや・白石隆(訳)『インドネシアのイスラーム』（1985年、めこん）

ムハマッド・ラジャブ、加藤剛訳『スマトラの村の思い出』（1983年、めこん）

4. その他

後藤乾一・山崎功『歴史文化ライブラリー 117 スカルノ』（2001年、吉川弘文館）

後藤乾一編『インドネシア【揺らぐ群島国家】』（早稲田大学出版部、2000年）

小池誠『新アジア生活読本 インドネシア 島々に織り込まれた歴史と文化』（三修社、1998年）

白石隆『現代アジアの肖像 11 スハルトとスカルノ』（1997年、岩波書店）

小川忠『インドネシア 多民族国家の模索』（1993年、岩波新書）

宮崎恒二他『暮らしがわかるアジア読本 インドネシア』（1993年、河出書房新社）

土屋健治他編『インドネシアの事典』（1991年、同朋舎）

宮本謙介『概説 インドネシア経済史』（2003年、有斐閣）

*インドネシアを含む東南アジア関係の国内で刊行された著書、論文に関する最良の目録は『東南アジア 歴史と文化』（東南アジア学会、年1回発行）所収の文献目録である。

II. 植民地経済の構造と住民煙草産業

19世紀以降のインドネシアは、基本的には先に述べたように熱帯特産物生産地へと社会経済を再編されていった。したがって、植民地経済は何よりも輸出経済であり、その動向は世界市場の動きによって強く規定されることになる。それでは、インドネシアから輸出されたものは何だったのだろうか。表 J-3 はそれを示している。

表示のように、(1)砂糖が1930年代に至るまではほぼ30%前後を占めているが、(2)世界恐慌期には激減していること、(3)砂糖とともに強制栽培制度の主要産品の1つだったコーヒーは20世紀に入ると激減していること、(4)これに代わって石油製品が1910年代から、またゴムが20年代から比重を高めていること、(5)ヨーロッパ市場向け輸出用煙草は世紀転換期には比重が高かったが、その後は減少したこと、などが見てとれる。

次に、輸出先の構成比、およびその変化は表 J-4 に示される。特徴的なことは、(1)ヨーロッパ市場の比重が徐々に低下し、(2)これに代わって、アジア市場の重要性が高まって来ていること、(3)1910年代以降のアメリカ市場の拡大である。また、アジア市場の中ではシンガポール・マラヤが圧倒的に重要だったが、この多くは最終仕向地ではなく、トランジット貿易だった。そして、この比重は次第に低下しており、最終仕向地への直接輸出が拡大していったことを物語っている。

これまでのインドネシア経済史研究では、こうした輸出向け産業については同時代から

研究が積み重ねられてきた。その基本的な方向は、こうした輸出産業の展開が現地社会にどのような影響を与えたかの検討だった。植村の一連の研究もこうした方向で行われてきた(例えば「糖業プランテーションとジャワ農村社会」(史林 61-3、1978年)、『世界恐慌とジャワ農村社会』勁草書房、1997年など)。しかしその反面で、住民産業の検討は米作を除くと十分ではなかった。また、生産の分析に比べ流通の検討は極めて不十分だった。

本報告のもとになる4年前から現在にかけての住民煙草産業の検討は、このような反省に立ってのことであり、したがってとりわけ流通面に目配りを心がけている。以下、本論に入っていくことにしよう。

第1章 植民地後期ジャワ住民煙草産業史研究序説

はじめに

煙草は16世紀末にジャワへ初めてもたらされて以降栽培が始まり、オランダの植民地支配が本格化した19世紀以降(=植民地後期)に拡大した。この時期のジャワの原料煙草は、一般にヨーロッパ資本の農園で生産される農園煙草と住民が栽培する住民煙草に分けられる。前者はブラッドやクロソックと称され、収穫後、乾燥と熟成、選別などの工程を経た後、葉煙草のままオランダに運ばれ、アムステルダム市場とロッテルダム市場で競りにかけられて最終仕向地へ輸出される。ジャワを含めたインドネシア産原料煙草の最大の輸出先はドイツだった⁽¹⁾。他方、住民煙草は多くがジャワを中心としたインドネシア内地市場向けに作られ、乾燥・熟成作業を経て刻まれた形で市場に出るので、ケルフ煙草と呼ばれる⁽²⁾。もっとも、ジャワで操業するヨーロッパ資本の煙草企業の中には自ら栽培を行ったり組織することはなく、専ら住民が栽培する煙草を買い上げることで原料煙草を確保し、それを輸出向けに加工するものも多かった。したがって、住民煙草の中でヨーロッパ市場に向けられるものも非常に多く、煙草と住民経済の関わりを検討する場合にはこの問題をも視野に入れる必要がある。

(1) ジャワ産原料煙草の仕向地はオランダが圧倒的に多く、例えば1910年には輸出総量38,011,876kgのうち、34,481,749kg、90.7%を占めた[Blink 1912:319-320]。オランダではアムステルダム、ロッテルダム両市場で競りが行われたが、前者が最大の市場であり、1920年代にはスマトラ煙草の約92%、ジャワ煙草の72%を輸入していた[Tabak 1925:25-26]。またこれらの市場にとってのインドネシア産煙草の持つ意味は、1911年にアムステルダムで販売された639,570パック中、インドネシア煙草は617,638パック、96.6%(内訳はスマトラ煙草213,318パック、33.4%、ジャワ煙草403,945パック、63.2%、蘭領ボルネオ産煙草375パック)を占め、ロッテルダム市場では153,086パック中、インドネシア煙草は151,627パック、99.0%(スマトラ煙草20,815パック、13.6%、ジャワ煙草130,812パック、85.5%)であったこと[Blink 1912:336-337]から明らかである。

これらの市場では1910年代初には3~7月と9~10月に週1回の入札が行われていたが[Blink 1912:336]、20年代に入るとジャワ煙草の入札は8月以外の毎月行われるようになった[Tabak 1925:25-26]。ここで入札された煙草の最終輸出先としては、ドイツが最も重要であった。例えば1911年のインドネシア煙草総輸出量は72.5百万kg(ジャワ・マドゥラ52.4百万kg、外領20.1百万kg)[C.E.I., vol.12:table 6B]であるが、同年の

ドイツのインドネシアからの煙草輸入量は 325,599 百 kg であり、インドネシアからの総輸出の約 45%に当たる。なお、この年のドイツの煙草総輸入量は 720,652 百 kg であり、インドネシア産はこの 45.2%を占める[Blink 1912:333]。第一次世界大戦期にはドイツの需要がなくなり、インドネシア煙草には大きな困難が発生した[Soegijanto Padmo:115]。しかし、その後、再びドイツの市場としての意味は回復したようであり、例えば 1936 年のインドネシア煙草輸出先はドイツ(43.9%)が最多で、以下オランダ(24.8%)、ベルギー・ルクセンブルグ(11.8%)と続いている[国際日本協会 1939: 86~91]。

なお、1910 年代初におけるジャワ煙草の主要輸出港はパナルカン(11.1 百万 kg)、スマラン(10.3 百万 kg)、スラバヤ(8.4 百万 kg)、パニユワング(1.2 百万 kg)、チラチャップ(1.2 百万 kg)、パスルアン(0.2 百万 kg)、バタヴィア(0.08 百万 kg)であり[Blink 1912:319~320]、農園煙草の主産地ブスキに近いパナルカンと、王侯領煙草の輸出を担当したスマランが最も重要だった。

(2)ケルフ(kerf)とは、オランダ語の kerven(刻む)という動詞に由来する。ジャワ語では radjangan と呼ばれる。なお、この煙草も少量ではあるが近隣地域へ輸出されている。例えば 1910 年の輸出量は 360,080kg であるが、大半はシンガポール向け(321,327kg、89.2%)、次いでペナン(30,720kg、8.5%)向けである[Blink 1912:319~320]。

この時期のジャワ煙草に関する研究は植民地期以来かなり上るが、主なテーマとして取り上げられてきたのは以下の点だった。第 1 は主要な植民地輸出産業の 1 つとして、東端地方のブスキ理事州^(補註)、及び中ジャワの王侯領で展開した農園煙草に関する研究である。近年の作品としてはスラカルタ地方とブスキ地方のそれを扱った Soegijanto Padmo [1994]、ブスキを分析対象にした植村[1983; 1997(5 章)]、Uemura[2002]等が挙げられる。第 2 は内地市場向けに製造された、ジャワ独特の丁字入り煙草クレテックの研究である。この製造は後述するように 19 世紀後半に中ジャワのクドゥスで始まり、1910 年代後半頃から急発展し、それ以降、クドゥス以外にも東ジャワ・ブリタルなど各地で同様の産業が展開し、現在にまで至っている。これについては Mangoenkoesoemo[1931]、Soenario[1935]、Reyden[1934,1935,1936]など詳細な調査報告があるが、本格的な研究は戦後のことである。先ず Castles[1967]が実地調査をも加えて戦後に至るまでの歴史と現状の人類学的検討を行った。その後、Segers の未刊行学位論文[1982]が経済史にこの産業を分析し、近年では Hanusz[2000]が現状の紹介に加え社会史的な検討をも行っている。この産業はジャワ人の民族産業として始まり、華人が次第に参入していった経緯があり、民族主義の問題としても論じられている。例えば赤崎[2000]は、これを巡って 1918 年にクドゥスで発生した華人とジャワ人の対立の問題を論じている。

(補註)植民地期インドネシアの地方行政区画は、オランダ人行政と原住民行政に大別されるが、直轄領の場合、それは以下の通りだった。

[理事州 residentie]-[県 regentschap]-[郡 district]-[副郡 onder-district] - [デサ desa]
resident(理事) - ass.resident(副理事) - 監督官

regent (Bupati : 知事) - wedana(郡長) - ass.wedana(副郡長) - デサ首長

これらの区画はしばしば変更され、また 1910 年代以後になると理事州の上の行政区画として、西ジャワ、中ジャワ、東ジャワの 3 つの省(provintie)が置かれた。

この他、Reid[1985]はインドネシアにおいて喫煙がそれまでのベテル・チュウイング^(補註)に次第に代わっていき、煙草製造業が拡大していく様を1970年代末の時期に到るまで歴史的に検討した。また植民地期にはジャワの煙草産業全般に関する調査・研究がいくつか出版されている。代表的なものとしてTabak[1925]、Kat Angelino[1929]、栗林[1941]などを挙げるができる。さらに煙草の強制栽培制度に関する論考、1930年代の煙草消費税導入問題に関する諸見解、栽培の農学的見地からの調査・検討など、個別的テーマで書かれたものも多い。

(補註)ヤシ科のアレカヤシ、通称ビンロウジュの種子(ベテル・ナット)の核と石灰を、コショウ科の蔓性植物キンマの葉で包み、これを口中で噛む習慣をいう。ベテル・ナットはアルカロイドを含み、興奮性の麻酔作用があり、紀元前よりインド、東南アジア、オセアニアの各地で広く栽培・利用されてきた。日常の嗜好品としてだけでなく、来客の接待、結婚式の交換財、様々な儀礼の供物などにも使われる。

しかし、内地市場向け住民煙草研究は大きく立ち後れてきた。管見の限り、これまで本格的な研究はマドゥラ地方を対象にしたJongeの研究[1982, 1984]が挙げられるのみである。Jongeは、植民地期の文献史料と現地調査の双方にもとづいて、この地域の煙草の栽培から流通、とりわけジュラガンと呼ばれる仲介者の役割を具体的に明らかにした。流通過程にまで触れた先駆的な業績であるが、対象地域マドゥラはジャワの住民煙草栽培から見ると周辺的な位置に止まり、その最大の中心地だった中ジャワ山間地方のケドゥー理事州や沿岸ボジョネゴロ地方の煙草については、なお検討が十分ではなかった⁽³⁾。

(3)ただし、ボジョネゴロの煙草栽培に関してはPenders[1984]の中に触れられている。

本研究では、以上のような研究状況をふまえて、住民煙草、とりわけ内地市場向けの煙草を検討対象にする。そしてこの場合、栽培・加工・流通・消費を相互の関連の中でとらえ、さらに関連産業や波及効果をも視野に入れて、住民煙草産業全体の検討を行うことを目指している⁽⁴⁾。本章ではその手始めとして、この時期のジャワ住民煙草産業がどのような状況にあったのかを概観し、それを踏まえて如何なる検討課題があるかを探してみたい。

(4)筆者は関連産業としてケドゥーの原料煙草、クドゥスのクレテック煙草などの輸送を担ったサマラン・ジョアナ蒸気軌道(Samarang-Joana Stoomtram Maatschappij、以下S.J.S.と省略)に着目して、2004年夏にオランダ国立総文書館で同社史料の収集に当たり、同社線を通じた米輸送に関して行った検討の結果を植村[2004]として発表している。

I. 世界の中のインドネシア産原料煙草の位置

1. インドネシアの原料煙草生産

まず、インドネシア全体の原料煙草の生産が世界的に見てどのような位置にあるかを、若干の数字を挙げて述べておく。1910年代初(恐らく1911年か12年だと思われる)の原料煙草の世界生産は1,059,605トンだが、インドネシアは52,492トンを生産、4.9%を占める。この数字はアメリカ合衆国319,165トン(30.1%)、インド254,000トン(24.0%)、ロシア73,960トン(7.0%)、オーストラリア・ハンガリー53,492トン(5.0%)に次いで、世界5位に当たる。また世界の総栽培面積は1,147.6千haであり、インドネシアは46千ha、4.0%を占める[Blink 1912:313]⁽⁵⁾。

(5) 数字の元データは Jacob Wolff, *Der Tabak und die Tabakfabrikate*, Leipzig, 1912 による。ちなみにアメリカ、アジア、ヨーロッパ、オーストラリア・アフリカに区分すると生産量比率は順に 40.1%、35.6%、22.9%、3.4%、栽培面積は 40.8%、37.7%、20.9%、4.3%となる。Blink[1912:312]によると、煙草は穏和で暖かい気候で最も生育がよく、ヨーロッパでの北限は北緯 63 度、最も価値の高い品種は北緯 35 度~南緯 35 度で生育する。ヨーロッパでは栽培が北緯 58~60 度まで広がり、アメリカでは北緯 35~40 度までである。

他方、Tabak[1925:29~30]によると原料煙草の 1909~13 年平均世界生産高は 1,308,805 トンで、インドネシアは 63,500 トン(4.9%)でアメリカ 450,000 トン(34.4%)、インド 209,000 トン(16.0%)、ヨーロッパ・ロシア 92,900 トン(7.1%)、中国 67,900 トン(5.2%)に次いで第 5 位を占める。また 1920~22 年平均世界生産は 1,667,760 トンであり、最も多いのがアメリカ 585,000 トン(35.1%)、以下インド 357,000 トン(21.4%)、中国 114,050 トン(6.8%)、ブラジル 79,800 トン(4.8%)、日本 66,200 トン(4.0%)と続き、インドネシア 58,800 トン(3.5%)はこれらに次いで 6 番目に位置する⁽⁶⁾。

(6) 大陸毎の構成比を取ると、下表のようになる。

	北米	南米	欧州	アジア	アフリカ	表註：アフリカには太平洋州含む。
1909~13 年平均	39.7	5.3	18.8	34.2	1.8	
1920~22 年平均	39.0	6.5	12.2	40.3	2.0	

こうしてみると、インドネシアの煙草栽培は世界的な規模を誇るが、その地位は徐々に低下しつつあったといえよう。

2. インドネシアの原料煙草輸出

次に世界の原料煙草輸出状況を見ておこう。Blink[1912:336]によれば、1840 年頃までは世界市場向け原料煙草は主にアメリカが供給していたが、この時期以降インドネシアからの輸出が徐々に増加し、1860 年以降は大規模にオランダ市場へ大量の煙草を供給し始めた。20 世紀に入ってからインドネシアの地位を 1908 年の例で見ると、世界の総輸出量は 742,386,121 アメリカ・ポンドで、最も輸出が多いのはアメリカ合衆国(305,455,871、41.1%)、インドネシア(173,306,569、23.3%)はこれに次いだ[Blink1912:330]。また 1936、37、38 年の世界の原料煙草輸出量はそれぞれ 438.9 フランス・トン、514.1 フランス・トン、573.0 フランス・トンだが、インドネシアは順に 49.4 フランス・トン(11.3%)、49.8 フランス・トン(9.7%)、50.0 フランス・トン(8.7%)である。輸出が最も多いのはやはりアメリカ合衆国で、それぞれ 192.9 フランス・トン(44.0%)、197.2 フランス・トン(38.4%)、221.9 フランス・トン(38.7%)、インドネシアの順位は各年ともやはり 2 位だった[国際日本協会 1939 : 86~91]⁽⁷⁾。

(7) 輸入についても一瞥しておくとして、1936 年の世界の輸入は 501.8 フランス・トンで、イギリスが最も多く 123.4 フランス・トン、24.6%、これに次ぐのはドイツ 93.2 フランス・トン、18.6%である[国際日本協会 1939 : 86~91]。

インドネシアは世界の主要輸出地であり続けてきたが、その地位は生産の場合と同様に徐々に低下しているといえることができる。

なお、インドネシアから輸出される原料煙草をヨーロッパ市場向けに加工された葉煙草(ブラッド、クロソック^(註註))と内地市場向けに加工された刻み煙草(ケルフ)に分けてみると、1910 年に例を取れば前者が 38,011,876kg、後者が 360,080kg で、比率は 106:1 となる[Blink

1912:319~320]。上述の輸出は、ほとんど全てが前者だと考えてよい。逆に Burger[1975, deel 2:101]によると、ケルフ煙草はほとんど全てが国内消費で1%を中国、マレーへ輸出するとされるから、内地消費原住民市場向け煙草は輸出量の100倍近く生産されたことになる。

(補註)ヨーロッパ市場向けに輸出される原料煙草は葉のままに熟成・乾燥させて、丸めた形で船積みされた。植民地期の主要な産地として東スマトラ、ジャワではブスキ理事州、王侯領などが挙げられる。

II. ジャワ煙草栽培小史

次にジャワにおける煙草栽培の歴史を概観しておく。

1. 煙草の流入と東インド会社時代

既に述べたように煙草は16世紀末にインドネシア群島へ持ち込まれたが、従来それはポルトガル人の手で行われたと考えられてきた[Jonge 1988:91~92; C.E.I., vol.1:113~115]。これに対し、Reidは煙草をアジアへ持ち込んだのはスペイン人で、1575年にこの植物をメキシコからフィリピンへもたらしたのが最初だと主張している[Reid 1985:535]。いずれが正しいのか、両者の議論がかみ合っているのか否かは不詳だが、この時期に到来したことについては両者とも一致している。Reidは1603年2月から西ジャワのバンテンに約2年半滞在したスコットの「ジャワ滞留記」⁽⁸⁾にバンテンで煙草が好んで喫煙されていることが書かれていること、さらにマタラム王国^(註註)のカルタスラ年代記によれば中ジャワに煙草が到来したのは1601年3月~02年2月の間だったことを指摘している[ibid.]。

(8)この滞留記は、『ジェンキンソン、ランカスター、スコット、ホーキンス、ドレイク イギリスの航海と植民1』(岩波書店、大航海時代叢書第II期 17、1983年)に日本訳が収録されている。

(補註)マタラム王国は1578年頃に中部ジャワ内陸部に建国され、17世紀初めのスルタン・アグン(1613~45年)治下にその威勢は頂点を極めたが、その後次第にオランダ東インド会社によって領地を奪われ勢力を削がれていき、1755年にはジョクジャカルタとスラカルタに二分され、その後、さらにそこからパクアラム家、マンクヌゴロ家が分立するなど、弱体化が進んだ。19世紀に入り、1825~30年のジャワ戦争(ディポネゴロ反乱)の敗北によってほぼ完全にオランダ植民地政庁に従属することになり、若干の自治を認められたその領域は王侯領 *Vorstenlanden* と呼ばれるようになった。

いずれにせよ、17~18世紀のオランダ東インド会社時代には、ジャワの煙草は後の時代のようにヨーロッパ向け輸出品でなかった。ヨーロッパの需要は、アメリカ産原料煙草の輸送とヨーロッパ自らの栽培によって満たされており、この時期にインドネシアで栽培された煙草は、ほぼ全てがインドネシア内で消費された[Tabak 1925:4]。

ジャワでは既に17世紀前半には住民の栽培する煙草はかなり一般的に知られており、フォス(Vos)使節の中ジャワのマタラム・カルタスラ王宮への旅行記(1624年)によると、ジャワ人貴族は煙草を吸っていたという[Fruin 1923a:349~351]。18世紀にはその栽培中心地のケドゥー地方(当時の区分による、20世紀初のトゥマングン県とマゲラン県から構成される地域)では、華人による煙草請負が行われており、この地方が1746年に東インド会社支配下に入り、会社がマタラム王国から同地方の煙草取引独占権を認められると、それは3,000スペイン・レアルの収益をもたらしたという[Fruin 1923a:349~351; C.E.I.,

こうして 18 世紀には煙草は主要な副作物 (nevengewassen) の 1 つになり、刻み煙草に加工されてジャワ周辺の多数の島々へ移出された [Jonge 1988:91~92]。栽培地域も中ジャワ以外に拡大していたようだ。1799 年に書かれたエイゼルディク (Van Ijsseldijk) の旅行報告によると、東端地方山間部で煙草栽培が行われており、彼はそれを重要と見なして煙草請負導入を計画している [Fruijn 1923a:349~351]。その重要性はますます高まったようで、1800 年頃には煙草はジャワでは米に次ぐアジア市場向け重要商品だった [Jonge 1988:91~92]。

2, 19 世紀前半：強制裁培制度導入まで

19 世紀に入るとジャワの煙草に関する史料の記述も増加し、その様相が次第に明らかになる。以下では若干の史料に依拠して、やや具体的に栽培と流通に関して述べてみたい。[自由栽培と主要産地]

ジャワでは東インド会社時代の後半期からプリアンゲルのコーヒーに代表されるように、様々な輸出向け特産物の義務供出制度^(補註)が実施されていたが、煙草栽培はムンティンへ (Mungtinghe) から全権委員 (Kommissarissen Generaal) に宛てられた 1817 年の書簡に「それは強制ではなく、義務供出でも割当制 (contingent) でもないほとんど唯一のものである。しかし同時にそのことによって、それはジャワ人が喜んで進んで行う唯一のものでもあり、彼が勤勉さを示す唯一のものである。そしてまた、それが行われる諸地域でにどんなに驚いても十分ではないような繁栄と富を広める唯一のものである。」 [tabakskultuur 1857:341~342] とあるように、住民の自由栽培でのみ行われていた。

(補註) 義務供出制度に関する最良の研究は、大橋厚子氏の一連の研究である。

1810 年代には、ラッフルズ^(補註)に従えば煙草は現地語で *tombaku* あるいは *sáta* と呼ばれ各地で栽培されていたが、それが輸出向けに広範に栽培されるのはケドゥーとバニユマスのみで、特にケドゥーでは米に次ぐ重要な栽培品であった [Raffles 1817, vol.1:134~135]。またクロフォードも同様に煙草の主産地としてケドゥー、ラドック (Ladok: 後の時代のバニユマス理事州北部 Ledok と同じだと考えられる)、及びバニユマスの肥沃な谷と、そこに見られる高い山の麓を挙げている [Crawford 1820, vol.1:406~409]。この時期にも、東インド会社時代と同様に、中ジャワ山間地帯が栽培の中心地だったのである。

(補註) 19 世紀初めのジャワは、ヨーロッパにおける英仏の対抗関係が激しくなったことを受けて、一時的にイギリスによって占領・統治されることになった。この時期をイギリス中間統治時代 (1811~16 年) という。統治の責任者として赴任したインド副総督 T.S.Raffles は、地稅制の実施など自由主義的な植民地支配を目指した。

この時期の栽培の特徴について、ラッフルズは「ケドゥーでは・・・土壌がこれに適しているので、それは予め肥料を施していない土地で 8~10 フィートの高さにまで生育するが、東インドでは滅多に見られない繁茂振りである。ここでは米と輪作され、年間に採れるのはそれぞれ 1 回ずつである。ただし、米の収穫後、あるいは煙草の葉の採り入れ後には、土地は次の作物を受け入れる準備をするための時期が再びやって来るまで休閑される。若い苗はこの地域内では栽培されず、周辺の高地から供給される。すなわちディエン (Dieng) 山、あるいはプラウ (Prahu) 山の山麓のカリ・ベベル (Kali-beber) 地方 (district) から供給されるが、そこでは苗が栽培され、周辺地域の栽培者に大量に売られる。移植は 6 月に行われ、10 月には完全に生長する。」 [Raffles 1817, vol.1:134~135] と述べている。クロフォ

ードもほぼ同様のことを指摘し、さらに加えて煙草は「高地にある一般の耕地でも、人工灌漑によって米が作られる土地でも栽培される」が、「収量が最も多く、危険が最も少なく、最も良質の煙草が採れるのは、後者での栽培である」という。また「煙草は6~8フィートの高さになるまで育てられ、それより丈が大きくなることを先端を摘み取ることで防ぐが、それは葉を広げるためである。収穫は先ず下の方の粗悪な葉から始められ、小さくより華奢な一番上の葉で終わる」ことも指摘している[Crawford 1820, vol.1:406-409]。

ここからわかるのは、(a)煙草は乾地でも水田でも作られるが、後者での栽培が主流であること、(b)水田栽培は米の後に6~10月の間、乾季作として作られていること、(c)輪作の間に休閑期があること、(d)無肥であること、(d)苗は高地で作られ、それを運んできて移植していたこと、(e)収穫は葉毎に、最下層から始めて上の葉へと進むこと、である。

そして、収穫された煙草は、クロフォードによれば、「ジャワの煙草は、葉を繊維状の主軸から切り離れた後、常に緑のまま刻まれる」[ibid.]とあり、いわゆるケルフ煙草に加工されていた。

[流通]

次に1810年代の原料煙草の流通の特色を見ておこう。クロフォードによれば、この中部ジャワ山間部で生産される煙草は十分に乾かされた後、華人の監督下で数オンス単位に小分けされて中国紙に包まれ、商標がスタンプされ、一定数が籠に入れられて売られる。品質には3等あり、上層葉から作られたものが1級品、中層葉からのものが2級品、下層葉からが3級品となる。ケドゥー煙草は人間に担がれて山越えしてスマランの市場に出されるが、その量は毎年300万ポンド(約1400トン)に上り、1816年のプカロンガン理事報告によれば、ケドゥーが煙草から得る利益は毎年15万~20万スペインドルに達した。そこからはさらに各地へ販売されるが、質の悪いものは主としてバタヴィアと西ジャワへ向かい、上質のものは海峡植民地、最上級品は南セレベスへ向かった[Crawford 1820, vol.3:416-417; Fruin 1923a:349-351]。他方、バニユマス産煙草はプカロンガンへ移出され、そこから原住民商人の手で船でバンタムへ運ばれた。さらに東端地方、マドゥラはプゲル(Poeger)(ジュンブル、ポンドウォソを含む)から煙草が供給されていた[Fruin 1923a:349-351]⁽⁹⁾。

(9) 1811~1816年(英中間統治期)スムヌップ港移出入に関する四半期概況報告(kwartaaloverzichten)によると、マドゥラにはジャワ煙草、中国煙草が運ばれてきており、マドゥラ煙草移出はなかった[Jonge 1988:91-92]。

このように煙草はジャワの輸出品としても重要であるが、デュ・ビュ(Du Bus)総督の1825年の報告(Verslag over de handel van 1825)によれば、煙草は米に次ぐ重要な住民輸出品だった[Fruin 1923a:349-351]。1827年にはオランダにも968ギルダー分の煙草が東インドから送られている[Blink 1912:315-316]^(補註)。

(補註)蘭領東インドの通貨単位はオランダ本国と同様であり、この段階ではギルダーとセント(100セント=1ギルダー)だった。

3. 強制裁培制度下の煙草栽培

周知のようにジャワでは1830年から、植民地政庁が強制裁培制度を導入した。その中心的な作物はコーヒー、砂糖黍、藍だったが、煙草についても計画され実施された。

煙草の強制裁培に関しては、砂糖やコーヒーほどではないが既に同時代から検討が行われ、近年でも専論はないが強制裁培制度を扱った著作の中では若干の記述が行われている。

それらによれば、マニラ種など新たに外国種煙草(kooltabak)を導入したこと、栽培は1831年から試行が始まり1830年代後半から本格化し、1846年がピークで2,919ヘクタールに達したが、これ以降は減少傾向に入り、1848年以降は政庁栽培拡大は中止され、1865年の90ヘクタールを最後に廃止されたこと、その背景には厳しい労働と低い収入に反発した住民の逃亡、製造される煙草の質の悪さに起因する政庁と契約した企業の赤字の深刻化があったこと、政庁は早くも1839年には生産される全ての煙草の自由処分をこれらの企業に認めていたこと、また地域別に見るとレンバンに多かった(最盛期の1840年代半ばには1,500ヘクタールを越えた)反面、住民煙草栽培の中心地であったケドゥーではそれはほとんど拡大せず1843年には廃止されたこと、などが指摘されてきた⁽⁴⁰⁾。

(10)以上の記述は K.V.[1849:218~219; 1850:76~78; 1852:109~111; 1853:166; 1856:110; 1858:103; 1861:151; 1862:179~180; 1863:174]、Hoevel[1849,dl.1:132]、Bleeker[1850-1:6~7]、tabakskultuur[1857:339]、Deventer[1866:394~96, 566]、Blink[1912:315~316]、Fasseur[1975:44, 53, 60, 120]、Elson[1994:79~81, 82, 113, 133~134, 230, 402(noot 50)]などに依拠して作成した。

このように、これまでこの時期の煙草栽培は強制栽培に関してはいくらかのことを知ることができる。しかし、例えばケドゥーでなぜこの制度が早期に廃止されたのか、なぜレンバンがこの制度において中心を占め得たのかなど、この制度導入以前の状況との関わりについては、十分に明らかになってはいない。

またこの時期の内地市場向け煙草の栽培に関する研究は、管見の限り皆無に等しい。そこで以下では、主として筆者の手元にある『植民地報告』(K.V.)^(補註)の記述に依拠して、1850年代初~1870年代初の時期のこの煙草に関する素描を試みたい。

(補註)『植民地報告』(Koloniaal Verslag)とは、1848年から毎年オランダ本国議会(Staten Generaal)に提出されるようになったオランダの海外植民地の状況報告で、議事録に付録として付された。この背景には、ヨーロッパにおける自由主義の発展の中でオランダでもこの年に憲法が改正され、それまで王室が独占してきた植民地経営に議会=新興ブルジョアジー勢力が関与するようになったという事情があった。なお、この報告書は1930年を以て終わり、それ以降は『東インド報告』(Indisch Verslag)1931~42年に引き継がれた。

K.V.の記事から先ず指摘できるのは、この時期に内地市場向け煙草の栽培は全体として拡大傾向にあったと思われることである。「内地消費向け煙草の栽培は、1852年を通じてかなり重要であり年々増加しているが、それはレンバン理事州における消費税の増加から明らかである。」[K.V.1852:110]、「原住民市場向け自由栽培は1853年にも重要であり、年々拡大するだろうと思われる。それはいくつかの理事州で原住民が特にそれに従事するものだからだ。」[K.V.1853:167]、「原住民市場向け煙草の自由栽培についても、報告は良好である。レンバンでは、海上経由の移出は3,528ピコル(1ピコルは約61kg=植村註)に達する。原住民市場向けに最も広範に栽培され最も好まれる種類は、それ以外ではケドゥー、バニュマスの一部(Bandjar-Negara)、バゲレン(Ledok)、及びパスルアン(Malang)に見られる。スマラン理事州のBodjo郡とSelokaton郡では、この栽培も住民に大きな利益をもたらしている。」[K.V.1854:135]、「裏作物^(補註)の栽培は1857年もかなり拡大した。その第1の地位を占めるのはトウモロコシであり・・・さらに様々な理事州で裏作物としての煙草栽培は再び拡大した。この作物は商業の重要な部門をなす。」[K.V.1857:117]、「原住民消費用煙草

も、収穫は非常に多かった。」[K.V.1857:129]、さらに 1874 年に関する「原住民市場向け煙草の栽培に関しては、4 地方に関して若干の報告を受け取っただけである。スラバヤ理事州では、特にシダユ県とラモンガン県で、またバニユマス理事州ではパンジャルヌガラ県で、住民は煙草栽培に従事している。バゲレンでは原住民市場向け煙草栽培は拡大しているが、特に Ledok 県がそうだ。最良地は平均してバウ^(補註)当たり 10 ピコル、2 等地は 5.5 ピコル、3 等地は 3 ピコルの生産を上げる。ケドゥーでも企業向け以外に大量の煙草が栽培され、これらはほとんどがスマランからくる華人によって高値で買い上げられる。付録 (Bijlage) KK の数字によれば、1874 年には全ジャワで住民によって 16,391 バウの煙草が表作として作られ、裏作として 12,196 バウが作られた。」[K.V.1875:176]などの記事から、それは窺える。

(補註)「裏作物」とは史料中に出てくる *tweede gewassen*、*polowidjo* などの訳語であるが、一般に水田乾季作で作られる作物を指す。なお、これらは「二義的作物」と訳されたり、あるいはポロウィジョとそのまま書かれたりする場合もある。

(補註)バウ (*baoe*, *bouw* と綴る)はこの地域で一般的に使われた面積単位で、1 バウは約 0.71 ヘクタール。

K.V.の内地市場向け煙草栽培に関連する記事の中で、栽培中心地としてしばしば名前が挙がるのはレンバン、ケドゥー、バニユマス、バゲレン、クディリなどの理事州である。ここでは、こうした記事にもとづいて各地域の栽培の特徴に触れておきたい。

レンバンではソロ河沿いの地域が主産地で、「原住民消費向け煙草栽培は主要産業の 1 つ、煙草は主要移出品の 1 つ」だった[Bleeker 1850-I:45, 46]。また、若干の年については収穫面積と移出量が分かる。前者は 1856 年 7,340 バウ(ボジョネゴロ県)[K.V.1856:110~111]、1862 年 6,558 バウ[K.V.1862:240]、1863 年 6029 バウ[K.V.1863:177]とあり、この頃にはだいたい 6,000~7,000 バウ程度が栽培されていたと思われるが、これは先に見た強制栽培の面積を遙かに上回るものである。これは「この栽培は栽培者に多くの利益をもたらす。彼らは自由で強制のない労働に対してバウ当たり 240~250 ギルダーを手にするが、契約栽培の場合の強制労働は最高でも 120 ギルダー、平均すれば 87 ギルダーにしかならないからである」[K.V.1856:110~111]とあるように、強制栽培を大きく上回る利益を上げることが可能だったからだ。他方、移出量は 1854 年が 3,528 ピコル[K.V.1854:135]、1856 年が 3,000 ピコル[K.V.1856:110~111]とされる。これらは海上経由でトゥバンからマドゥラ島のスムヌップ、バンカランや、バウエアン島などへ向かった[K.V.1856:110~111]。これらの煙草は「天日乾燥され、続いて刻まれた後、ほとんどが華人の手で、しかし時には原住民によっても栽培者から買い上げられる。」[K.V.1863:177]とあるように、その取引は基本的に華人商人が支配していた。

次に中ジャワ山間地域に関しては、先ずバウト(J.C.Baud)総督代理から植民大臣宛ての 1834 年 8 月 23 日付け視察旅行報告書に、ケドゥー理事州の煙草栽培について「煙草はここではジャワ人の手で大量に栽培されているが、それはなお常にいわゆる中国煙草(*Chineesche tabak*)で、ハバナ煙草、マニラ煙草の種子をもっと広めようとする政庁の試みは効果が上がっていない。首長達は前者の種類の方がより有利な結果をもたらすと主張している。人々はこの間、小規模に試験を続けてきている。」[Deventer 1866:651~652]とあり、

1830年代にも盛んに現地市場向け煙草栽培が行われていたことが分かる。また、Bleeker [1850-II:90~91, 148, 222]からは1850年頃の状況を若干知ることができる。すなわちバニユマスでは煙草は米と並ぶ主要栽培物で、「原住民が消費する煙草の栽培は、主として山間郡であるバンジャルヌガラ (Bandjar-negara) とプルボリンゴ (Poerbolinggo) で行われ、またバトゥール (Batoor)、カランコバル (Karang-kobar)、チャヒオノ (Tjahijono) 郡でも行われる。この栽培は十分な利益を生むが、その大半の部分はかなりの数が山間諸郡に住んでいる華人の手に入る」という。他方、ケドゥーでは「煙草は特にトゥマングン県と(マゲラン県)プロボリンゴ (Probolinggo 郡) で作られる。ジャワ人はふつう生産物を華人に売る」という。また『植民地報告』では先にも触れたように、1854年の報告に栽培中心地としてケドゥー、バニユマスの一部(バンジャルヌガラ)、バゲレン(ルドック)の名が挙がり [K.V.1854:135]、ケドゥーの収量は5万~6万ピコルと推定されているから [K.V.1855:109]、その収量は同時期のレンバンを凌ぐものだったと思われる。理事州内でも特に生産が盛んだったのは Kadoe、Lempoeijang、Probolingo、Remameh 郡で、苗は Soembing、Sindoro の高原 (hooge bergvlakten) で栽培されたものが用いられた。生産物は全て内地市場向けに加工され、理事州外から来る者も含んだ華人に買い上げられ、スマランを経てボルネオ、スマトラ、シンガポールに送られた。この煙草の多くの部分はバトゥールとシダユ (Sidaijoe) を越えてプカロンガン市へも運ばれ、さらにそこから海上経由でバタヴィアとバンタムの市場に向かったという。そして60年代末の報告によれば、Kadoe 郡と Lempoeijang 郡だけでも煙草の売り上げは年に100万ギルダーになると計算されている [K.V.1862:182; 1869:116]。このように、ここでも取引は華人が支配し、理事州外へ盛んに移出されていた。

他方、クディリの場合には、1855年の報告に煙草が裏作として作られることが述べられ [K.V.1855:109]、1862年には「この地方で栽培されるのは、ほとんどジャワ煙草だけである。住民に外国種煙草 (kooltabak) を作らせようとするヨーロッパ人企業家の努力は、これまで常に失敗してきたが、それは外国種煙草の栽培が多く労働と世話を必要とし、ジャワ煙草よりも凶作の危険が大きいからだけではなく、住民はジャワ煙草を、ヨーロッパ人企業家が買おうとしない時でも、いつでも原住民商人に売ることができるからである。1862年に原住民市場向けに加工された(刻まれた)生産物は、3,500~4,000ピコルに達する。原住民商人は、それをスラバヤ、マディウン、スラカルタに送るために買い上げる。」 [K.V.1862:182] とあるように、ヨーロッパ市場向け栽培を凌いでいた。しかし、翌年の報告によるとケルフ煙草の生産は4000~5000ピコルだったが、同年のヨーロッパ人企業家による生産は34,726ピコルに達しており、ここではこれ以降、ヨーロッパ市場向け生産が次第に拡大していくようである。ただ、この段階では買い上げ商人はスラバヤ、マディウン、スラカルタの原住民商人であり、ここで生産されるケルフ煙草は非常に人気が高かった [K.V.1863:176~177]。1869年の収穫面積は4,000バウと報告されている [K.V.1869:116]。

この他、『植民地報告』にはパスルアン、プロボリンゴ、スマラン、プリアンゲル、パチタン、スラバヤ、ブスキ、マドゥラにおける栽培に関する記事が見られる。これらから、この時期にもケドゥーなど中部ジャワ山間部とレンバンを中心にして、しかしかなり広範な地域で内地市場向け煙草栽培が行われていたと判断できよう。そしてこうした状況は、次に述べる1870年代以降の栽培分布に繋がるものであった。

4、「自由主義政策」以降の煙草栽培

周知のように 1870 年以降の「自由主義政策」時代には、インドネシア植民地開発の担い手は次第にオランダを主とした民間資本の手に移っていくが、煙草栽培でもそれは同様だった。ジャワではブスキなどを中心に煙草農園が発展し、外領でも新たに東スマトラのデリーを中心に煙草農園が展開する⁽⁴¹⁾。そして、インドネシアの煙草栽培はそのほとんどがジャワとスマトラに集中した。いま C.E.I. [vol.1:table 13] 所収のデータから 1920 年代の原料煙草年平均生産量を算出すると、合計 109,200 メートル・トンの内訳はジャワ農園生産が 22.4%、スマトラ農園生産 15.7%、ジャワ小農生産が 52.3% (うち農園への提供分 8.3%) と、この両島で 90% 余りを占める。

(11) ジャワでいわゆる「民間栽培」、すなわちヨーロッパ資本の民間企業による煙草栽培が始まったのは 1855 年からであり、当初はブスキ、レンバン、王侯領で行われた [Blink 1912:315~316]。他方、東スマトラでは 1862 年から、葉巻の上巻として有名な「デリー・ラッパー」の栽培が開始された [C.E.I., vol.1:113~115]。

さて、1870 年代以降になると様々な煙草栽培統計が作られている。その数字の信頼性については議論の余地があり、またこれらは農民が栽培する全ての煙草に関するものであって、輸出向けと内地市場向けの区別がなされている訳ではないが、ここではさし当たりこれらを利用して大まかな栽培の動向を眺めてみたい。

先ず表 1-1 は、様々な統計にあるジャワ・マドゥラ煙草収穫面積データを、5 年平均に組み直したものである。ここから明らかなのは、(1) 栽培は 1910 年代前半がピークで、それまでは比較的順調な拡大を見せていること、(2) 1910 年代後半~20 年代前半に生産の後退が見られること、(3) 1930 年代前半の世界恐慌期にはあまり減っておらず、むしろ 30 年代後半の退潮が目立つことである。

これらのうち 1910 年代後半期の落ち込みは、かつて論じたように第一次大戦期末の船腹不足、それに伴う食糧危機によってヨーロッパ市場向け煙草輸出が不能になり、植民地政庁も煙草栽培から食糧栽培への切替を奨励したことが大きな理由であると考えられる [植村 1998]。また恐慌期に砂糖黍のようにドラスティックな減少をしなかった理由についても、ブスキの事例を通じてかつて論じたが [植村 1997; Uemura 2002]、30 年代後半期の停滞については今後の検討課題である。

次に栽培のジャワ内における地域的分布を見ておこう。ジャワでは行政区画がしばしば変更された結果、植民地期を通して一貫した地域毎の統計を作成することはできないが、以下に掲げる表 1-2 は、区画変更が比較的少ない 1874~1915 年の時期について、『植民地報告』に掲載された理事州別煙草収穫面積を一部を例外として 5 年毎に平均したものである。また表 1-3 は 1910 年代後半から 20 年代後半にかけての年平均、表 1-4、表 1-5 は 1916~20 年の栽培が盛んな郡と県の対耕地面積比、表 1-6 は 1930 年代の年平均を示している。

これらから明らかなように栽培はジャワ各地で見られるが、西ジャワにおける栽培はブリアンゲルを除くと一貫して少ない。栽培中心地として先ず挙げられるのは、以前と同様にケドゥー理事州 (20 世紀初に合併されたバゲレンを含む) 及びバニユマス理事州北部を中心とする中ジャワ山間地方である。次にレンバン理事州、特に 1930 年代に入ると独立した理事州となったボジョネゴロ地方、さらに東端地方のブスキ理事州が栽培中心地だった。この他、クディリや 1930 年代の区分でいえばマラン理事州に属するルマジヤン、1930

年代の増加が著しいマドゥラなどが中心地として挙げられよう。栽培される煙草の種類は地域によって様々でありまた時期によっても異なるが、1930年代末の調査によればケドゥーはケルフの一大産地であるのに対して、レンバンは比較的クロソックが多く、またブスキでは農園生産煙草はほとんど全部が世界市場向けだが、住民生産煙草はジャワ内で大量消費され、一部がヨーロッパ市場に輸出されていた。またここはケルフの産地でもあった。他方、クディリの生産は大半がケルフ煙草でありジャワ内で消費されたのに対して、ルマジヤン煙草は大半がドイツへ輸出され、ジャワ内消費は極めて少なかった。またマドゥラ煙草はジャワの華人煙草工場で製品化され、プリアングルではケルフ煙草の方が葉煙草より多く生産された[栗林 1941]。この他、王侯領は一貫して良質の輸出向け葉煙草(いわゆるブラッド煙草)を産出してきた。

このような栽培の偏在は、煙草の内地流通を不可避にする。筆者はこれまで 1903~04 年に実施された『福祉減退調査』^(補註)の報告書や、ジャワ北岸を走るスマラン・チェリボン蒸気軌道会社(Semarang Cheribon Stoomtram Maatschappij、以下 S.C.S.と省略)、サマラン・ジョアナ蒸気軌道会社(Samarang Joana Stoomtram Maatschappij、以下 S.J.S.と省略)文書の検討から、20世紀初頭には中ジャワ山間部の煙草は主として西ジャワへ、またレンバンの煙草はスラバヤ方面へ移出されるという大きな流れがあったことを把握しているが、その実態の詳細な検討はなお本研究における重要な課題の1つである。

(補註)東インド植民地では、19世紀後半以来の「自由主義政策」によって生じた現地社会の貧困化に対処するべく、20世紀にはいると住民福祉の向上をも意図した「倫理政策」が導入された。その際に、ジャワ社会の貧困化について行われた調査が、この『福祉減退調査』である。この調査は1901年9月17日のオランダ議会両院総会における女王の演説をもとに、1902年10月15日付け東インド総督命令でジャワ・マドゥラの直轄領全域で実施することが決められ、1904年初には533にのぼる質問項目が決定され、各県毎に地方官吏の手で1年かけて調査が行われた。膨大な量の報告書は、極めて有用なデータを提供してくれる。

III. ジャワにおける製品煙草

さて、それでは以上のようにして製造された原料煙草は、ジャワ内ではどのような形で製品化されたのであろうか。本節では、この問題について概観しておきたい。

1. 煙草の利用法の推移

リードによると、インドネシアへ伝わった当初、煙草の主な消費者は宮廷貴族であり、彼らは長いパイプを使って喫煙していた。マタラム王国のアマンクラット I 世(1646~77年)は宮殿外へ出る際、常に供の女官達の1人には煙草とパイプ、もう1人には火を持たせていたという。このパイプ使用は1760年代に至ってもなお見られ、18世紀末までバタヴィアのエリートやジャワ人貴族の中で続いた。しかし同時に1658年には刻んだジャワ産煙草をトウモロコシやバナナの乾燥させた葉で巻いた、ブングス(bungkus)として知られる現地型の巻煙草が登場した。この結果、喫煙習慣は17~18世紀にインドネシア中に拡大した。もっとも、18世紀末までにインドネシアの一般民衆の中で最も広く行われるようになった消費法は、煙草をそれまで広く行われてきたベテル・チュウイングの材料に加えて噛むことであり、それは19世紀を通じて主要な利用法だったという[Reid 1985:535~538]。

しかし、この習慣は東インドに住むヨーロッパ人には広がらなかった。彼らは 19 世紀前半になるとそれまでのベテル・チュウイングやパイプによる喫煙に替えて、専らマニラ葉巻(シガー)を愛用するようになった。この葉巻は 1856~64 年には 230 百万本ほどがジャワに輸入され、富裕ヨーロッパ人、華人やジャワ人貴族に吸われたという。1845 年になるとバタヴィアには輸入紙巻煙草(シガレット)も現れ、これらの喫煙は 19 世紀後半にはエリート層から次第に社会の下層にまで拡大し、とりわけ男性の中ではベテル・チュウイングに取って代わっていった。こうした中でかつてのブックスは、直ぐ後に述べるストローチェ(strootje)として大規模な形で復活することになる[ibid.:538-539]。

2. 製品煙草の種類

次に、以上のような喫煙方法の変化を経た 20 世紀前半期の製品煙草の種類について整理しておく。ジャワで吸われていた煙草はストローチェと総称される現地型巻煙草(かつてのブックス)と、紙巻煙草(シガレット)、葉巻に大別される。このうち葉巻は現地における消費量はわずかであるので除き、以下ではストローチェと紙巻煙草について述べよう。

ストローチェとはオランダ語で「薫煙草」の意味だが、「細い、先端の尖った現地シガレットの総称」[C.E.I., vol.8:170]、あるいは「小さく、先細の、上巻に乾燥させたトウモロコシ、パーム椰子、バナナの葉を使った土着の喫煙物の総称」[Reijden 1834:6]である。そして rokok krettek (rokok はインドネシア語で煙草の意味、したがってこの言葉はクレテック煙草を意味する)、rokok kawung、rokok diko、rokok pupus などの種類がある。このうち、rokok krettek は 20 世紀初から現在に至るまで最もポピュラーであり、また調査・研究も多いので、後からやや詳しく述べることにして、以下では先ず他の種類について簡単に解説しておく。

rokok kawung は砂糖椰子(arenpalm)の若葉を上巻に利用し、中味にガランガン煙草(garangan: 直火乾燥させた刻み煙草)のみを使用し、添加物を加えていない煙草である。ガランガン煙草の喫味は非常にきつく重いので、使用量は少なく、したがってこの煙草は非常に細く作られる。1905 年に華人の手で初めてバンドンで製造され、次いでガルット(1908 年)、タシクマラヤ(1910 年)、プルウォカルタとバイテンゾルフ(1911 年頃)、さらにはスカブミ(1920 年頃)、次いでバタヴィア(1923 年頃)に工場ができた。主に西ジャワ、特にプリアンゲルで吸われたが、世界恐慌期には工場の多くが打撃を受けたため工場製品は少なくなり、喫煙者自身が手巻きする場合が多かったという。この煙草はプリアンゲルの山間地帯などでは、1930 年代半ばにおいてもなお常に主要な煙草であり続けた[Mangoenkoesoemo 1929:7; Reijden 1934:11, 107; Reijden 1936:139-140; Soenario 1935:12]。

rokok diko は、ニッパ椰子の葉を上巻に利用し、中の煙草には様々な添加物、特に安息香(benzoë)と大黄(rhabarber)などを加えた煙草である。名前の由来は、1890 年頃(1897 年ともいわれる)にスラカルタの Irodiko または Wirodiko なる人物がこの混ぜ物を発明したことによるといわれ、主に王侯領で吸われる。芳香を出すことから rokok wangèn ともいわれる[Mangoenkoesoemo 1929:7; Reijden 1934:10-11; Reijden 1936:139-140; Soenario 1935:1-2]⁽¹²⁾。

(12)ただし Soenario[1935:1-2]によると両者は厳密には同じでなく、rokok diko は rokok wangèn の一種であるが、後者の概念の方が範囲が広い。rokok wangèn とは、乳香を添加してあるおかげで喫煙時に芳香をまき散らすあらゆる種類のストローチェをいう。しかし、rokok diko はニッパ椰子葉を巻き葉に使ったこのストローチェだけで

あるという。この rokok wangèn の製造法については K.V.[1892, bijl.C, Soerakarta]に記事があり、それによると普通の煙草に先ず蒸気を当て、次に阿片水(amfioenwater)を吹きかけ、これが終わると芳香がある成分と混ぜてニッパ椰子の葉で巻くという。

なお Reijden[1936:139~140]によれば、この製造はほぼ完全に王侯領に限定され続け、1920年頃が最盛期だったが、その後、徐々にではあるが確実に klembak-sigaret に押し退けられていき、その際、この産業は大半がバゲレン平地へ移り、クブメンとゴンボン(Gombong)が主要な中心地となった。そしてソロでは、クレテック・シガレットが主流にさえなり、これがそのうちに完全に消滅することはほぼ確実であろうといわれる。

rokok poepoes とは、若くてまだ広がっていないバナナの葉を上巻に用いたストローチェであり(poepoes という言葉は、本来は一般的に「若い葉」を意味しており、特定の種類の葉を指すのではないが、rokok という言葉と結びつくと、特に若くてまだ開いていないバナナの葉を意味する)、バナナの葉にちなんで"rokok klaras"とも呼ばれるが、一般に中身は煙草だけである[Mangoenkoesoemo 1929:7; Reijden 1934:11; Soenario 1935:1~2]。

3. クレテック・ストローチェ(rokok kretek)産業の発展

(a)クレテック・ストローチェの起源

現地式煙草の中で最も大きく発展したのが roko kretek、すなわちクレテック・ストローチェだった。この煙草は刻み煙草と丁字(クローブ)^(註)を乾かしたトウモロコシの包葉(クロボット)で巻いたもので、一般に円錐形をしている。クレテックという名は丁字が火を付けた時にパチパチと弾ける音から付けられたという[Mangoenkoesoemo 1929:7; Soenario 1935:1~2]^(註)。この煙草の出現について、Reijden[1934:10]は、次のような伝承を紹介している。「この煙草と丁字の混合物の発明者はクドゥスの住民ハジ・ジャマフリ(Haji Djamahri)なる者で、胸の病を患って重い咳の発作に苦しんでいた。この苦しみを取り去るため、彼は胸と背中の中塗り薬として丁字油を使った。これはかなりよく効いたが、完全に直ることはなかった。しかし丁字を噛むと非常によく効いたので、彼はこの丁字の効果を体の内部に適用することを思いついた。このため、彼はストローチェ煙草に細かく刻んだ丁字を混ぜ、これを喫うことで煙を肺まで運べるようにした。この方法の結果は非常によく、この治療法はすぐに周辺一帯に知られるようになった。友人知人はこのようなストローチェでもてなされ、彼らは非常に満足したようである。その結果、これを混ぜた彼は、このストローチェをもっと作れという要望に驚くことになった。このように元々は薬と考えられたものが短期間に嗜好品になり、この仕事は続けられなければならなくなった。他の人々もいち早くハジ・ジャマフリの後続き、こうしてストローチェ産業はクドゥスで始まることになった。」Reijden は、このハジは 1890 年にクドゥスで亡くなったので、この産業の出現は 1870~80 年だと推定している。この伝承の真偽はともかく、この産業が 1880 年頃にクドゥスで始まったことは通説化している。

(13) 1930 年代のデータでは、煙草と丁字の混合割合は煙草 10 に対して丁字 3~7 程度、最も一般的には 10 対 5 であった。なお、これ以外にこの種の煙草では様々な成分からなるソースをかけてさらに香りを付けることが当時から行われ、現在に至っている。Reyden[1934:18]、Soenario [1935:33~35]、Hanusz[2000:90~97]等を参照。

(補註)丁字(クローブ)はかつてはモルッカ諸島にしか産出しなかった香料であり、ヨーロッパでは極めて珍重され、いわゆる大航海時代にヨーロッパ勢力が東インドへ進出する原因の1つとなった。香料に関しては山田憲太郎氏の一連の作品を参照せよ。

(b) クレテック・ストローチェ産業の発展と東ジャワへの拡大

この煙草は当初、*rokok-tjengkèh*(丁字煙草：*tjengkèh*は丁字)と呼ばれ、後に *rokok krètèk* と称されるようになった。その製造は長年にわたってクドゥスが独占してきたが、Soenario [1935:2]によれば当初は商業的な意義は小さく、意味ある産業に発展したのは第一次世界大戦後だという。もっとも *Werkum* [1937:2~3]は、この製品に対する需要がクドゥスの生産能力を上回り、1914年頃には東ジャワ、特にブリタル(*Blitar*)からトゥルンアグン(*Toeloengagoeng*)にかけての地方を中心にこの産業が発生したと指摘しており、クドゥスにおける発展時期はもう少し早いのもかもしれないが、詳細は不明である。いずれにせよ、1920年代後半になるとクドゥスの他にも、東ジャワのブリタル、クディリ、トゥルンアグンがこの産業の中心として挙げられる[Mangoenkoesoemo 1929:5]。

さて、この煙草に混ぜられる丁字はほとんどがザンジバル産であり⁽⁴⁾、したがってその輸入量の推移は、この産業の発展を近似的に示す指標となる。表 1-7 は 1919~40年の総輸入量、及びスラバヤ、スマラン両港の輸入量を示したものである。ここから分かるように、(1)この産業は 1920年代以降、急速な発展を遂げ、(2)それとともにスマランから丁字を輸入するクドゥスの独占的地位が次第に相対的に低下し、スラバヤからの輸入によって東ジャワの産業の地位が高まって来ている。

(14)インドネシア・モルッカ産丁字を使用しない理由としては、油分が多すぎてこの利用に適さないことや、値段が高いことが上げられる。また、ザンジバル産丁字はクレテック以外には使用されない。詳しくは *Reyden* [1934:17~19]を参照。

次の表 1-8 に示される 1930年代のストローチェ製造所の理事州別分布の推移は、これらを裏書きしている。表示のように工場数全体は 1933年に至るまで激増しているが、これは 1932年末の煙草消費税条令(*Tabaksaccijnsordonnantie*)施行の結果、いわゆる家内工業小営業(*huisnijverheidbedrijfjes*)が消滅し小ストローチェ工場へと転換を余儀なくされたことにより、年産 1000万本未満の小規模営業が中ジャワと東ジャワでそれぞれ 1929年の 161軒、73軒から 1933年には 799軒と 563軒に増加したのが主な原因である。逆に 34年の激減は、こうした小工場の多くが再び操業停止に追い込まれたことで生じた[Werkum 1937: 2~3]。

さてクレテック・ストローチェ製造で特徴的なことは、クドゥスではジャワ人資本による経営が多かったのに対し、東ジャワでは華人資本による経営が当初から主流だったことである。またクドゥスの場合、この製造は一種の請負制で行われる。企業家はアボンと呼ばれる者に一定量の丁字と煙草を渡し、アボンは提供された原料から決められたモデルに従ってストローチェを用意し、一定の賃金支払いと引替えに一定の期間内に引き渡す。アボンは自分の村でケルネット(*kernèt*)と呼ばれる労働者を使って、煙草を製造させるというシステムである[Mangoenkoesoemo 1929:51~52]。同様のシステムは、東ジャワでも見られた。

(c) クドゥス産クレテック・ストローチェの原料産地

さて、最大の中心地クドゥスのクレテック・ストローチェの原料煙草は、ケドゥーからくるものが最も多かった。例えば 1920年代後半の状況を見ると、1927年にクドゥスへ運ばれた原料煙草 6,184.15 トンのうち、ケドゥー産は 4,653.70 トン、75%以上を占めた。ケド

ケドゥー内の供給地ではトゥマンガングン郡が最も多く、以下ムンティラン(Moentilan)、マゲラン(Magelang)、クラングアン(Kranggang)、パラカン(Parakan)、ブラバック(Blabak)郡が続いていた。ケドゥーに次ぐ供給地はレンバン理事州だったが、その意義はそれほど大きくはなく減少しつつあるといわれる[Mangoenkoesoemo 1929:29, 30-31]。また1934年の調査によると、「周知のように、クレテック産業にはペペアン煙草(天日乾燥)⁽¹⁵⁾が用いられる。この煙草の大部分はケドゥー理事州(トゥマンガングン、ムンティラン、マゲラン、クラングアン、パラカン)から来る。ケンダル県からも煙草は取り寄せられるが、ケドゥーと比べればゼロに等しい。ボジョネゴロ県、トゥバン県から来る煙草は今ではもうクレテック産業では使わないが、それは品質が設定された要求を満たさないことに加えて、とりわけケドゥー煙草の値が安いからだ。」[Soenario 1935:16]とあり、ケドゥーへの集中がますます進む一方で、レンバン煙草の意義はますます低下していることが分かる。

(15)ケドゥーで製造される原料煙草は、その乾燥方法によってペペアン煙草とガラングアン煙草に大別される。前者が完全に天日乾燥であるのに対して、後者は直火にかざして乾かされる。一般に前者がクレテックの原料に用いられ、1920年代初めの調査によればクドゥスのハジが自動車で Temanggoeng 郡まで買い付けに来るといわれる[Fruin 1923b:269]のに対して、後者は西ジャワへ輸送されていくといわれる。

こうして見ると、ケドゥーにおける煙草栽培の発展とクドゥスのストローチェ産業の発展は関連が深いと考えられるが、これまで両者を関連づけて検討した研究はなかった。先に触れたように、中ジャワ山間部の煙草は20世紀初頭には西ジャワへ向かっていたのであるが、それが何時、どのようにしてクドゥス向けになったのか、その結果、従来の西に向かう輸送にどのような影響が出たのかといった原料煙草輸送問題をも含めて、本研究における検討課題の1つである。

これに対し、もう1つの原料クロボットは主にプルウオダディ(Poerwodadi)県のウイロサリ(Wirosari)郡、ゴドン(Godong)郡産だが、デマック(Demak)県とグンディー(Goendih)周辺からも供給される。これらの地域のトウモロコシ乾季作の収穫期は9~12月、最盛期は10~11月で、クロボット商人や農民自身の手で荷車(grobak)によって運ばれてくる。クドゥスの企業家はこれを倉庫に貯蔵した[Mangoenkoesoemo 1929:27, 28~29; Soenario 1935:22~23]。

(d)クレテック・シガレット

さて、現在、インドネシアで吸われる丁字入り煙草は大半が紙巻で、クレテック・シガレットと称される。これらは次に述べる紙巻煙草とクレテック・ストローチェの中間形態に当たり、既に1920年代には登場していた。円錐形が普通のクレテック・ストローチェとは異なって形は円筒型であるが、これは機械製造することで可能になった。またこの機械の使用は生産コストの大規模な削減を可能にし、その結果、この製品は高価な輸入シガレット紙の使用にもかかわらず値段はストローチェよりそれほど高くはなかったため、住民にも受け容れられて常に増産されてきた。その結果、1920年代末には、最大のヨーロッパ人シガレット会社の1つがスマランにクレテック・シガレットを専門に作る工場を建設することさえ計画していたといわれる[Mangoenkoesoemo 1929:43~44; K.V.1929:221~222]。

4. 葉巻・紙巻き煙草の製造

最後に、ジャワ内で生産された葉巻、及び紙巻煙草と、それに関連した原料煙草栽培の変化に触れておきたい。

①初期の煙草製造業

管見の限り、ジャワにおける紙巻、葉巻煙草等の製造に関する最も初期の記事は 1853 年のジャバラ理事州に関するもので、「既に上で述べたように、1853 年の収穫は非常に豊作だった。すなわち 1852 年を 5065 ピコル上回り、その生産を内地消費と大半を葉巻製造のために使ったジャバラ理事州の 1 企業家を例外として、これらは全てヨーロッパ市場向けに加工された。」[K.V.1853:166]と述べる。ここではおそらくオランダ人の民間企業家によって葉巻が製造されていたようだが、現在のところそれ以上の詳細は分からない。

レンバン理事州トゥバンについても、やはり 1850 年代の葉巻製造に関する記事が見られる。最も早い時期の記事は「1856 年にトゥバンの葉巻が推定で 50,000 ギルダーほど製造・販売されたことを見るならば、それ(=煙草栽培)は疑いなく拡大している」[K.V.1856:110~111]と述べている。この葉巻製造は「ジャワ煙草の一部は刻まれずに乾燥だけされて、華人葉巻工場主に売られる。この葉巻産業は常に拡大している。葉巻は大半が華人工場主のところで働く原住民によって作られる。」[K.V.1863:177]とあり、華人経営であること、原住民が雇用されていること、原料はケルフでなく、葉煙草の形で購入されていることが分かる。そして 1890 年代初のトゥバン市には、「華人の葉巻製造所 (sigarenmakerij) が 1 軒ある。そこでは原住民が 40 人ほど働いている。この工場の生産物はなお常に売れ行きがよい。・・・ラセムには、葉巻ケースを編むことに従事する者が 100 名ほどいるが、大半は華人女性である。この品はなお常に需要が大きい、値段は相対的に高い。これによって十分な日当を稼ぐことはできない。この仕事は家内工業としての性格が強く、技能 (kunstvaardigheid) の点から見ても停滞している。」[K.V.1892: bijl.C]とあり、華人経営の工場の労働者が 40 名ほどであること、また関連産業として葉巻ケース製造業が起こった可能性もあることが示される。

Jasper[1915:347~348]によると、トゥバンのこの葉巻製造は 1890 年代半ばに、企業心豊かな一華人がこの当時既に非常に小規模に葉巻を製造していたジャワ人のストラディオ (Soetoradio) に前貸しを融資して製造を進めたことをきっかけに、拡大し始めたという。ストラディオはその後もこの華人との関係を保ち、マニラ葉巻風の外観を持った葉巻を低価格で製造したが、農民の間で売れ行きが極めてよかったため、新規に葉巻を製造する企業家や職人が増加して競争が激化した。この地域で製造される葉巻は、当初は Pambes、Silar、Sigagoek、Sompret の 4 商標だけだったが、1910 年代半ばには 100 ほどに達したという。また『福祉減退調査』によれば、トゥバンでは 155 名の葉巻製造者がおり、このうち 100 名は県都に住んでいたという [Hasselman 1914:146]。

このように大きく発展したこの地域の葉巻は、域外へも移出された。1900 年代~10 年代の『植民地報告』によると、販路は特にシンガポールとバタヴィア向けであり (例えば K.V.1906:226 ; 1908:245~246 ; 1910:205~207)、「トゥバンの葉巻工場は、相変わらずバタヴィアとシンガポールのバイヤーからの活発な注文を受けている」[K.V.1911:204~206]、「トゥバン県で製造される葉巻は、バタヴィアとシンガポールに十分な販売先を持つ」[K.V.1913:164~165]とあるように、10 年代初めには売れ行き好調であった。このように、トゥバンは現地人による葉巻製造の中心地として発展した。

このような形での煙草製造は、最大の原料煙草産地であるケドゥーでも見られた。すなわちトゥマングン県では既に 1850 年頃には地元の原料煙草から葉巻が製造され、1000 本

当たり 6~8 ギルダーで販売されているが、それはスマランでも大量に売られていたという [Bleeker 1850-II:222]。さらに 19 世紀末の報告でもトゥマングンで華人、ヨーロッパ人企業家が葉巻と紙巻煙草を製造して周辺理事州へ販売しており [K.V.1890:bijl.NNN]、1890 年の経済調査ではヨーロッパ人葉巻・紙巻煙草製造業者が 3 人 [K.V.1892:bijl.C]、93 年には「現在、同理事州のトゥマングン県ではヨーロッパ人 2 名と華人 18 名が原住民労働者を使ってこれに従事し・・・また華人工場主の若干は選別と包装にも同国人を使っている」 [K.V.1894:217] といわれ、94 年にはこの製造がマゲラン市でも行われていると報告される [K.V.1895:239]。そして 20 世紀に入るとこの産業はさらに拡大したようで、ケドゥー産原料煙草の一部はトゥマングン、マゲラン、アンバラワで紙巻煙草に製造され、ジャワの他地域と外領に販売されていた [K.V.1905:232~233 ; 1906:226 ; 1908:246]。

1909 年の状況について K.V.[1910:205~207] は、ケドゥーの原料煙草のうち「薫り豊かで力強い種類は、刻まれて原住民市場へ向けられる。それより劣る種類はトゥマングンとアンバラワの葉巻工場のためにブラッド煙草として商われ、クロソックはヨーロッパへ船積みされる。」と述べ、葉巻にはあまり質のよくない原料煙草が葉巻のまま使用されるとするが、翌年の報告には「刻み煙草はトゥマングンとパラカン (Parakan) で紙巻煙草に加工される」 [K.V.1911: 204~206] とあり、葉巻と紙巻煙草の双方が製造されていたこと、後者には良質品が使われた可能性があることが窺える。何れにせよ、これらの産業は 1910 年代半ばには大きく発展したようだ。K.V.[1917:240] は「葉巻工業は 1916 年に非常に大きく拡大し、特にケドゥーでは非常に重要になったが、これは特に内地での使用増加と輸入品価格の上昇の結果である」と述べている⁽¹⁶⁾。

(16) この地域の葉巻工業は 1920 年代にも順調に発展していたようだが、Tabak [1925:188~189] によるとそれは「原始的方法で製造される原住民向けの非常に安価な大衆品」と「近代的方法による高級品」に明確に分けられ、後者はマゲランの Ko Kwat Ie & Zonen 葉巻工場 (商標は Indiana) で製造されるが、ここは Mignot en de Bloek 社の王侯領ジョクジャカルタにある "Negresco" 工場とともに高級葉巻を製造する数少ない工場である。大衆品の場合、葉巻は手で作られ、外葉には安いデリー・ラッパー、填充葉には質の悪いクロソックまたは屑、中巻葉にはたいてい "hangblad Kedoe" (上質クロソック) が使われ、外巻葉全体を糊付けして形を整えた後、乾かされて包装されるが、高級品の製造法はこれとかなり異なる。糊付けは上端部のみで、中巻葉の助けを借りて葉巻は巻かれ、木型の中で成形され、その後初めて上巻葉で巻かれ、包装して乾燥させる。填充葉にはブラジル産、ケドゥー産、王侯領産煙草、中巻葉にはジュンブル産、またはデリー葉、上巻葉にはたいていデリー葉が使われる。この工場では葉巻機械 1 台をも使っており、1 日当たり最大 1 万本の製造が可能であるという。

また、スマランでも既に 1890 年にはヨーロッパ人経営の一企業 (Glaser & Co) の葉巻、紙巻、刻み煙草工場があり、蒸気動力と手労働により製造していた [K.V.1891:bijl.QQQ]。K.V. [1900:149] はここには 1899 年にも紙巻煙草工場があったと述べているが、この産業はその後拡大したらしい。1907 年には葉巻工場が 6 軒あり、東洋外国人労働者 27 人、原住民労働者 645 人を雇用していたという [K.V.1908:bijl.AAA]。この他、20 世紀初めにはバタヴィアにもヨーロッパ人経営の紙巻煙草工場があった [K.V.1905:232 ; 1906:226]⁽¹⁷⁾。

(17)なお、20世紀初めの福祉減退調査によると、「葉巻と紙巻きはスマラン、サラチガ、マゲラン、そして特にトゥマングンとトゥバンで製造される。そこからは多くがジャワの三都及び西スマトラのパダン、南東ボルネオのバンジャルマシン、シンガポールへ輸出される。この業種はたいてい華人と契約して行われるが、発展した」[Hasselman 1914:146]とある。

②近代的紙巻煙草製造の発展

さて、これまで述べてきた葉巻や紙巻煙草の製造には、機械が導入された事例も一部含まれるが、基本的には手作業によるもので生産規模、資本規模は小さかった。しかし、1920年代以降になるとジャワで機械巻きによる紙巻煙草の大量生産が始まる。

機械生産による紙巻煙草製造業の起源は1887年まで遡る[C.E.I., vol.8:171]。そして1909年には英米煙草会社(British American Tobacco Company:以下B.A.T.と省略)^(補註)が当地の煙草商社Anton Justmanの生産を引き継いで機械生産を導入したが、この当時にはインドネシア内地市場は小さく生産は中止された。しかしその後、紙巻煙草の内地市場は徐々に拡大し、その輸入は大きく伸びることになった。こうした動きに対応して、第一次大戦直前にミカエル(S.S. Michael)はチェリボンに工場を開いた[Tabak 1925:200]。機械巻き煙草の市場はその後も拡大し続け、1920年代前半の輸入量は年に4,000百万本に達した[Castles 1967:35]。

(補註)B.A.T.については、Howard Cox, *The global cigarette: origins and evolution of British American Tobacco, 1880-1945*. Oxford University Press, 2000、およびその日本語訳であるハワード・コックス著; たばこ総合研究センター訳、『グローバル・シガレット: 多国籍企業BATの経営史1880~1945』(山愛書院, 2002年)を参照。

こうした中で1923年、B.A.T.はチェリボンで既存の1工場を買収して機械生産を開始、輸入煙草を徐々にインドネシア産シガレットに替えていこうとする新しい方針を打ち出した(同社はこの主要輸入業者だった)。この新しい試みは大成功を収め、1925年には紙巻煙草のジャワから外領向け移出がジャワへの外国産品輸入を越え、翌年以降、外領のジャワからの移入が外国からの輸入を越え始めた。1932年には、2番目の大煙草企業であるFarokaがスラバヤに工場を設立した。こうした結果、1931年までにはインドネシアで機械生産される紙巻煙草は6,000百万本に達し、輸入(1,100百万本)を遙かに上回るに到った。このインドネシア産と輸入品の合計である7,000百万本という消費量は、当時のストローチェ生産量に匹敵するものだった。またこうした動きに刺激されて、手作り紙巻煙草製造業も特に1935年以降大きく発展した[Castles:35; C.E.I., vol.8:171~172]。

これらの産業は世界恐慌期を生き抜き、生産を発展させた。1939年現在の機械製紙巻き煙草生産を担ったのは、表1-9に示した企業である。栗林[1941:123]によるとこれらは政庁に登録された会社のみだが、中でも四大会社で(機械紙巻き煙草)全製造数量の98%を生産し、残り2%は手巻きを主としつつも巻上機1~数台を有する小工場が製造したという。とりわけB.A.T.とFarokaの生産は大きかった。前者はスマランに本社があり、チェリボン、スマランに製造工場、スラバヤに原料工場を持ち、機械紙巻き煙草の約75%を製造し、年産は5,800~6,000百万本に達した。他方、ファロカはオランダ系資本で、マラン市に製造工場があり、解包場に出してある原料の種類はジャワ産在来種と黄色種、米国産黄色葉、ケンタッキー火干葉、マリランド葉、バーレー葉、バシバグリー系オリエント葉など、様々だった。製造量はジャワにおける機械製全紙巻き煙草の約2割、年額1,500~1,600百万

本で、B.A.T.の 1/4 を占め、ジャワ島内消費だけでなく、欧州動乱以来、従来はベルギーからアフリカのベルギー領コンゴへ輸出していた製品も製造していた[栗林 1941: 124~127]。

これらの機械生産による紙巻煙草製造のための原料煙草は大半が輸入されていたが、1929 年、B.A.T.はこれに適したバージニア煙草の栽培試行をボジョネゴロ県の住民栽培の中で始めた。この栽培は 34 年から本格化し、その面積は 29 年の約 140 ha から 34 年 900 ha、35 年 1,300 ha、36 年 2,500 ha、37 年 3,900ha、38 年 6,800ha へと急速に拡大した[I.V.1936:69~70 ; 1937:87 ; 1938:79 ; 1939:102]。このように、これをきっかけにレンバンでは新しい品種の栽培が拡大していったのである。また、B.A.T.、ファロカの 2 社はボジョネゴロ以外にマドゥラ、そして特にブスキで住民煙草を原料として買い付けたが、このことが恐慌期の経済悪化を緩和する役割を果たしたことはかつて論じたとおりである[植村 1997]。

おわりに

以上、これまでの研究と若干の史料にもとづき、植民地期ジャワにおける煙草産業の発展を概観してきた。16 世紀末に伝えられた煙草の栽培は 19 世紀に至って本格化した。内地市場向け原料煙草生産の最大の中心地は一貫して中ジャワ山間地域とレンバンだった。これらは前者の地域からは西へ、後者の地域からは東へ向かって移出され、また時にはそのままの形、あるいは葉巻などに加工されて外領やマレー半島にまで運ばれた。

ジャワでは喫煙習慣が広まるとともに、次第に現地産煙草の製造が盛んになってきた。ストローチェ、特にクレテック・ストローチェはその代表的なものだが、その拡大は中ジャワ山間地域の原料煙草の流通経路に影響を与えた。また東ジャワにおけるこの産業の拡大も、東ジャワ内での流通に影響を及ぼしたと考えられる。さらに、B.A.T.やファロカ社を中心とした紙巻煙草の現地生産の発展は、インドネシア社会におけるそれまでの煙草消費の構造に大きな影響を与えるとともに、新たにヴァージニア種煙草の栽培拡大をもたらした。

世界経済との関わりの中で、こうした生産と流通、消費をどのように関連づけて総合的に捉えていくのかが、今後の検討課題である。

第 2 章 植民地後期ジャワ製品煙草研究序説

はじめに

煙草は 16 世紀末にインドネシア群島へ持ち込まれたが[Jonge 1988:91~92 ; C.E.I.vol.1: 113~115; Reid 1985:535]、ジャワでは既に 17 世紀前半には栽培がかなり広範に行われ、宮廷貴族の間ではパイプを用いた喫煙が流行した⁽¹⁾。しかし 1658 年には刻んだジャワ産煙草をトウモロコシやバナナの乾燥させた葉で巻いた、ブックス(bungkus)と呼ばれた現地型巻煙草も登場し、これによって喫煙習慣は 17~18 世紀にはインドネシア中に拡大した[Reid 1985:535~538]。そして 19 世紀以降、喫煙が次第に一般化するとともに様々なタイプの煙草が登場し、輸入も拡大した。

(1) 例えば Reid[1985:535~538]によると、マタラム王国のアマンクラット I 世(1646~77 年)は宮殿外へ出る際、常に供の女官の 1 人には煙草とパイプ、もう 1 人には火を持たせていたという。

小論ではそうした喫煙可能な形に加工された煙草を製品煙草、それ以前の段階のものを

原料煙草、あるいは単に煙草と呼ぶことにする。そして様々な製品煙草の間でそれをめぐる諸条件の変化の下で、市場の獲得をめぐってどのような競合関係が展開したかを、植民地後期(19世紀初~1945年)を対象に検討する。こうした問題については、これまでストローチェなど特定のタイプについては検討されてきたが、製品煙草全体を見通した研究はなかった。しかし、この問題は単に製品煙草消費の問題に止まらず、原料煙草の流通・生産の変化を検討する場合においても避けて通ることができない問題である。以下では、同時に書かれた様々な調査報告、雑誌記事などを史料に、この問題に迫ってみたい。

それに先だつてこの時期に消費された主要な製品煙草の種類を概観すると、表 2-1 のようになる。各種製品煙草等の 1909~40 年の生産・輸入量の推移は表 2-2 に示した。同表の「丁字輸入量」の推移は、後述するようにストローチェの大半がクレテックであること、また輸入される丁子のほとんどはクレテック製造に使用されるので、ストローチェ生産量の推移を示すと考えてよい。これらの数字は様々な史料によってかなりバラツキがあり、その正確さには問題がない訳ではないが、およその傾向を掴むために利用することは可能であろう。さて、この表からは次のような特徴を読みとることができる。第 1 に、シガレット輸入は 20 年代後半から急激に減少し、1930 年代には極めて少なくなる。第 2 に、シガレット生産量は 20 年代後半から急増している。第 3 に、シガレットの中で「手作り」が 1935 年から急増している。そして第 4 に、ストローチェの生産は 1920 年代後半から急増し、1930 年代恐慌期にも増加し続けていることである。

ではこうした推移は、如何なる条件下で、どのようにして生じたのだろうか。以下では、ジャワにおける製品煙草製造の歴史をいくつかの時期に分けて、この問題を考えてみたい。

I, ジャワにおける製品煙草製造の開始から第一次世界大戦まで

1, 手巻き

刻み煙草(ケルフ)を購入し様々な上巻材料で手巻きすることは、庶民レベルでは最も原始的な喫煙方法だったと考えられる。なぜなら、内地市場向け煙草が栽培される地方に関する初期の史料の多くには、製品煙草を製造していたとする記述がない。例えば 1890 年にジャワ・マドゥラの各理事州で実施された経済調査の「原住民工業」の項目に、明確に「製品煙草」に関する記述があるのはスラカルタとレンバン、クディリのみで[K.V.1892:bijl.C]、1904~05 年の『福祉減退調査』の報告でも同様である。また Reijden[1934:52~53]は、西ジャワのバンテンでは 1930 年代に至ってもストローチェ産業は皆無であったことの理由として、「この地方では原住民煙草(rookartikelen)の消費者は長年にわたり、自分で使うストローチェは例外なしに自分で巻くという古くからの習慣に従ってきた」ことを挙げ、手巻きが古くから行われてきたことを示唆している。

2, シガレット・シガールの製造開始

こうした中で、ジャワで製品煙草の製造が始まったのは 1850 年前後のことだった。管見の限り、ジャワにおけるシガレット、シガール煙草製造に関する最も初期の記事はケドゥー理事州トゥマングン県に関するもので、そこでは既に 1850 年頃には地元の原料煙草からシガールが製造され、1000 本当たり 6~8 ギルダーで販売され、スマランへも大量に移出されていた[Bleeker 1850-II:222]。この県では 1881 年にはシガレット工場が、ケドゥー煙草を中味にしたケドゥー・シガレットを製造していた[Reijden 1935:139~140]。1890 年前後には華人、ヨーロッパ人企業家がシガールとシガレットを製造して周辺理事州へ販売してお

り [K.V.1890:bijl.NNN]、1890 年経済調査ではヨーロッパ人シガー・シガレット製造業者が 3 人 [K.V.1892:bijl.C]、93 年にはヨーロッパ人 2 名と華人 18 名が「原住民労働者を使ってこれに従事し・・・また華人工場主の若干は選別と包装にも同国人を使って」いた [K.V.1894:217]。さらに『福祉減退調査』などによると、県都を中心に立地するシガー製造業は主要産業の 1 つであり、華人とヨーロッパ人の企業家 (Gatzen 某氏) の他に、6 人の現地人企業主がおり、男女原住民労働者を使用して月に約 25 ギルダール稼いでいた。これに対してシガレット製造業は華人などが経営し、労働力として現地人女性を雇用していた [M.W.vol.VI^a,dl.1, 1909:140~141; Rapport Nijverheid 1904 I:116~117; II:51; M.W.vol.VI^b,dl.2,bijl,1909:bijl.5,132~133; M.W. vol.VI^a,dl.1,1909:91]⁽²⁾。この理事州では 1890 年代にはマゲランでも製品煙草製造が行われ [K.V.1895:239]、1900 年代にはシガレット、シガーの両方が製造されていた⁽³⁾。

(2) これらの製品煙草に使われた原料煙草について、K.V.[1910:205~207]はケドゥー煙草のうち「薫り豊かで力強い種類は、刻まれて原住民市場へ向けられる。それより劣る種類はトゥマングンとアンバラワのシガー工場のためにブラッド煙草として商われ、クロソックはヨーロッパへ船積みされる。」と述べ、シガーにはあまり質のよくないものが葉煙草のまま使用されるとするが、翌年の報告には「刻み煙草はトゥマングンとパラカンでシガレットに加工される」[K.V.1911:204~206]とあり、シガーとシガレットの双方が製造され、後者には良質品が使われた可能性があることが窺える。

(3) マゲランの煙草製造業の評価は、史料によって大きく異なっている。『福祉減退調査』によればそれは 1 デサに限定され、従事するのは数人だけで意味は小さかった。また製品の質も悪く、マゲラン市で販売するのみだった。そこには華人シガー工場も 1 軒あり、原住民労働者を使用していたという。他方、『植民地報告』は、ここで製造されたシガレットはジャワの他地域と外領に販売されていたという [K.V.1905:232~233 ; 1906:226 ; 1908:246]。

レンバン理事州トゥバンでも、1850 年代にシガーが製造されていた。最も早い時期の記事は「1856 年にトゥバンのシガーが推定で 50,000 ギルダールほど製造・販売された」[K.V.1856:110~111]と述べる。この製造は「ジャワ煙草の一部は刻まれずに乾燥だけされて、華人シガー工場主に売られる。このシガー産業は拡大している。シガーは大半が華人工場主のところで働く原住民によって作られる。」[K.V.1863:177]とあり、華人経営であること、現地住民が雇用されていること、原料はジャワ産煙草を葉煙草の形で購入していたことが分かる。また 1890 年にはトゥバン市に華人のシガー製造所が 1 軒あり、現地住民が 40 人ほど働いていたこと、製品は売れ行きがよかったことが報告されている [K.V.1892:bijl.C]。

1890 年代半ば、トゥバンのシガー産業は拡大を始めた。当時、企業心豊かな一華人が既に非常に小規模にシガーを製造していたジャワ人のストラディオ (Soetoradio) に前貸しを供与したことが、そのきっかけだった。ストラディオはその後この華人との関係を保ち、見かけはマニラ・シガー風の低価格シガーを製造したが、農民の間で売れ行きが極めてよかったので、新規にシガーを製造する企業家や職人が増加して競争が激化した [Jasper 1915:347~348]。こうして 1900 年代半ばには、現地人シガー製造者で営業税を査定される者が 155 人を数え、うち 100 人が県都に住んでいた。彼らは大半が華人商人から原料を 1 ピ

コル当たり 7 ギルダで提供され、シガーを固定価格で供出していた。中巻 (dekblad) は彼ら自身で用意し、稼ぎは 1 日当たり 0.50~1 ギルダ、労働者の日当は 0.20~0.30 ギルダ、操業期間は年に 6~7 ヶ月だった。シガーは手作りだったが、シガレット製造では簡単な手動式器械 (handtoestelletjes) 使用が拡大しつつあった。仕上げには改善の余地が大きかったが、この産業は発展しつつあり、バタヴィア、スマラン、スラバヤ、パダン、バンジャルマシン、シンガポールへの移出が増加し (1895 年の 568kg から 1903 年 2,346kg に増加)、1000 本当たり 2.20~7 ギルダで販売されていた [M.W. vol.VI, 1e deel, 1909:140~141; Rapport Nijverheid 1904 I:116~117; M.W.H. Rembang 371, 372, 376]。その発展ぶりは、「トゥバンのシガー工場は、相変わらずバタヴィアとシンガポールのバイヤーからの活発な注文を受けている」 [K.V.1911:204~206]、「トゥバン県で製造されるシガーは、バタヴィアとシンガポールに十分な販売先を持つ」 [K.V.1913:164~165] といった、1910 年代初の史料からも窺い知ることができる。この地域で製造されるシガーは、当初は Pambes、Silar、Sigagoek、Sompret の 4 商標だけだったが、1910 年代半ばには 100 ほどに達したという [Jasper 1915:347~348]。トゥバンは現地人シガー製造業の中心地となったのである。

この他、1850 年代にはジャバラ理事州でもシガーが作られていた。1853 年の報告は、「既に上で述べたように、1853 年の収穫は非常に豊作だった。すなわち 1852 年を 5,065 ピコル上回り、その生産を内地消費と大半をシガー製造のために使ったジャバラ理事州の 1 企業家を例外として、これらは全てヨーロッパ市場向けに加工された。」 [K.V.1853:166] と述べる。おそらくオランダ人民間企業家がシガーを製造していたようだが、現在のところそれ以上は分からない⁽⁴⁾。

(4) なお、19 世紀には早くからマニラ・シガーが輸入されていた。そのジャワ・マドゥラの輸入額 (5 年平均、単位 1000 ギルダ) は以下の通り。

1820 年 代後半	1830 年 代前半	1830 年 代後半	1840 年 代前半	1840 年 代後半	1850 年 代前半	1850 年 代後半	1860 年 代前半	1860 年 代後半	1870 年 代前半
48	113	120	189	209	386	540	1,219	602	712

出所：CEI, vol.12a: table 5A

マニラ・シガーの輸入が 1860 年代前半をピークにしてその後減少するのは、輸入全体が減ったことを意味するものではない。後に見るようにジャワ・マドゥラのシガー輸入額は 1880 年代後半から減少傾向に入るが、1910 年代~20 年代には激増している。むしろ、1904 年のある報告に「東インドでは以前、ほぼ全てマニラシガーが吸われていたが、後、それはほとんど全てオランダシガーによって駆逐された。」 [Rapport Nijverheid 1904:117] とあるように、19 世紀後半になると次第にマニラ・シガー以外のシガー輸入が増加してきたと考えられる。この報告によれば 1904 年第 1 四半期のジャワ・マドゥラのマニラシガー輸入は 3,508kg、その他のシガー輸入は 31,981kg である。この傾向はその後も続き、例えば 1911~13 年のジャワ・マドゥラシガー輸入 235 トン、258 トン、289 トンのうちマニラ産は 25 トン (10.6%)、20 トン (7.8%)、24 トン (8.3%) にすぎなかった [V.H.N.L.1913:144]。またオランダからのシガー輸入量は 1921~28 年についてデータが得られたが、順に 156、127、132、125、157、139、150、156 トンである。これは蘭印のシガー輸入量のほぼ半分に該当する。K.V. [1925:211~218; 1926:223~233;

1927:225~233, 1928:215~224; 1929:207~220, 1930:191~222]を参照。

19世紀末~20世紀初には、スマラン理事州でも製造が行われていた。スマラン市では既に1890年にはヨーロッパ人経営の一企業(Glaser & Co)のシガー・シガレット・刻み煙草工場があり、蒸気動力と手労働により製造していた[K.V.1891:bjl.QQQ]。K.V.[1900:149]はここには1899年にもシガレット工場があったと述べているが、この産業はその後拡大したらしい。1907年にはシガー工場が6軒あり、東洋外国人労働者27人、現地人労働者645人を雇用していたという[K.V.1908:bjl.AAA]。またサラチガ(アンバラワ)でもシガレットが製造されていた[K.V.1905:232~233; 1906:226; 1908:246]。この他、20世紀初めにはパタヴィアにもヨーロッパ人経営のシガレット工場があった[K.V.1905:232; 1906:226]。この工場は現地人労働者50名を雇用していた。

3. ストローチェ生産の始まり

他方、ストローチェの商業的生産が始まったのは、19世紀の終わりだった。各地方毎の起源は表2-3にまとめた通りであるが、最も早く登場し最もよく広まったのがクドゥスのクレテック・ストローチェだった。この煙草は刻み煙草と丁字を混ぜたものをクロボット(乾かしたトウモロコシの包葉)で巻いたもので、一般に円錐形をしている。クレテックという名は、丁字が火を付けた時にパチパチと弾ける音から付けられたという[Mangoenkoesoemo 1929:7; Soenario 1935:1~2]⁽⁵⁾。

(5)1930年代のデータでは、煙草と丁字の混合割合は煙草10に対して丁字3~7程度、最も一般的には10対5であった。なお、これ以外にこの種の煙草では様々な成分からなるソースをかけてさらに香りを付けることが当時から行われ、現在に至っている。

Reyden[1934:18]、Soenario[1935:33~35]、Hanusz[2000:90~97]等を参照。

この煙草の出現について、Reijden[1934:10]は、次のような伝承を紹介している。「この煙草と丁字の混合物の発明者はクドゥスの住民ハジ・ジャマフリ(Hadji Djamahri)なる者で、胸の病を患って重い咳の発作に苦しんでいた。この苦しみを取り去るため、彼は胸と背中の塗り薬として丁字油を使った。これはかなりよく効いたが、完全には直らなかった。しかし丁字を噛むと非常によく効いたので、彼はこの丁字の効果を体の内部に適用することを思いついた。このため、彼はストローチェ煙草に細かく刻んだ丁字を混ぜ、これを喫うことで煙を肺まで運べるようにした。この方法の結果は非常によく、この治療法はすぐに周辺一帯に知られるようになった。友人知人はこのようなストローチェでもてなされ、彼らは非常に満足したようである。その結果、これを混ぜた彼は、このストローチェをもっと作れという要望に驚くことになった。このように元々は薬と考えられたものが短期間に嗜好品になり、この仕事は続けられなければならなくなった。他の人々もいち早くハジ・ジャマフリの後続き、こうしてストローチェ産業はクドゥスで始まることになった。」Reijdenは、このハジは1890年にクドゥスで亡くなったので、この産業の出現は1870~80年の時期だと推定している。この伝承の真偽はともかく、この産業が1880年頃にクドゥスで始まったことは通説化している。

他方、王侯領では早くからニッパ椰子の葉で煙草を巻いたニッパ・ストローチェ(rokok nipah)が吸われてきたが、1890年頃、スラカルタの王宮役人IrodikoもしくはWirodikoが煙草に混ぜ物をするを考案し⁽⁶⁾、それが広く知られるようになって多数の小企業がそれを賃労働で製造するようになった。最初の工場は1897年にソロで設立され、製品は発明

者の名前にちなんでロコッ・ディコ (rokok diko) と呼ばれた [Reijden 1934:10~11;1935:152~153]。ケドゥー理事州でもマゲランとムンティランでは 1900 年頃にニッパ・ストローチェが賃労働で生産されており、そこでは後になるとロコッ・ワンゲン (rokok wangen)⁽⁷⁾ の生産も始まったという [Reijden 1935:139~140]。また西ジャワで好まれたカウン・ストローチェの工場生産開始はやや遅く、1905 年にバンドンに設立されたのが最初だった [Reijden 1934:76~77]。

(6) 煙草に追加される混ぜ物 (woor あるいは woer と称される) は安息香 (menjam)、クレンバック (klembak = 大黃 rabarber の根)、クベバ (kemoekoes)、カユ・マニス (kajoe manis)、ナツメグ (pala)、アダス (adas)、プロサリ (poelosari)、プチュック (poetjoek)、ガンティ (ganti)、トゥガリ (tegari)、チュンドノ (tjendono)、メソイ (mesoji)、ワロン (waron)、クラブット (klabet)、ドゥパ (doepa) など、極めて多様だった [Reijden 1934:12~13]。

(7) Reijden [1935:124~125] は、ロコッ・ワンゲンとはロコッ・ディコからクレンバック・シガレットへの移行形態だと述べている。

さて、表示のようにストローチェの工場生産が第一次大戦までに始まったところは決して多くなく、生産量も表 2-2 の丁字輸入量から分かるように多くはなかった。それが急増するのは 1910 年代後半からである。他方、シガーやシガレットの輸入も、表 2-4 に示されるように増加に転じるのは 1910 年代に入ってからで、特にその後半に激増している⁽⁸⁾。こうしてみると、オランダ領東インドの製品煙草市場は第一次世界大戦期に転換期を迎えて拡大した、と考えることができる。そこで、次にその時期にどのような状況変化があったかを考えたい。

(8) 表示のように、製品煙草輸入では 20 世紀にはいると外領がジャワを上回るのが、特徴である。この理由を十分なデータにもとづいて説明することは困難であるが、本稿でも述べるようにジャワ・マドゥラが現地市場向け煙草生産の中心であったのに対して、外領ではごく一部を除いてそのような生産が行われていなかったこと、さらにシンガポールとの商業上の関係が密接であったので外国煙草が入りやすかったなどの事情が、このような状況を生み出したと考えられよう。

II. 第一次世界大戦期のジャワ製品煙草産業の発展

第一次世界大戦は、ジャワのシガーやシガレットの製造が発展を始める契機になったと考えられる。植民地政庁農商局 (Afdeling Nijverheid en Handel) が 1916 年、17 年に発行した報告書は「この製造は近年非常に急速に拡大してきた。」 [Gegevens Nijverheid 1916:21]、「既に大戦前にこの地における産業分野の明確な発展を語ることができるが、1914 年以後初めて、とりわけ輸入 (特にシガーの輸入) が困難になり、輸入シガーと輸入シガレットの価格が上がり始めた 1916 年初以来、この産業分野は急速に発展することができた。」 [Ontwikkeling Nijverheid 1917:26] と書いている。以下、この点をもう少し具体的に眺めてみよう。

「急速な発展」を直接的に示す製造量のデータはないが、1915 年のジャワのシガレット工場数が 65 軒、労働者総数 2,008 人 [V.H.N.L.1915:181]、16 年 1 月 1 日現在のジャワ・マドゥラのシガー、シガレット工場が 70 軒、1,954 人 [Gegevens Nijverheid 1916:21]、1917 年のジャワの工場数が推定 80 軒 [Ontwikkeling Nijverheid 1917:26] という、工場数の増加を示す数値からその一端が窺えよう。その地域分布は表 2-5 に示されるとおりであり、ケドゥー、レ

ンバンなど以前からの中心地が依然として主導的な役割を果たしている。

このような発展の要因として、先に引いた 1917 年の報告は輸入困難による輸入シガー、シガレット価格の上昇を挙げているが、さらに詳しく検討してみよう。

まず表 2-2 で 1914-22 年のシガー輸入量を見ると、19 年、21 年を除き減少傾向にある。恐らく輸入の主力がオランダ産だったことが、その原因だったと考えられる。1917 年の報告書は「オランダからのシガー輸入は報告年に大きく減り、後半期には意味がずっと小さくなった。販売価格は少なからず上がった。」[V.H.N.L.1917:196]と述べている。逆に 19 年、21 年の輸入増の背景は、オランダからの大量輸送だった[V.H.N.L.1919:223 ; 1921:184]。したがって、第一次大戦末期にその輸送が船腹不足の影響を被ったことは想像に難くない。

それでは、こうした状況下でジャワのシガー製造業はどのような方向へ向かったのだろうか。これについて、以下の報告は示唆的である。

シガー製造は、大戦中に大きく増加した。特に中ジャワ地方ではこの産業は大きな比重を占め、完全に華人企業家の手で行われる。ヨーロッパ人主導の工場はスマラン、スラバヤ、ジュンブル、ジョクジャカルタで拡大または再建された。これらの工場も原住民労働者を雇用しているが、彼等はヨーロッパ人職人の下でシガー作り職人、選別者、糊付け職人として、それぞれの分野で完全なヨーロッパ式方法で養成される。

オランダ製シガーとの比較試験に完全に耐えられるシガーが既に作られていることは、否定できないようだ。

1919 年、内地市場はシガーにとっては特に良好ではなかったが、シガレットには良かった。オランダからの大量輸送や、マニラとの競争激化の結果、ヨーロッパ標準で操業する現地シガー工場にとって競争は厳しかった。特に良いブレンドのために必要な外国煙草の点で、不利だった。これらの煙草は直接輸入されるのではなく、オランダ経由で、そこでまず様々な質によって選別されなければならなかった。

しかし現地産煙草だけから作る安物のシガーは、原住民の中で売れ行きが伸びた。

概して経済的な結果は 1919 年には前年までよりよかったが、外国との競争激化によって先行きは不安である。[V.H.N.L.1919:223~224]

ここから分かることは、①シガー製造は大戦中に大発展し、②主に華人とヨーロッパ人企業家によって担われ、③後者の工場ではヨーロッパ式のやり方で品質の高い製品も生まれていること⁽⁹⁾、④ただし、品質向上に不可欠なブレンド用外国産原料煙草確保の点で不利な立場にあったこと、⑤現地産煙草のみから作られる安物のシガーは、現地住民の中で売れ行き好調だったこと、である。このように、シガー製造は高級品志向と、質は落ちるが価格の安い製品への志向とに分極化しつつあった⁽¹⁰⁾。

(9)同様の内容は 1920 年の報告にも見える。この年、ジャワ産シガーはスカンジナビア諸国やその周辺の東方の国々にかかなりの量が卸輸出され、またオランダへも郵便小包によって販売されている[V.H.N.L.1920:202]。ジャワで生産されるシガーの質については工商局の 1917 年の出版物に「残念なことに質、特にシガーのそれには改善の余地が大きく、またその製造にはしばしばしっかりと注意が払われることがない。疑いなしに、この地におけるシガー工業は通常の状態でも将来性があるが、その場合には技術的にヨーロッパ製品に劣らない、少なくともそれに近い製品を出荷するよう努めなければならない。」[Ontwikkeling Nijverheid 1917:26~27]と指摘されていたのが、一部で

急速に改善が進んだのである。

(10) 中心地の1つケドゥーに於ける 1920 年代初めのシガターの製造方法は「原始的方法」と「近代的方法」に明確に分かれており、前者は大衆品のため、後者より高価なシガターにだけ適用されるという。詳しくは Tabak [1925: 188~189] を参照。

しかし、結局、高級品は十分には発展できなかった。1924 年のある報告が、「シガター製造も徐々に拡大しているが、なお常に人が一般的に現地産シガターに対して抱く偏見の悪影響を受けている。これには、同じ価値の品質を持つ輸入シガターよりずっと安い販売価格を設定することで対抗する他ない。原料は十分確保できるが、上質シガター製造に必要な、上質ジャワ煙草、スマトラ煙草のみはアムステルダムとの競りで購入しなければならない。」[V.H.N.L.1924:180] と述べるように、品質面ではなお十分な評価が得られず、高級品に必要な原料煙草の確保にも相変わらず困難が伴った。この結果、栗林 [1941:133~134] が指摘するように、これ以降もシガターの高級品は専らオランダ本国から輸入されることになった。

こうしてジャワ産シガターは、専ら安価な製品の製造に活路を見出した。1920 年の報告では「国内の売れ行きも伸びたが、これはシガターの喫煙が原住民にも一層広がり始めたからでもある」[V.H.N.L.1920:202] とジャワ内でのその市場の拡大が報じられ、22 年報告では同年はシガター産業にとってよい年になったが、それはジャワ産シガターが外国製品よりずっと安かったので、外国産シガターの優位性がますます消滅しつつあるからだといわれる [V.H.N.L.1922:148]。こうして栗林 [1941:133~134] が「蘭印(といってもジャワがほとんど全部である)で製造されるものは中級品以下、特に下級品が大部分」であるというように、価格の安いシガターはジャワ産シガターの主要製品となったのである⁽¹¹⁾。

(11) シガターの 1939 年の製造量は 11 億本であり、製造工場は多数に上るが、Negresco (オランダ資本、Magelang)、Aroma (華人資本、Koedoes)、Tieong Sing (華人資本、Toeban)、Kaw Kwat Yee (華人資本、Magelang) が四大工場であり、とくに Negresco が半数以上を占めた [栗林 1941:133~134]。なお、1920 年代前半には seroetoe-omblad、cigarillos などと称される様々な安価なシガターが製造されていた。これについては Tabak 1925 [189~190] を参照。

次にシガレットの場合を検討しよう。輸入量はシガターとは対照的に 1914~22 年には急激に拡大している。これは「シガレット産業は概して外国、特に中国とフィリピンの競争を、シガター製造以上に受けている。」[V.H.N.L.1920:203]、「大量のシガレットが中国から輸送された」[V.H.N.L.1921:184] という記事からも窺えるように、シガレットが船腹不足の影響をあまり受けないアジアから主に輸入されていたことと関係があるろう。中でも中国からの輸入は極めて多かった。Tabak [1925:195, 201, 217~218] によれば、シガレット輸入の圧倒的部分は B.A.T. (British American Tobacco Co.) と南洋兄弟煙草会社 (Nanyang Brothers Tobacco Co.) が中国、香港の工場で中国産ヴァージニア煙草だけを原料に製造し、これらの会社が直接あるいはシンガポール、ペナン経由で蘭印に輸入する安い大衆向け商品であり、1923 年のジャワ・マドゥラのシガレット総輸入量 2,563,100kg のうち約 200 万 kg は中国製だという。

したがって価格上昇も、シガターとは別の要因による。V.H.N.L. [1916:186] によれば、1916 年には外国産シガレット消費が増えた結果、輸入は安物についても高級品についても増加し、ますます新しいブランドが流入したが、価格は原料と包装材料の高騰にもかかわらずかわらなかつた、しかし「1917 年にはかなりの価格上昇が始まるだろうと広く予想されている。なぜなら、ヨーロッパとエジプトにおける煙草ストックは非常に多いという訳で

はなく、マケドニア煙草、ルーマニア煙草の集散地であるカバラー(Kavallah)がブルガリアによる占領以降、閉鎖されたからである。」とあり、ヨーロッパに於ける大戦の影響が原料煙草価格に影響し、シガレットの価格も上昇したことが示唆される。

それではこのような状況の中で、ジャワのシガレット製造業はどのような方向に発展しつつあったのだろうか。以下、この時期のV.H.N.L.の記事を追ってみよう。

第一次世界大戦が始まった1914年、ジャワのシガレット産業は景気が悪く、操業停止に追い込まれる工場さえあった。製品はほぼ全て内地市場向けで、価格は概して輸入品より安かったので競合しなかった[V.H.N.L.1914:200]。ところが15年の報告には、満足できる状態で販売は拡大したが、「その一方で、安い外国産シガレットの輸入によって大きな不利益を蒙った工場もあった」[V.H.N.L.1915:181]とあり、安価な製品について輸入品との競合が問題にされる。16年になると、「シガレット産業は非常に大きく拡大し、とりわけケドゥーではたいへん大きな意味を持つようになったが、これはとりわけ輸入品価格が常に上昇していることの結果である」とされ、同時に輸出が大きく伸びたとされる[V.H.N.L.1916:203]。17年は輸入量が急増した年であるが(表2-2に従えば前年比146%)、「内地製造品への需要が報告年に大きく拡大したが、それは不十分な輸送量と価格値上がりの結果である」[V.H.N.L.1917:210]という。

こうしてみると、輸入増を上回る内地市場の拡大が進みつつあったといえるが、それはこれ以降もシガレット輸入が拡大していることから裏書きされよう。そして19年、20年もシガレット産業は良好な状態にあったが[V.H.N.L.1919:223~224; 1920:202~203]、それでも拡大した市場をめぐる輸入品との競争は、相変わらず激しかったようだ。20年には「シガレット産業は概して外国、特に中国とフィリピンの競争を、シガー製造以上に受けている。」[V.H.N.L.1920:202~203]、翌年には「多数の小規模で、大半が華人経営の企業が操業停止したが、外国との競争のせいでもある。すなわちシガーは大量にオランダから輸送され、その一方で大量のシガレットが中国から輸送された。」[V.H.N.L.1921:184]と述べられる。この21年の状況については『植民地報告』も、「シガレット製造業は拡大した。原住民のシガレット消費の拡大が、この製造業により影響を与え、これらは安いシガレットの製造に従事した。この産業はますます機械で操業する施設に集中しつつあるようだ。手作業で生産する多数の小営業が、停止した。この産業部門でも外国との競争は激しく、他の国の輸入は高い保護輸入関税によって妨げられている。」[K.V.1922:301]⁽¹²⁾と述べている。

(12)同様の内容はV.H.N.L.[1921:184]にも見える。

これらの記述から、(a)シガレットの内地市場がこの時期に急速に拡大したこと、(b)それをめぐり輸入品と内地産品との激しい競争が展開されていること、(c)その中で安価なシガレットの製造が進展したこと、(d)機械生産が発展したこと、また(e)輸出は若干行われてきたが、相手国の関税障壁のために困難だった⁽¹³⁾ことがわかる。要するに、ジャワのシガレット産業も、内地市場向けの安価な製品を主力にすることで発展を図ったのである。

(13)同様のことは、翌年の報告[K.V.1923:207~208]でも「外国向け販売は不可能だったが、それは高い船賃と、英領地域(Britische gebieden)に関しては高輸入関税のためだった。」と指摘される。ジャワ産シガレットはもともと基本的に内地市場向けで、1910年代前半の輸出(最も多いのがシンガポール向け、他にオランダ、中国、香港向け)は1912年3,299kg、1913年4,168kgと僅かだったが[V.H.N.L.1914:200]、16年にはオランダ

向けなど輸出が大きく伸びたという [K.V.1917:240 ; V.H.N.L.1916:203]。しかし、20 年代に入ると、関税障壁に阻まれて輸出は激減し、専ら内地市場を目指したと考えられる。

したがって、ジャワのシガレット産業がさらに発展するためには、何よりも輸入品との競争に勝つことが必要だった。では、この競争はその後、どのように展開したのであろうか。次に、それを含めて 1920 年代以降のジャワの製品煙草をめぐる状況を検討しよう。

III, 1920 年代の事態の発展

1, 煙草輸入関税の引き上げ

これまで述べてきたジャワのシガレット産業と輸入シガレットの激しい競争は、1920 年代に製品煙草に対する輸入関税の大幅引き上げという、外在的条件の劇的な変化によって決着がつくことになった。

蘭領東インドでは 1907 年から 1921 年まで、あらゆる種類のシガーとシガレットに 100kg 当たり 50 ギルダの輸入関税が課せられてきたが、1921 年 5 月 18 日からこの関税は 100kg 当たり 100 ギルダに引き上げられ (Stbl.1921 No.210)^(補註)、シガレットについてはさらに 24 年 6 月 6 日から 150 ギルダへと引き上げられた (Stbl.1924 No.192) [Tabak 1925:217]。

(補註) Stbl.、すなわち *Staatsblad van Nederlandsch-Indië* は蘭印で公布された法令のうちの主要なものを載せた法令集である。ここに掲載される法令にとって補助的な法令・規則は *Bijblad op het Staatsblad van Nederlandsch-Indië* に集められた。ただし、これらには掲載されないものも多数あったようだ。

この時期のジャワでは、シガレット 1 本は煙草 1 g に換算されるのが普通だから、この関税値上げによって 1 本当たりの価格は 21 年には 0.1 セント、24 年には 0.15 セント上昇したことになる。当時のシガレット輸入額は 21 年が 2380 万 8000 ギルダ、24 年が 2435 万 2000 ギルダ、輸入本数は 44 億 900 万と 45 億 1000 万だから [C.E.I.,vol.8:table XVII]、1 本当たり価格は両年とも 0.54 セントになる。仮に輸入関税が全て消費者に転嫁されたとすれば、両年の輸入シガレット 1 本当たりの値段はそれぞれ 0.64 セント (税改訂前比で 8.5%値上げ)、0.69 セント (17.9%値上げ)になる。また当時、ケドゥーで操業していた Mac Gillavry 社の例だとシガレットは 10 本入りパック、20 本入りカートンで販売されていたので [Tabak 1925:194]、これを基準に考えると 1 箱当たりの値上がりは前者の場合は 21 年 1 セント、24 年 1.5 セント、後者では 2 セントと 3 セントになる。

当時の現地産シガレットの値段は不詳であるが、Hoogesteger [1933b:667]によると後述する 1932 年の煙草消費税導入時に、住民産シガレットの主力商品は 10 本 5 セントだったという。また、20 年代初めのストローチェは 25 本入りパックが 5 セントで買えた [Tabak 1925:198]。これらと比較すると、もともとやや高めだった輸入シガレットの割高感がさらに増したことは否めないであろう。表 2-6 はジャワ・マドゥラにおける 1924 年初~25 年 8 月の、月毎の各種製品煙草の輸入量を示したものである。ここから明らかに、関税が値上がりしたシガレットのみ、新税率が適用された 24 年後半の輸入量が前半と比べて激減しており、また 1~8 月期を比較しても 25 年は半分以下に減っている。こうした数字の動きには関税引き上げが直接的な影響を与えた、と考えても間違いない。

もっとも、シガレット輸入は表 2-2 から明らかなように、それ以降も 20 年代後半を通じて減少している。その背景には、この時期にジャワでシガレットの機械制生産が大規模に始まったことがあった。以下では、その発展について概観してみよう。

2. 機械制シガレット生産の発展

機械生産によるシガレット製造業の起源は 1887 年まで遡る [C.E.I.,vol.8:171]。そして 1909 年には B.A.T.が当地の煙草商社 Anton Justman の工場を引き継いで機械生産を導入したが、当時の内地市場は小さく生産は中止された。しかしその後、既に述べたようにシガレット消費は徐々に拡大し、その輸入は大きく伸びることになった。こうした動きに対応して、第一次大戦直前にミカエル (S.S.Michael) はチェリボンに工場を開いた [Tabak 1925:200]。さらに 1918 年にはケドゥーの Mac Gillavry 工場が機械化した [C.E.I.,vol.8:171~172]。この工場は 1920 年代前半、多数の企業が操業するケドゥーで最新式機械を装備した 2 つのシガレット工場の 1 つで、日産 100 万本が十分可能だが 150 万本への引き上げを計画中だった [Tabak 1925:193] ⁽¹⁴⁾。

(14) 1930 年のスマラン理事の引継覚書によると、同社は 1920 年代を通じて規模が非常に拡大したという [Memori Residen Semarang 1930.: 56] ^(補註)。もう一方は Ko Kwat Ie の工場で、そこは十分な需要がある場合には 1 日 50 万本の供給能力を持っていた。なお、機械生産では円筒形シガレットしかできず、ジャワで需要の多い先細形 (puntmodel) の製造は手作業による。Mac Gillavry 社では 100 名ほどの女性が従事し、1 人で 1 日 1000 本程度を作っていた。製品の包装作業はほとんどが手作業だが、Mac Gillavry 工場は 10 本入りパックの包装には機械を使った。しかし 20 本入りカートンは、まだ手で詰められている。包装賃金は 50 箱当たり 3 セントで、普通の女性労働者の場合 1 日に 35~40 セント稼いだ [Tabak 1925:193, 194]。

(補註) オランダ領東インドでは、地方行政官が交替する際にはその職務期間の間の統治地域の状況を引継覚書として書き残して後任に引き渡すことが習慣になっていた。これが Memorie van Overgave と呼ばれる史料であり、その写本はバタヴィアの総督府からハーグの植民省に送られた。現在、これらはハーグの国立文書館に所蔵されており、またそのマイクロフィッシュ版が発売されている。他方、原本はジャカルタのインドネシア国立文書館 Arsip Nasional Republik Indonesia に残っており、その一部は活字化されて同文書館から出版されている。この註におけるように Memori Residen... とインドネシア語表記で表されているものは、これによる。他方、Memorie van Overgave... というオランダ語表記になっているものは、マイクロ版によるものである。

シガレットの機械製生産はその後にも拡大し続け、1920 年代前半の年生産量は 40 億本に達したが [Castles 1967:35]、この発展に決定的な役割を果たしたのが B.A.T.だった。輸入シガレットに対する「恐ろしいまでの輸入関税引き上げによって、安いシガレットの最大の輸入業者の 1 つが、この地で大規模に製造を始めることに踏み切った」 [V.H.N.L.1923:179] とあるように、外国産シガレットの最大の輸入業者だった同社は、関税引き上げという状況の中で、ジャワでシガレットを自ら大規模に生産する方向に転換し、1923 年にミカエル社のチェリボン工場を買収し、機械生産を開始したのである。チェリボン理事の 1930 年の引継覚書によれば、この工場は日産能力 1,750 万本と桁外れに大きな生産力を備え、従業員数は 1,700 名、原料煙草はこの時点では外国産を輸入していた [Memori Residen Cirebon 1930:252~253]。そしてこの工場の操業開始の結果、それまで輸入シガレットよりも小さかったジャワ産シガレットのシェアは急拡大し、1925 年にはシガレットのジャワから外領向け移出がジャワへの外国産品輸入を越え、翌年以降、外領のジャワからの移入

が外国からの輸入を越え始めた[Memori Gubernur Java Tengah 1930:11; Memori Residen Cirebon 1930:249]。

こうした中で、シガレット産業の発展にとって妨げとなる可能性のある事態が生じた。1926年6月26日の政令(ordonnantie:Stbl.no.260)によってシガレット用紙に輸入関税が課せられることになり、その額は面積が25cm²を越えるものは1m²当たり20セントと定められた。これは普通のシガレットの場合だと、1本当たりでおよそ0.044セントに当たった[Hoogesteger 1933b:666-667]。これに対してジャワのシガレット業界は当初は販売価格を引き上げたが[K.V.1927:236]、ストローチェとの激しい競争の中で販売が落ちたために、翌年には旧価格へ戻さざるを得なかった[K.V.1928:226]。ではこの時期、ジャワの機械製シガレット生産はどのように推移したのだろうか。表2-7は煙草用紙関税収入の推移を示しているが、機械製シガレットが使用するのには表中のボビンという用紙である。これは幅をシガレットに必要な大きさに合わせた巻紙で、長さは数千メートルに達する。Hoogestegerはこの数字にもとづいて1927~30年の機械製シガレット生産量を表示のように推定し、この時期には(機械製)シガレット産業は大発展したと結論づけている。

そして、この発展過程は、寡占化の過程でもあった。V.H.N.L.[1929:197~198]は、1929年には様々な新しい小規模企業が参入し新しい商標のシガレットを市場にもたらしたが、それらの品質には改善の余地が大きく、また必要性が高い集中的な広告のための資本が欠如しているので、大企業製のよく知られたシガレットに互して地位を維持することは難しく、概してシガレット産業における小企業のチャンスはますます縮小しつつある、と述べている。こうしてこの時期には大手企業が生産を伸ばした。スマラン理事の1930年の引継覚書によると、Oengaran郡にあるMac Gillivaryシガレット工場はこの10年間に非常に規模を拡大し[Memori Residen Semarang 1930:56]、最大手のB.A.T.は1930年にスマランに2番目の工場を開設した[Memori Gubernur Java Tengah 1930:11; Memori Residen Cirebon 1930:249]。また1932年には、第2位の大煙草企業であるファロカ(Faroka)がマランに工場を設立した[MvO, residentie Malang 1934:24]。こうして、1931年にはインドネシアで機械生産されるシガレットは60億本に達し、輸入(11億本)を遙かに上回った[Castles 1967:35;C.E.I., vol.8:171~172]。

他方、手作りシガレットも表2-2にある1924年と29年の数字を比較する限りでは、この時期に全体としては生産を伸ばしているようだ。ただ、先にも引いた『植民地報告』の「この産業はますます機械で操業する施設へ集中しつつあるようだ。手作業で生産する多数の小営業が停止した」[K.V.1922:301]という記述に加えて、1925年に出された報告書には「機械生産と比べると、手労働で得られた生産物は各地で少なくない売れ行きがあるが、意味は小さい。輸入シガレットはそれを大きく後退させた。またこの地でますますシガレットの機械制生産が増加していることから、それは先の尖ったモデルを除き、手作りシガレットを完全に消滅させるであろうことが予想される」[Tabak 1925:200]とあり、また別の報告が「シガレット産業内の競争は一世界企業の設立によって非常に激しくなった。多数の小企業家がこれによって営業停止に追い込まれる見通しである。」[V.H.N.L.1925:157]と述べているところから判断すると、少なくとも機械製シガレットのような華々しい発展はなかったと考えた方がよいようである。事実、20年代末から30年代初めにかけては生

産量は減少傾向にあり、機械製シガレットの 1/10 以下でしかない。それゆえ、1930 年の『商工農業報告』では「この地のシガレット産業は 2 つのグループに分けることができる。すなわち機械製シガレットと、手製のクレテック・ストローチェである。」[V.H.N.L.1930:380]とあるように、その存在は無視されたのだった。

それでは、この報告で機械製シガレットと並び称せられたクレテック・ストローチェは 20 年代にはどのように発展したのだろうか。次に、この点を考えてみたい。

3. クレテック・ストローチェ生産の拡大

既に見たように、ジャワのストローチェの主なものはクレテック・ストローチェ、カウン・ストローチェ、ロコッ・ワンゲンあるいはロコッ・ディコである。そしてこの時期にはクレテック・ストローチェは大発展したが、ロコッ・ワンゲンあるいはロコッ・ディコは製造がほぼ王侯領に限定され、1920 年頃に最盛期を迎えた後は徐々にクレンバック・シガレット(煙草に大黃 *klembak* と安息香 *menjam* を混ぜたシガレット)に押しのけられていった。他方、カウン・ストローチェは 1930 年代半ばに至っても、なお西ジャワでは主要な製品煙草の地位を保っていた[Reijden 1934:12~13; 1936:139~140]。

表 2-8 は、1929~34 年のストローチェの賃労働による製造本数を理事州別に見たものである。ここからさしあたり明らかなことは、中ジャワと東ジャワのストローチェの大半は、上に述べたことを踏まえるならばクレテックであるので、ストローチェ全体に占めるその比率は圧倒的であることである。対照的に西ジャワのカウン・ストローチェは極めて少ないが、これは必ずしも製造自体が少ないことを意味するものではない。Reijden[1934:11]によると、賃労働で生産されるカウン・ストローチェはごく僅かで、西ジャワでは自分で原料を用意して好みどおりにストローチェを巻く方がより好まれるという。そこで以下では、クレテック・ストローチェを中心にして、話を進めたい。

まず表 2-2 の丁字輸入量から見て、クレテックの生産量が 1910 年代前半から後半にかけて倍増していること、20 年代後半にはそれを上回るペースで激増していることが顕著である。これらの時期は、クレテック産業の大発展期だったといえよう⁽¹⁵⁾。また表 2-3 からは、賃労働によるストローチェ生産開始が第一次世界大戦以降、それも 20 年代に始まった地方が多いことが明らかになる。

(15) なお、これらの中で大半を占めるクレテックについては、Segers[1982::bijl.1B (p.7~11)]が丁字輸入量から生産量の推計を行っている。ただし、その数値には表 2-2 とはかなり異なる部分もある。

こうした点について Reijden[1935:166;1936:139~140]は、クレテック・ストローチェの生産はその発生以来、長年にわたってクドゥスにはほぼ限定されてきたが、この製品に対する需要拡大がクドゥスの生産容量を越えた結果、1914 年頃に東ジャワでブリタル、トゥルンアグンを中心としてこの産業が発生した、そして 1925 年以降、急速に中ジャワの北部全域、マゲラン県と王侯領の一部に広がったと説明している。また 1930 年に書かれたある報告書では、①小規模なクレテック・ストローチェ製造は古くからあったが、これがジャワの特定の中心地で最重要住民工業の 1 つに発展したのは 1920 年以降である、②近年の発展の特徴を要約すると、中心地はクドゥス、ブリタル、クディリとトゥルンアグンであり、先ずクドゥスで顕著な発展を遂げた後、他の地方へ拡大した、このストローチェの販路は主に東ジャワ、中ジャワに限られ、西ジャワではあまり評価されていないことである、

と指摘される[Overzicht Ontwikkeling Inlandsche Nijverheid 1930:4-5]。要するに、クドゥスに限定されてきたクレテック製造が 1910 年代半ばから東ジャワでも本格化し、20 年代半ば以降に中ジャワの他地域にも広がっていったのである。

それでは最大の中心地クドゥスにおけるこの時期の生産状況は、どうだったのだろうか。20 年代の正確な生産統計は存在しないが、これに代わるものとしてこれまでしばしば利用されてきたのが、表 2-9 に掲げたサマラン・ジョアナ蒸気軌道によるクドゥスから各地へのストローチェ輸送統計である。Mangoenkoesoemo[1929:45]によれば、トラック輸送がますます盛んになってきているので、この数字は総生産の一部を反映したものに過ぎないというが、いずれにせよ、この時期に生産が 3 倍以上に拡大していることが見てとれる。

クドゥス産ストローチェの最大市場は、東ジャワだった。しかし西ジャワではカウン・ストローチェとの競争に勝つことができず、また中ジャワでもケドゥーヤ、プカロンガンを除くスマランより西側では売れ行きはそれほど芳しくなかった⁽¹⁶⁾。この他に、スマトラ、ボルネオ、セレベスにも移出されていた[Fruin 1930:439-440]。

(16) Mangoenkoesoemo[1929:14]によると、クドゥスから西ジャワ向けの輸送はスマラン・チェリボン蒸気軌道で行われていたが、彼が調査した 1928 年 10 月の輸送量は全部で 650 籠、約 32.5 トンにすぎなかった。

これに対して後発の東ジャワでは、ブリタル周辺に 1920 年代後半に第 2 の拠点形成された[C.E.I.,vol.8:170]。このことは表 2-2 に示されるスラバヤ港経由の丁字輸入量(東ジャワのクレテック産業にはスラバヤから丁字が運ばれた)の急増にも示される。Reijden[1936:115]によれば、1925 年頃まではクドゥスは東ジャワの着実な生産増加によっても何ら困難を感じることはなかったが、この年にブリタルとトゥルンアグンのストローチェ産業が非常に大きな規模になり、初めて深刻な競争が問題になり始めた。その後、これに続く何年かにクディリ理事州におけるさらなる拡大と、同理事州内他地域へのこの産業の拡散によって、競争はより激しい形をとるようになったという。

東ジャワ産クレテックの主な市場は東ジャワであり[Mangoenkoesoemo 1931:9]⁽¹⁷⁾、したがってその発展はクドゥス産ストローチェの販路を一部奪うことによって実現した。その事情について、Castles[1967:35]は次のように説明している。クローブ価格は変動が激しく、1928 年に異常に値上がりした⁽¹⁸⁾。クレテックは主に貧しい人々が吸うので、値上げすれば消費が急減し、恐らく価格が安定している"white cigarette"(添加物のない普通のシガレット)への乗り換えが起こる可能性があった。そこで、クドゥスの生産者の中には、この年により安い煙草や丁字を使用したり、丁字比率⁽¹⁹⁾を下げる者が現れたが、この結果、評判が落ちて東ジャワの生産者が東ジャワ市場を獲得したというのである。

(17) 東ジャワ産クレテックは、この他にスマトラ、バリ、ボルネオ、セレベスにも販路があったという。

(18) クレテックに使われる丁字はザンジバルからの輸入品が大半であったが、28 年にはそこで凶作が発生したために価格が高騰した。これについては、さしあたり V.H.N.L.[1928:178-179; 1930:380-382]、K.V.[1929: 221-222]などを参照。

(19) Mangoenkoesoemo[1929:44]によれば、クレテックの煙草と丁字の混合比率は煙草 10 に対して丁字 3-7 であるが、煙草 10、丁字 5 が最も多かった。なお、使われる煙草は 1 種類だけではなく、7 種類も混合することさえあった。煙草混合物をどのように作

るかに製品の質、味と製造コストがかかっており、この作業は専門の煙草混ぜ職人(しばしば企業家自身)の手で行われる、全工程の中で主要な作業であった。

このようにクレテック・ストローチェはその内部で競争を展開しつつ、全体としてこの時期に大きく生産を伸ばしたが、そのことによって他の製品煙草、特にシガレットとの間でも、先に少し触れたように極めて激しい競争が行われた。そしてこのような状況は、1930年代に入り世界恐慌の影響が現れるとともに一層複雑な形を取るようになる。次章では、その問題を扱うことにしたい。

IV、1930年代における製品煙草の推移

1930年代はジャワの製品煙草産業にとって、激動の時期だった。前半には不況によって、消費者の購買力が大きく減退した。これに加えて、植民地政庁は恐慌対策の一環として1932年12月16日、全ての製品煙草に20%の消費税を導入した(Stbl.no.517)。この税は36年にシガレットのみ30%に引き上げられ(Stbl.no.2)⁽²⁰⁾、さらに40年にはシガレットは40%、シガーとクロボットは30%へと再度改訂された(Stbl. no.392, 393)。また、シガレット輸入関税が引き上げられた。加えて1934年に制定された事業制限令(bedrijfsreglementeering-ordonnantie:

Stbl.no.595)が、翌35年9月1日から機械製シガレット産業に適用された(Stbl.no.437)。これらは、ジャワの製品煙草産業にどのような影響を及ぼしたのだろうか。

(20)これと引き替えにシガレット巻紙に対する付加関税は撤廃された[Stbl 1936,no.1,2,3]。

1、輸入シガレットの終焉

まず挙げられるのは、シガレット輸入の激減である。表 2-2 に示されるように、それは1931年、32年、33年と連続して大きく減っている。これは輸入シガレットの価格がもともと割高であることに加え、シガレット輸入関税の再引上げと関係が深い。すなわち付加税賦課により、1924年以來100kg当たり150ギルダーだった税額は31年1月1日から165ギルダー、32年1月1日から180ギルダー、同年6月15日からは225ギルダーとなった[栗林 1941:195 ; Hoogesteger 1933b:666]。この結果、輸入シガレットは不況下で購買力が低下した人々の中での販売が一層困難になったと考えられる⁽²¹⁾。なお、この税は後述する製品煙草の消費税が小売価格の2割から3割へと引き上げられた36年2月1日からは、ジャワ産製品煙草との釣合いを考えて再び150ギルダーにまで引き下げられた[栗林 1941:195]。36年以降の増加傾向は恐慌の影響が薄らぎ始めたこととともに、これとも関連があるかもしれないが、その売上げを見ると表 2-10 に示されるようにシガレット全体の1割にも満たず、輸入量は1910年代前半の水準にまで戻ってしまった。輸入シガレットは、蘭領東インドの製品煙草市場の中ではもはや周辺的な地位を占めるに過ぎなくなったといえよう。

(21)I.V.[1931:205~206]には1928~30年のシガレット輸入量と輸入額が載せられており、これにもとづいて1本当たり輸入額を算出すると0.68~0.69セントになる。これに輸入関税分を加えると1本当たりの値段は1930年末まで0.84セント、31年は0.855セント、32年初~6月14日0.87セント、それ以降は0.915セントとなるが、小売りされる時にはさらに高くなると思われる。当時の現地産製品煙草の1本当たりの小売り価格をいくつか挙げると、クドウス産ストローチェは1930年に大型が0.42セント、中型0.32セント、小型0.26セント[Reijden 1935:14]、バタヴィアでのストローチェのワルン価格(~33年)は0.14~0.15セント[Reijden 1934:58~59]、パカロンガンでのストローチェ

のワルン価格(1929~31年)は0.12~0.16セント[Reijden 1935:111~112]、バニユマスのクレ
ンバック・シガレットのワルン価格(1929年)は上級品0.5セント、下級品0.24セント
[Reijden 1935:126~127]、マランのストローチェ(~1932年)は0.2~0.25セント[Reijden
1936:108]、手作りシガレット(1932年)が0.5セント[Hoogesteger 1933b:667]などであり、
輸入シガレットは何れと比べてもかなり高いといえる。

2. 事業制限令と内地産シガレット

(1) 恐慌の到来と内地産シガレット

恐慌の到来によって、内地産シガレットの生産は表2-2に示されるように、30年代前半には減少傾向が続いた。そのことは別の指標からも明らかである。シガレット用巻紙輸入量の推移を見ると、1928~30年には順に388,855kg、497,231kg、626,347kgと大きく増えてきたが[I.V.1931:205~206]、31年に376,779kgへと激減している。そしてこれと対照的に、この年には丁字輸入量は3,038,292kgから5,173,284kgへと激増しており、『東インド報告』はこの年には「安価なクレテック・ストローチェの消費が、より高いシガレットを犠牲にしてかなり増加した」と結論付けている[I.V.1932:140]。また翌年の報告も、あらゆる住民グループの購買力激減によりシガレット販売は様々な工場が閉鎖に追い込まれるほどに減少し、シガレットからより安いストローチェへの移行がはっきり見られるという[I.V.1933:150~151]。34年には、機械製シガレット工場の生産高は前年比で7%、販売額では12%減となった[I.V.1935:118~119]。住民購買力が低下する中でシガレット、特に価格が高めの機械製シガレットは、より安いストローチェに太刀打ちできなかったのである⁽²²⁾。

(22) 機械製シガレットの30年代初めの価格についてはデータが得られなかったが、栗林[1941:124~129, 131~132]によると30年代末、B.A.T.の最も大衆的な製品、ファロカ
の一番代表的な製品であるダフロスはともに20本入りパックが12セントであったの
に対して、手作りシガレットは1包み1~3セント、ストローチェは上級品が3本包
み1セント、普通品6本包み1セントであり、価格には相当の開きがあった。

(2) 事業制限令の機械製シガレット産業への適用

しかし機械製シガレットにとって最大の打撃となったのは、事業制限令の適用だった。Oorschot[1956:43~45,47]によれば、この事業制限令は一般には①破滅的な競争の防止、②望ましくない産業の設立阻止、③特定の産業分野の発展速度を、商業政策の要求と関連づけて調整する、④経済的に弱い側を保護するため、同一産業分野内における極めて差が大きい産業形態(西洋工業に対する東洋の工業)を相互に制限するという、4つの主要目的を持っていた。そして、これをシガレット産業に適用しようとした意図は、(a)B.A.T.の独占に導く恐れがある過度の競争の緩和、(b)ストローチェと手作りシガレットの保護、これらは(a)で述べた価格競争によってだけではなく、クレテック・シガレットを機械で製造するための技術の発見によっても、市場から押しのけられる恐れがある、(c)その生存を脅かされているクロボット生産者の保護、(d)シガレット工場の住民煙草使用を促進して住民煙草栽培を支援すること、の4つだったという⁽²³⁾。

(23) Castles 1967:37もこのOorschotに依拠して同様の見解を述べている。

こうしたことが必要となった背景は、Vries[1935:1434]によると次のようだった。ジャワでは当時、シガレット製造機械の台数はそれを1日8時間稼働させると生産量が消費量の3倍に達するほど多く、この結果、企業間では激しい競争が続き、シガレット、特に安い

種類のシガレットの価格は継続的に低下し、数年前には 10 本 5 セントという価格が一般的だったのが、2～3 セントにまで下がり、35 年前半期には 10 本 1 セントのシガレットがますます流通するようになった。このことは機械製シガレット業者のみならず、他の製品煙草製造者にも悪影響を及ぼした。すなわち、最も安い機械製シガレットの価格が手作りシガレットやストローチェの価格帯にまで下がったことによって、後者の販売は困難になり、さらにクレテック・シガレットが機械によってストローチェの価格で製造されるようになったので、ストローチェはジャワ市場から押し出され南東ボルネオや南セレベスに市場を求めなければならなくなった。

以上要するに、機械製シガレット業者間の競争激化による価格低下の悪影響から手作りシガレットやストローチェ製造業者を保護する必要があると、植民地政庁が判断したのだった。こうして、この条令では機械製シガレットにのみ、生産の上限と最低価格が設定された。すなわち、シガレット生産を認可された者には各時期の推定消費量の一定比率の生産が認められ、10 本当たりの最低価格が 2,000mm³ 未満の最小のシガレット (liliput) について 2 セントに設定され、それより大きいものについては容積が 400mm³ 増える毎に 1/2 セント上昇するものとされた。そしてクレテック・シガレットの場合には、最低価格は各形態ともに 10 本当たりで 1/2 セントだけ普通のシガレットより安く設定された。また、企業家は一定量以上 (栗林 [1941:139] では 6 割) の内地産煙草を原料として使用することが、認可条件の 1 つとされた⁽²⁴⁾。

(24) なお、同条令は 38 年に若干改正された [I.V.1939:175]。ところで当初、これら大手企業の原料煙草は大半が蘭印外から輸入されていた [Memori Residen Cirebon 1930:253]。しかし、やがて B.A.T. は 1929 年、これに適したバージニア煙草の栽培試行をボジョネゴロ県の住民栽培の中で始めた。この栽培は 34 年から本格化し、その面積は 29 年の約 140 ヘクタールから 34 年 900 ヘクタール、35 年 1,300 ヘクタール、36 年 2,500 ヘクタール、37 年 3,900 ヘクタール、38 年 6,800 ヘクタールへと急速に拡大した [I.V.1936:69~70 ; 1937:87 ; 1938:79 ; 1939:102]。したがって、蘭領東インド産原料煙草使用義務づけは、少なくとも B.A.T. にとっては困難な条件ではなかった。いずれにせよ、これをきっかけにレンバンでは新しい品種の栽培が拡大していった。また BAT、ファロカの 2 社はボジョネゴロ以外にマドゥラ、そして特にブスキで住民煙草を原料として買い付けた [植村 1997]。こうしたこともあって、1930 年代には下表に示されるように原料煙草に占めるジャワ産煙草の割合が高まり、逆に輸入葉は減少した。

1933-38 年各種原料煙草使用量の推移 (トン)

	輸入葉		輸入刻上原料		ジャワ産葉煙草		ジャワ産ヴァージニア種		ケルフ		合計
	トン	%	トン	%	トン	%	トン	%	トン	%	
1933 年	3,150	5.1 %	1,486	2.4 %	5,182	8.4 %	76	0.1 %	51,600	83.9 %	61,494
1934 年	1,562	2.6 %	2,183	3.7 %	4,670	7.9 %	191	0.3 %	50,387	85.4 %	58,993
1935 年	709	1.0 %	2,480	3.4 %	6,166	8.4 %	382	0.5 %	63,515	86.7 %	73,253
1936 年	648	1.0 %	1,192	1.9 %	8,064	12.7 %	756	1.2 %	52,555	83.1 %	63,259
1937 年	1,378	2.4 %	1,687	2.9 %	4,987	8.7 %	1,530	2.7 %	44,053	76.6 %	57,535
1938 年	1,379	2.0 %	1,587	2.4 %	9,108	13.5 %	1,260	1.9 %	54,124	80.2 %	67,458

出所：栗林 1941：143~144

この条令は、栗林[1941:121]によればジャワのみで 1935 年に 25 工場、38 年には 18 工場に適用されたという。いずれにせよ、これによって機械製シガレット生産は 35 年、36 年にも減り続けたのだった。

(3) 手作りシガレットの大増産

他方、手作りシガレットは 1933 年から増加に転じ、35 年には激増して 30 年代後半には機械生産と肩を並べるまでに成長した。その 1929~34 年の地域毎の製造本数は表 2-11 に示したとおりであるが、33、34 年の増加は中ジャワ北岸と内陸が牽引したものだ。それは Reijden[1936:142]によれば、33 年についてはバゲレンにおけるクレンバック・シガレット大増産と王侯領のクレテック・シガレット製造が原因であり、34 年はバニユマス、ケドゥー、スラカルタにおけるさらなる発展と、中ジャワ北岸でクレテック・シガレット販売が増加したことによる⁽²⁵⁾。

(25) スラバヤでは表示のようにこの時期には一貫して減っているが、それはこの時期にストローチェ産業が勃興して手作りシガレットを凌駕したことによる。この地域では家内工業によるストローチェ製造は 1900 年頃にまで遡るが、工場製生産はクレテック・シガレットの方が先で、1914 年には華人経営の大規模工場が生産が始まり、17 年には 2 番目の華人企業が設立された。他方、この地方のストローチェは当初は丁字も煙草ソースも全く使用しなかったが、1920 年以来、クレテック・ストローチェが増加するようになり、21 年にはジョンバン県、24 年シドアルジョ県、27 年モジョケルト県、そしてスラバヤ県ではようやく 28 年になって賃労働生産が始まった。その後、下表に示されるように生産は急速に増加し、表 2-11 に示されるシガレットを上回っていった。詳しくは Reijden[1936:95~97]を参照。

年	1929	1930	1931	1932	1933	1934
100 万本	85	95	100	105	230	256

表註：生産本数にはマドゥラ産を含む。

表 2-2 に示される 35 年以降の大増産の原因は、上述の機械製シガレットに対する規制により、手作りシガレットが再び価格面で優位に立ったことであると考えられる。1 パックの小売り価格が 1~3 セントのものはほとんどが手巻き工場で生産されていたといわれる。1939 年の手製シガレット製造本数は 75 億本と推定され、機械製シガレットとほぼ等しくなった。製造所数は 300 に達したが、大半は華人経営で、大規模工場はジャワ人労働者 4,000~4,500 名を使用、1 日 400 万~450 万本を製造した[栗林 1941:124~129]⁽²⁶⁾。

(26) 栗林[1941:124~129]によれば N.V.Trio Sam Hien Kongsie(クドゥス)、Tio Swie Lian "Soerabajasch Sigarettenfabriek"(スラバヤ)、N.V.Handel Mij."Sampoerna"(スラバヤ)、Sigarettenfabriek The Djie Siang(トゥバン)、Sigaretten fabriek Indonesia Handelsmerk "Marikangan"(スラカルタ)が、特に規模の大きい工場だった。

(4) 1930 年代後半における機械製シガレット生産の回復

1930 年代後半に入ると、表 2-2 に示されるように、機械製シガレット生産は再び増加に転じた。この背景には、主として外領に於ける需要拡大があった。『東インド報告』によれば、「外領経済の回復によって、1936 年の第 4 四半期には機械製造シガレットの地位に若干の改善が見られ」[I.V.1937:143]、翌 1937 年には生産額 2480 万ギルダーのうち、1880 万ギルダー(75.8%)が外領での販売だった。規制対象工場の生産割当は需要増加との関連

からたびたび引き上げられなければならない、機械製シガレット工場数は 15 に増加した(大規模工場 5, 小規模工場 10)。また最低価格は、大半の工場についてはもとの水準に止められたが、小規模工場については手作り工場との競争に耐えられるようにするため、若干引き下げられた [I.V.1938:152~153]。

このような動きの中で、B.A.T.が圧倒的に優位を占めるという構造は変わらなかった。表 2-12 は 1939 年現在の機械製シガレット煙草生産を担った登録企業を一覧したもののだが、栗林 [1941:123~127] によると四大会社で機械製シガレットの 98%を生産し、残り 2%は手巻きを主としつつも巻上機 1~数台を備えた小工場が製造したという。B.A.T.の年産は 58~60 億本、機械製シガレット生産の 75%に達した。ファロカがこれに次いで約 20%を占め、年産は 15~16 億本だった。また企業数はさらに減少しており、経営基盤の弱い企業が淘汰されていく傾向が依然として続いていたと考えられる。

3. 消費税と製品煙草

(1) 煙草消費税の徴収方式

これまで述べてきた輸入関税引き上げ、事業制限令以上に、製品煙草産業に大きな影響を与えたのが、1932 年 12 月 16 日の煙草消費税導入だった。その徴税はその製品煙草 1 パック当たり価格を記載したバンデロール (banderol: 帯封) をパックに巻き、その価格の 20% を製造業者が納入することによって行われた。製造業者はこのバンデロールをバタヴィアの税務局から購入しなければならなかったが、1 日当たり生産がシガレットとストローチェは 2000 本以下、シガーは 1000 本以下、刻み煙草は 250 包以下、またはこの上限を超えない組み合わせの場合には、各地の郵便局で入手可能だった。33 年 2 月末に政庁に登録されていた製品煙草製造工場主は 2,108 人だったが、そのうちでこれが可能なのは 1,125 人だった [Hoogesteger 1933c:1491]。

(2) 生産形態への影響

消費税の影響は多岐にわたったが、まず挙げられるのはこれによって生産形態が変化したことである。C.E.I. [vol.8:170~171] は Reijden の調査報告をもとに、消費税導入の結果、家内工業はかなり急速に消滅したが、対照的により規模の大きな製造工場は家内工業消滅から利益を得ることができた、またそれと関連して 30 年代には家内労働から工場雇用へのシフトが特に中ジャワで顕著で、そこでは消費税がそれを促進したと指摘している⁽²⁷⁾。

(27) 対照的に東ジャワでは、家内労働者数は確実に増加し続けたと指摘される。この差は、東ジャワの家内労働者の大半は事実上は工場雇用者と見なしうる倉庫労働者 (depot workers) から構成されるからだといわれる。詳しくは C.E.I. [vol.8:171]、Reijden [1935:175; 1936:124, 145~146] 参照。

要するに、家内工業が減少しこれに替わって賃労働による工場が増加したというのであるが、実際、表 2-13 に示されるように消費税導入後の 1933 年には、多くの地域で賃労働者を雇用して生産を行う製造所の数が増加している。こうした変化が生じたのは、条令の 33 条 1 項に、工場には「そこで煙草製品の小規模販売が行われる店舗 (winkel) その他、如何なる施設をも併設することは認めない」とあり、また 37 条では「店舗その他、そこで煙草製品の小規模販売が行われる如何なる施設においても、その製品を製造することは禁止される」、そして「店舗」とは「販売が小規模に行われる空間と理解されるのみならず、より広く、そこに他の部屋も含めてトコ (toko) やワルン (waroeng) が造られている

家屋であると理解される」と規定されていたからである。この結果、従来、多数のワルン所有者がそこで販売するストローチェを家族労働によってワルンの片隅で製造してきたが、それができなくなったのである〔Reijden 1934:54~55〕⁽²⁸⁾。この結果、例えば西ジャワでは 1930 年以来、恐慌の影響で多数のカウン・ストローチェ企業が閉鎖されたが、家内工業は 32 年末までその地位をかなりよく維持できた、しかし煙草消費税条令が 33 年初に施行されたため、多数が操業中止に追い込まれた、と報告される〔Reijden 1934:108~109〕。

(28)ワルンとは、竹や木で造られた簡単な構造の小さな店、または屋台のことをいう。これに対してトコは造りがしっかりした、比較的大きな店のことをいう。また「店舗」という訳語を当てた *winkel* はオランダ語であるが、ここではワルンやトコを含む一般的な店の意味で使われている。

もっとも西ジャワの場合には、それに替わる工場はそれほどは増えなかった。表 2-13 で製造所数が増加したチェリボンの場合でも、ストローチェ製造所の営業許可が 33 年半ばまでに煙草消費税局 (Tabaksaccijnsdienst) によって 16 件交付されたが、このうち賃労働者を雇用して操業していたのは 9 軒だけで、7 軒は家内工業だった〔Reijden 1934:98〕。またプリアンゲルでは、「何人かの企業家たちは作業場を建てたり場所を移したりすることを恐れて控え、閉鎖を決めた」ので企業数は減少した〔Reijden 1934:78~79〕

これに対して中ジャワや王侯領、東ジャワでは、家内工業に替わる小規模営業所の設立によって、33 年の製造所数はかなり大きく増加した⁽²⁹⁾。ただ、このような新設された製造所の経営は、その後必ずしも順調だった訳ではない。表示のように東ジャワでは 34 年には営業数は再び減っているが、それは 33 年に家内工業から賃労働へ移行した多数の営業の大半が変化した状況についていけず、生産を再び停止し、「特に 1934 年初めにはほとんどの認可が再び撤回された」からだった〔Reijden 1936:116〕。

(29)例外的にバニユマスではクレンバック・シガレット工場数は 1929 年の 15 軒から 30 年 28 軒、31 年 50 軒、32 年 60 軒と急増し、生産も激増したが、33 年には 31 軒へと一挙に落ち込んだ。消費税導入の際に、ごく小さい規模の工場所有者が営業許可を申請しなかったことが原因だという〔Reijden 1935:125~126〕。

(3) 消費税と製品煙草の価格

表 2-2 に示されるように、手作りシガレットもストローチェも、1930 年代に入っていったん減産傾向にあったが、機械製シガレットとは異なって消費税導入後には増勢に転じた。それではなぜ、それが可能だったのだろうか。小論ではこれまでこれらの製品煙草の価格の安さを、ライバルとの競争における有利な条件として挙げてきた。そこでここでは、価格面からこの問題を考えてみたい⁽³⁰⁾。

(30)これらの減産の一般的背景としてはもちろん恐慌による住民購買力の低下があるが、ストローチェに関してはそれに加えて以下のような特有の事情があった。すなわち表 2-8 から明らかのようにストローチェの生産減は特に 32 年に著しいが、それは翌年に導入されることになった煙草税に備えて煙草消費税条令施行時に在庫がないようにするため、32 年後半に数ヶ月間操業が完全に停止されたか、あるいは生産を可能な限り低く抑えたためである。だから課税 1 年目の 33 年の増産は、前年に生じた後退を取り戻さねばならなかったことと、賃労働者を使わないで操業してきた家内工業の大半が消滅した結果だった。34 年の大増産は、この産業のさらなる分散が消費

拡大と並行していたことを示している。32年の落ち込みが特に激しいジャバラ・レンバン理事州の例では、クドゥスの多数の企業家が消費税との関連で価格と質を決めることが困難だったこと、また消費税導入後にどれほど売れるかが読めなかったことなどから、32年下半期と33年第1四半期に営業を停止したという。その結果、クドゥス産ストローチェの移入が減ったプカロンガンでは、1933年上半期の生産が8200万本、前年同期比82%増という未曾有の増産となった。詳しくは Reijden [1935:110~111; 1936:141] を参照。なお Soenario [1934:5~7] によれば、クドゥスでは工場数は1932年12月末165から33年末175に増え、34年10月末には152まで減少したが、クドゥス県のストローチェ工場主が注文したバンデロールの税額に着目して33年と34年を比較すると、34年の税額はデータの得られた10月までで33年を上回っており、この年全体の生産は前年のf530万に対してf650万と推定され大きく増加している、営業は全体的には安定し、弱い工場はつぶれたが資本力ある工場は増産したと述べている。

先ず問題になるのは、消費税分は消費者に転嫁されたか否かである。Hoogesteger [1933c:1492] によると、輸入品は概して転嫁されたので値上がりしたが、現地産シガレット産業では一部は旧価格を維持し、一部は消費税分を上乗せした。しかし、ストローチェ産業は大半が旧価格で作り続け、基本的には転嫁しなかった。そして、それを可能にしたのは、既にだいぶ前から原料価格が値下がりしていること、また全般的な賃下げに合わせてストローチェ労働者の労賃も下がったことなどだった。

そして、それどころか消費税にもかかわらず、表2-14に示されるように価格はむしろ低下した。それは、バンデロールに記載される1パック当たり価格の推移を見ても明らかである。消費税の導入が計画された当初、この表示価格の最低は2セントだったが [Hoogesteger 1932:261]、フォルクスラートの要請により1セント表示のバンデロールが導入され、33年3月の時点ではそれが最もよく出ていると報告される [Hoogesteger 1933c:1492]。そしてストローチェでは、1933年の政庁消費税収入の中で1セント・バンデロールの売り上げによるものが総額に占める比率は52.8%だったが、34年には77.2%にまで上昇している。この年、1セント・バンデロールを貼ったストローチェは10億6757万8000パックが販売されたが、これは全販売パック数の91.9%を占めた [Hoogesteger 1935:71]。

シガレットの場合は33年と比較ができるデータは得られなかったが、消費税導入当初にはその税収見積もりは「10本5セントという通常価格にもとづいていた」ことから見ると、5セント・パックが普通だったようだ。しかし、33年を通じてそれは急減し、代わりに「3セント以下」のバンデロールの比率が急増した [Hoogesteger 1934:370; 1933b:667~668]。そして34年には、消費税額から計算すると最もよく売っていたのは3セント・パック(全体の46.7%)で、これに1セント・パック(21.4%)が続いた [Hoogesteger 1935:72]。ストローチェと比べるとなお高めだったが、シガレットもやはり値下がりしたのだった⁽³¹⁾。

(31)このことは逆にいうと、ストローチェが貧乏人の煙草であったという、通説的解釈を裏書きするものである。近年の研究では Hanusz [200:25] が、「クレテックは1960年代に至るまで貧乏人の吸う煙草であり、特に中・東ジャワの農民、また建設労働者やベチャ引きのような低所得都市在住者の中で流行した。」と述べている。

この時期の値下げは、次のような方法で行われた。1つは中味の質を落とし、小型化す

ることである。例えば「ジャバラ・レンバンでは以前にはほとんど糸 2~3 本で巻いたより大型のストローチェのみ製造し、これにより良質の煙草を使用していたが、もっと安い値段でもっと多くのストローチェを提供したいという願望の結果、大型は完全に、中くらいのサイズのものも大半が市場から姿を消し、巻き糸 1 本で質の劣る煙草が主流となった混合物を詰めた小さいストローチェがこれに替わった。」[Reijden 1935:14]という。また、中ジャワ・王侯領全体をみると、原料煙草 1 カティから製造される製品煙草の本数は 1929 年、30 年の 900 本から 31 年 1000 本、32 年 1100 本、33 年 1350 本、34 年 1500 本と年々増えており [Reijden 1935:182~183]、1 本当たり原料煙草使用量は減っていることになる。またクディリでも同様に、1929~31 年には生産されたストローチェのかなりの比率が大型だったが、32 年には小型ストローチェが増加し始め、また特に 1934 年にはいわゆる恐慌種、すなわち "rokok-obral" の名で知られているものが大量に製造された [Reijden 1936:8~9]。

次に一箱当たりの本数を減らすことが一般化した。ストローチェはかつてはほとんどが 1 パック 25 本入りであり、ワルンでは箱を開けてバラ売りしていたが、消費税導入によってそれができなくなり、この時期、25 本入りパックはデサ住民には高価すぎるので、4~10 本入りの箱が登場し、また包装も簡単になった [Reijden 1934:46]。ジャバラ・レンバン理事州では、既に 32 年に 10 本入りパックを販売する企業が現れたが、これは同年の第 4 四半期には大いに流行し、1933 年初には 4 本入り、5 本入り小パックも市場に出た。当時、10 本入りには 2 セント、4 本か 5 本入りには 1 セントのバンデロールが付けられた。しかし、これらの価格もなお高すぎるということがわかった。そこで今度は価格を 1 パック 1 セントに固定して本数を増やすことが試みられ、33 年中にはバンデロール価格 1 セントの 5~10 本入りパックが主に売られるようになった。そして、このために中味の質を落とし、また形も小さくされた。レンバン県では 34 年 5 月には 12 本入り、15 本入り 1 セント・パックさえ発売されたという [Reijden 1935:15]。

クディリ理事州でも煙草消費税導入まで 50 本または 25 本入りパックに詰められたストローチェが前者は 11 セントか 12 セント、後者は 6~3.5 セントで小売りされていたが、消費税導入後は 4~15 本入り 1 セント・パックが主力商品となった [Reijden 1936:10]。またスラバヤでは消費税導入以前には 50 本入り が 7.5 セント、25 本入り が 4~5 セントで売られていたが、導入後は 1 セント・パックが主力商品になり、33 年には 4~8 本入りだったが、34 年には 6~12 本入り、若干の営業では 15 本入りまでに増えた [Reijden 1936:97~98]。マランでも当初は 25 本パック 6 セント、10 本パック 2.5 セント、5 本パック 1 セントで売られていたが、33 年には 4 本、5 本、6 本入り 1 セントパックが主流になり、34 年には中味が平均 8 本、最多では 12 本にまで増えた [Reijden 1936:108]。

4. 手巻きストローチェと製品ストローチェ

このように製品煙草、とりわけストローチェが大幅な値下げを進めたのは、一般的には不況による住民購買力の減退に対応したものであるが、とりわけこの時期には手巻きストローチェに対抗してシェアを確保することが課題だったからである。

Reijden [1934:116~117] によれば、多数の消費者は 1930 年以來の不況の中で、節約のためにストローチェ原料を別々に購入して自分で手巻きするという、古くから行われてきたやり方を復活させた。この場合、同じ金額で約 2 倍の喫煙材料を入手可能だったという [Hoogesteger 1933a:74]。そして、それらは未包装で販売される限り消費税がかからないので、

消費税導入とともにそういう形で製品煙草を製造・販売する業者が増加したと考えられる。西ジャワ・スメダンの例では、それは次のようだった。

ここでは 1932 年 3 月にあるストローチェ企業家はその製造を止めて小包装の原料煙草の商いに転向したが、彼がいうには、それは以前の顧客の多数が再び自分でストローチェを巻くようになったからだった。こうした煙草の小商いはバンドンやその周辺では以前から見られたが、不況によりかなり増加したという。この場合、煙草は圧縮され長さ 8~10cm、幅 3~4cm、厚さ数 mm の、巻かれて紙に包まれたもの 1 個 2~2.5 セントで売られるが、それはストローチェ 40~50 本分に相当する。他方、カットされたカウン葉の上巻は、約 80 枚入りの包みが 1 セントである。だから最低でも 40 本の手巻きストローチェ相当量の原料が 2.5~3 セントで得られるが、同じ種類の工場製品は 40 本 5 セントで売られていた。

こうしたことから多数の企業家がストローチェ製造業に加えて包装煙草の小取引を始めるようになり、1932 年までこの形の煙草商いはますますの利益を上げることができた。しかし包装には労賃と紙代がかかり、また 1933 年からは煙草消費税のために経費はさらに増加したので、売れ行きは落ち込むことになった。この結果、1933 年初以来、大きな町のパッサールやワルンでも消費税がかからない未包装煙草が販売されるようになったが、売れ行きは極めてよかったという [Reijden 1934:116~117]。

工場製製品煙草と手巻きとのこのような競争の帰趨がどうなったのかは、定かではない。一方では、1934 年の「クレテック産業は、クレテックを 10 本 1 セントで市場に出すことで、手巻き煙草との競争に勝つべく真剣に努力している。この損失を伴う試みは当初はうまくいかなかったので、14 本入りを出したがそれでも手巻きを防ぐことができなかった。」 [Sigarettenfabrikatie 1934:588] という、手巻き優位だとする評価がある。しかし、クドウスでは「33 年には煙草消費税の結果、手巻き煙草消費者が激増したが、クドウスの製造所は本数が少ないパックの販売へとシフトして小売価格を可能な限り低く抑えた (1 パック 1 セントで販売) 結果、急速に若干回復することができた。」 [Reijden 1935:172~173] というような記事から見ると、手巻きに対抗した値下げが功を奏したといえるのかもしれない。

おわりに

小論では植民地後期インドネシアにおける製品煙草の推移を、競合関係に着目しながら述べてきた。ジャワで製品煙草の製造が始まったのは 1850 年前後であり、19 世紀終わりにはストローチェの商業的生産も始まったが、市場が拡大してシガレット輸入が急増し、製品煙草の製造が本格化するのには 1910 年代後半以降だった。こうした中で、とりわけ輸入シガレットと現地産シガレットは市場をめぐって激しい競争を展開したが、20 年代に行われた輸入関税引き上げと、それと関連した B.A.T. を初めとする企業による機械製シガレット生産開始によって、現地産シガレットが一挙に優位に立った。しかし、同時にストローチェ産業も大発展した。とりわけクドウスから始まったクレテック・ストローチェは東ジャワにも第 2 の中心を生み出し、この産業内部で激しい市場獲得競争を繰り広げつつ、全体として生産を伸ばし、シガレットとも激しい競争を展開した。1930 年代に入ると不況の影響下で価格の高い輸入シガレットは激減し、また植民地政庁の一連の産業保護政策によって機械製シガレットに制限が加えられた結果、手作りシガレットとストローチェが大増産することになった。しかし、これらは同時に手巻きシガレット、手巻きストローチェからの挑戦を受けねばならなかった。こうした中で、シガレットやストローチェは、ぎ

りぎりまで価格を下げることによって、これに対応したのだった。

いずれにせよ、このような状況の中でジャワの製品煙草製造業は全体として発展を続けた。植民地期も終わりに近い 1939 年、これらのオランダ領東インドにおける消費量は原料煙草に換算して 65,900 トンで、消費者が自分で巻く「手巻き煙草・ストローチェ」がその 57%、シガレットが 23%、ストローチェが 9%、現地産シガーが 7%、シヤグが 4%を占めた。これを本数に換算すると、現地産シガレット 152 億本(このうち機械製シガレット 77 億本)、輸入シガレット 2 億 9400 万本、ストローチェ 151 億本、現地産シガー 11 億本、輸入シガーが 1500 万本だった[栗林 1941:119]。これが、競争の 1 つの帰結だった。

さて、これまでジャワにおける製品煙草の状況を見てきた。それでは、これらの内地産製品煙草の原料はどのようにして生産され、流通したのであろうか。以下では章を改めて、中部ジャワ山間部のケドゥー、バニユマス、およびジャワ北海岸東部のレンバンを対象に、この点を考えてみたい。

第 3 章 植民地後期ケドゥーにおける内地市場向け煙草の生産構造(2005 年執筆)

はじめに

植民地期ジャワの住民農業の中で、ほぼ 100%販売向けに作られる代表的な作物が煙草である。農民が栽培した煙草は、葉煙草の形で買上商人やヨーロッパ煙草農園によって買い上げられてヨーロッパ市場へ輸出されるブラッド、クロソックと、ジャワを中心とした内地市場で消費されるケルフ(刻み煙草)に大別される。これまでのジャワ煙草に関する研究ではもっぱら輸出産業としての前者が注目され、その栽培の中心地である王侯領やブスキについての研究は比較的進んでいるが⁽¹⁾、後者の生産・流通に関してはなお十分とはいえない状況にある。この中でマドゥラを対象にした Jonge[1984]は、煙草の生産とともに特にその流通システムを戦前・戦後を通して詳細に検討しており、注目に値する研究である。ただ、マドゥラの栽培は歴史が比較的新しく市場も限定されており、内地市場向け煙草生産がジャワの社会経済に与えた影響を歴史的に検討するためには、必ずしも適当な対象地域ではない。

(1)近年の研究には、王侯領とブスキを対象にした Padmo[1994]がある。また Houben[1994]は王侯領の煙草栽培を詳細に扱っている。筆者もかつてブスキ煙草と王侯領煙草について論じたことがある。植村[1983]、植村[1997:6 章]、植村[2001]、Uemura[2002]を参照。

内地市場向け煙草生産の中心地は古くから中部ジャワ山間部のケドゥー理事州及びバニユマス理事州北部であるが、これらの地域における煙草生産については植民地期にいくつかの調査・研究が行われている。時期の古いものから挙げると Verslag Garoeng[1906](1900 年代のケドゥー理事州ウォノソボ県 Garoeng 郡の栽培調査報告)、Stenvers[1915](同理事州トゥマンガン、マゲラン県の 1910 年代半ばの煙草栽培を論じた報告)、Fruin[1923a](1923 年 7 月に実施された現地調査の報告)、Fruin[1923b](この現地調査報告をもとに書かれた論文)、Tabak[1925](植民地政庁税務局 Dienst der Belastingen が刊行した植民地各地の煙草栽培・生産に関するモノグラフ)、Heijden[1935](1930 年代半ばのウォノソボ県での煙草栽培に関する調査報告)などがある。これらは当時の煙草栽培・生産に関する多くの情報を与えてく

れるものであり、特に Fruin の 2 著作は最も包括的にこの地域の煙草栽培・生産・流通を論じている。ただ、いずれもそれが地域経済の中でどのような意味を持ったかについての検討は十分ではない。

そこで本稿ではこれらの調査報告などに依拠して、内地市場向け煙草の生産と加工がどのような構造的特質を持っていたのかという点を、ケドゥー理事州ウォノソボ、マゲラン、トゥマングン県⁽²⁾の事例から分析する。以下では先ず、ケドゥーでのこの栽培の発展にはどのような特徴があったかを検討する。次いでこの地域の栽培・加工の特質を分析する。そして、それらを踏まえて最後に煙草栽培の利益がどれ程であり、それが地域経済・農家経済にとってどのような意味を持っていたかを考察したい。

(2)この地域はしばしば行政区画が変更され、ウォノソボ県は 1874~1900 年にはバゲレン理事州、1929~33 年にはウォノソボ理事州に属したが、本稿ではケドゥー理事州として扱う。1874 年以降の行政区画変更問題は深見[1991]を参照。1874 年以前の行政区画については、さしあたり K.V.[1872:Bijl.P]を参照。なお、付属の地図は Atlas[1938:18a]をもとに作成したもので、1930 年現在の行政区画を示している。

I, ケドゥーにおける内地市場向け煙草栽培の発展

1, ケドゥー煙草の栽培面積の拡大とジャワ内での位置

(1) 19 世紀初頭までのケドゥー煙草

煙草がインドネシア群島に伝わったのは 16 世紀末のことで、通説ではポルトガル人がもたらしたとされる。これ以降、早くも 17 世紀前半にはジャワでこの栽培がかなり広範に行われており、当時のケドゥー(トゥマングン県、マゲラン県)は 18 世紀にはその中心地として知られており、1746 年にこの地方がオランダ東インド会社の支配下に入り、会社がマタラム王国から同地方の煙草取引独占権を認められると、それは 3,000 スペイン・レアルの収入をもたらしたという[Fruin 1923a:349~351; C.E.I., vol.1:113~115]。

19 世紀初めには、Raffles[1917:134~135]によると煙草は現地語で *tombáku* あるいは *sáta* と呼ばれジャワで広く栽培されていたが、それが輸出向けに広範に栽培されるのはケドゥーとバニユマスのみで、特にケドゥーでは米に次ぐ重要な栽培品だった。また Crawford[1820, vol.1:406~409]も同様に煙草の主産地としてケドゥー、ラドック(Ladok = Ledok、後のウォノソボ県)、及びバニユマスの肥沃な谷と高い山の麓を挙げている⁽³⁾。

(3)加工された煙草は、クロフォードによれば十分に乾かされた後、華人の監督下で数オンス単位に小分けにされて中国紙に包まれ、商標がスタンプされ、一定数が籠に入れられて売られる。品質には 3 等あり、上層葉から作られたものが 1 級品、中層葉からのものが 2 級品、下層葉からが 3 級品となる。ケドゥー煙草は人間が担いで山越えし、スマランの市場に出されるが、その量は毎年 300 万ポンド(約 1400 トン)に上り、1816 年のプカロンガン理事報告によれば、ケドゥーが煙草から得る利益は毎年 15 万~20 万スペイン・ドルに達した。そこからはさらに各地へ販売されるが、質の悪いものは主としてバタヴィアと西ジャワへ向かい、上質のものは海峡植民地、最上級品は南セレベスへ向かったという[Crawford 1820, vol.3:416~417、および 1812 年の未刊行史料]。なおバニユマス産煙草はプカロンガンへ移出され、そこから原住民商人の手で船でバンタムへ運ばれた。さらに東端地方、マドウラはプゲル(Poeger)から煙草が供給されていたという[Fruin 1923:349~351]。

(2) 強制裁培制度期～1873年の内地市場向け煙草栽培

ジャワでは1830年から強制裁培制度が導入されたが、煙草についても31年にヨーロッパ市場向けにマニラ煙草をパスルアン、クラワンで試験的に栽培したのを皮切りに、翌年以降、各地で栽培が開始された。ケドゥーでも33年に栽培が始まり37年以降200バウに達したが、42年を最後に廃止された。しかし、ジャワ全体ではその後もこの栽培は拡大し、最終的には1865年に廃止された⁽⁴⁾。

(4)これに関する詳細は、さし当たり植村[2005a]を参照。

Elson[1994:79~81]によれば、ケドゥーでの早期廃止の理由は農民の自由な乾季作煙草栽培が強制裁培の倍の収入をもたらしたからだというから、ここではこの時期にも従来からの栽培が盛んに行われていたことになる。これについて、バウト(J.C.Baud)総督代理から植民大臣宛ての1834年8月23日付け視察旅行報告書は「煙草はここではジャワ人の手で大量に栽培されているが、それはなお常にいわゆる中国煙草(Chineesche tabak)で、ハバナ煙草、マニラ煙草の種子をもっと広めようとする政庁の試みは効果が上がっていない。首長達は前者の種類の方がより有利な結果を生むと主張している。人々はこの間、小規模に試験を続けている。」[Deventer 1866:651~652]と述べている。ケドゥーではヨーロッパ市場向け外国種煙草の導入の試みが、在来種⁽⁵⁾の盛んな栽培の前に実を結ばなかったのである。

(5)バウトがここで「中国煙草」といっているものは、明らかに在来種であるジャワ煙草であると考えられる。ジャワで「中国煙草」なる品種が栽培された事実はなく、註(3)で述べたように19世紀初めには煙草は華人の監督下で中国紙に包まれて出荷されていたから、バウトはケドゥー産ケルフ煙草をこのように表現したと考えられる。

さらに1840年代末の状況については、Bleeker[1850-II:222]に「ケドゥーの栽培は米と様々な果物を除くと、原住民消費用煙草、裏作として作られる様々な作物、コーヒー、茶、藍と砂糖の栽培である。……煙草は特にトゥマンゲン県と(マゲラン県) Probolinggo(郡)で作られる。ジャワ人は生産物を普通は華人に売るが、トゥマンゲンではシガーに製造もする。これは1000本当たり6~8ギルダーで販売される。スマランでは、このシガーが原住民によって大量に売られている。」という記述があり、ケドゥーでは盛んに栽培が行われていたことがわかる。

この頃には、ジャワ各地で内地市場向け煙草栽培が拡大しつつあった。K.V.[1852:110]は「内地消費のための煙草の栽培は1852年を通じてかなり重要だったし、レンバン理事州における消費税(consumptie-regten)の増加から明らかに、年々増えている。」と述べ、翌年にも「原住民市場向けの自由栽培は1853年にも再び重要であり、年々増えているものと推定される。」[K.V.1853:167]と報告される。当時のケドゥー理事州とバゲレン理事州ルドック県(後のウォノソボ県)はレンバンなどとともに、この栽培の中心地だった[K.V.1854:135]。この時期、ケドゥーの生産高は5万~6万ピコルと推定されているが[K.V.1855:109; K.V.1859:145]、これは55年の強制裁培参加15企業(収穫合計1,637バウ)の合計収量が17,345ピコルだった[K.V.1855:126]ことを考えれば、極めて多いといえよう。

1860年代にもケドゥーは栽培中心地であり続けた。K.V.[1864:161]は「原住民市場向けのジャワ煙草の栽培は、特にレンバンとケドゥーで大規模に行われている。」と述べ、またK.V.[1869:116]はケドゥーでは内地市場向け煙草の生産がヨーロッパ人企業家による「自由栽培」より重要であり、理事州北部の中心地Kadoe郡とLempoeijang郡のみで煙草の売り

上げは 100 万ギルダーに達すると述べる。70 年代に入ってもその重要性は変わらず、煙草は理事州からの重要な移出品 [K.V.1871:233]、煙草栽培は主要な生計手段の 1 つ [K.V.1872:150] と言われた。他方、ルドック県の煙草もバゲレン理事州の重要移出品であり [K.V.1862:240]、70 年代前半には「ウォノソボ高地 (Ledok) で煙草栽培はかなり大規模に、完全に栽培者自らの計算で行われ……全て原住民市場向け」 [K.V.1874:184] であり、それは特にルドック県で拡大していた [K.V.1875:176]。

(3) 1874 年以降の発展

1874 年以降は各理事州の毎年の収穫面積データが得られる。表 3-1 は K.V. 所収データ (1874~1915 年) から理事州毎の 5 年平均の数値を算出したもの、表 3-2 は Bagchus [1929:42] 及び K.V. 所収の数字から作成した 1910 年代後半と 1920 年代の一覧、表 3-3 は I.V. 各年の数字による 1930 年代の統計である。これらの数値は、とりわけ表 3-1 の元になったデータの正確さに問題がないわけではなく、また時期によって行政区画が変化しているので絶対的な信頼を置くことはできないが、おおよその傾向を知るためには有効であろう。

これらから直ぐに読み取れるのは、ケドゥーはレンバン (30 年代にはボジョネゴロ)、ブスキと並ぶジャワ最大の煙草生産地であることである。

次に収穫面積の増減について見ると、ジャワ・マドゥラ全体では煙草栽培は 1910 年代前半まで着実に発展したが 10 年代後半に激減し、20 年代には回復傾向を示すが 30 年代には停滞しやや減少気味である。この数字にはヨーロッパ市場向け輸出用煙も含まれるので、第一次大戦末期の船腹不足の影響を受けた 10 年代後半の激減は当然だった⁽⁶⁾。また 30 年代の停滞には世界恐慌の影響が考えられる⁽⁷⁾。他方、ケドゥーの場合 (1900 年まではバゲレンとの合計) も 1910 年代前半まで順調な発展を見せ、10 年代後半にはやはり減少している。しかしこれ以降は異なっており、20 年代前半に回復が見られない反面、30 年代にはむしろ生産を伸ばしているのが特徴である。

(6) 1910 年代末には船腹不足に伴って煙草栽培の制限が実施された。これについてはさし当たり植村 [1998:10~11] を参照。

(7) 恐慌期の煙草については、植村 [1997] を参照。

ケドゥーにおけるこうした動向の背景を全面的に検討することは本稿の範囲を越えているので次の課題にすることとし、以下ではケドゥー理事州内における地域差に着目して煙草栽培の発展の特色をいま少し検討してみたい。

2. 発展の地域的構造

(1) ケドゥー内の中心はどこか

ケドゥー内でも、煙草栽培は特定の地域に偏っていた。表 3-4 に示されるように、20 世紀前半の栽培はマゲラン、トゥマンゲン、ウォノソボ 3 県に集中しているが、これらの地域ではそれ以前から栽培が盛んだった。19 世紀の報告に当時のケドゥー理事州の主要煙草生産地として挙げられる郡はマゲラン県の Probolinggo [Bleeker 1850-II:222 ; K.V.1862:182; K.V.1869:116]、Remameh [K.V.1869:116]、トゥマンゲン県の Kadoe (後の Parakan 郡にほぼ相当) [K.V.1862:182; K.V.1869:116]、Lempoeijang [K.V.1862:182; K.V.1869:116] である。

マゲラン県とトゥマンゲン県とを表 3-4 から比較すると後者の方が栽培が盛んだが、19 世紀段階でも同様だった。1870 年代初めには「煙草栽培は 1872 年非常に重要だったが、それは特にトゥマンゲン県でそうだった。」 [K.V.1873:204]、「原住民市場向け煙草の栽培

は、今年もトゥマングン県で最も重要だった。」[K.V.1874:184]といわれる。そして、Temanggoeng の町は理事州内最大の煙草取引場所だった[K.V.1890:bjjl.NNN]。

他方、旧バゲレン理事州に属したウォノソボ県も、既に述べたように 19 世紀半ばには内地市場向け煙草栽培の中心地であり、その移出は特に Kalialang 郡で大きな意味があった[K.V.1862:240]。また 70 年代前半にはかなり大規模に栽培が行われていた Wonosobo 高地に加え、Sindoro 高地(Kalialang 郡⁸⁾)、さらに南で Soembing 山と Tawang 山の麓近くに位置する Leksono 郡でも「この作物の栽培に非常に適した土壌が見られる」[K.V.1874:184]と報告される。これ以降、K.V.にはこの地域の栽培の盛んな様子がしばしば描かれるが、ここで生産された煙草はバゲレン理事州(当時)北部の最重要商品の 1 つであり[K.V.1891:bjjl.PPP]、ウォノソボの町に立つ定期市で取引され各地へ移出され[K.V.1892:198]、ボルネオからさえ買付けに来たという[K.V.1891:204]。

(8) Kalialang 郡は、Sindoro 丘陵に位置することからすると、後の Garoeng 郡に相当する地域であろうと思われるが、そこでは福祉減退調査によれば「煙草栽培がこの 20 年間に拡大した」[M.W.L. Kedoe 214]とされ、1880 年代以降、さらに栽培が発展して表 3-2 の数字になったと考えられる。

1900 年代のこれら 3 県での栽培について見ると、K.V.[1905:232]は「高価格の結果、煙草栽培は・・・ケドゥー(マゲラン県)で拡大した。ケドゥー理事州のウォノソボ、トゥマングン県では栽培拡大は不可能だったが、それはこれに適した土地は既に全て利用されているからである。」と述べ、K.V.[1906:226]によればマゲラン県では翌年も Moentilan 監督官管区で栽培拡大が進み、1908 年には「ケドゥーでもほぼ全ての土地が既に利用されている」[K.V.1909:237]という状態に至った。また 1910 年には「トゥマングン県、ウォノソボ県、マゲラン県では、煙草栽培は既に拡大がもう問題にならないほどの規模で行われている。」[K.V.1911:204~206]と述べられる。これらの地域では煙草栽培が拡大し、それに適した土地がほぼ 1900 年代には利用され尽くしたと考えることができる。

このように、ケドゥーの煙草栽培は既に 19 世紀中葉には 3 県に、それも特定の郡に集中していた。行政区画がたびたび変更され名前も変わっているので軽々には結論できないが、それ以降栽培中心地は植民地期末まで変わらなかったと思われる。

3. 水田作煙草と畑作煙草

それではこの地域では、どのような土地にいつ煙草が栽培されたのであろうか。また、それは歴史的に変化が見られたのであろうか。

この点についての情報を与えてくれる最も早い時期の史料は、管見の限り先に引いた 19 世紀初の Raffles[1817:134~135]、Crawford[1820, vol.1:406~409]であり、それによると旧ケドゥーでは煙草は乾地でも作られたが水田乾季作(6~10 月)が主流だった。その後、1873 年までの間、栽培地と栽培時期を明確に示した史料は得られなかったが、煙草の強栽培が水田で展開された⁹⁾ことを考えると、当初はやはり水田作が中心だった可能性が強い。

(9) これについてはさし当たり植村[2005a]を参照。

1874 年以降は各耕地毎の収穫面積データが K.V.から得られるので、各時期の平均を表 3-5 ~表 3-7 にまとめた。先ず表 3-5 から明らかに旧ケドゥー地域では 1880 年代前半を例外として水田裏作が相対的に多く、これが主流だったことがわかる。もともと畑作面積もかなりに上り、ラッフルズの観察と比較すると、19 世紀前半から半ば以降に煙草の畑作が拡

大してきたと考えられる。

この地域では 1903 年の『福祉減退調査』によれば、煙草はマゲラン県で商品作物として意味が大きく、県全域で低地でも山麓でも水田と畑で栽培される。他方、トゥマングン県でも極めて大きな意味を持ち、やはり水田にも畑地にも作られていた[M.W.L.Kedoe 213]。

さらに 1923 年の調査によると、水田栽培が行われるのは両県の高度の低い山間部で、マゲラン県では Moentilan 郡が最も重要であり、トゥマングン県では Temanggoeng、Parakan、Tjandiroto 郡が主要郡だった[Fruin 1923a:268~269]。トゥマングン県では大半の栽培が水田裏作として行われるが[Fruin 1923b:300~301]、マゲラン県では Soembing 山の傾斜地に向かう Bandongan 郡の高地山間デサにおける畑地での栽培、またこれよりは劣るが Tegalredjo 郡、Grabag 郡の Merapi 山麓の山間デサでの畑地栽培も重要だった[Fruin 1923b:309~310]。また 30 年代にも Heijden[1935:564]が水田作と畑作の立地に関する同様の報告をしている。

こうしてみると、旧ケドゥー地域では煙草栽培は高度の低い山間部で水田乾季作として始まり、その後に高度の高い傾斜地の畑作が拡大してきたと考えられる。

他方、旧バゲレン理事州に属したウォノソボ県に関する最も早い時期の記述は、管見の限り 1873 年に関する記事でありウォノソボ高地(Ledok:後のウォノソボ県)での栽培面積は約 1,880 バウ、このうち水田栽培は 97 バウ[K.V.1874:184]だということから、ここでは 95%が畑地で栽培されていたことになる。次に 1874~99 年の状況を表 3-6-1 から見よう。

旧バゲレン理事州はプルウォレジョ、クトアルジョ、ルドック、クブメン、カランアニヤルの 5 県から構成されていたが、先に見た表 3-4 の数値から判断する限り、ルドックすなわち後のウォノソボ県以外では煙草栽培は盛んでないので、表 3-6-1 の面積の大半はウォノソボ県に関わると判断できる。ここでは一貫して畑作が主力だった。

次に『福祉減退調査』によると、ウォノソボ県の水田では稲収穫後にトウモロコシを作るのが一般的であり、煙草を作るのは若干の農民だけだが、畑地では煙草とトウモロコシが主要作物であり、畝を立ててそこに煙草を、溝にトウモロコシを植えるのが普通だという[M.W.L.Kedoe 188]。また 1923 年の報告では、ウォノソボ県の煙草栽培中心地である Garoeng 郡 Kedjadjar 副郡、Leksono 郡 Watoemalang 副郡などでは畑作煙草しか栽培されていないという[Fruin1923a:268~269]。さらに 1935 年にも Garoeng 郡やシンドロ(Sindoro)山、スンビン(Soembing)山傾斜地沿いの高い位置にあるデサでは煙草がほぼ全て畑地に栽培され、県全体で約 90%が畑作だと報告される[Heijden 1935:564]。同報告が掲げる同県の 30 年代の耕地別栽培面積(バウ)は表 3-6-2 の通りで、一貫して畑作比率が圧倒的だったことが示される。

なぜこのように畑作煙草が圧倒的だったかの理由はこの地域の農業全体の中で検討しなければならないが、さし当たりこの地域が理事州内で最も水田が少なく、畑地が卓越した所であることを挙げておこう。M.W.L.[Kedoe bijl.1]によると 1903 年現在の水田面積の対耕地面積比は理事州全体が 51.44%、マゲラン県 55.38%、トゥマングン県 49.32%、プルウォレジョ県 53.55%、クブメン県 63.62%に対して、31.72%でしかなかった。

最後に 20 世紀に旧ケドゥーと旧バゲレンが合併して成立したケドゥー理事州の煙草収穫面積を、表 3-7 から見ておこう。ここからは栽培は水田では第 2 作物、畑地では第 1 作物が主力であり、水田作も拡大はしたがその伸びは小さいのに対して、畑作の拡大が著しいこと、とりわけ 1910 年代前半の 2 倍近い拡大がこの時期の収穫面積拡大の全てを占め

ていることが目につく。

それではこれらの栽培はどのように行われ、如何なる原因によってこのような拡大の違いが生じたのであろうか。以下では、栽培の特徴を検討する中でこの問題を考えてみたい。

II、ケドゥーにおける煙草栽培・加工の特徴

1、19世紀初めの煙草栽培・加工

先ず栽培・加工の具体的な様子に関する史料が得られる最も早い時期である、19世紀初めの煙草栽培の特徴を見よう。Raffles[1817:134~135]は「ケドゥーでは・・・土壌がこれに適しているので、それは予め肥料を施していない土地で8~10フィートの高さにまで生育するが、東インドでは滅多に見られない繁茂振りである。ここでは米と輪作され、年間に採れるのはそれぞれ1回ずつである。ただし、米の収穫後、あるいは煙草の葉の採り入れ後には、土地は次の作物を受け入れる準備をするための時期が再びやって来るまで休閑する。若い苗はこの地域内では栽培されず、周辺の高地から供給される。すなわちディエン(Dieng)山、あるいはプラウ(Prahu)山の山麓のカリ・ベベル(Kali-beber)地方(district)から供給されるが、そこでは苗が栽培され、周辺地域の栽培者に大量に売られる。移植は6月に行われ、10月には完全に生長する。」と述べている。またCrawford[1820, vol.1:406~409]もほぼ同様の点を指摘し、さらに煙草は「高地にある一般の耕地でも、人工灌漑によって米が作られる土地でも栽培される」が、「収量が最も多く、危険が最も少なく、最も良質の煙草が採れるのは、後者での栽培である」という。また「煙草は6~8フィートの高さになるまで育てられ、それより丈が大きくなることを先端を摘み取ることで防ぐが、それは葉を広げるためである。収穫は先ず下の方の粗悪な葉から始められ、小さくより華奢な一番上の葉で終わる」ことも指摘している。収穫された煙草は、「葉を繊維状の主軸から切り離した後、常に緑のままで刻まれる」とあり、ケルフ煙草に加工されていた。

ここからわかるのは、(a)先に既に触れたが、煙草栽培は水田乾季作(6~10月)が主流であること、(b)毎年、米と輪作すること、(c)高地で育てられた苗を購入して移植していたこと、(d)無肥であること、(e)先端摘みが行われていること、(f)収穫は葉毎に、最下層の粗悪葉から始めて上の葉へと進むこと、(g)加工の際、葉を主軸から切り離してから刻むことである。

それでは、このような特徴はそれ以降、どのように継承されたのであろうか。以下では、主として1920年代前半の調査報告から水田作の中心地としてトゥマンガングン県とマゲラン県(特にMoentilan郡)、畑作煙草の中心地としてウォノソボ県Garoeng郡(特にKedjajar副郡)の事例を取り上げて、検討したい。

2、20世紀の煙草栽培

(1)輪作

先ず、栽培時期を見ておこう。表3-8はケドゥー理事州と煙草3県の月別煙草作付け面積、表3-9は同収穫面積の1920~25年平均、表3-10、表3-11は同じ数字を煙草栽培が耕地の10%を越える煙草5郡について表したものである。

これらから明らかなように、何れの場所でも煙草は乾季に大半の作付け、雨季に大半の収穫が行われる。ただ、もう少し細かく見ると水田作が卓越するマゲラン県、トゥマンガングン県、Temanggoeng、Parakan、Moentilan、Tjandiroto郡では畑作地帯に比べ1ヶ月あまりスケジュールが遅い。これは「水田煙草は、稲の収穫が終了してから初めて植えるので畑作煙

草より数ヶ月遅れる」[Fruin 1923a:318]ためである⁽¹⁰⁾。

(10)同様のことは Tabak[1925:70]も指摘している。

水田での輪作方式をトゥマングン県の例で見ると、煙草は一般にジャワ稲 (padi-djawa : 晩稲)の後に作られ、「ジャワ稲→煙草→クレテック稲 (padi-kretek : 早稲)やジャワ稲」という順番になる。移植時期は5~7月、収穫は10~12月が普通である。しかし、煙草は毎年作られるのではなく、良質の水田でも2年1作より頻繁にはならなかった[Fruin 1923a:300~301]⁽¹¹⁾。

(11)1915年の観察によれば輪作のやり方はやや異なっており、Temanggoeng 郡では「煙草(5/6月~10/11月)→Padi Kreteg(12/1月~4/5月)→裏作物(5/6月~10/11月)→稲(12/1月~4/5月)→煙草」という形を取る。したがって、煙草は2年毎に同じ土地区画に作られる。しかし煙草が3年1作の場合もしばしばで、特に Parakan 郡ではこれが非常に多い。この場合には、「煙草(5/6月~10/11月)→Padi Kreteg(12/1月~4/5月)→裏作物(5/6月~10/11月)→稲(12/1月~4/5月)→煙草」という順番になる。裏作物はほとんどがトウモロコシであるが、若干のケースでは唐辛子を作り、間作にトゥロン(terong : ナス科の野菜)を植える[Stenvers 1915:7~8]。

次に畑地での輪作を Kedjajar 副郡の事例から見よう。この副郡は高度の高い傾斜地に位置するが雨季に豪雨がな、朝霧が立つなど煙草栽培に好都合な気候条件に恵まれていた[Verslag Garoeng 1906:511~512]。耕地はほとんどが畑地で(1910年現在の面積は畑地7,675バウ、水田146バウ)、煙草は全て畑作で1920年代初めの年間栽培面積は3,000バウに上った。しかし畑地の大半は石ころだらけで傾斜が急なので、煙草を毎年作ることができるのは約800バウの灌漑可能な畑地だけで、それ以外の土地での栽培は1年おき、2年おきだった[Fruin 1923a:269~270]⁽¹²⁾。

(12)Heijden[1935:567]も同様に、ウォノソボ県では毎年煙草を栽培できる畑地は小面積の灌漑可能な所だけで、普通は2年1作、最も悪い土地は3年1作であると指摘している。なおM.W.I.[Kedoe 325]によると、1903年段階でウォノソボ県には361の泉があり、水田2,429バウ、畑地605バウに給水していたといわれるので、煙草栽培に使われた灌漑可能な畑地への給水もこれによったと考えられる。

このような最良地はデサ Tieng、Kedjajar、Serang、Tambi などに見られ、そこでは煙草は毎年4、5月に移植して9月、10月に収穫が終るが、収穫終了前にトウモロコシを煙草の間に蒔くのが普通であり、高度の高い畑では収穫開始以前の場合さえあった⁽¹³⁾。煙草収穫が終わってしばらくすると、トウモロコシが植わっている土地へ灌水した。

(13)この副郡は高度の高いので煙草は7~8ヶ月かかり、トウモロコシは完熟するにはそれよりなお長い期間を要するので、しばしば両作物が同時に耕地上にあることになる。煙草の収穫(数ヶ月かかる)が終わる前に、もっとも高い位置にあるデサでは収穫開始以前から、トウモロコシは煙草の間に播種される。Dieng 高原の非常に高い所にあるデサでは、トウモロコシの収穫前に煙草が新たに植えられることがある。そこでは煙草は2月3月に植え付け、Kedjajar ではやや遅くなる。9月10月には収穫は大半が終わる[Fruin 1923b:356]。

このトウモロコシは自家消費で、この地域では最も重要な主食だった。また最良地では煙草とトウモロコシの他に、販売用に野菜やジャガイモが間作された。デサ Kedjajar の例では、ジャガイモから始め、それがまだ小さいうちに煙草を植え、ジャガイモを掘り上

げた後、トウモロコシを煙草の間に播いた。

これに対して灌漑のできない畑地の場合には、ある年に煙草とトウモロコシを作ると、翌年には休閑された[Fruin 1923a:271~272]。

以上のように煙草は乾季に栽培され、水田では水稻、畑地ではトウモロコシという主要な食糧作物と輪作されるのが一般的だった。もっとも水田、畑地を問わず、ごく一部の条件に恵まれた土地を除いて、同じ土地に煙草を毎年作るわけではなかった。

(2) 苗

移植される苗は、1920年代初めのトゥマングン県やマゲラン県の栽培では基本的にはディエンなどの高地から取り寄せていた[Fruin 1923a:269~270, 301~302]⁽⁴⁴⁾。これらの地域は1900年代前半にもディエン産苗を購入していたが、M.W.L. [Kedoe 191]によればそれは質のよさで知られ、収量が多く病気にも強かったからだという。

(14) 当時、ディエンの苗は1000本あたり75セント~1ギルダーだった。なおマゲランでは、農民は自分で苗を育てることはないが種子を採集し、これが高地地方(Dieng)へ運ばれて蒔かれ、そこから採れた苗は再び低地へと運ばれていた[Fruin 1923b:362]。

他方、ディエン高地に位置するKedjadjar副郡の場合には、当然苗は地元で育てられる。ここでは1~2月に苗床を造成し、自家製種子を播き竹やアランアラン^(補註)で作った日覆いをかける。移植は約70日後である。苗床にはしばしば肥料が施された。作業は全て家族労働で行われ、必要な資材も自給したので、現金支出はなかった[Fruin 1923a:275]。この地域では自家栽培用苗だけでなく、先に挙げた2地方向けに販売する苗も専門的に栽培していたが、苗販売先での移植時期が稲収穫後になり遅かったので、前者に比べ播種時期は遅かった[Fruin 1923b:361]⁽⁴⁵⁾。

(補註)アランアランとは、イネ科の植物で和名チガヤ。焼畑によって再生不能になった森林後に広く出現する。家畜が若芽を食べたり屋根葺きに使われる他は、とくに利用法はない。アランアランが優占すると、その他の樹木や草本が侵入・定着できず、その土地が森林に回復できないことが大きな問題であるといわれる。

(15) この結果、この地域では販売用苗に日覆いをする必要がなかったが、このことは苗に十分な日射を与えることが遠距離輸送される苗を強くするために必要だとも考えられていた。こうした点も含め苗栽培に関してほぼ同様のことはVerslag Garoeng [1906:518~521]も指摘している。この報告にはGaroeng郡における苗作りが詳細に描かれている。ケドゥー煙草の苗育成に関してはさらにVerslag Garoeng [1906:515]、Tabak [1925:68]、Stenvers [1915:11~14]、Heijden [1935:574~576]、M.W.L. [Kedoe 191, 213]を参照。

(3) 煙草栽培のプロセス

次に煙草栽培のプロセスを順を追って検討していこう。

[耕地準備]

煙草栽培にとって過剰な水分は敵であり、水田栽培の場合には排水に特に注意が払われる。Stenvers [1915:10~11]によると、このためにしばしば図のような主排水路(djagangan ngoenbeng)を土地の最も低い位置に掘ることから作業が開始される。次に耕地上にほぼ4m間隔で溝(sidattan)が傾斜の方向に合わせて掘られる。その深さは土壌の状態によって異なり、主排水路よりは浅いが60cm以上はある。溝掘りのあと稲藁が刈り取られ、その切り株は犁(ploeg)で反転され、犁でできない所は鍬で耕される。

この後、土地耕起が行われる。トゥマングン県の水田は鋤 (patjol) を使って 3~4 回耕されるが、作業には賃労働が使用され、バウ当たりの経費は調査デサの Modjotengah では 45~50 ギルダー、Gembjang では 45.5~46.5 ギルダーだった [Fruin 1923a:303]。

他方、マゲラン県 Moentilan 郡では犁とハロー (eg) が使われるが、畦の仕上げ、環状水路と床作りには鋤を用いた。この地域はトゥマングンに比べ水害を受けやすく、土地の排水・乾燥にはよりしっかりと注意を払わねばならない⁽¹⁶⁾。だから煙草苗はトゥマングンでなされるように田面に直植えするのではなく、表層土を床に集め、それを後にもう一度鋤で耕して畝を立てて植える⁽¹⁷⁾。このようにここでは細かい作業が必要だったので経費も高く、バウ当たり 60~70 ギルダーに達した。当然、このような重い経費負担に見合う収穫が期待できるのは良質地だけであり、水の害が少ない場所では作業を省略して経費を 20~30 ギルダーに抑えていた [Fruin 1923a:310; Fruin 1923b:362~363]。

(16) このように排水に留意することは、1900 年代前半においても同様だった。M.W.L. [Kedoe 213] は、マゲランでは「この栽培にはしっかりした注意が払われる。土地は乾かされ、かなり深く掘り返され、その後、畝がきちんと作られるが、それは良く乾かし通気させるためにしばらくの間そのまま放置される。」、トゥマングンでは「かなり深く耕される。整然とした (flink) 溝のネットワークが、雨水の排水のために作られる」と指摘している。

(17) 畝造りには排水以外にも理由があった。ここでは下層の土はローム状であり、薄い表層土だけが煙草に必要な浸透性を持っているので、十分な厚さの土層を確保するためには表層土を集めなければならなかった [Fruin 1923a:310]。

これに対して Kedjadjar 副郡の畑作では、上のような排水対策は不要である。ここでは移植前、本畑は鋤で深耕 (45~75cm) される。この作業 (tilep と呼ばれる) には他人労働が使われ、数週間かかる。もっとも全ての土地で同時に作業するわけではないので、デサ Koelipan では 1 バウに満たない土地しか持たない農民は、この作業を家族労働か、若干名のサンバタン (sambatan: 相互扶助) によって行う。しかし、デサ Kedjadjar の良質な灌漑畑地では、サンバタンだと土地がきちんと耕起されないという理由からこの作業は大半が賃労働で行われ、バウ当たりの経費は 50 ギルダーに達する。ただ、このデサでも劣等地の場合には耕起の深さも 15cm 程度と浅く、家族労働がサンバタン、もしくはラヤット⁽¹⁸⁾の助けを借りて作業が行われた [Fruin 1923a:275]⁽¹⁹⁾。

(18) ラヤットとは本来、「大土地占有者のもとに寄寓する若者」の意味であるが、ここでは「煙草栽培者の近くに住み、無償労働提供の対価として衣服と食事を供給される若者」を指す。

(19) ウォノソボ県のこの作業については、M.W.L. [Kedoe 188] に 1900 年代前半、Heijden [1935:574~576] に 1930 年代半ばの様子が描かれているが、後者に緑肥 (crotalaria) を使っていることを示唆する記述がある他は、基本的に変わっていない。

[移植]

耕地準備が終わると移植が行われる。ケドゥーでは穴空け棒で植え穴を空け、1つの穴に苗1本を植えるのが普通だった。植え穴への施肥は水田の場合、トゥマングン県では行われないが Moentilan 郡では行われる。畑地の場合には、トゥマングンでも Kedjadjar 副郡でも肥料が施される⁽²⁰⁾。用いられるのは厩肥を主体にした堆肥で、たいていは自ら飼育す

る馬、山羊などの家畜から採られたが、販売されるものを購入する場合もあった⁽²¹⁾。

(20) Heijden [1935:574~576]は、ウォノソボ県におけるこの作業を具体的に描写している。それによると、植え穴を開けるのは女性の仕事であり、5人が3日間働く。穴開けの直ぐ後から、たいていは女性か子供がそこへ厩肥を施すためについて歩く。苗の移植は肥料を入れてから2~3日後で、男女2名で4日で済む。平均すると1m²に6本、バウ当たりでは約42,000本の苗が植えられる。ただし、農民が利用可能な苗は、必要な場合には約1ヶ月後に補植をしなければならないので、これより多くなければならなかった。なお、M.W.L. [Kedoe 192]によれば、マゲラン県でも1900年代前半には山間部で厩肥が発酵させられた後、煙草、トウモロコシ、タマネギ、ジャガイモ、落花生、豆その他の野菜に施され、低地地方でも牛糞が煙草栽培に使われており、「休閑なしの水田での収量がますます減少しているので、ジャワ人はますます施肥の必要が大きくなるであろう」とあり、この時期には煙草栽培による地力後退を防止するために、水田にも施肥されていた可能性がある。またトゥマンガンでは高度の高いデサでは肥料使用が昔から知られていたが、当時、低い位置にある地方でも肥料使用が増加しつつあった。その原因を、同報告は人口増加の結果、土地の休閑がなくなったことに求めている。肥料として用いられるのは厩肥と灰であり、水田においてさえ、既にあちこちで肥料がやられるという。これらから考えると、煙草への施肥はかなり以前から行われていたようである。なお、1920年代初には化学肥料(硫酸)も使われ、ウォノソボ県では簡単に入手可能だったが、デサ Kedjadjar の住民によればその使用は栽培がよくない場合や後退した場合に限定されていたという [Fruin 1923a:272~273]。

(21) トゥマンガン県デサ Gembjang の例では、堆肥の価格は1レンバット当たり15~20セント、その運搬費が5~10セントかかり、灌漑可能な畑地では1バウ当たり約70レンバット、灌漑のない畑地ではその倍の施肥が必要なので、経費は前者では3.5~7ギルダー、後者ではほぼその倍かかったという [Fruin 1923a:303]。

Kedjadjar などでは厩肥に対する需要が多かった結果、家畜は他地域とは対照的に厩舎で飼われるのが一般的だった⁽²²⁾。このため、1920年代初には草刈り仕事を行う若者が年12.50ギルダーの賃金による請負制で雇用された。施肥の量は主に農民の家畜飼育規模にかかっていたが、農民の経済状況によっても異なり、例えばデサ Kedjadjar では一般に1バウに50~60担ぎ(mansvracht)を施すが、富裕農民は200担ぎ使用した [Fruin 1923a:272~273, 276, 302, 310]。

(22) Heijden [1935:570~571]によると、ウォノソボで厩肥作りに利用されるのは主に馬、山羊、マーモットで、最良の肥料はマーモットから得られる。次が山羊、最後は馬である。これらはそれぞれ約40日間、1ヶ月半、2ヶ月以上おいた後、様々なものと混ぜられる。煙草栽培1バウ当たりに必要な肥料を確保するためには、馬なら1~2頭、山羊12~15頭、マーモットなら60~90頭が必要だが、一般的にいて住民は十分な量の肥料を自給できていたという。また Fruin [1923a:276]では最良のものは山羊の糞であり、デサ Kedjadjar では様々な種類の動物糞と草、ゴミを混ぜた堆肥に対して1担ぎ当たり(de mansvracht)30セント、完全な山羊の糞には50セントが払われていたこと、このデサのルラーによると1バウに必要な肥料は約120担ぎであるが馬2頭で生産可能であり、馬1頭は山羊10~15頭とほぼ同量の肥料を産するという。

移植作業は、トゥマンガン県ではサンバタンによって30~40名の手で午後に行われるの

が普通で、経費は 10 ギルダールほどだった [Fruin 1923a:303]。対照的に Kedjadjar 副郡の場合は、他人労働を使わないのが一般的だった [Fruin 1923a:272~273, 276]⁽²³⁾。

(23) その理由は、デサ Kedjadjar での人々の説明ではあまり多くない人数の方がよりよい仕事ができるからだという。

[維持管理作業]

移植後、作物の維持管理のために様々な作業が行われたが、その中で特に労働力を大量に要するのが除草 (matoen) である。トゥマングン県では一般に 3 回行われるが、デサ Gembjang では水田と灌漑可能な畑地の場合には 4 回行われ、経費は約 55 ギルダール (灌漑できない畑地ではその半分) 必要だった [Fruin 1923a:302~303]。他方、Kedjadjar 副郡デサ Kedjadjar の畑地栽培では、除草は月 1 回、合計 5 回程度行われた⁽²⁴⁾。作業は女性の手で午前中に行われ、費用はバウ当たり 46~47 ギルダールとなる。またデサ Koeripan では 4 回実施され、年間経費はバウ当たり 50 ギルダールだった。ただ、1 バウより少ない土地を耕す者は、大半の労働を家族労働で行っていた [Fruin 1923a:276]。

(24) Heijden [1935:574~576] によれば、この地域の除草は 4 回行われるのが普通であるが、傾斜地では雑草が余計にはびこるので 5 回になるという。作業は 35 日間隔でなされるが、1 回目 (3~4 月) のみ男の手で行われ、その後は主に女性の仕事となる。3 回目の除草 (5~6 月) と同時に、煙草の茎を丁寧に掃除する (ngrewosi)。また 4 回目の除草 (6~7 月) と同時、もしくは直後に穂先摘み、つまり余計な最上端葉、芽と枝を除去する (moenggel)。なお M.W.L. [Kedoe:213] では移植 1 ヶ月後に 1 回目が行われ、その 1 ヶ月後に 2 回目を実施されるが、この時には最下層の 2 枚の葉も摘まれる。そしてその 2 ヶ月後に 3 回目の除草が行われ、その時には先端が摘まれる。その 2~3 ヶ月後、収穫を始めることができるとあり、除草回数が増えた可能性もあるが詳細は不明である。

この他、補植、土寄せ⁽²⁵⁾、最下層の砂葉 (zandblaren) の除去 (ngrampel : この葉はクロソックとして売られるか、クロソック価格が低すぎる場合には捨てられる)、先端の摘み取り (moenggel : 種子の形成を防いで煙草をより強いものにするために行われる)、脇芽の摘み取り (mritil)⁽²⁶⁾ などが行われたが、いずれも労力をそれほど要する作業でなく、家族労働で行われるのが普通だった [Fruin 1923a:276, 303~304 ; 1923b:363~364]⁽²⁷⁾。

(25) 例えば Moentilan の最良の煙草デサでは、土地を鋤で細かくする作業が 3 回行われるが、第 1 回目はかなり深く、2 回目はややそれより浅く、そして 3 回目は土寄せがなされる。この場合、経費は合計して 50 ギルダールあまりになる [Fruin 1923b:363~364]。また M.W.L. [Kedoe 188] によれば、遅くとも移植後 2 ヶ月以内に煙草苗に土寄せすること (生育状況が良好な場合には 35 日後)、鋤で 2 回整地することが、必要な作業としてあげられている。

(26) 煙草の頂上では、葉をよりたくさん取るためにだいたい 3 本の脇芽が残された [Fruin 1923a:277]。

(27) ただしトゥマングン県のデサ Modjotengah では芽摘みに女性労働者を雇い、10 日毎に 2 ヶ月間仕事をさせて 4.50 ギルダールを払っている [Fruin 1923a:303~304]。

[収穫]

収穫は全部一度に行うのではなく、先ず最も質が悪い最下層の葉を摘み取り、その後、徐々に上層の良質な葉を収穫するのが普通だった。収穫開始時期は高度によって異なり、

比較的低地の Moentilan 郡では移植後 100 日前後、山間部の Parakan 郡や Toemangoeng 郡では約 4 ヶ月後だった [Stenvers 1915:16]。収穫終了までに Moentilan 郡やトゥマングン県では約 2 ヶ月、Kedjadjar 副郡では数ヶ月を要した [Fruin 1923a:271~272, 303~304, 311]⁽²⁸⁾。

(28) Tabak [1925:69~70] ではやや違い、収穫開始時期を移植後 80~100 日、終了まで 1 ヶ月半だとしている。また同史料によれば、収穫時期は市場価格によっても影響され、たとえば最上級葉収穫が終わる頃に雨が少ない気候の場合には価格が高いため、さらに収穫できる葉を付けさせるべく煙草はそのまま成長させるが、逆に市場価格が安い場合、水田作では次にジャワ稲を栽培するために煙草を早々に片付けてしまうという。収穫の担い手について史料に明確な記述があるのはトゥマングン県に関してのみであり、「摘葉も普通は自分でやる。大土地占有者は摘葉と輸送をボロンガン(出来高払い)で行うが、これはバウ当たり 15 ギルダーになる。」 [Fruin 1923a:304] とある。ここから判断すると、1 バウ程度の栽培の場合は収穫は家族労働だけで十分に行うことができ、それを越えるような規模の経営だけが賃労働を使用したと考えられる。

収穫される煙草葉は各層毎に異なる名称を持ち、その用途も異なっていた。その分類は地域や史料によって多様であり、全てを紹介することは不可能なので、ここでは 3 つだけ挙げておきたい。

第 1 は Fruin [1923b:364] の分類であり、最も一般的には「最下層の価値が最も小さい葉を ampadan と呼び、真ん中の葉を tengahan、rampasan、最上層の葉を tjengkrik (Batoer)、tjelingkrik (Kedjadjar)、kepala (Moentilan) と呼ぶ。oeroetan というのは、Batoer と Kedjadjar で ampadan よりはやや良質だがそれでも価値が低い葉の名称である。しかし逆にトゥマングンでは、またレンバンでもそうらしいが、この名称は最良の質を指す」という。

第 2 はやはり Fruin [1923a:277~278] が報告している Kedjadjar 副郡のデサ Kedjadjar とデサ Koeripan における分類であり、まとめれば表 3-12 のようになる。

第 3 は Stenvers [1915:16] が観察した水田栽培地域での区別であり、表 3-13 にまとめた。

このように各地で 4~6 段階に分類されているが Tabak [1925:73~74] や Heijden [1935:588] によれば実際には 3 種類程度に大まかに分けて収穫することが多かったという⁽²⁹⁾。

(29) ここに挙げた以外にも Tabak [1925:73~74]、M.W.L. [Kedoe 213]、Verslag Garoeng [1906:579] に、葉の分類に関する記事が見られる。なお Heijden [1935:588] によれば、収穫前には家族による小規模なスラメタンが行われたという。

3. 煙草の内地市場向け加工

内地市場向け煙草の加工は、(1)発酵、(2)刻み、(3)乾燥・熟成からなる。これらのうち、製造する煙草がペペアン煙草(天日乾燥)かガランガン煙草(直火乾燥)かによって、特に(3)の方法には大きな差がある。

(1) 発酵

収穫された煙草葉は、刻み作業に入る前にしばらく時間をかけて発酵させられる。Tabak [1925:74] によれば、ペペアン煙草製造の場合には、先ず女性や子供の手で葉を主脈の一番太い部分から切り離す。その後 50 枚ほどの小さな山に積んで小さな束にし、それを 3~5 日間、家の中で保存する。葉はこれによって少しばかり熟成し、むらなく黄変する。

他方、ガランガン煙草を製造するウオノソボ県 Garoeng 郡では、朝の収穫の際に 1 級品煙草と 2 級品煙草を分けて別々に家に運ぶ。その日の午後、1 級品の葉 3 枚を取り上げて

主葉脈を葉の先端近くまで取り去る。次いでこれらの葉を縁で重ね、その中に2級品の葉を数枚斜めに差し込んで一緒に巻き上げる。こうして出来上がったものをリンリン(lilin)といい、長さは23cm程度である。これを家の中に高さ30cmほどに積み上げて発酵させる[Verslag Garoeng 1906:585]⁽³⁰⁾。

(30)1920年代初のKedjadjar副郡デサKoeripanの事例では、主軸を取り去るのは発酵が終わってからである。この作業に対してKoeripanでは女性達は現金賃金を受け取ることはないが、一緒に連れてきている子供達とともに食事1回に預かるという[Fruin 1923a:278]。

この熟成期間はHeijden[1935:578]によると葉によって差があり、ウォノソボの場合にはampadanで3日、oeroetan 4日、rampasan 5日だという⁽³¹⁾。

(31)M.W.L.[Kedoe 213]によると、ウォノソボ県では刻む前に葉6~10枚を一緒に巻き上げて4昼夜ほど家の中に置き、トゥマングン県でも葉は家の中で軽く発酵させられるが、マゲラン県では「摘葉後、1~2級品は内地消費向けであるならば、直ちに細かく刻まれ」とあり、1810年代と同様に緑葉のままで刻まれている。

この作業では葉脈の扱い方が、ペペアン煙草とガランガン煙草で若干異なる。前者の場合には葉は葉脈から切り離されるが、後者の場合は主脈を除くだけである。ペペアンの場合には乾燥時間が長いので、葉の部分が葉脈部分よりずっと早く乾燥して腐敗の原因になる可能性があり、それで葉脈を取り去って厚さを均等にするのだという[Stenvers 1915:18]。

(2)刻み(radjang)

熟成された葉の刻み作業は、早朝か夜間に行われる。良質な煙草を得るためには、刻み後直ちに乾かす必要があり[Tabak 1925:75]、特にペペアン煙草を製造する場合には直ぐに天日乾燥に移らねばならないからだ[Reijden 1934:14~16]⁽³²⁾。

(32)中には刻まずに出荷される場合もあったようで、M.W.L.[Kedoe:213]によるとトゥマングン県では発酵させた後、質の劣るものは刻まずに葉煙草として出荷された。

この作業にはチャチャック(tjatjak)と呼ばれる独特の道具が使われる。それは厚さ15cmほどの木の台で、その中には広い側に溝が付けられており、それは台の前側(小さい側)で四角形の開口となって終わっている。台は、刻み職人が座る低い長いすの上にもたがる形で備え付けられる。職人が溝にリンリンを運んで左手で軟らかく下へ押し付ると、リンリンの端は溝から前面へ現れる。職人が右手で大きく重い包丁を溝に沿って斜め方向に上から下へ動かすと、各リンリンは極細の糸状にカットされる。

この作業では、溝の中でリンリンに加える力は常に均等でなければならない。さらに刻まれたもの(kerfsel)は一定の厚さでなければならず、ばらけてもいけないので、ナイフは鋭さを保つために時々研がれる。台を削ってしまわないように、その開口部の周りには鉄板が取り付けられており、それに沿ってナイフは動かされる[Verslag Garoeng 1906:586]。

このように作業は熟練を要するので、刻みがきちんとできる者は限られていた。特にガランガンはペペアンより細く刻まねばならず、トゥマングン県のデサModjotengahでは住民1,300人中でこれが正しくできるのは僅か6人だった[Fruin 1923a:304~305]。こうして、各地方を巡回する刻み職人が登場することになる。このデサではKledoeng、Telahabという他デサから刻み職人を呼んでいるし[Fruin 1923a:304~305]、ウォノソボ県Kedjadjarの職人の一部は収穫終了後にトゥマングン県まで出かけていた[Fruin 1923a:270 ; 1923b:364]。

それゆえ、この作業に従事する者の報酬は多い。例えばトゥマングン県では 1920 年代前半に 6 時間働くと 1.25 ギルダーの稼ぎがあり [Tabak 1925:75]、デサ Kedjadjar ではこの作業に 1 日当たり 50 セントと 3 食、デサ Koeripan では 40 セントと 2 食が払われた [Fruin 1923a:278] が、これらは他の加工作業の賃金と比べると倍以上の水準だった。

刻まれた煙草は Kedjadjar 副郡では直ちに女性の手でリゲン (rigen : 割竹を編んで作られた目の粗いトレイ、同時に煙草を数える単位としても使われる) の上に広げられ、厚さ約 5cm の長方形の薄板すなわちエレラン (eleran) に形を整えられる。リゲンは幅が約 30cm、長さ 120cm の大きさであり、1 つにエレランが 5 つ並ぶ。この作業はソガジャン (ngandjang) と呼ばれ、これに従事する女性の賃金はデサ Koeripan では 1 日 15 セントと 2 食、Kedjadjar では 25 セントと 3 食である。刻み人 1 人と女性で Kedjadjar では 1 日に 6~7 リゲン、Koeripan では 6 リゲンを製造する。したがってこのリゲン当たり経費は Koeripan では 9 セントと食事 2/3 回、Kedjadjar では 11 セントと食事 1 回となる [Verslag Garoeng 1906:586 ; Fruin 1923a:278]。

(3) 乾燥・熟成

乾燥は直火乾燥 (garangan : 主に高度の高い山間部で行われ、1920 年代にはウォノソボ県、トゥマングン県で実施) と天日乾燥 (pepean : マゲラン県、トゥマングン県で実施) に大別される⁽³³⁾。

(33) トゥマングン県では主に Temangoeng 副郡と Tembarak 副郡で煙草の全収穫を天日乾燥する。これ以外のガランガンが主に作られる副郡でも、最下層の葉はペペアン加工される [Fruin 1923a:269, 301]。同県 Parakan 郡でも最下層の葉は全てペペアンに加工され、他の価値の低いペペアン煙草とともにススル (soesoer) すなわち噛み煙草用に売られるという [Stenvers 1915:16]。またウォノソボ県でも Kaliwiro 副郡では若干のデサでペペアン煙草が作られていたが、小規模であった [Heijden 1935:565]。M.W.L. [Kedoe 213] によると、ペペアン煙草の方が良質で長持ちするという。

まず 1920 年代初の Kedjadjar 副郡におけるガランガン煙草製造を見よう。リゲンに広げられたエレランは、石釜の上方で木を燃やした弱火に 15 分程度かざして乾燥させる⁽³⁴⁾。この作業は夕方か夜に行われるのが普通で、デサ Kedjadjar では男子 3 人が一晩に 50 リゲンを乾燥させ、25 セントと食事 2 回を受け取った。デサ Koeripan では出来高払いで、作業に従事する 2 名にリゲン当たり 2 セントが払われた。この後、煙草は望ましい色を付けるため天日で後乾燥され、涼しい場所に保存して再びやや湿り気を帯びさせてから販売された [Fruin 1923a:278~289 ; Reijden 1934:14~16]⁽³⁵⁾。

(34) Verslag Garoeng [1906:587] によれば乾燥のためにできるだけ煙を出さない火を使うことが望ましいとされるが、香り付けのため、特定のシダが燃料として用いられる場合がある。刻んだ煙草を広げたリゲンは、15 分程度火の上で前後に動かされる [Tabak 1925:76]。

(35) 出荷はリゲン単位で行われ、リゲン 40 枚分 (エレラン 200 個) の煙草をまとめて周りに乾いたバナナの葉を巻いてその上を縛ったコーディー (kodi) と呼ばれるバックが用いられた [Stenvers 1915:17~18]。

ペペアン煙草の場合には、刻まれた葉はガランガン加工用より 4 倍ほど大きリゲンに広げられるが [Fruin 1923a:304]、その量は基準がなくまちまちである [Stenvers 1915:17~18]。こ

の上で長いものと短いものが選り分けられ、天日で2～3日乾燥されるが⁽³⁶⁾、その間に数回ひっくり返される。煙草は赤褐色になると巻き上げられ、2枚のリゲンの間に挟んでもう一晚屋内で保存し湿り気を帯びさせる[Tabak 1925:74~76]。そして、バナナの樹皮でくるんだ竹籠に詰めて[Fruin 1923b:365]、量り売りされた[Stenvers 1915:17~18]。

(36)この場合、あまりに強すぎる日光に晒してもいけないので、晴天の場合には午前7時~11時、午後4時~6時に干すのが普通だった[Stenvers 1915:7~18]。

4, 煙草の販売

販売の様子にも簡単に触れておきたい。加工された煙草は Parakan、Temanggoeng、Magelang、Moentilan、Grabag といった取引中心地や農家で、そこへ出向いてきた買付商人やその代理(バクル)に売るのが普通だった[Stenvers 1915:19]⁽³⁷⁾。パッサールへ農民が持ち込む場合もあったが、「若干の大商人が語ったところでは、ケルフ煙草のうちでパッサールに来るのは少量で、それも質の悪いもの」[Tabak 1925:78]だった。

(37)販売の具体的な様子は Verslag Garoeng[1906:515]、Fruin[1923a:279,307]、Stenvers[1915:19~20]などに詳しい。

買付けには 19 世末にはプカロンガン在住の華人商人に加えて地元のジャワ人商人も活躍したようだが[M.W.,vol.Va:151~152]⁽³⁸⁾、後にはスマラン、プカロンガン、バタン、テガルに本拠を持つ華人商人が大半を手に収めた。彼等は、たいてい地元の代理人を使って仕事した[Tabak 1925:77]。しかし、クドゥスでストローチェ産業が盛んになるにつれて、クドゥスのジャワ人煙草商人やストローチェ工場主も買付に参入した[Soerario 1935:16~17]。これらの商人は一般に、煙草農民に前貸しを行って煙草を確保しようとした[Verslag Garoeng 1906:588]⁽³⁹⁾。こうして商人の手に集められた煙草は、ケドゥー煙草としてジャワ各地へと輸送されていった⁽⁴⁰⁾。

(38)ジャワ人商人の参入の背景には、K.V.[1892:198]が「バゲレンでは 1891 年、華人買上者がデサから閉め出されたが、その結果、ウォノソボ(Ledok 県)に定期的な煙草市が開設され、報じられるところによれば何人かの原住民が煙草の大商業に従事しはじめた。」と述べるように、政策的なバックアップがあった。

(39)前貸しの具体的な様子については M.W.H.[Kedoe 364]、Fruin[1923a:308~309]、Mangoenkoesoemo[1929:32~33]、Heijden[1935:586~587]などを参照。なお、例外的にマゲラン県の煙草中心地 Moentilan 郡ではジャワ人商人に対してテバサンで売ることもあったが、Fruin[1923b:375]によるとこれらの商人は大土地占有者であり、自分のデサや近隣デサのあまり裕福ではないジャワ人から収穫前の煙草を買い付け、自作の煙草と一緒に加工した。加工量が多いのでコストは安く、デサ Bodjong 在住の商人の場合には年に 200 ピコルを加工するが、ピコル当たり加工経費は 9 ギルダー程度を越えなかった。

(40)煙草の流通経路とその仕組みの検討は次の課題であるが、1920 年代以降には、大まかに言ってペペアン煙草はかなりの部分がクドゥスを中心としたクレテック産業と、原住民シガレット産業に向けられ、ガランガン煙草は主として西ジャワへ輸送された。これについてはさし当たり Reijden[1934:16]を参照。

5, 19 世紀初めと 20 世紀の栽培・加工法の比較

以上に主として 1920 年代初めの史料にもとづいて、ケドゥーにおける煙草の栽培・加

工の特徴を検討してきた。いまこれを先にまとめた 19 世紀初めの栽培・加工の特徴と比較するならば、次のことが指摘できる。

まずラッフルズやクロフォードが見た煙草は、刻みの前に葉を葉脈から切り離すという加工法から見てペペアン煙草であり、したがってその栽培は比較的低い地域におけるものであったと判断できる。それをふまえてこの約 100 年間に変わっていないものを挙げると、高地苗の利用、先端摘みの実施、収穫方法である。また旧ケドゥー地区における水田乾季作の卓越、ウォノソボにおける畑地栽培の卓越もおそらくは変わっていない。ただ、旧ケドゥー地区では明らかにこの間に畑作が拡大し、またウォノソボでも栽培面積の拡大から考えると、従来は必ずしも煙草栽培に相当だとは考えられていなかった所でも栽培が始まったと思われる。

次に変化した点として挙げられるのが、休閒の有無である。すなわち 19 世紀初めにラッフルズが見た水田では毎年米と煙草の輪作が行われていたが、1920 年代初めの史料では毎年の栽培は例外的だった。そこで福祉減退調査から 1900 年前後のこれに関連する状況を見ると、トゥマングン県では煙草栽培が拡大してその規模が適地面積に比べて大きくなりすぎた結果、「以前には煙草を栽培した後 3 年間休閒するか、少なくともそこに煙草は植えなかった所で、この期間が 2 年、場合によっては 1 年にまで短縮」されたが、この結果、土地が次第に煙草疲れ (*tabak-moe*) を起こし、収穫は質量ともに後退したので、行政側は住民に対し十分な休閒期間を取るようアドバイスしている [M.W.L. Kedoe:213, 216]。また畑作地帯であるウォノソボ県でも、煙草を移植する良く耕された水田や畑は「1 年間休閒しなければならぬ」 [M.W.L. Kedoe 213]、Wonosobo、Leksono、Garoeng、Sapoeran 郡では「1 年間の休閒(土地耕起を伴わないもの)が、煙草を栽培する場合には必要」だと、一般に見なされていた [M.W.L. Kedoe 188]。このように休閒期間は 1900 年頃にはむしろ短くなりつつあることが指摘されている。

これらをどう解釈すべきかについては現在のところ十分な根拠のある答えを見つけることができないが、ラッフルズが見たのは最良の水田であり、その後に栽培が休閒の必要な土地にまで拡大し、そしてさらにケドゥー煙草への需要が高まった結果、休閒期間を無理に縮める形での輪作が流行したのではないかと、とりあえず考えておきたい。

また施肥は 19 世紀初には少なくともラッフルズが見た水田作では行われていなかったが、20 世紀にはトゥマングンの水田を除いて肥料が施されるようになった。もっともラッフルズは畑作煙草に肥料が施されていたかどうかについては何も述べておらず、この間に施肥の面で進歩があったと即断することはできない。ただ、いずれにせよ、施肥の開始が基本的には戦後の緑の革命期であった水田稲作と比較するならば、煙草栽培はこの面では高い水準にあったと考えることができよう。

III. 煙草栽培の経済学

これまで 2 章にわたって、ケドゥーにおける内地市場向け煙草栽培の特色を検討してきた。それを簡潔に表現するならば、極めて集約的な耕作方法と、高い技能を要求される加工方法といえよう。したがって、それには当然それなりの見返りがなければならぬ。では煙草栽培の利益はどれほどであり、地域経済・農家経済にとってどのような意味を持っていたらうか。以下では、農家収入の検討を通じてこの問題を考察したい。

1, 煙草栽培の利益

(1) 地域経済に対する影響

最初に、煙草栽培がこの地域の経済にどのような意味を持っていたかを眺めておこう。19世紀のケドゥーで煙草栽培が主要な生活手段の1つだったことは1章で触れたが、20世紀に入ってもその重要性は変わらなかった。例えば Kedjadjar 副郡のデサ Tieng では豊作年の煙草の売上げは4万ギルダー、Garoeng 郡全体では年々の売上げが15万ギルダーという巨額に達し[Verslag Garoeng 1906:588]、またトゥマングン県では1914年に煙草栽培の収入が減った結果、地域の商業に悪影響が出たといわれる[K.V.1915:228]。1920年代初めの Kedjadjar 副郡では、「煙草はこの地方の群を抜いて主要な富の源泉」[Fruin 1923a:271]だった。また恐慌期 1930年代の報告も「ウォノソボ県では煙草栽培は極めて集約的に行われる。煙草は、常に住民により利益を、この地方には一定の豊かさをもたらしてきた商品作物である」[Heijden 1935:564]と述べている。内地市場向け煙草栽培は、ケドゥーの地域経済にとって一貫して富の源泉であり続けてきたのである。

(2) 水田作地帯と畑作地帯

それではこのような経済的影響は、水田作煙草地帯と畑作煙草地帯で差があったのだろうか。これを考えるため、先ず各地で製造された煙草の価格を比較検討してみよう。表3-14は Fruin[1923b:370~371]に挙げられる様々な地域の各種煙草の価格を一覧したものである。

ここから明らかに、ガランガン煙草の方がペペアン煙草より値が高い。したがって、前者を主に生産する高地の畑作地帯の方が後者を生産する低地の水田地帯よりも、生産コストは余計かかることは予想されとはいえ、利益は大きいと思われる。

次に地域の農業の中での煙草の位置を、水田作地帯と畑作地帯で比較してみよう。Fruin [1923a:300, 310]によると煙草栽培は水田作地帯のトゥマングン県では非常に重要ではあるが、Kedjadjar 副郡などにおけるほど地域経済を支配しているのではない。水田の多くは稲の収穫が年2回可能なので、毎年の稲栽培面積は煙草を遙かに上回り、また様々な他の裏作物の栽培面積も煙草より大きい。県内の主要煙草郡を見ると、Temanggoeng 郡では耕地13,000バウ(水田5,000バウ、畑地8,000バウ)に栽培される煙草は約2,500バウであるのに対して稲は5,000バウ、トウモロコシは3,000~4,000バウに達し、キャッサバ栽培もしばしば煙草を面積で上回る。Parakan 郡では水田11,600バウ、畑地14,400バウに約4,000バウの煙草が栽培されるが、稲は9,000~12,000バウであり、トウモロコシも煙草より多い。Tjandiroto 郡では年間約2,800バウの煙草、6,000~7,000バウの稲、9,000バウのトウモロコシ、2,000~3,000バウのキャッサバが、合計5,800バウの水田と17,800バウの畑地に作られる。またマグララン県の水田作煙草の中心地 Moentilan 郡とそれに接する Salam、Salaman 郡では稲の2期作または2年3作が可能だが、ここで煙草に必要な有孔性と柔らかい組成を持つのは薄い表層土だけなので水田での栽培可能面積はトゥマングン県よりも小さく、Moentilan 郡では水田12,000バウのうち煙草が作られるのは年に2,500~3,000バウ(20.8~25.0%)、Salam では10,000バウ中の1,000バウを越えることなく、Salaman では10,000バウ中の1,000バウ以下だという。

これらの水田作地帯ではたしかに煙草は重要だったが、それ以上に米の栽培が多く、地域経済に対する影響は稲の方が大きかったといえよう。

これに対して Kedjadjar 副郡をはじめとする畑作煙草地帯は高地に位置し、水田面積が小

さく畑地が卓越しているので⁽⁴¹⁾、水稻は十分に栽培することができず、食糧作物としては専らそれより価値が劣るトウモロコシを栽培している。したがって、ここで多くの現金収入をもたらす煙草を栽培することは極めて大きな経済的意味を持つ⁽⁴²⁾。また、この地域は煙草苗の供給地でもあり、刻み職人を各地に派遣もしていた。さらに、煙草栽培は土地なし農民にも生計手段を提供していた。M.W.E[Kedoe 148]によれば Wonosobo、Garoeng、Leksone と Sapoeran 郡では、多数の人々が7~9月には煙草の収穫で生計を立てていた。この地域の経済的煙草依存は極めて強かったといえよう。

(41) 例えば 1903 年、Kedjadjar 副郡を含む Garoeng 郡の水田の対耕地面積比は 15.6%にすぎない[M.W.L.Kedoe bijl.1]。この比率は 1920 年になってもほとんど変わらず、18.3%だった[Landbouwatlas 1926:Staat I]。

(42) M.W.L.[Kedoe 203]によると、ケドゥ理事州の煙草 3 県のうちマゲランとトゥマングンでは米移入は例外的だったが、畑作煙草が卓越するウォノソボ県では平均して年に 5,000 ピコルの米が輸入されていたという。煙草から得られる現金収入の一部は、この米の代金に充てられていたと思われる。

(3) 煙草栽培農家の収入

それでは、煙草栽培農家の収益はどれほどだったのだろうか。ここでは、4つの事例を検討してみたい。

① ウォノソボ県 Garoeng 郡 Kedjadjar 副郡の 1922 年の事例 (畑地、ガランガン煙草)

先ず Fruin[1923a:277~278]の記述から、煙草栽培のバウ当たり粗収入を計算すると表 3-15 のようになる。このように耕地によっては粗収入が 1,000 ギルダを超えるものもあるが、差も極めて大きい。Fruin は土地の大部分は粗収量 50~150 リゲン、収入は 50~250 ギルダ程度だと結論づけている。次にデサ Koeripan とデサ Kedjadjar における生産費を計算すると、表 3-16 のようになる。

この 2 つから純収入はデサ Kedjadjar の大土地占有者の場合には Fruin が別の箇所[Fruin 1923a:319]でも述べているようにバウ当たり数百ギルダに達し、デサ Koeripan の平均的な農民の場合でも、賃労働者雇用がほとんどなく生産コストが少ないために十分な利潤が出ることがわかる。

② トゥマングン県の 1922 年の事例

2 つ目はトゥマングン県の 3 つのデサの事例であり、Fruin[1923a:306~307]が載せるそのデータを一覧すると表 3-17 のようになる。

これらは明らかに高収量の水田であり、十分な利潤が出ている。特にデサ Gembjang のルラーは水田 4 バウで煙草を作っており、純収入は 1,000 ギルダを越えるを見てよい。

③ マゲラン県 Moentilan 郡の 1922 年の事例

次の表 3-18 は水田作地帯 Moentilan 郡の 2 つのデサの事例であり、ここでも前 2 地域ほどではないが十分な利益が出ている。。

④ ウォノソボ県 1930 年代半ばの生産コスト(良地 1 バウ当たり)

最後の例(表 3-19)は 1930 年代半ばの、ジャワ経済がようやく恐慌の影響から脱し始めた時期の畑作煙草の生産コストである。これを①のウォノソボ県の 1922 年の生産コストと比較すると、あまり減っていない収穫・加工費を例外として、大きな経費節減が行われていることがわかる。この結果、1935 年の良地 1 バウ当たり平均煙草粗収入は 100 ギルダ

一ほどになるので、かなりの黒字が残る。1930年代にもこの地域の煙草栽培が伸びている理由の一端は、ここにあったと考えられる。

(4) 米作収入との比較

次に、煙草栽培の収入がどれほどの水準かを考えるために、米作収入と比較してみよう。Fruin [1923a:318~319]は「(煙草栽培が有利かどうかという)この問題を正しく考えるためには、水田煙草と畑作煙草を分けるべきである。前者に関しては既にはっきりと、煙草はそれに適した土地で育てられる場合、稲より利益が大きいことは疑いないといえる。東モンスーン季に煙草を植える水田は、普通2回目の稲作に十分な水を持っている。それにもかかわらず煙草が選ばれるのは、人々が煙草を東モンスーン稲より有利であると見なしていることを示している。この地方(ケドゥー理事州のこと=引用者)では稲収量は東モンスーン作も西モンスーン作もほとんど変わらないので、煙草が前者より有利だとすれば、後者より利益が多いことになる。この問題に関する2番目の指標は、煙草を植える場合と西モンスーン稲を植える場合に借地料の差である。煙草を植える水田には、そこに煙草を作ることができない水田の2倍以上の借地料が払われる。」と述べ、乾季には米より煙草を作った方が利益が大きいと主張している。さらに Fruin [1923a:302]が載せる、トゥマンガングン県における煙草栽培の場合と稲作の場合のそれぞれのバウ当たり借地料を一覧すると、表3-20のようになる。煙草栽培のための借地料は、稲作の場合の倍以上である。このことは、煙草栽培の利益が如何に大きいかを示している。

Fruin は畑作については何も述べていないが、表3-20に示される灌漑可能畑の借地料の高さから考えても、畑地での煙草作の有利さは疑問の余地がない。

このように、煙草栽培は何れの場合でも極めて有利な選択であったといえることができる。

2. 経営規模による収入格差

さて、これまでは煙草栽培の有利さを一般的に論じてきた。しかし、これまで挙げてきた事例が示唆するように、農民階層あるいは経営規模によりそれには大きな差が見られるようだ。ここでは、その問題をもう少し検討しておきたい⁽⁴³⁾。

(43)この地域の土地権はデサの処分権が弱く、トゥマンガングン県では *tanah sanggeman* とよばれるが世襲的個人占有と見なされ、また *Moentilan* でも同様に1920年代初には売却もしばしば行われていた[Fruin 1923a:301, 310]。他方、*Kedjadjar* 副郡ではこの時期、土地は固定持分制共同占有であり、デサ外への譲渡は認められていなかった[Fruin 1923a:301]。この占有形態は1900年代も同様に、*Veslag Garoeng* [1906:512]によると「*Dieng* 地域では土地占有はいわゆる固定持分制共同占有、いわゆる *tanah boeda* である。定期的に耕作される土地は、全てこの共同占有である。」と述べられる。しかし同時に、ここでは耕地不足を解消するために拓かれた高い位置にある急傾斜地の開墾地は世襲的個人占有 (*tanah jasa*) で占有されていた。1930年代になるとウォノソボ県全体で畑地の約2/3は世襲的個人占有 (*tanah jasan*) 及び固定持分制共同占有であるが、両者には事実上差はなくなり、ともに他デサ住民への売却も可能になった。もともと畑地の1/3を占める優良地は *tanah boedo* であり、デサ外への売却は依然として禁じられていたという[Heijden 1935:568]。いずれにせよ、土地売却が比較的容易であったので土地集積も早くから進行しており、例えば M.W.E. [Kedoe bijl.1]によれば、2バウを越える耕地を占有する者はマゲラン県では耕地占有者全体の7.7%、トゥマンガングン県では8.9%、

ウォノソボ県では 14.0%を占めた。

先ず指摘すべきは、煙草の収量は土地の質に極めて大きく影響されることである。既に見たように 1920 年代初めのデサ Kedjadjar では最良地はバウ当たり 250~300 リゲンの生産を上げるのに対して、灌漑できない畑地は 150リゲン以下であり、畑地の 2/3 は毎年の栽培が不可能だった。デサ Koeripan でも 1/4 の良質な畑地は 200~300 リゲンを産するが、残りの畑地では 160 リゲン以下だった。また 1874 年の Ledok 県でのバウ当たり収量は最良地が 10 ピコル、2 等地 5.5 ピコル、3 等地は 3 ピコルと大きな差があった [K.V.1875:176]。いま 1 つ、1935 年のウォノソボ県の事例を Heijden [1935:576~577] から見ると、この地域では最良の灌漑可能地からは最大で約 360 リゲンの葉が収穫されるが、最も悪い土地からは 72 リゲンを越えない場合もある。葉の種別毎に平均収量を見ると表 3-21 のようになるが、良地と劣等地の差は大きい。

そしてこうした最良地に煙草を作ったのは、栽培規模の大きい富裕農民だった。Fruin [1923a:275]によると、デサ Kedjadjar の灌漑可能な畑での煙草栽培のための深耕は常に賃労働で行われるが、このような経営を行うのは栽培規模が 1 バウを越える栽培者だけだった。加えて、このデサでは前章で見たように富裕農民は一般農民よりも遙かに多量の肥料を施しており、これによりもともと良質だった土地はますます生産性を高めたと考えられる。

同じような富裕農民の事例は、トゥマンゲン県のデサ Gembjang でも見られる。先に述べたように、このデサのルラーは最良水田 4 バウで煙草を作り、22 年にはバウ当たり 1,045 ギルダ、合計 4,180 ギルダもの粗収入を上げていた。彼の経営方式の具体的な記述は得られなかったが、このデサでは分益小作も賃入れもない [Fruin 1923b:301] といわれるので賃金労働者を雇って各作業を行わせていたと考えられる。

さて、ジャワでは水田米作の場合、しばしば分益小作が大土地占有者が経営を拡大するための手段として用いられたが、煙草の場合にはどうであろうか。1920 年代初めのケドゥーでは、Kedjadjar 副郡の調査デサ Kedjadjar と Koeripan では分益小作に出される土地はなかった [Fruin 1923a:271] が、トゥマンゲン県 [Fruin 1923a:301~302] とマゲラン県 Moentilan 郡 [Fruin 1923a:310~311] では煙草栽培でも分益小作が行われていた。前者の県についてはその内容に関する具体的な記述がないが、後者の地域では調査デサの Mendoet でも Bodjong でも収穫は折半され、Mendoet では苗は小作側が用意し、Bodjong ではそれは双方の負担となり、土地占有者がそのための前貸しを提供し、さらに耕起のためにバウ当たり 30~50 ギルダを払うという条件だった。

しかしこの方法は、先に挙げたデサ Gembjang のルラーが賃労働者を雇用した事例に示されるように、経営拡大の主要な方法にはならなかったようだ。富裕農が煙草栽培を拡大する主要な方法は、最適地を借地してそこを賃労働によって経営することだった。既に見たように、トゥマンゲン県各地における煙草栽培のための借地料は高額であり、また Moentilan 郡のデサ Mendoet でも 4 級水田が煙草栽培に限ってバウ当たり 80 ギルダで貸し出されるが、このような高額借地料は富裕農民のみが負担可能であり、借地したのはこの層であったと考えられる。

こうした点がさらにはっきりわかるのが、Kedjadjar 副郡の事例である。デサ Kedjadjar と Koeripan での聴き取り調査によれば、土地を貸し出すのは主として規模のより大きな土地占有者たちであり、それは残りの土地を耕作するための現金を手に入れるため、借り手

は同じデサの住民である。しかし、デサ Kedjadar の最優良地は近隣デサ Tieng の富裕な煙草農民たちにバウ当たり 400 ギルダ―までの金額で貸し出されている。劣等地はデサ内の非土地占有者に 50 ギルダ―で貸し出される。また Koeripan では灌漑可能な良地の借地料は 100 ギルダ―、灌漑のない最良畑地は 35 ギルダ―である [Fruin 1923a:271]。

この事例からわかるのは、デサ Kedjadar のより大きな土地の占有者には先に見たような賃労働者を雇用して自ら煙草を栽培する者と、土地を賃貸しする者がいたことである。後者の中に占有地全部を貸し出した者がいたかどうかは不明だが、彼らの中にはそれによって得た現金収入を残った土地に煙草を栽培するための賃労働者雇用に向けた者も多かったと考えられる。そして、ここで述べられる最優良地の賃貸しを借り手である Tieng の富裕農民たちの側から見ると、彼らはデサの領域を越えて最良地を手に入れて経営を拡大している。富裕農民は借地によって経営面積を拡大し、それを賃労働で経営して利益を増やそうとしていたのである。

3. 華人買上商人の支配？

さて、植民地期を通じて煙草の流通を支配したのは華人商人であり、前章で触れたように彼らは前貸しを供与して煙草を確保した。それでは、この前貸しは農民にとってどのような意味があったのだろうか。以下では、華人煙草買上商人の前貸しの中味を検討して、その点を考えてみたい。

最初に見るのは Garoeng 郡の 1900 年代半ば頃の事例である。Verslag Garoeng [1906:588]によると年利は 20~50%であり、「農民は現金が必要な時期に華人から借りるためウオノソボ (の町) へ行くが、彼らは最も安く金を提供してくれ、またたいい農民を個人的に知っている。この貸付は完全な信用貸しであり、この農民は同じ華人に対して後で煙草を売らねばならない義務は全くない。煙草収穫後、借金は清算されるが、祝祭の時期が暫くあった後、新規の貸付けが始まる」という。この事例では華人の貸付けに煙草引渡し義務はなく、彼等の煙草確保は専ら顔見知り関係=信頼関係によっており、この限りで融資条件は極めて緩やかであるといえる。

これに対して 1920 年代の Moentilan 郡の事例は、借り手にとって条件がより厳しい。Fruin [1923a:317]によると、デサ Mendoet では小規模土地占有者は華人から 100~300 ギルダ―借りるが、契約には証紙を貼った書類が作られ、何人かの借り手の連帯保証が求められ、水田と屋敷地が担保にされる。利子は書類には月 1.5% (県銀行の利子と同じ) と書かれているが、借用額を実際より多く記載する (例えば実際に借りたのは 100 ギルダ―なのに 120 ギルダ―と記載) 華人もいる。デサ Bodjong では、華人から金を借りるのは富裕者だが、煙草供出義務付きである。利子は直接的な形を取らず、例えば 120 ギルダ―の価値がある煙草に 90 ギルダ―や 100 ギルダ―といった値を付ける形で取られる。その価格が低すぎるので前貸し供与者に供出したくない場合には、約 6 ヶ月の煙草期間当たり 20%、月利では 3~5% の利子を付けて、前貸しを返済する。貸した金 50~60 セント毎に最良品煙草 (kepala) 1 カティ (70 セントの価値) 供出を義務づける場合もある。

おそらくはこのような条件での前貸しが一般的だったと思われるが、現実には供出義務が実行されなかった事例も見られた。トゥマングン県のデサ Gembjang の事例は、その一例である。1920 年代初め、このデサで華人がかなり大規模に前貸しを供与していたのは 6 子村 (doekoeh) 中の 1 つだけだったが、以前には他の子村でも煙草栽培 0.5 バウ当たり 300

～ 500 ギルダールといった巨額を貸し付けており、それらは合計すると 60,000 ギルダールに上っていた。この融資は利子が 30%、市場価格で供出する義務付きだった。しかし、庶民金融銀行^(註註)がこのデサで集中的な融資活動を展開して合計 16,000~20,000 ギルダール(1人あたりでは 11~14 ギルダール)を貸し付けたことに加えて、華人から前貸しを受けた者が最良の煙草をしばしばよその買い上げ者に売ってしまったことによって、華人の前貸しは激減したという[Fruin 1923a:307~308]⁽⁴⁴⁾。

(補註)庶民金融銀行とは、オランダ植民地政庁が現地人に低利融資(利率は年利 10%)を行い、主として華人からなる高利貸しの支配を打破する目的で 20 世紀初めから整備を進めた金融機関の 1 つである。基本的には各県に 1 行置かれた。

(44)庶民金融銀行が集中的に活動したのは、このデサだけではない。1920 年代初のトゥマングン県では県銀行の融資はほぼすべての煙草栽培をカバーし、毎年、このためにほぼ 60 万ギルダールが貸し付けられていた。また人口 2 万人の Kedjadar 副郡では、ウォノソボ県銀行が土地占有者の 2/3 に当たる約 2,000 人に対して 1921 年には 10 万ギルダール、22 年には 126,000 ギルダールを貸し付けていた[Fruin 1923b:382]。

では、何故このようなことが起こり得たのであろうか。それは前章末で見たように、ケドゥー煙草の買付けには華人商人だけではなくクドゥスのジャワ人商人など様々な人々が参入し、競争が激しかったことに理由が求められよう。次に掲げる 1902 年の記事は、その一端を具体的に物語るものである。

「(プカロンガンの)刻み煙草商人(大半が華人)は、本年、前年ほど多くの煙草をウォノソボから確保できないことを恐れているが、それは現地の不作のせいではなく、Poerworedjo の有名な華人煙草商人を長としたバタヴィアの数十人の華人が、ウォノソボで煙草を買い付けるために資本金 15,000 ギルダールで会社を形成したからである。この煙草は近年、バタヴィアで非常に人気が高い。これまでこの煙草は全てプカロンガン市の華人煙草買付け者達によって買い上げられ、彼らの代理人の仲介でバタヴィアで販売されていた。

ウォノソボの煙草栽培者は普通、ジャワ正月の数日前に彼らのジュラガン(djoeragan)と一緒にプカロンガンへ来て、彼らから提供すべき刻み煙草の代わりに現金とバティック布からなる前貸しを受け取っていた。しかし、本年は前貸しを要求するためにプカロンガンへ北面のは若干名に過ぎなかった。大半の者は既に新しい会社から現金を受け取っているのは確実である。現在では、バタヴィアの華人煙草商人達は自らウォノソボで、したがって生産者から直に従来よりずっと安く煙草を買い付けている。」[I.M.1902:294]

ここではそれまでウォノソボの煙草取引を独占していたプカロンガンの華人商人の地位が、その最終販売地であるバタヴィアの華人商人の挑戦によって脅かされているのである。こうした状況がある時、煙草市場は売り手市場となり、貸付条件が緩和される、あるいは栽培者は前貸しを受けた商人でなくともより有利な価格を付ける商人が現れるならば、そちらに煙草を売ったとしても不思議ではなかったといえよう。

この結果、華人商人は前貸しに慎重にならざるを得なかったのである。そうした状況が続いたことは、1930 年代の報告からも明らかである。Heijden[1935:586]によると、ウォノソボ県では「華人商人はこの数年間事実上もう融資を行ってこなかったが、1934 年の煙

草栽培に対しては再び極めて慎重に、一般により上質の煙草を持っている富裕な顧客に対して前貸しを供与した。……商人達は合計するとかつての煙草前貸し金 100 万の半分未満を貸し付けたといわれる。……借り方に対して強く出ることができないことは、商人達が起こした訴訟が極めて少ないこと、また出血セールが散発的にしか行われていないことに示される。……前貸しが供与される対象は、主に大規模煙草栽培者である。加えて、庶民銀行に借金がある場合には、銀行が常に優先されることも計算に入れられる。だから銀行による巨額の融資がある場合には、常に融資関係から排除される。華人商人による融資はそれによっても大きく減少した。」という状況だった。

ここでは、借り手が仮に融資条件を守らなかった場合でも、訴訟などを通して強く出ることができなかつたことが指摘されている。このように見ると、華人の前貸しは表面上は厳しい条件であるが、現実には必ずしもそうではなかつたと考えてよい。むしろ、栽培者、とりわけ大規模栽培者にとっては煙草の販売先を確保できるメリットの方が大きかつたように思われる。

さて、この事例でもう 1 つ注目されることは、華人商人たちが前貸し対象者を選ぶ場合に庶民金融銀行から融資を受けている者を外していることである。このことは、この地域ではこの政庁金融機関による融資がかつて筆者が検討したブスキ理事州やスラバヤ理事州の各県とは異なつて、1930 年代の恐慌期にもしっかりと実施されていたことを示唆している⁽⁴⁵⁾。実際ウォノソボでは、Heijden [1935:596]によると「以前の年には主に煙草畑の土地耕起時に貸付を行つており、個別の貸付額は市況低下の年(1931~32 年)にもほとんど、あるいは全く減らなかつた。……不況に突入した後、煙草栽培ではなお土地耕起に関わる作業に高すぎる賃金が払われていたのは、広く見られる現象だった。なぜなら、土地所有者に対して銀行は常に融資機会を開けていたからである。労働者(クーリー)はここから利益を得た。煙草栽培が 1 バウ以下の小土地占有者についても、銀行は土地耕起融資を提供することによって、生活水準を人為的に高く維持した。この融資を可能にしたことによって、煙草栽培者はそうでない場合と比べてよりも、自分の利害を促進することができた。したがつてこの貸付政策は、多くの焦げ付きを生んだ。」という。1935 年のこの融資は表 3-22 からわかるように 4,003 件、41,126 ギルダであり、1 件当たり平均額は 20 年代初めと比べると大きく減つてはいるが、10.3 ギルダだった。貸付月は 4、5 月に集中しており、この融資は土地耕起費用や苗購入などに当てられたと考えられる。

(45)スラバヤ理事州、ブスキ理事州の各県銀行は、何れも貸付け引締めを強力に実施しすることにより、焦付きを防ごうとした。これについては植村 [1997:254~260, 455~463] を参照。

この結果、華人商人の前貸しがなくなつたとしても、煙草栽培者が資金不足に陥ることは比較的少なかつたと思われる。このこともまた、栽培者と華人商人の関係をますます前者に有利に展開させたのだった。

おわりに

本稿ではケドゥーにおける内地市場向け煙草生産の発展を辿り、その栽培・加工の特徴を述べてきた。そして、それらをふまえてこの生産が一貫してこの地域の富の源泉であつたこと、その経済的影響は畑作地帯の方が水田作地帯より大きかつたこと、煙草栽培の収益は稲作より遙かに大きかつたこと、収益性の点では賃労働者を雇用して行う大規模経営

の方が優位に立っていたが、経営拡大は主として借地によって行われたこと、華人買上げ商人と生産者農民との関係は決して商業高利貸し資本による一方的支配と位置付けられるものではなく、むしろ後者が相対的に優位な立場にあったことを明らかにしてきた。

ただ本稿では専ら煙草生産とそれが農家経済・地域経済に及ぼす影響の構造的な特質を検討することに主眼をおいたので、それらを通じてこの地域の社会経済が市場変動の影響をどのように受けて、どのように変容したかという点にはいっさい触れることができなかった。この問題を考えるためには、ケドゥー煙草がどのように流通し、どのように消費されたかという点の検討が不可欠である。これは次の課題にしたい。

第4章 植民地後期バニユマス理事州における内地市場向け煙草の生産と地域経済 はじめに

中ジャワの内陸から南海岸に広がるバニユマス理事州は、植民地期ジャワの煙草栽培中心地の1つだった。ここでは煙草は既に東インド会社時代には栽培され[Tabak 1925:153]、19世紀初めには現地人商人の手でプカロンガン港経由でバンタムへ船送されていた[Raffles 1814:134]。これらは1834年10月のバニユマス理事の総督宛書簡によれば、水田裏作として作られていた[Elson 1994:244]。そして1837年にはヨーロッパ市場向け栽培が強制栽培制度により開始されたが、この制度は僅か3年で廃止され⁽¹⁾、以降、従来の内地市場向け栽培とヨーロッパ人主導による輸出向け「自由栽培」とが並行して行われることになる。

この地域の煙草生産については Fruin[1923a]、Fruin[1923b]、Tabak[1925]が比較的詳細に述べているが、その歴史的意味づけは十分ではない。小論では内地市場向けケルフ煙草に焦点を絞ってその生産と取引の特徴を検討し、それが地域経済に占めた意味を考えたい。

(1)この地域の強制栽培は1837年に186バウ、603家族の参加で始まり、38年は142バウ、460家族、39年には131バウ、1203家族で行われたが[C.E.I.,vol.14:table A3]、この年を最後に廃止された[Tabak 1925:153]。

I. 内地市場向け生産の発展とその特徴

1. 栽培の中心地域

先ず理事州内のどの地域で栽培が行われていたかを表4-1から見ると、①県レベルでは北部のバンジャルヌガラ県に集中し、②同県内では北部のバトゥール郡とカランコバル郡が中心で、③他にバニユマス県スカラジャ郡、プルウオケルト県ジャンプー郡、プルボリンゴ県のプルボリンゴ郡とクルタヌガラ郡でも比較的広範に栽培が行われていた。このうち、③の地域での栽培はほぼヨーロッパ市場向けだと考えられるので⁽²⁾、以下ではバトゥール郡とカランコバル郡を対象を絞って考察を進めたい。

(2)この判断の根拠は次の通りである。強制栽培廃止後、ヨーロッパ市場向け栽培は1863年に自由栽培企業が1軒登場するまで皆無だったが、「この3年間にヨーロッパ人企業家がバニユマス、バンジャルヌガラ、プルボリンゴ県に煙草買上げのために住み着いて以来、これらの県及びバニユマスと接するプルウオケルト県の住民は多くの煙草を植えた。チュンダナとプルボリンゴにある2つの企業は、1868年にそれぞれ41,000アムステルダム・ポンド、100,000アムステルダム・ポンドを買い上げたが、これは67年のほぼ倍である。この2人の(ヨーロッパ人買上げ専門)企業家の他に、バニユマスには煙草を買い上げる華人と原住民もいるが、買上げ量は不詳である。買上げは畑で、品種に応じ1000本当たり8ギルダー、10.5ギルダー、12.5ギルダーで行われるが、倉庫まで運ぶと2ギルダーが追加払いされる。作物への前貸はない。小屋内の仕事は大半が出来高払いである。」[K.V.1869:116]とあるように、60年代後半以降大きく拡大した。そしてK.V.によればこの地域のヨーロッパ人煙草企業は最盛期の1870年代後半からバニユマス、プルウオケルト、プルボリンゴ県に集中し、20世紀にもこの三県で合計4企業が営業していた。またM.W.H.[Banjoemas:394]によるとプルボリンゴ県ではヨーロッパ人煙草企業家がクロソック、ブラッドとして葉煙草を買い上げており、Landbouwatlas[1926:tabel VI]によるとヨーロッパ人煙草企業が煙草を生産または買い上げているのはバニユマス県とプルボリンゴ県だけだった。

先ず両郡の栽培がジャワ・マドゥラの中で占める位置を見ると、1916~20年平均栽培面積が耕地の10%以上を占める郡は14あったが、バトゥールは栽培面積(7,669バウ)、対耕地比(41.1%)ともに1位で、特に後者は群を抜いて高かった。カランコバル郡の対耕地比(17.1%)も7番目だった[Landbouwatlas 1926:staat III]。郡内ではバトゥール郡北部のバトゥール副郡、それに接するワナヤサ副郡(カランコバル郡)の北端にあるいくつかのデサでの栽培が特に重要だった[Fruin 1923a:283~284]。

2. 畑作栽培の発展

表4-1から窺えるいま1つの重要な点は両郡の耕地は大半が乾地だということ、それゆえ煙草は畑作だったと考えてよいが、それはFruin[1923a:268~269]やRapport Tabakscultuur Wonosobo[1935:564]の記述からも確認できる⁽³⁾。これを踏まえて表4-2からこの理事州における煙草栽培発展の特徴を見ると、①栽培は1880年代後半に急増し、1910年代前半がピークである、②1910年代後半にかなり減ってそのままの状態が続き、恐慌期にもあまり減っていない⁽⁴⁾、③当初は水田裏作が盛んだったが減少傾向にある、④1880年代前半から畑作拡大が始まり、その後急速に発展して1890年代から栽培面積の過半を占めた、⑤畑作の中では表作が圧倒的な比重を占めるようになった、などが指摘できる。

(3)したがって、内地市場向け栽培の縮小は畑地栽培の縮小を意味する。例えば1912年に「バニユマス理事州では、原住民市場向け煙草栽培が縮小した。逆にヨーロッパ人企業家向け栽培は増加し、それは主としてプルウォケルト、プルボリンゴ県で生じている。」[K.V.1913:164~165]と報告されるが、この年の栽培状況は水田表作172バウ(前年比4バウ減)、水田裏作2,418バウ(前年比32バウ増)に対して、畑地表作12,823バウ(前年比3,682バウ減)、畑地裏作1,386バウ(前年比508バウ減)だった[K.V.1912, 1913:bijl.FF]。

(4)1915年以降の栽培減少の理由は不明だが、1915~19年については第一次大戦末期に発生したジャワの米不足の中で、植民地政庁が煙草栽培の縮小と食糧生産への振替を奨励したことと関係が深いと思われる。これについてはさしあたり植村[1998]を参照。また1920年代前半の減少についてはバニユマス理事が1922年の覚書で「ディエン高地の煙草産業向けの燃料供給にあらゆる注意が向けられた。しかるべき植付なしに伐採したため、この地域では燃料不足が発生した。これによって煙草栽培面積がこの間、既に減少した。」[Zandveld 1922:146]と述べた事情が影響したと考えられる。

ところでBleeker[1850-II:91]は「原住民が消費する煙草の栽培は主として山間郡であるバンジャルヌガラとプルボリンゴで行われ、またバトゥール、カランコバル、チャヒヨノ郡でも行われる。」と述べ、19世紀半ばのバトゥール、カランコバルは必ずしも理事州内の内地市場向け栽培の中心地ではなかったとしている。また1870年代の状況について、K.V.[1874:184]は「この理事州の煙草は大半が裏作として稲収穫後に植えられる。生産の最良部分はヨーロッパ市場向けに当地に住む企業家によって買い上げられ、残りの質の劣る部分は刻み煙草としてパッサールで売られる。」、K.V.[1876:189]は「バニユマス理事州では煙草は(裏作として)主にプルボリンゴ県とプルウォケルト県で栽培される。またバニユマス県にある3企業も栽培を拡大しつつある。」と述べる。これらを先の①~⑤と照らし合わせると、この理事州では19世紀後半期まではなお南部平地水田地帯におけるヨー

ロッパ市場向け栽培の方が盛んだったが、1880年代前半頃からバトゥール、カランコバル両郡で内地市場向け栽培が急拡大したと考えられる。

3. 栽培方法の特徴

両郡の畑作煙草栽培の特徴を、先ず表 4-3 から栽培時期について見ると、作付は2～5月、収穫は7～11月に集中している。雨季に作付し、乾季に収穫するのである。このスケジュールは、「煙草が表作としてかなりの量植ええられるバトゥール郡を除くと、理事州内の他地域ではどこでも裏作として作られる。」[K.V.1872:150]とあり、少なくともバトゥールでは19世紀後半以来のものだった。

次に栽培・収穫の手順を、Fruin[1923b:360~364]によって述べよう。バトゥールでは1～2月頃に苗床を後に移植する土地の一部に造成し⁽⁵⁾、鋤で均して厩肥を施した後、あらかじめ細かく砕いた肥料と混ぜておいた種を蒔く。播種後、種を覆うためもう一度細かい肥料を苗床上に散布する。密集しすぎの苗を間引きした後、さらに肥料をやる。苗には直射日光を避けるため日覆いが掛けられた。移植は播種後約70日、苗丈が10cm程になった頃行われる。その前に畑は鋤で耕されるが、草を抜いて溝を造るだけのラリキ(lariki)法と、草を反転させた後で土を時には1.5~2.5フィートの深さまで掘り起こすティレプ(tilep)法の、2つがある。バトゥール郡やカランコバル郡では前者を適用するのがふつうで、後者は良質地や長期の休閑のため固くなった土地にだけ用いられた⁽⁶⁾。移植は、穴空け棒で作った植穴に苗を1本ずつ植える。厩肥は、植える前に植穴に施す。植付密度はバトゥールではほぼ3～5平方フィートに1本、バウ当たり15,000~25,000本だった。

(5) 1バウの栽培のためには、だいたい50~75m²の苗床が必要である。床の播種面積は幅1mを少し越える程度である。

(6) 前者の方式は後者より安い。例えばワナヤサ副郡では、ラリキ方式でバウ当たり10ギルダの契約労働で移植でき、煙草の収益が小さい南バトゥールでは5ギルダだった。逆にティレプ方式は、全部現金払いの場合バトゥールでもバウ当たり50ギルダかかる。傾斜地ではティレプで耕された土地に畝を造り、土壌流失を防いだ[Fruin 1923b:363]。

3～4ヶ月後には収穫が始まるが、それまでに行われる煙草の維持管理作業には除草5～7回、最下層葉の除去⁽⁷⁾、先端摘み、小枝と芽の除去がある。収穫は一度に行うのではなく、先ず一番下の価値の低い葉を摘み取り、その後価値の高い上層葉を徐々に収穫する。全部の収穫には約4ヶ月が必要だった[Fruin 1923a:292]⁽⁸⁾。

(7) この葉はふつうは捨てられ、需要が非常に大きい時だけクロソックとして売られた[Fruin 1923a:291~292]。

(8) 煙草の葉は各層によって名称が異なり、バトゥールでは最下層の葉をアンパダン(ampadan)、真ん中の葉をトゥンガーハン(tengahán)またはランパサン(rampasan)、最上層の葉をチェンクリック(tjengkrik)と称した。もっともここではアンパダンよりはやや良質な葉をウルタン(oeroetan)と呼ぶこともあった。

4. 輪作

この地域の畑作煙草は、一般にトウモロコシと輪作された。M.W.I.[Banjoemas:341]によれば、カランコバル郡とバトゥール郡の高地地方では畑地は年中栽培され、1月～4月は

煙草だけが作られ、煙草が5～6ヶ月になるとトウモロコシが間作された。この方式は、1920年代にも行われた。Fruin[1923a:285; 1923b:356~357]によれば、冷涼なこの地域では煙草は成熟するまで7～8ヶ月、トウモロコシは8～10ヶ月必要なので、両作物が同時に同じ耕地上にあることが多く、トウモロコシが煙草の収穫終了前に、高地では収穫開始前から煙草の間に播種された⁽⁹⁾。その結果、表4-3に現れるように、両郡ともトウモロコシ作付のピークは煙草収穫の最盛期でもあり、煙草作付最盛期の2～4月にはなお多くのトウモロコシが植わったままだった。

(9) M.W.L.[Banjoemas:228]によれば、この両郡で輪作が行われるのは煙草栽培だけで、水田では稲の収穫まで9ヶ月かかるので輪作はない。なおディエン高原の高度の高いデサでは、トウモロコシの収穫前に煙草が新たに植えられることがある。そこでは煙草は2月3月に植え付けられ、9月10月には収穫は大半が終わるといふ。

もともと、こうした輪作が全域で毎年行われたのではない。北バトゥールの灌漑可能な畑の一部にはほぼ毎年煙草とトウモロコシが作られたが、広い土地を利用可能な富裕者は2年間に煙草1回、トウモロコシ2回の収穫を続けて行い、その後半年間休閑した。灌漑はトウモロコシの植付時期と休閑期に行われた。灌漑できない畑では、煙草かトウモロコシを植えた翌年には休閑した。痩せ地では、3年以上の期間に1回しか収穫できなかった。ただ休閑される畑は例外的で、バトゥール副郡では煙草を毎年作る面積は半分を越え、バトゥール郡全体では19,000バウ中の7,700バウ(40.5%)だった[Fruin 1923b:356~357]。

肥沃な土地では煙草とトウモロコシの他に、販売目的で野菜やジャガイモが間や縁に作られた。先ずジャガイモを植え、後から成長したジャガイモの間に煙草を植え、ジャガイモを引き抜いた後で煙草の間にトウモロコシを植える場合もあった⁽¹⁰⁾。

(10) このような間作についてはTabak[1925:155]も「バトゥールの高度の高い山地では、煙草は収穫できるようになるまでに約7ヶ月(1月~8月)必要で、間作としてトウモロコシが植えられることが多い。それがジャガイモの場合には、このイモのために必要な施肥が煙草栽培に利益を与える。」と、同様のことを述べている。

5. 施肥

こうした土地利用は地力を消耗させるので施肥が盛んで、厩肥の利用は既に19世紀初めのCrawfordの報告にも見られた[Fruin1923b:358]。そして「肥料はバトゥール郡の煙草栽培では大量に使用され、天秤棒1本当たり約0.25ギルダーで取引される。・・・煙草のために人々は小家畜や鶏、馬の肥料を使う。」[M.W.L.Banjoemas: 192]とあるように世紀転換期には一般化し、売買もされた。Fruin[1923a:290~291]も「細かく篩にかけられた厩肥はバトゥールでは一担ぎ40セント、粗い厩肥は30セント程である。ディエンではそれぞれ30セント、25セントといわれる。山羊厩肥は馬厩肥よりさらに良質に違いない。ふつう、厩肥は混合して売られる。純度の高い山羊厩肥は価格がもっと高い。」と指摘している。

最良なのは山羊糞で、馬糞がこれに次ぎ、牛糞は適していない⁽¹¹⁾。それゆえ煙草栽培デサでは牛の頭数は大きく減った1909年以降も、小家畜の頭数は増加した。また、ここでは多数の馬、牛、羊と山羊が肥料を取るために、他地域とは異なり厩舎で飼われていた[Fruin 1923a:272~273; Fruin 1923b:357; Tabak 1925:156]。この地域では、家畜飼育が煙草栽培と結合した形で行われていたのである。

(11) 肥料に使われたのは、厩肥に屑やゴミを混ぜた一種の堆肥だった。バトゥール郡

のデサ・クシンバルウェタンでは、馬1頭の厩肥1年分で1バウに足りると考えられていた。政庁農業指導局は緑肥としてクロタラリア(*crotalaria*)の栽培を農民に奨励したが、この地域では普及しなかった。バトゥールのような高い山間地方では、この植物は生長が遅すぎることが原因だったという。詳しくは Fruin [1923a:290~291; 1923b:359~360] を参照。

6. 加工

煙草の葉は収穫直後に最も厚い部分を主脈から切り離して束ね、そのまま3~5日間熟成させた後、刻んで薄い板状のエレランにしてリゲン(竹で編んだ篋の子)の上に広げる。リゲン1枚にはエレランが5つ載る。刻みは男の仕事、エレランにするのは女の仕事だった。刻みの方法は植村 [2005:75~76] で述べたケドゥーの場合と同じだが、バトゥールでは職人を雇うことは少なく一般に農民自身が作業するので、仕事は粗く刻まれた葉は他地域と比べるとずっと大きかった。またバトゥールやカラコバルで作られるエレランは、ウオノソボ県ガルン郡と比べると概して厚めだった [Fruin 1923a:292~293; Fruin 1923b:364]。

乾燥は全て直火乾燥で、バトゥールでは2名で一晩にリゲン約5枚分の煙草を処理し、燃料にはアンビアン(シダの一種)を用いた [Fruin 1923a:269,292~293; 1923b:365; Tabak 1925:156]。こうして作られたバトゥール産ガランガン煙草の上級品は良質で、評判の高いケドゥー産ペペアン煙草より高値が付いた [Fruin 1923b:355~356]。

7. 労働力雇用

以上の作業の中で苗床の造成・維持は基本的に家族労働で行われ「必要な場合は他人の(不払いの)援助」を得たが、その他の作業には他人労働を使用することが多かった。土地耕作はサンバタン(相互扶助)⁽¹²⁾が主流だが、ボロンガン(請負制)の場合もあった。移植はたいていサンバタンで行われ、家畜の飼料(草やトウモロコシの葉)集めは若者を雇い馬1頭当たり一年10~15ギルダー(バトゥールの町の周辺では20ギルダーを超える場合もあった)で請け負わせた。作物の維持管理は家族労働で行われ、除草作業のみサンバタンが利用された。葉の収穫と運搬は、サンバタンか賃労働によって行われた。

(12)サンバタンの場合は賃金は払われず、食べ物と飲み物が提供されるだけである。

本来の相互扶助(*sambatan gilir* と称される)は労働を等価交換することだが、煙草栽培は非常に集約的で大量の労働を必要とするので、作付面積が1バウ以上になるとそれは不可能になる。その場合、労働の補助を受けた者は労働で返すのではなく、この地域では本来のサンバタンの場合よりよい食事を出すことですませた [Fruin 1923a:287]。

刻みに職人を雇う時は出来高払いが多かった。デサ・ディエンでは1日にリゲン3枚分を刻み、日当は前払いなら30セント、そうでない時は40セントで、ともに食事2回と飲み物が出された。デサ・クパキサンでは1日リゲン2枚分について10セントと良質な食事3回と飲み物、デサ・バトゥールではリゲン1枚当たり15セントで食事なしだった。アンビアンはボロンガンで集められ、デサ・クシンバルでは5セントが払われ食事が出されたが、男1人で1日2ルンバットを集めることができた。クパキサンでは2ルンバット当たり30セントと食事、バトゥールではルンバット当たり20セント、食事なしだった。乾燥作業は家族労働かサンバタンで行われた [Fruin 1923a:288~293; 1923b:365]。

もっとも、各作業の労働力雇用には地域や経営規模によって差があった。Fruin [1923b:366~368] によればバトゥール南部の小規模栽培の場合は大半を家族労働で行うが、北バト

ールではより集約的な経営がなされ相互扶助の場合の食事にもより費用をかけた。また煙草栽培者が富裕農民の場合には、しばしば寄寓している独身の若者ラヤット(rajat)を煙草栽培に使役した。彼らはその対価として住居、食事と衣服を受け取るだけだった。こうした差が持つ意味については、IIIで触れたい。

II. バトゥール煙草の取引

製造されたケルフ煙草は、少なくとも半分近くはバトゥール煙草として域外、特に西ジャワ西部とスマトラへ移出された[Rapport Tabakcultuur Wonosobo 1935:587; Reijden 1934:53~54; Tabak 1925:160]。その流通先と経路の詳細については別稿で論じる予定なので、ここではバトゥール煙草が誰によってどのように取引されたかを考えたい。

1. 栽培者農民の煙草販売

K.V.[1913:165]はバトゥール郡の住民煙草は「内地のあらゆるパッサールへ販売のために出されるが、主にはバトゥールのパッサールであり、そこでは煙草の大規模で非常に活発な取引がなされる。」と述べているが、1920年代初めの調査では農民がパッサールへ持ち込むのは少量の質の落ちる煙草のみであり、「煙草の買上げに際しては、原住民バクルが華人に次ぐ役割を果たす。一般に言えるのは、良好な煙草デサや華人居住地からあまり離れていないデサ(バトゥール、カラコバル、シベベック周辺)では華人やその代理が通知をした後で煙草を栽培者から買うためにデサへ来るが、より離れた地域の小規模栽培者からは一般に華人でなくそこに住む原住民バクルが買う。彼らはその煙草をパッサールへ運んだり、自宅を訪れる華人に売ったりする。これは特に南バトゥールに当てはまる。カラコバルとワナヤサでは、少量でも華人商人が農民から直接買い上げる。この地域にはプカロンガン、プルボリンゴ、ゴンボンからさえ原住民買上げ商人が来る。」[ibid.:295~296]、「(バトゥール郡では)煙草商業は完全に華人の手にある。原住民買上げ商人もいるが、彼らは主に他地域からやって来た人々である。」[Fruin 1923a:286]とあるように、農家を尋ね歩く買付け商人に販売されることが一般的だった。

このように取引は華人が支配しているがジャワ人商人も参入し、華人居住地近くの産地には華人商人やその代理が買付けに行き、より離れた所や生産規模が小さい場合、特にバトゥール南部では地元のジャワ人商人バクルが買い上げている。さらに、ジャワ人商人には県外から来る者さえいた。以下では、これらについて具体的に検討したい。

2. ジャワ人商人の活動

県外から来るジャワ人商人のうち、プルボリンゴやゴンボンなど理事州南部から来る商人は、そこに立地するシガレット産業のための原料煙草を買い上げたと思われる⁽⁴⁾。他方、プカロンガンは西ジャワ向け移出の中継拠点で、1870年代初めまでは4万~5万ギルダーの資本を持つ2人のジャワ人商人が大規模取引を行っていた[M.W.E.Pekalongan:47, noot(3); M.W., vol.VI:177, noot]。しかしその後は取引の主導権を華人に奪われ勢力が衰え[K.V.1892: bijl.C]、1920年代には「ふつう150~200リゲン以上買うことはない。だからせいぜい10ピコル程度にすぎない。」[Fruin 1923b:374]とあるように、もはや昔日の面影はなかった。

他方、地元のバクルの取引は次のようだった。彼らの大半は数百ギルダーを超えない程度の自己資金で営業するので、煙草を一度に150~200リゲン以上買うことはなかった。南バトゥールのデサ・シジュルックの例では、華人商人は煙草を農民から直接購入せず買付

けは 12 名のバクルが担ったが、前貸しは行わず買付け時に現金で半額を払い、残り半分は煙草を華人商人に転売した後に払った。その中の 1 人は、先ず自分の収穫(1.5 バウ分)を販売し、その稼ぎで他の農民から 20 リゲンを買い入れ月 2 回バンジャルヌガラへ売りに行った[Fruin 1923a:295~296]。このように、彼らの取引は一般に小規模で煙草農家を兼業している者も含まれ、買い上げた煙草は域外には運ばず華人に転売していた⁽⁴⁴⁾。

(13) この理事州における製品煙草製造の起源は不詳だが、Gegevens Nijverheid 1916 [bijlage]によれば 1915 年末現在、葉巻またはシガレット工場が 2 軒あった。1925 年にはカラニアニャル県ゴンボンにクレンバック・シガレット(煙草に大黃と安息香を混ぜたシガレット)の最初の工場が設立され、29 年には 2 番目の中規模営業が開設され、小規模営業が 3 軒できた。プルボリンゴ県、チラチャップ県での最初のシガレット企業設立は 28 年、バニユマス県では 29 年で、その後この産業は徐々に理事州全体に広がった。このシガレットは域内で消費される他、王侯領、ケドゥー理事州と東プリアンガン理事州で取引され、さらにスマトラ南部のランボンにまで送られた。詳しくは Reijden [1935:124~127]を参照。

(14) もちろん例外的に大規模取引を行う地元バクルもいた。Enkele gedeelten Banjoemas [1924: 34]によれば、バトゥール郡在住の 4 人のジャワ人煙草商人はバトゥールに住む華人卸し商人への販売の仲介者として活動し、1924 年の稼ぎは 1,500~2,500 ギルダールだった。また Fruin [1923a:296]が載せる事例では、デサ・ワナヤサには農民に前貸を行うバクルが 10 名おり、このうち 2 名は年に 1,000 ギルダール、他の者も数百ギルダールを貸し付けていた。

3. 華人商人の活動

(1) 煙草取引支配とその拠点

この地域の華人煙草商人の活動は 19 世紀後半には盛んで、バトゥールの町は住民の大半が華人だった[Diëng-Vlakte 1890:230]ことから知られるように煙草取引の拠点だった。もっともカラニコバルでは、華人はこの時期には煙草買付けに従事していなかった。この地域とジャワ南岸沿いを走る国鉄西部線とを繋ぐセラユダル(Serajoedal)蒸気軌道会社(以下、S.D.S.と省略)⁽⁴⁵⁾の建設部長の取締役宛 1897 年の書簡には「カラニコバルには、多くの煙草が作られているにもかかわらず、煙草を買い付ける華人はいない。現在煙草を買い付けていない華人を、バンジャルヌガラから煙草買い上げのために招聘することは可能だろうが、そうすればその煙草は確実に軌道で輸送されることになるだろう。」「[Chef van aanleg 1897]とある。

20 世紀に入るとカラニ・コバルにも華人商人が進出したようだが、バトゥールの町は相変わらず煙草取引の拠点であり続けた。M.W.L.[Banjoemas:213]によれば、両郡で計 10,000 バウに内地市場向け煙草が作られるが、取引の大半は華人が行い、「バトゥール在住の華人達は年に少なくとも 125,000 ギルダール稼いでいる」と推計されている。また K.V.[1911:206]は、「(バニユマスの)煙草地帯では、原住民式に加工され刻まれた煙草は主に華人が買い上げる。ディエンの原住民煙草商業の中心であるバトゥールでは、最も富裕な買上げ商人達が収穫を手に入れようとしたが、バンジャルヌガラ県銀行の仲介によって既に若干の栽培者達は産物を自分で市場へ運ぶことができている。」と述べている。

(15) S.D.S.はマオス・プルウォケルト間 29km で 1896 年 7 月 16 日に営業開始したのを

皮切りに路線を中ジャワ山間部の煙草地帯へ伸延し、1917年6月7日にウォノソボまでの営業が始まったことで総延長126kmの路線が完成した。詳しくは Reitsma [1928:122~123]を参照。

S.D.S.輸送代理人の1917年の業務旅行報告[Rapport Batoer 1917]はこの町の華人煙草商人の活動を具体的に知ることができる数少ない史料だが、それによるとこのデサには華人ライテナントを務めるタン・ティン・チウら17人の華人大商人が住み、彼らはバンジャルヌガラに代理人を置いていた⁽⁶⁾。そしてバトゥール郡、カランコバル郡及びケドゥー理事州ウォノソボ県レクソノ郡のワトゥマルム副郡で生産される煙草8,500コーディーのうち、約4,000コーディーを買い上げて西ジャワへ移出していた。Fruin [1923a:268]も、このデサは「ほとんど純粋に華人の、周辺地域の煙草買い付けのための中心」だと述べている。

この時期にはこの他に、カランコバル郡シベベックなども煙草取引の中心地であり、多数の華人が住んでいた[Fruin 1923b:376]。

(16)17名の華人煙草商人の名前は次の通り。Tan Ting Tjioe、Tan Ting Kiat、Tan Gian Tong、Tan Ting Lan、Oei Ing Hin、The Ko Beauw、Tji Ioe Ti、Tjioe Tjong Sioe、Tjioe Tjong Loij、Go Kioe Ting、Lin Tji Siang、Oei Kong In、Lim Tiang Djian、Tji Soeij Tjiang、Tjang Tiong Sem、Tjang Tiong Hi、Tjang Tiong Tik。

(2) ジャワ人商人との関係

これらの華人は生産者農民から直接買付ける場合もあったが[Tabak 1925:160]、既に触れたようにバトゥール郡ではバクルを代理人として利用する方が一般的だった。1900年代初めにはM.W.H.[Banjoemas:366]によれば、華人は「非原住民商人による煙草商業が重要なバトゥールにおいてのみ、原住民仲介者をよく利用する」が、「その結果は非常によいので、数年来彼らの仕事が利用されて」いた。彼らは華人から無利子か非常な低利で受け取った前貸金を農民に再貸付して華人への提供価格より安く煙草を入手する。さらに煙草1ピコル当たり0.05~0.1ギルダの手数料と鞍、馬勒、毛布などの贈り物を華人商人から受け取る。デサ首長やデサ役人の中にも、この仕事をこっそりとやっている者が多かった。

この事例から明らかに、仲介者は華人商人から厚遇され利益はかなり大きかったようだ。このことはまた、そうして煙草を手に入れても華人商人の利益が大きかったことを示唆している。同時にこの史料は、これが県内でもバトゥール郡に限定され、歴史が比較的浅いことを示唆している。Fruin [1923b:380]によると華人が地元の仲介者を代理人として利用することは1920年代初めのカランコバル郡でも見られたので、このシステムは20世紀に華人商人が新たにカランコバル郡に進出するに従い、そこへも拡大していったと考えられる。

III. 煙草と地域の農民経済

これまで述べてきたように煙草栽培はこの地域の農民経済にとり極めて重要で、1924年の調査報告が「現プルボリンゴ県、つまり1919年に併合された旧バンジャルヌガラ県を含めた地域の経済状況は、それでこの県が豊かになった4郡のうちの2つ、すなわちバトゥールとカランコバルが豊かさの多くの特徴を示している。とりわけ、原住民土地占有者が原住民市場向けであれヨーロッパ人企業家への販売のためであれ植え付けた広大な煙草の栽培と、水準がかなり高い牛と馬の飼育が、この地区を住民が比較的豊かな状態に至っている地域にしているのである。」[Enkele gedeelten Banjoemas 1924, deel II, 34]と述べるように、豊かさの原因だった。本章ではこの点を、いくつかの点から考察してみたい。

1, 煙草農民の収支バランス

煙草栽培の収支バランスについては様々な議論があるが、バウ当たり生産費についての諸説をその額の低い順に並べると、(a)ほとんどかからない[Fruin 1923b:366]、(b) (a)よりやや多い[Fruin 1923b:367]、(c) 74 ギルダー[Fruin 1923a:319~321]、(d) 100 ギルダー程度[M.W.H.Banjoemas:371]、(e) 100~140 ギルダー[Fruin 1923b:368~370]、(f) 137 ギルダー[Fruin 1923a:293]、(g) 140~200 ギルダー[Fruin 1923a:293]、(h) 200 ギルダー[Tabak 1925:156~157]、(i) 300 ギルダー程度(1922年に関する原住民農業指導員エリアサルの説)[Fruin 1923a:293]となる。

こうした差が生じる原因は生産費の定義が明確でないことにもよるが、最大の理由は如何なる他人労働をどれだけ利用するかという点にある。最少の(a)は自家生産の食糧を十分に持っている「土地所有者が栽培を独りか家族労働で行い、自家労働で飼料を供給する家畜から肥料を得る場合」の生産費で、南バトゥールの栽培面積1バウ未満の場合が該当する。(c)は他人労働を使うがサンバタンで、肥料は保有する馬から得られる場合である。

これに対して(e)は大土地占有者が全作業に賃労働者を雇用した時の経費で、日当は30~50セント(食事なし)である。これを基準に各作業のバウ当たり経費を計算すると、土地耕起は150日が必要で1日6~7時間労働とすると総労働時間は900~1,000時間、賃金総額は50ギルダー余りとなる。土を細かく砕く作業と耕地を清潔に保つ作業にも、ほぼ同じ時間と経費が必要である。苗床の造営・維持は家族労働かラヤットの使用が多く確定し難いが、肥料と資材を含め10~20ギルダーとなる。移植、先端切り、小枝と芽の除去などには数百時間、10~20ギルダーかかる。こうして収穫前の必要労働時間は2,200時間以上、総生産費は100~140ギルダーとなり、肥料を全部購入すれば30~60ギルダーの追加が必要である。ただバトゥールではラキリ法で本畑を造るから、以上から労働時間で700~800時間、賃金では30~40ギルダーを引く。これに収穫・加工の経費1ピコル当たり10~20ギルダーが加わる。また(h)も全作業を賃労働で行うとして計算されている。内訳は土地耕作15ギルダー、植穴空けと移植5ギルダー、肥料、肥料輸送と施肥54ギルダー、除草42ギルダー、作物維持管理26.5ギルダー、収穫賃金7.5ギルダー、加工費32~40ギルダー、これに苗床経費を加えると合計200ギルダーになる。

他方、収入は次のようである。1900年代初め((d)の場合に相当)、煙草のバウ当たり収量はリゲン50~200枚で、金額換算すると40~160ギルダーになる[M.W.I.Banjoemas:342]。1920年代初めには、バトゥール副郡各デサの良質地の収量はリゲン100枚(リゲン1枚は0.04~0.05ピコル)を越えず、価格は1枚2ギルダーだからバウ当たり粗収入は200ギルダーを越えない。ワナヤサ副郡の高地デサにある1級地の収量はワサとシベベクで130枚、粗収入は260ギルダー、クシンパル・ウェタンでは150~200枚、300~400ギルダー、バトゥール郡とカラコバル郡の低地デサでは40~70枚で、1枚当たり価格が1~1.25ギルダーなので粗収入は40~87.5ギルダーとなる[Fruin 1923a:293~294]。

このように1900年代初めの粗収入は40~160ギルダー、生産費は100ギルダー程度、1920年代初めの粗収入は高地デサで200~400ギルダー、低地デサで40~87.5ギルダー、生産費は0~300ギルダーということになる。これらの収支バランスをどう考えればいいのか。

先ず前者の時期に関してはM.W.H.[Banjoemas:371]に「華人商人に対して負債がない場合」には生産費よりずっと多くを稼ぐことができるが、「生産物を決められた値段で華人に供

出せねばならない場合」には手許に残るのは僅かで、純益はバウ当たり 30~40 ギルダ―だとあり、華人商人との関係如何が収入の多寡に大きく影響していたことが示唆される。そして「バンジャルヌガラ県の煙草栽培者は、その大半が華人大商人に対して常に負債を抱えているといわれる」[M.W.H.Banjoemas:375]とあり、「生産物を決められた値段で華人に供出」するケースが多かったようだ。しかし、それでも上述のような純益が出たとすれば、煙草は非常に有利な作物だったといえよう。

後者の時期について、Fruin[1923b:371]は「純収益がどれほどかは、賃労働をどれだけ使うかにかかって」おり、全作業を賃労働で行い肥料を全て購入する場合、バトゥールではバウ当たり 5 ピコル(リゲン 100~125 枚に相当)以上の収穫がなければ純益は出ないと指摘する。これに従うと 100 枚未満しか穫れないバトゥール副郡の良質地は赤字になるが、Fruin [1923a:319~321]は生産費を全て現金換算する想定自体が非現実的で、カラコバルと南バトゥールの全域ではなおサンバタンが優勢であり、バトゥール副郡でも富裕でない栽培者の大半がこれを利用しているという。つまり、ここでは先に述べた生産費(c)のケースが最も一般的だとされるのである。Fruin はさらに続けて、これらの煙草栽培者は自らとサンバタン参加者が食べるのに十分な量のトウモロコシを収穫でき若干の野菜も持っているため、サンバタンの際に出す食事のために買い足すのは少しの魚か肉だけで、必要な現金支出はごく僅かだという。この(c)はクシンパル・ウェタンの事例だが、このデサでの支出は 1 人当たり 1 日 10 セント程度、収穫や肥料の運搬などのよりきつい仕事の場合でも 20 セント程度にすぎない。土地耕作から乾燥に至る全作業がサンバタンで行われ、肥料は自分の馬から得られるので費用は草刈り報酬 10 ギルダ―だけだと仮定すると、ここではバウ当たり耕作費は 48 ギルダ―程度、他に資材の調達に 11 ギルダ―、加工費はリゲン 1 枚当たり 30 セントとなる。収穫がリゲン 50 枚(最も悪い土地でもこの程度の生産は可能)、価格が 1 枚 2 ギルダ―としても、なおバウ当たり 25 ギルダ―程度が手元に残る。

また収量がリゲン 50 枚、価格が 1 枚 1.25 ギルダ―と安い南バトゥールの低地でも、乾燥用燃料の木材は十分あるし、土地耕作はバウ当たり 5 ギルダ―のボロンガンで行いサンバタンの食事に肉は出さないなど、経費を低く抑えるので十分に利益が残る。最も多くを賃労働に頼る大土地占有者も一般にかなり大量の自家製家畜肥料を使い、ラヤットの労働力を利用するので、全て現金で払うことはあり得ないという[Fruin 1923b:371~372]。

以上要するに、どのケースでも煙草栽培それ自体が極めて有利な栽培だったといえる。加えて、この栽培を行う農民は、山間デサの耕地平均占有面積が約 2 バウであることに示されるように一般に十分な広さの畑地を占有し、しかもそれはバトゥール郡では極めて肥沃だった[M.W.E.Banjoemas:22]。これらのことが、煙草栽培をこの地域の経済活動の中心的地位に押し上げたのだった。

2. 食糧生産との関係

では、このような広範な煙草栽培は、この地域の食糧事情に悪影響を及ぼさなかったのだろうか。表 4.4 からカラコバル、バトゥール両郡とトゥマングン県の煙草郡を比較して先ず明らかなのは、前者では水稻が極端に少なくトウモロコシの比率が高いことである。またバンジャルヌガラ県の水稻のバウ当たり収量(1916~1920 年平均)は 19.84 ピコルで、理事州全体の 26.63 ピコル、ジャワ・マドゥラ平均 29.94 ピコルと比べ著しく低い[Landbouwatlas 1926 II :staat III,44~75]。1 人当たり収量(1919~20 年平均)は 1.32 ピコルで、移

入を行わねば米が絶対的に不足する数値である⁽¹⁷⁾。しかし、この県では理事州の畑作煙草収穫面積が急増した 1900 年代初めにも米移入はなかった。1904 年 12 月 1 日のアンデル同県副理事のバニユマス理事宛書簡 No.4035/18 は、S.D.S.線の開通で米移入は激増した(1899 年の 9 トンから 1900 年 120 トン、1901 年 1,132 トン、1902 年 470 トン)が、隣接するウォノソボ県への通過輸送で、この県自体の移入ではないと述べている [M.W.H.Banjoemas:Bijlage 3]。この時期、人々はトウモロコシを主食にしており、稲は収穫の多くの部分が米に搗かれてパッサールで売られていた [M.W.L. Banjoemas:198, 203]。

(17) Landbouwatlas [1926:76]によれば、1 人当たりの稲収量が 0~2.25 ピコルの場合は移輸入が必要で、4 ピコルを越えると移輸出ができ、その中間は自給が可能であるという。

また Landbouwatlas [1926:staat IX]も、バトゥール郡の水田地帯では主食に米も食べるが、それ以外の所では年中トウモロコシで米を食べるのは祝祭時だけである、カラコバル郡では稲の収穫直後には自家米とトウモロコシを混ぜたもの、端境期にはトウモロコシ、キャッサバを食べるが、シンゴメルト郡と比べるとトウモロコシがずっと多く、米だけということはずないという。さらに S.D.S.輸送代理人の報告も、バトゥール郡では米作が行われるのは低地にある水田 2,179 バウのみだが、住民はほとんどトウモロコシだけで生活しているから米はこの収穫で十分で移入はない、と述べている [Rapport Batoer 1917]。

こうして見るとこの地域の農民は商品作物としての煙草と、主食として自給するトウモロコシを矛盾なく栽培する方法として、先に述べた輪作法を選んだのである。加えてトウモロコシをこのように栽培すると、労力と栽培費用の双方を節約できた。Fruin [1923a:320]によると、土壌が煙草栽培により緩く清潔に保たれるのでトウモロコシを煙草の間に播く時には耕起はほとんど必要なく、除草は煙草の収穫終了時に限定されるので、収穫にサンバタンを使う以外、全作業を家族労働で行うことができ、費用はほとんどかからなかった。

3. 家畜飼育との有機的結合

次に「かなり高い水準にある牛と馬の飼育」の意義を、表 4-5 から検討しておこう。数字を太字で示した煙草栽培の中心地域では他地域と比べ牛は決して多くないが、馬の頭数は突出している。馬の飼育が煙草栽培と如何によく結びついてきたかを示す数字である。

それでは家畜自体はどのようにして富を生んだのだろうか。バトゥール郡のデサ・カラントゥンガーでは痩せ地を三部分に分け、「煙草—トウモロコシ—休閑」などの形で輪作する。煙草の苗床は 9 月末に造成され、移植は 12~1 月である。煙草の後のトウモロコシは 6 月から収穫し、その後は 12 月頃まで休閑する。肥料は雌牛 42 頭と 10 頭前後いる馬から得る。これらは煙草収穫の余剰収入を使ってスマラン理事州ウェレリで 9~11 月に非常に痩せた状態で 15~30 ギルダーで購入し 5 月頃まで肥料を取るのに利用した後、5~7 月にバンジャルヌガラで売るが、肥育の結果販売価格は 30~60 ギルダーになり 15~30 ギルダーの利益が出る。だから家畜を所有していた農民は、しばらくの間、この金で煙草加工費と生活費を賄うことができる [Hak 1927:79~80]。

この例からわかるように、家畜は肥料を提供すると同時に育ち、購入時よりも付加価値が高まった状態で販売できる。飼料用の草を刈る若者に払う 10 ギルダーを差し引いても、なお手元に現金が残ることになる。

4. 華人の取引支配と農民経済

最後に、カランコバルとバトゥールに居住する華人が煙草取引を支配していたことが、農民経済にどのような意味を持ったかを考えておきたい。

M.W.E. [Banjoemas:168]はそのメリットとして、①住民が大胆になりより多くの主張をしようとする、②施肥、土地耕作の改善、適切な時期における収穫、加工方法の改善を通して煙草栽培が改良され、より高値を付けることができる、③華人がいなかったら煙草その他の産物の大半が売れ残った、④住民は必要な衣服を容易に入手可能になった、という点を挙げる。逆にデメリットとして、華人は厄介な条件での前貸を通じて煙草をできるだけ安く確保しようとするので生産者は利益の一部を失うということを述べている。

Fruin [1923a:298 ; 1923b:377]も、華人の買上げは煙草価格を上昇させ、以前には幾度か行政が華人を排除して現地人の煙草商業参入を促したが、そのたびに価格が暴落し、結局デサへの立入りを認めざるを得なかった、バトゥールの住民は華人が煙草価格に好影響を及ぼしたことを記憶しており彼らに対し友好的だが、華人の前貸とその返済条件が緩やかなこと、華人が特別な機会にちょっとした贈り物をするのもその要因だと述べている。

さらに次の点も指摘される。煙草栽培農民は耕作費、加工費や除草費用に現金が必要で、作業を家族労働やサンバタンで行う場合でも、煙草栽培に特化し現金収入が年1回しかない時には収入を年間を通じ平準化する必要があるが、これに応えるのが前貸である。人々は全額を一度に受け取るのではなく、現金が必要になると華人の家へ借りに行く。バトゥール、カランコバルの小規模栽培者の借入は15~50ギルダーだが、1回の受取額は2.50ギルダー、5ギルダー、10ギルダーである。大規模栽培者の場合は合計数百ギルダー、時に数千ギルダーに達するが、1回の受取額は10ギルダー、50ギルダー、100ギルダーである。栽培者が華人の融資を受けるもう1つの理由は、質が劣るものも含め全収穫を前貸提供者に売る習慣があるので、売りにくい最下層葉も含めた販売が容易になることにある。

このように、煙草取引に華人が介在した結果、(a)栽培改良が進み高値が付くようになり、(b)販売が容易になった、という点では両者とも一致するが、(c)前貸条件が厳しいか否か、については意見が対立している。そこで、以下では(c)について検討してみたい。

前者の史料が問題にするのは利子が高く、農民は煙草を市価の2/3か4/5で華人商人に提供せざるを得ない[M.W.L.Banjoemas:213 ; M.W.vol.VIa:77]という点である。この点はFruinでもあまり変わらない。利率は貸し手の煙草に対する必要度と借り手の前貸に対する必要度にかかっており、バトゥールの優良な栽培者の場合は20%(rolasi)が一般的である。30%も多いが、カランコバル副郡とワナヤサ副郡では一般に50%、バトゥール副郡のデサ・ブカシランではこれに加えて煙草引渡し価格が10%引きになる。また同じ副郡のデサ・シンバルでは、ある大土地占有者は50ギルダーを無利子で一度に借りたが、市価の17%引きで引き渡した。同じデサの別の栽培者は無利子融資の代わりに、市価50ギルダーの煙草を45ギルダーで引き渡した。デサ・クパキサンやカラントウンガーでも前貸は無利子だったが、引渡し価格は市価の20~25%安、または2/3だった[Fruin 1923a:297-298 ; 1923b:378]。

しかしFruin [1923a:298 ; 1923b:378]は、実質的な返済条件が緩やかだったことも指摘している。華人は借り手が優良な煙草栽培者なら、返済猶予を簡単に認めるのである。例えばカランコバルの一華人商人は、農民が煙草の収入で貸付額25ギルダーのうち20ギルダーしか返済できなかった場合でも、この債務の完済前に新たな貸付を行った。また融資期間

は5～8ヶ月を越えないのがふつうだが、延長が必要な場合でも利子が増えることはなかった。債務が継続すれば華人商人にとっては良質な煙草の確保が容易になるからだった。

ただこのことは裏を返せば、Fruin[1923a:298]が指摘するように華人は融資相手を選別し、小規模栽培者には多く貸さないことを意味するが、バンジャルヌガラ県では煙草栽培農民に対する公的融資が早くから盛んで、華人が貸し渋った場合でも埋合わせが可能だったと思われる。この県では1901年設立のバンジャルヌガラ県銀行が、「土地耕作のため40,000ギルダーが住民にもたらされ、加工期(7月または8月)にはさらにそのために20,000ギルダーか30,000ギルダーが供給されることになっている。」[M.W.L.Banjoemas:213]とあるように、バトゥールの煙草栽培農民に貸付を行ってきた。そして特に戦時利益税の負担が原因で華人の前貸しが減った1919/20年、1920/21年、1921/22年の煙草シーズンには、バトゥール支店を通じてバトゥール副郡でそれぞれ42,000ギルダー、55,000ギルダー、72,000ギルダーを主に煙草栽培のために貸し付けた。1人当たり年間貸付額は2ギルダー、2.5ギルダー、3.5ギルダーとなり、平均貸付額は50～60ギルダーだった。この他、バトゥール副郡では16デサ全部でデサ銀行も煙草栽培者に少額貸付を実施しており、1923年の融資合計は21,400ギルダーに達した。デサ銀行の貸付限度額は1人50ギルダーだが、2月か3月に一括貸付され、煙草収穫後ほとんどが一括返済された[Fruin 1923a:299～300]。

こうしてみると、この地域でも植村[2005]で論じたケドゥーの事例と同様に、流通を支配した華人商人が煙草栽培農民に対して圧倒的に強い立場にあったというイメージを描くことはできないように思われる⁽¹⁸⁾。

(18) Fruin[1923a:298]によれば、農民が融資を受けた華人に収穫したことを通知せず最良部分を第三者に売ってしまうことが増加しており、束縛手段としての前貸制度は崩壊しつつあった。

おわりに

小論ではパニユマス理事州北部山間地域で展開された内地市場向け煙草の栽培とその取引の特徴を検討し、この産業が地域経済の豊かさの源泉であったメカニズムを労働力のあり方、食糧生産との関係、家畜飼育との結びつき、華人商人の融資条件という4つの側面から考察してきた。論じ尽くせなかった点が多いが、とりわけ煙草農民の経営の大小にかかわる問題、煙草価格の変動と栽培との関連については、十分な史料が得られず触れることができなかった。これらは今後の課題にしたい。

第5章 植民地後期トゥバンにおける住民煙草産業

はじめに

植民地後期の東ジャワ北岸西部に位置したトゥバン県は1872～1928年はレンバン理事州、29～42年にはボジョネゴロ理事州に属したが、同じ理事州に属するボジョネゴロ県とともにジャワにおける原料煙草栽培の中心地の1つとして知られていた⁽¹⁾。そのことは表5-1、表5-2に示される、この県の収穫面積が耕地面積に占める比率の高さから窺える。表5-2からさらに明らかなことは、この県では乾季作が栽培の中心を占めること、県内でも地域差が大きく、しかもそれがかなり変化していることである。また、この県は古くから内地

市場向け葉巻の生産地としても知られていた。

(1) ジャワ・マドゥラ各理事州の煙草収穫面積については、植村[2005A]の表1～3参照。

小論では、これらの点を踏まえて、植民地後期にこの県の住民煙草産業がどのように展開したかを考えてみたい。

I. トゥバン住民煙草産業小史

1. 輸出向け栽培の展開：強制裁培制度の推移

この県を含むレンバン地方では、既に19世紀初には内地市場向け煙草の栽培がかなり広範に行われていたようだが、残念ながら筆者は現在のところ、トゥバン県におけるその実情を述べるに足るだけの史料を持ち合わせてはいない。

ただ、ここでも1830年代に入るとヨーロッパ市場向け栽培が導入される。それは当初、強制裁培制度という形をとった。周知のように1830年からオランダ植民地政庁はジャワに強制裁培制度を導入したが、煙草についても試みられた。この点は既に植村[2005B]で若干触れたのでここで詳述しないが、トゥバンでも「1833年6月20日付け命令(besluit)第2号によって、レンバン理事州のトゥバン県、ボジョネゴロ県において煙草栽培の試行を進めるために3,617.32ギルダーが認められた。」[Deventer 1866:396]とあるように、33年から強制裁培制度が試行された。

この制度による栽培はジャワ・マドゥラ全体では1846年にピークの4,111バウを記録、翌47年にも3,970バウとほぼ水準を維持した。しかし、様々な問題を抱えていた結果、十分な成果を上げることができず、48年から栽培縮小が始まり、レンバン理事州における1865年収穫を最後に廃止された[植村2005B]。

2. 「自由栽培」の発展

ジャワ・マドゥラにおいて強制裁培に代わって発展したのが、ヨーロッパ人経営煙草企業が農民と契約を結んで輸出向け煙草を栽培させる、いわゆる「自由栽培」だった。

トゥバンでも、現地に立地する買い上げ企業がこの方式で営業していたようだ。この県だけに関する初期のデータは得られなかったが、同県を含むレンバン理事州では管見の限り、遅くとも1852年には「3人の企業家がデサ首長・デサ住民と煙草栽培のための自由契約を締結し、100バウの栽培を行って」いた[K.V.1852:110]。50年代を通じてこうした民間企業による煙草の「自由栽培」は大きく発展し、1862年にはこの理事州のこのような企業は25軒に増え、生産される原料煙草は合計32,928ピコルに及んだ[K.V.1862:181]。表5-3はトゥバン県で操業した企業の1859-63年の状況を一覧したものであるが、この時期にはトゥバン県でも60年代に入って企業が新設されるなど、その発展が窺える⁽²⁾。

(2) なお、表示のように1863年は栽培面積に比べて収穫面積が極端に少ないが、理事州全体でもこの年には民間栽培5,289バウのうち、3,577バウ(67.6%)が凶作となった(前年には栽培1477バウの約1/4が凶作)。これは、天候不順と維持管理の悪さのためだと報告される[K.V.1863, bijl.Y]。

この時期の農園による買い上げ方法については、K.V.[1861:bijl.AA]に大要次のような記事が見られる。「農園主達は住民諸個人と、煙草の栽培・供出を口頭で契約し、前貸し金を供与する。Wiedang農園所有者は、書面での契約を結んでいるこの地方唯一の煙草農園主である。前貸しなしの栽培はまれである。栽培者は煙草を農園主の小屋で供出する。民

間の手で栽培される煙草は多くが凶作になるのがふつうであり、それはしばしば必要な世話が欠如していることが原因である。クーリーは日当 20 セントで確保でき、いつも希望通りに容易なわけではないが、ふつうは煙草の加工のため十分な数が得られる。」

すなわち①個人契約であり、②契約は口頭により、契約書は一般に作られず、③前貸し供与が一般的である、そして④凶作がかなり多かったが、⑤労働者確保は比較的容易だった、という特徴をもっていた⁽³⁾。

(3)ただし、翌年の報告(K.V.1862:bijl.Z)によれば、トゥバン県ではプロラ県とともに、一定の時期にはボジョネゴロ、レンバン両県ほどクーリー確保は容易ではないとされる。

発展は 60 年代にも継続したようで、1867 年には理事州全体の企業数は 27 を数え、栽培面積は 4,775 バウで 23,888 ピコル = 1,457,168kg を生産したが、このうちトゥバン県は 2,828 バウ (59.2%) を占め、7,528 ピコル (31.5%) = 459,208kg を生産した。しかし翌 68 年には煙草の市場価格が低下した結果、3 企業が操業を停止して企業数は 24 に減り、栽培面積も 3,552 バウ、生産量も 17,202 ピコル = 1,049,322kg に低下した。トゥバンの栽培面積は 1,354 バウ (38.1%) だった [K.V.1869:115]。69 年も状況は引き続いて悪く、理事州で操業する企業は 13 にまで減少した。ただ栽培面積は若干増えて 4,301 バウとなり、トゥバン県では前年を大きく上回る 3,150 バウ (73.2%) を記録した [K.V.1870:113~114]。そして 71 年には理事州全体で 10 企業、12,360 ピコル = 753,960kg とさらに低迷したが、72 年になると 13 企業へと回復し、概して良好だった気候条件も手伝って生産も 23,086 ピコル = 1,408,246kg にまで増えた [K.V.1873:203~204]。

1875 年のトゥバン県で操業する企業名と生産量 (kg) は、表 5-4 に掲げたとおりである。ここから明らかなように 75~77 年の生産量は 60 年代と比べて増加しているが、これはレンバン理事州では「ヨーロッパにおける煙草価格上昇の結果、本年には若干の既にいったん放棄された煙草企業が再び操業を開始した。」 [K.V.1872:149] とあるように、70 年代初めのヨーロッパ市場における価格上昇が理由だと考えられる。

3. 輸出向け煙草生産の後退と内地市場向け生産への特化

しかし、「レンバンでは……ヨーロッパ市場におけるこの作物の安値は、企業の発展に不利な影響を与え、ほとんどが赤字操業だったといわれる。」 [K.V.1878:192] とあるように、77 年には一転してその価格は低下した。これが 78 年からの急減の原因であり、82 年以降、この県で住民と契約して栽培を行わせる企業はなくなってしまった⁽⁴⁾。

(4)レンバン理事州ではこの他、1875 年にはレンバン県に 1 企業、ボジョネゴロ県に 5 企業、プロラ県に 1 企業があったが、これらは徐々に閉鎖されてしまい、83 年にはどの県でも完全になくなってしまった。

そして、これ以降、この県で生産される煙草はほとんどが内地市場に向けられた。例えば 1890 年の状況については、「レンバンではトゥバンとボジョネゴロ県が栽培の中心である。そこで得られた作物は完全に原住民市場に向けられる。スラバヤへ送られるものの他に、一部はマドゥラとバンジャルマシンにも輸出される」 [K.V.1891:204] と述べられ、また Blink [1912:319~320] は 1900 年代初めのデータに依拠して、ジャワの煙草産地のなかでも内地市場志向が特に強い地域としてトゥバンを挙げている。ちなみに M.W.H. [Rembang 372] によれば、同県のケルフ⁽⁵⁾移出量は 1895 年 237.235 トン、1903 年 457.357 トンだった。

(5)周知のように、ジャワで生産される原料煙草には、主としてヨーロッパへ輸出される葉のままのブラッド (blad) とクロソック (krossok)、主として内地市場向けの刻み煙草がある。後者はジャワ語でラジャンガン (radjangan)、オランダ語に由来する名前のケルフ (kerf) と呼ばれるが、以下の記述では基本的に依拠したそれぞれの文献・史料が使用している名称を使用する。

ただ 1910 年代になると、ヨーロッパ市場向け輸出は幾分かは回復したようだ。実際、この県からは表 5-5 に示されるように、10 年代前半にはかなりのクロソックが輸出されていた。Jasper [1915:341] によれば、「クロソック加工は最近ようやく行われるようになったもので、以前にはそれほど知られてはいなかった。そして今や住民がクロソック販売で多くの稼ぎを上げている地方もあるが、農民は以前には最下層葉 (kepèllan) を使い物にならないとして捨て、真ん中葉 (tengahan) と最上層葉 (poetjoekkan) だけを刻み煙草作りに使っていた。」という。そして Djenoe 郡と Rembes 郡の煙草は一般に、ヨーロッパ市場向けクロソックに加工されるともいわれる [Jasper 1915:331]。要するに、この 1915 年から見てしばらく前の時期になって、トゥバンの煙草栽培農民は初めてクロソック加工を始めたということになる。この背景には、植村 [2005B] でも指摘したように、1900 年代前半に底を打ったヨーロッパ市場価格が、それ以降再び上昇に転じたことがあったと思われる⁽⁶⁾。

(6)インドネシア産煙草のアムステルダム市場価格の推移は、同論文の表 2 を参照。

もっとも、この県では表示のようにクロソック輸出は 1914 年からは激減する。そして 1923 年の調査によると、この時期のレンバン理事州ではクロソック価格が高いために「ほとんどの栽培でケルフにするのは最上葉 5~6 枚だけであり、残る約 75% はクロソック」に加工されていた [Tabak 1925:138]⁽⁷⁾ が、トゥバン県ではそうでなかった。ここではボジョネゴロ県のように、苗の移植の際に良質なクロソックを生産するために行われる密植を実施していなかった。密植はケルフ加工にとっては害が大きかったからである。この県では「可能な限り、葉が原住民ケルフへ加工されるのに適していることが望まれ、クロソックへの加工を目的としているのではない」 [Tabak 1925:139~140] のだった。結局、この県の原料煙草は最終的にはほぼ内地市場向けに特化していったのである。

(7)この調査によれば、レンバンでは原料煙草の価格が通常の場合には、トゥバン県の Rengel 郡 (特に Prambon 副郡)、Djenoe 郡、Bangilan 郡、Senori 郡 (Singgahan 副郡)、ボジョネゴロ県の Bodjonegoro 郡、Malo 郡ではケルフ加工が多くクロソックは少ないが、ボジョネゴロ県 Baoereno 郡、Soemberredjo 郡、Kapas 郡、Tambakredjo 郡、Pandanga 郡、プロラ県 Djepon 郡、Randoeblaton 郡では逆にクロソックが多く、ケルフは少なかったという [Tabak 1925:138]。

それでは、この地域では煙草はどのように栽培されたのであろうか。以下、章を改めて述べることにしよう。

II. 原料煙草の生産

1. 栽培用地と栽培時期

まず、この県で煙草がいつ、どのような耕地に栽培されたかを検討しよう。残念ながらそれをこの県だけに関して直接示してくれる史料は手に入らなかったが、以下の表 5-6、表 5-7 から考えよう。

表 5-6 から窺えるのは、理事州全体では先に植村 [2005A] で検討したケドゥー理事州と

比べ、水田裏作の比率が高いことである。また、畑地栽培でもケドゥーの場合と異なり、裏作の方が多い。次に表 5-7 を見ると、両県で栽培地に差がある。すなわち、ボジョネゴロでは水田作が卓越するのに対して、トゥバンでは畑地栽培が極めて多い⁹⁾。したがって、表 5-6 の畑地裏作の多さには、トゥバンにおけるそれが大きく貢献していることが推定される。

(8)なお、表 5-7 では 1900 年、1901 年の収穫面積、特に水田収穫面積が大きく減少しているが、その原因は気象条件の悪さにあった。Walbeehm[1902:1061]は「1900 年、1901 年の気象条件はまさに異常に悪かった。Djaträgá の監督官が駐在する Wotsogá では、1900 年の 5 月、6 月、そして 7 月前半にまでなお雨が続き(6 月雨量は 45mm)、水田が湿気を帯びていたために煙草苗の移植が不可能になった。1901 年も同様で、Wotsogá では 6 月に 109mm を越える雨が降った。7 月の終わりにかけて土地は徐々に十分に乾いていったが、この時には苗床の苗は移植するには成長しすぎている。ここでは当然、雨が土壌をそれほど湿潤にはしない栽培畑地の数字に対しては、この天候不順は先の表からも明らかなように、あまり影響を与えていない。総面積に対して以外に、かくして気象条件は栽培地の性質に影響しているのである。東モンスーン季初めが乾燥しておれば、人々はより多く水田に植え、その時雨が多く降れば、畑地へより沢山植える。」と述べている。

次に県内各郡毎の作付時期、収穫時期を表 5-8、表 5-9 から見よう。これらから明らかなことは、まず一般に作付時期は乾季、とりわけそれが本格化する 7、8 月に集中していることである。そしてこの結果、収穫は雨季の前半に集中する。ただ、郡毎に細かく検討すると Djatirogo 郡、そして特に Singgahan 郡では雨季にも比較的多くの作付が行われ、両郡とも乾季作付の本格化する時期が Rengel 郡などと比べると遅いことが分かる。また Djenoe 郡の作付は、乾季前半の 3 ヶ月に 70%が集中している。この郡は収穫の時期も他とは異なり、80%近くが乾季後半に行われる。この違いが生じる原因については、直ぐ後で述べる。

2. 栽培方法

次に、Jasper[1915:332-335]により、栽培の手順を述べておこう。

作業は苗床造成から始まるが、畑地では 3 月か 4 月に開始され、水田の場合はやや遅れて 5 月か 6 月になる。床の高さは畑地や屋敷地では 1 フィート、水田では 1.5 フィート程度である。造成された床は表面を乾いた葉で覆い、後にそれを燃やしてできた灰を含む床に灌水すると、播種の準備が完了する。

農民は種子を自分の栽培から採取するが、きちんとした選定はしない。種子は時には一昼夜水に浸してから播かれ、手のひらで土中に押し込まれる。この際、直射日光から保護するため、苗床は薄い稲藁の層または乾燥した椰子の葉で覆われる。播種後 6～8 日で発芽すると、この日覆いを地面から高く離して苗の生長を促す。灌水は毎日、除草は時々行われる。

播種後 40-60 日で、苗は本畑へ移植できる大きさに成長する。よく手入れされた長さ 5 m、幅 2 フィートの苗床からは、1 バウの栽培にちょうど十分な 5,000-6,000 本の苗が採れる⁹⁾。苗は苗床の土が水遣りで十分軟らかく湿気を帯びるようになった後、慎重に引き抜かれ、籠に入れるかチーク樹の葉でくるんで本畑へ運ばれる。

本畑の耕起開始は早く、苗の発芽 5~10 日後である。犁を使う耕起は 4 回行われるのが一般的で、第 1 回目はふつう約 8 日間続き、*neras* という (Djenoe では *ngoetoh*)。2 回目、3 回目、4 回目はそれぞれ 8 日間ほど続き *noegel* と呼ばれ、それぞれは前の回に引かれた溝と直交する方向で犁が入れられるので、大きな土の塊を砕くことができる。最後に植穴 (*kowak*) を作るが、これも最後の犁溝の走りと同角方向に行われるので、最終的に植穴は溝の交差部に 3~4 フィート間隔で作られ、鍬で容易に深くすることができる。施肥は行われない。

(9) 苗が販売される場合もあり、その場合には 1,000 本当たり 0.50~1.00 ギルダであった。移植の際、農民は植穴に予め十分に水やりするために、自分の前を *lodong* (水を詰めた竹筒)⁽¹⁰⁾ か *timba* (ロンタル椰子^(補註)の葉で作ったバケツ) を持った水やり人を歩かせる。移植された苗は、その日のうちにチークの葉で覆うか椰子の葉で囲って、陰を作って保護する。これは植えたばかりの苗にはなお 10~15 日ほどは欠かせない。土地がやや多孔性の場合には、植え穴は煙草の苗を植えた後でもう一度水を遣る。Djenoe では主に赤土の畑地で栽培が行われるが、水やりはほとんどせず、苗の移植時でさえ行わない。そこでは植穴を苗を植える前の一定期間、枯葉で覆って冷涼に保つだけである。しばしば、移植のために、前日の雨で土がなお軟らかい日を選ばれる。

(10) 水遣り人は長い竹筒を左手で立てて支え、筒の下部 (*benedendeel* ママ：上部の間違いか?) は左肩にもたせかける。筒の底は左手掌で支えられ、同時に小さな注ぎ口は指 1 本をあてる。水遣り人は右手には棒に付けられた竹籠 (*bamboevlechtwerk*) を持っている。高い位置にある竹筒からの細く力強い水流を、彼は先ず竹籠に当てるが、それは水を遣りたい土地部分と近接している。これにより、規則的で緩やかな灌水ができる。(補註) ロンタル椰子

水やりは移植後 1 ヶ月間続けられるが、毎日の場合も、2~3 日に一度の場合もある。この時期には、竹棒 (*arit*) を使って第 1 回のダンギル (*dangir* : 植穴の周りの土を軟らかく保つ作業) が行われる。

移植 10~12 日後に最初の上葉の伸びが見られ、約 2 ヶ月後に最初の収穫が行われ、最下層の葉 3~4 枚が摘まれる (この収穫を *ngèpèlli* という)。この葉からは最も質の悪いクロソックができる。Prambonwetan ではこの *ngèpèlli* の前にさらに *nglepèkki*、すなわち最下層の、土に垂れ下がっている葉 2~3 枚の収穫を行うが、これも最も安い種類のクロソックに使用される。Djatiraga では、これを *ngèpèlli gowok* と呼んで、最下層葉の直ぐ上の葉の収穫を意味する *ngèpèlli* と区別する。

さらに約 1 ヶ月経って花が咲き始めた頃に先端摘みが行われるが⁽¹¹⁾、種を採る場合にはこれは行わない。その直ぐ後に、伸び出したばかりの脇芽を取り去る。

(11) 煙草の種を採る場合は、花を咲かせなければならないのでこの作業は行われない。先端摘みの 15 日後にもう一度摘み取り作業が行われるが、今回は真ん中の葉 (*tengahan* : それぞれに 4~5 枚付く) の収穫で、これからは 2 級品の刻み煙草が作られるが、良質のクロソック原料に向けられることもある。

この収穫からそれほど経たずして、新たに伸びた先端部が切り取られる。移植後約 4~4.5 ヶ月経った時、最後の収穫 (*motjok*、また *rampas birén*、*oeroettan* ともいう) が最上層葉を対象に行われる。この葉は一般に黄色くなりシミが出るように熟成させ、最上質ラジャン

ガン原料に当てる。

これで収穫は終わりであるが、Djatiraga ではこの後、全ての茎を同じ高さに切り揃えて成長させ、再び最下層葉、真ん中葉、最上層葉を煙草として収穫する。この煙草は soegléngan と呼ばれ、クロソック加工用や農民の自家消費用に向けられる。Djenoe では2回収穫されるだけで、先ず9枚の最下層葉 (ngépèlli)、その後で残りの葉 (ingon) が摘まれる。

以上のように、煙草栽培は綿密な栽培管理が行われる、労働集約的農業である。こうした特徴は早くから見られたようで、既に 1890 年代初には「トゥバン県、ボジョネゴロ県では、原住民はこの栽培に極めて熱心である。彼らが自分の栽培に必要な灌漑用水を得る目的だけのために井戸を掘ろうとすることも珍しくはない。概して煙草栽培では、施肥に大きな注意が払われる。」[K.V.1892:198] と、灌漑や施肥に十分な注意が払われている。

また、水田作の場合、畑作に比べておよそ2ヶ月ほど各作業が後にずれることになるから、先に表 5-7 で見た作付が相対的に遅い Rembes、Djatirogo、Singgahan などの郡は水田作が多いと考えられる。逆に Djenoe 郡のように作付・収穫がいずれも他郡より早いのは、畑作が中心だったからだった。そして実際、表 5-10 から各郡の耕地状況をみると前者のグループは水田比率が高いのに対して、Djenoe 郡では乾地が卓越している。したがって、作付の時期は、各郡の耕地状況に対応したものであったといえる。

また以上の調査には輪作方式は触れられていないが、水田の苗床造りが遅くなるのは水稲収穫を待って本畑準備を開始するからだと考えられよう⁽¹²⁾。

(12) なお、良質な煙草の生産は、県内でも特定の地域に集中していたようだ。Bleeker [1850-I:45]によると、1840年代のレンバン理事州で煙草が特によく生育するのはソロ河沿いの地域であり、Waeij [1875:166~167]はトゥバン県内では Rengel だけが小面積で質のよい煙草を産出できたと述べている。また 1890年の調査も、最上質の煙草はソロ河な どのしばしば洪水が発生する河岸で作られ、いくつかの種類、中でもいわゆる Prambon-tabak (ソロ河沿いのデサにちなんでこう呼ばれるが、このデサの周辺ではこの煙草が作られ、主に華人の手で加工される)は、識者によれば以前より質が悪くなったと言われるが、なおより高い価格を実現しているという [K.V.1892, bijl.C]。さらに Jasper [1915:331~332]は、県内の特定地域、例えば Djenoe、Rembes、Rengel、Prambonwetan、Bangilan などでは土地が特定の種類の煙草を産出するが、これらは市場で評価が高いこと、最上質の radjangan は Prambonwetan の森林と植生が豊かな丘陵地の麓にある数バウの水田の栽培からだけ加工されること、Bangilan の煙草は色が黒く味がきつい種類 (een donkere, zware soort)として有名であること、これらの煙草には様々な名称(詳細は同所参照)が付けられていることを指摘している。

3. ケルフ加工

それではこの地域の煙草の主要産物だった内地市場向けのケルフ煙草は、どのように加工されたのだろうか。以下、Jasper [1915:341~343]にもとづいて略述しよう。

先に触れたようにケルフに製造されるのは真ん中葉 (tengahan) と最上層葉 (poetjoekkan) だけだったが、農民はこれらを収穫直後に5~6日程度、椰子の葉で編まれた通気性のいい籠の中で萎ませ黄変させる。その後、葉を主脈から取り去り積み重ねて厚い層にし、刻み職人 (toekang radjang) のところへ運ぶ⁽¹³⁾。

(13) なお、K.V.[1892, bijl.C]によれば、いわゆるプランボン煙草(ソロ河沿いの同名の

デサの周辺で作られる良質煙草)は主に華人の手で加工されるといわれ、ここではケドゥーなどとは異なって、華人商人が加工する場合もあったようである。

刻み職人の刻み作業は夜の 12 時から翌朝の 9~10 時まで続くのがふつうで、有能な職人は月額 12.50 ギルダールか 15 ギルダールの固定給を手に入れる。作業は層状の煙草葉を挟む直立した 2 本の骨をもつフォーク状のもの、鋭利な刻みナイフと砥石がついた重い刻み板 (djongka radjangan) を用いて行われる。刻み職人はこの板を土の上に据え、自分は低い椅子に座って左手で煙草葉の塊をしっかりとつかんで時々同じだけ前へ押し出し、右手に握ったナイフを竹のフォークの骨の方向に沿って上下に規則的に動かして、煙草を刻んでいく。こうして彼は夜 12 時から翌朝 10 時までで、煙草葉 3.5 ピコルを刻むことができるが、これは乾燥後には 3.5 カティになる重さである。

この作業の終了直後に、煙草は女性の手で選別される。すなわち、東にある細い繊維をほぐし、長い繊維を指と指で挟み、短いものを落としてしまうのだが、後者は後に質の劣るケルフとして別に加工・包装される。他方、長い繊維は小さい束にまとめられ、竹で細かく編まれた長方形の乾燥用網 (widig) の上に広げられ、戸外で 2~3 昼夜、日中は太陽の光に当て、夜間は露に晒す。これを経過して色が黒ずんだ煙草は、小さなパック (deleg) に巻かれ、乾燥したバナナの樹皮で覆いをした籠に入れられ、出荷される。

このように、刻み作業はこの地域でも、先に植村 [2005A] で検討したケドゥーの場合とほぼ同じやり方で専門の職人の手で行われ、乾燥は天日乾燥である。

III, 原料煙草の流通

それではこうして生産・加工された原料煙草は、どのように流通したのであろうか。ジャワでは一般にクロソックは輸出され、ケルフはそのままの状態ですぐ内地市場に向けられるが、この地域では両者ともかなりの部分が、地元特産の葉巻の原料として消費された。ここでは 20 世紀前半の事例を中心に、それらの流通の特徴を具体的に述べることにしたい。

1, 買上商人の活動

Walbeehm [1902:1065] が「最近までトゥバン県では、パッサールへもたらされるのは劣等種だけ」で、「この種の煙草は、家計に現金への需要があるかないかに応じて」女性の手で売られるのが一般的だったが、質のよいものは家に保存して買い上げ者が来るのを待った、というように、世紀転換期にはトゥバン産原料煙草の大部分は買上商人の手を通して流通に入った。そして、これらの商人は基本的には華人商人で⁽⁴⁴⁾、1910 年代前半のトゥバン県にはクロソック買い上げを専門にする華人が 38 名、ケルフ煙草製造をも兼業する華人が 21 人⁽⁴⁵⁾、さらに主な職業として内地市場向け刻み煙草加工を行う華人が 59 人いた [Jasper 1915:345]。

(14) 世紀転換期にはまだ華人はデサに立ち入ることが禁じられていたが、この地域では 11 月~2 月の買い上げ期には特別に通行許可書を交付していた。こうして彼らや、その手先として働く現地人商人の手で、Djatiraga 監督官区だけでも毎年煙草の買い上げに金数トンが費やされたという。この他、Walbeehm [1902:1065~1066] はボルネオのバンジャルマシンからも現地人商人がやって来て大量に買い付けを行っていること、富裕なジャワ人の中にも煙草買い上げを職業にしている者がいること、しかしすくなくとも彼がここで監督官を務めた 3 年半の間には、ヨーロッパ人が煙草買い付けに参入したことはなかったこと、Toeban 監督官区では買い上げ者が煙草を畑上にある状態で買

い上げて加工することが習慣であるが、Djatirogo の場合には栽培者が加工したものを買い上げるのがふつうだったことを指摘している。

(15) この 59 名のうち、煙草の圧縮器をもっていたのは 16 名だけだったというから、彼らが買い上げたクロソックの大半は輸出前に再加工が必要だったと思われる。

以下では、彼らによる買い上げを経た原料煙草がどのように流通したかを、クロソック、ケルフに分けて考察してみたい。

2. クロソックの流通

Jasper [1915:336-339]によれば、農民から収穫直後にヨーロッパ市場向けクロソックを買い上げるのは、一般に先に挙げた華人買上商人のために働くバクル (bakoel: 現地人中間商人) である。彼らは華人商人から一定の前払いを受けており、買い上げた生の煙草葉を 5~6 枚ずつ竹串 (soedjen) に突き刺して直射日光で 10~15 日間乾燥させた後、華人商人に引き渡す。華人商人はこれを選定し⁽¹⁶⁾、1 ピコル当たり 8~12 ギルダーで買い上げる。なお、栽培者農民に対する前貸しは行われない⁽¹⁷⁾。

(16) Jasper [1915:339-340]によれば、1910 年代前半期には、クロソックはその品質によって次のように分類されていた。

A. うす茶色のクロソック	A.O. 長葉、うす茶色	上級 ↓ 下級
	A.A. 普通葉、うす茶色	
	A. 短葉、うす茶色	
B. 黒褐色のクロソック	B.O. 長葉、黒褐色	
	B.B. 普通葉、黒褐色	
	B. 短葉、黒褐色	
C. 茶緑色のクロソック	C.O. 長葉、茶緑色	
	C.C. 普通葉、茶緑色	
	C. 短葉、茶緑色	
D. 黒色 (zwarte kleur) のクロソック	D.D. 長葉、黒色	
	D. 短葉、黒色	
K. 小葉で質の悪いクロソック	K.K. 長葉、質悪い	
	K. 短葉、質悪い	

企業家の中に、はさらに「R. ダメージのある葉のクロソック」、すなわち最も質の悪い種類というグレード (merk) をも使用する者もいたが、他の企業家は AA. A. BB. B. CC. C. DD. D だけしか使わなかったという。

(17) なお、この県では、住民から収穫直後の煙草葉を直接買い上げて自分で乾燥させる華人買上商人もいる。また、栽培者自身が煙草葉を乾燥させ、それを自分でクロソックとして華人企業家の倉庫へ運ぶ場合もある。さらに、バクルとは別にウィリジャ (wliidja) と呼ばれる中間商人がおり、煙草を農民から買い上げて華人商人の倉庫で供出する。バクルとの違いは、前貸しなしで完全に自己責任で農民が乾燥させた葉の買い上げに従事する点である。

この地方の華人買上商人の中で最大規模の者は、県都、Rengel と Djatirogo 郡の栽培中心地 Bangilan に住んでおり、スラバヤのヨーロッパ人輸出商社⁽¹⁸⁾と取引関係を結んでいる。

その内容は様々だが、例えばある買上商人の場合は購入した煙草全てを商社に譲渡し、この商社が計算した利子プラス委託手数料相当額を控除した後、利益を買上商人に引き渡すという条件で、一定の操業資本しか受け取らない。別の取引関係では、買上商人は商社から資金を提供されて操業しているが、商社に対して次のような義務を負っている。すなわちクロソックを商社が予め決めた値段でスラバヤで供出し、決算報告をしなければならず、また供出する煙草の少なくとも70%は上級品であるA級、B級、C級でなければならず、下級品であるD級、K級は30%しか許されない。そのいずれにせよ、華人商人は自分の工場の後乾燥、選定、束ね、熟成などを行って、それから煙草を引き渡すことになる⁽⁹⁾。

(18) 福祉減退調査によると、「トゥバンのクロソック煙草は firma Fraser Eaton の代理人とハジに買い上げられ、スラバヤへ移出される」[M.W.L.Rembang:215]とあり、この輸出商社は Fraser Eaton 社のことと思われる。

(19) Jasper[1915:340~341]によればトゥバンにおける華人工場でのクロソック加工作業工程とその経費は次のようである。

- 1, 数日間の後乾燥 (djemoer)。
- 2, 乾燥葉全部を小選定棹に結びつける。
- 3, 葉一枚ずつ長さとお色を選別し (sortir)、その後、煙草を束にする (いわゆる oenting)。
- 4, 乾燥した煙草を熟成させるために、束を積み上げる (stapel mateng)。

最初の積み上げ時には、煙草の山の中心にまで入れられた長い竹筒の中に差し込まれた温度計は高温を記録するが、その後山は崩され煙草は空気にさらされ、そしてまた再度積み上げられる。この作業は可能なら2~3回行われる。このクロソックの熟成のための山 (fermenteer-stapels) は高さが1.5~2m前後、直径1.5mほどである。積み上げに際しては、束は1つずつ広げられ、・・・外側へ並べられる。

- 5, 一緒に山積みされた様々なブランドに分類される全ての束が、いま束毎に選別されなければならない。その後、6回目の加工 (bewerking) が行われ、2回目の選別がなされた煙草をボール状に圧縮する。このボールは縁をしっかりと縫い付けたマットで包まれ、それぞれにはブランド表示が記される。

クロソック1ピコル当たりで、これら全ての加工費は以下のものである。

1, 後乾燥	0.15 ギルダー
2, 選別積み上げ (voor het maken der sorteerstapels)	0.10 ギルダー
3, 長さとお色の葉毎の選別と束ね作業	0.40 ギルダー
4, 山積み作業	0.10 ギルダー
5, 束毎のブランド付け選別 (het bosgewijze sorteeren op merk)	0.15 ギルダー
6, 煙草の圧縮	0.16 ギルダー
7, 梱包みマット購入費	0.40 ギルダー
8, 輸送費	0.50 ギルダー
9, マンドールなどによる監督費その他	0.20 ギルダー
生産費計	2.16 ギルダー

華人企業家全てが、こうした加工プロセスを全部行うわけではない。大規模に操業

しておりプレス機を持っている企業家は少ない。大半は煙草を買い上げ、圧縮機を使う華人企業家に選別、あるいは未選別でそれを売るのである。

ただ、この地域の葉煙草の一部は、後述するトゥバンの葉巻製造の原料にも充てられた。Walbeehm [1902:1063]によれば、Bangilan では 1899~1900 年にある商人が年に 1,000 ピコル近くの葉煙草を買い上げたというが、これらは大半がスラバヤとトゥバンへ移出され、葉巻加工原料となるという。

このように、クロソックは一般に農民からバクル、華人買上商人の手を経て、スラバヤのヨーロッパ人商社の手に入り、輸出されていたのである。

3. ケルフの流通

他方、ケルフ煙草の場合には、まず移輸出先を見ると 1890 年代には周辺地方の他に、ボルネオのバンジャルマシン、ポンティアナック、ブル島のカエリ (Kajeli) など外領諸港、さらにはシンガポールにまで送られていた [K.V.1892:bijl.C ; K.V.1894:bijl.SSS]。また 20 世紀初にも Rengel, Singgahan 郡、Bangilan 副郡 (Djatirogo 郡)、Mondokan 副郡 (Djenoe 郡) 産の煙草は、マラン、スラカルタ、スラバヤ、マドゥラに向かうほか、バンジャルマシンへ移出され、シンガポールへも輸出されていた [M.W.L. Rembang:215 ; M.W.L. Rembang:213]。また、1923 年の調査は「ラジャンガンは買上者によって周辺 (Toeban-Koedoes) の多数の原住民や華人の紙巻煙草工場、煙草工場に提供されたり、あるいは現地での消費のためにスラバヤ、スマラン、ジョクジャ、ソロなどへ売られる。質の劣るケルフは噛み煙草として利用される。」 [Tabak 1925:151] という。

このように、ケルフはジャワ内の比較的近い地方へ移出されて様々な形で消費され、あるいは製品煙草に加工され、またボルネオやシンガポールにも送られていた⁽²⁰⁾。

(20) なお、Jasper [1915:341~343]によれば、出荷の具体的な様子は次のようだった。「ソロ向けには、乾燥網 1 vak (tampang) 分の煙草は小さなパックすなわち巻いたもの (rolletjes: deleg) 4 つに分割され、この煙草はこの場合、tembako tamplek と呼ばれる。この小パックすなわち巻いたものは先ず平らに潰されて籠 (krandjang of toemboe) に入れられ、一種の熟成をさせるためそのまま約 2 ヶ月間おく。そしてそれから色によって 6 つの品質に選別される。それ以外の地域向け、例えば東ジャワ向けの場合には、網の仕切 1 つ分の煙草が 1 つのパック (deleg) に巻かれ、こうして得られたパックがそのまま移出のために籠に詰められる。この煙草は普通 bako pègon と呼ばれる。トゥバンの 1 華人は別の形で噛み煙草を作っているが、これはマランで需要がある。またもう 1 人の企業家は刻み煙草を球状に小さく巻くが、これはマナドへ移出される。」

次に栽培農民の煙草販売には、Tabak [1925:150~151]によれば 3 つの方法があった。第 1 は、農民がパッサールへ持ち込むことであり、収穫の最大部分はこれによって商売された。第 2 は、農民が企業家・買上げ者 (ngider) のところへ搬入することである。そして第 3 は、買上げ者の仲介者 (welidjo) に売ることであり、彼らはこのためにデサにやってきたという。トゥバン県の場合、ケルフ用煙草は未乾燥状態で販売されるのがふつうであり、椰子の葉で編まれた籠に入れて引き渡されたという。そして、このケルフ煙草の取引は、ほぼ全て華人と富裕ジャワ人が支配していた。

このように、世紀転換期と比べると 20 年代初にはパッサールでの販売が増えているようである。ただ、その理由については現在のところ不詳であり、今後の検討課題としたい。

IV、トゥバンにおける葉巻製造業の発展

さて、上で述べたようにトゥバン産の煙草は一部が地元で発展した葉巻産業の原料として使われた。それでは、この産業はどのように発展したのであろうか。最後に、この問題に触れておきたい。

1、発展の歴史的概観

この産業の発展に関する歴史的な概観は既に前稿で行ったが、その要点を記すならば、トゥバンでは遅くとも 1850 年代には華人経営で葉巻が製造されており、1890 年代半ばには現地人がこれに参入し、1900 年代半ばにはその数が 155 人に及んだが、うち 100 人は県都に住んでいた。この産業は 1910 年代前半にも発展が続き、当初は 4 商標だけだった葉巻は 10 年代半ばには 100 ほどを数えるに至った[植村 2006:39~40]。以上を踏まえて、ここではさらに若干の点を付け加えておきたい。

1 つは 20 世紀に入ってからの特徴に関する問題である。Jasper[1915:346]に従うと、1910 年代半ばには「葉巻製造はトゥバンの町では約 500 人の原住民と 150 人の華人に主たる仕事、あるいは副業として行われている」とあり、1900 年代前半と比べると華人の企業進出が盛んになったことが窺われる。

次に 1910 年代後半にも、この地域の葉巻産業は発展を続けたと考えることができる。それは前稿でも指摘したように、ここで作られるような現地産煙草だけを原料にする内地市場向けの安価な葉巻は、少なくとも 1910 年代後半期～ 20 年代前半期には一般に売れ行き好調だった[植村 2006:43]ことに加え、S.J.S.の 1918 年第 3 四半期輸送報告の中に、沿線では「本年、煙草栽培は 1917 年よりもずっと拡大したが、これは現在、刻み煙草についている異常な高値と関係がある。この原因は、大拡大した葉巻、紙巻煙草製造のため、刻み煙草の需要が増加したことにある。以前、この産物が一ピコル当たり 80~90 ギルダールだったところでは、現在はピコル当たり 200 ギルダールが払われる。」[S.J.S.1918-3]とあることから裏付けられよう。1918 年頃にはレンバン地域の煙草を原料とする葉巻や紙巻煙草の製造が大きく拡大したのである。

また 1934 年の煙草産業に関する記事は、「葉巻産業はそれが最も安い種類を製造するものである限り(それはしばしば機械で製造された紙製「上巻き」を持つ)、着実に規模が拡大した。この産業はトゥバンに集中している。他の種類の葉巻(1本 0.5 セント以上)に関しては、人々がより安いもの(たいていは紙巻煙草)の使用に移ったことによって、輸入も生産も減少した。」[IV.1935:118~119]と述べており、1930 年代に至っても依然としてトゥバンがジャワ産葉巻製造の中心地だったことが窺える。

このように、トゥバンの葉巻製造は 19 世紀と 20 世紀の転換期以降大きく発展し、この地域はジャワ産葉巻製造の中心地たりつづけたのである。

2、トゥバン葉巻の製造方法と工場経営

次に、トゥバン葉巻の製造方法を眺めてみよう。M.W.H.[Rembang:371]によれば、この葉巻には①刻み煙草の周りに煙草葉を 1 枚上巻きとして巻いて作るものと、②葉巻全部が煙草葉から作られるもの、の 2 種類があり、形は円錐形のもの(1000 本当たり 2.25 ギルダールで販売される)と、純粋な円筒形のもの(2~3 ギルダール)があった。

上巻葉は特にこのために採されたもので、あらかじめ湯に浸して軟らかくする。これを割りナイフとまな板、巻くために利用する小板数枚を使って糊で貼り付け、等級分けした

後に手動式圧縮機で圧縮する。こうして製造された葉巻はせいぜい6ヶ月程しか持たず、その後はばらけてしまうので、質的には改善の余地が大いにあり、専門家による指導が必要だという⁽²¹⁾。

(21)なお、1910年代前半のことを記したと思われる Jasper[1915:346]によると、この葉巻の充填材(vulsel)と中巻葉(binnenblad)に使われるのは「1ピコル当たり 15~20 ギルダールのトゥバン・クロソックと、とびきり上質ではないトゥバン・ケルフ(radjangan)」で、「外巻葉(dekblad)には色の浅い種類が使われるが、これは1ピコル当たり 50 ギルダールで購入される」という。ただし、Tabak[1925:197]によれば、「ほとんど全てを完全に原住民や華人の消費のために操業する葉巻企業は、大半が大煙草地帯であるケドゥー、レンバン理事州と王侯領にあり、主にジャワ・クロソックを加工する。」とあるから、クロソックの使用(②の形態の葉巻)が多かったようだ。

これらを生産する工場の経営のあり方も検討しておこう。まず、1900年代初めの時期についてみると、原住民葉巻製造業者の大半は、15名ほどいる華人商人と協定を結んで葉巻を作った。華人商人は原料の刻み煙草を平均市場価格にほぼ等しい1ピコル当たり7ギルダールと計算して前貸し、製造業者は商人に対して葉巻を固定価格(大きさに応じて10,000本 24.75ギルダール、11,000本 25ギルダールもしくは17,000本 25.50ギルダール)で提供するが、その際に前貸分を清算した。上巻葉は、製造業者自身が1ピコル当たり6~7.50ギルダールで購入して準備する。彼らの1日の稼ぎは日雇労働者を雇用する場合には0.50~1ギルダールであり、他方、労働者の稼ぎは0.20~0.30ギルダールだった。営業は年間6~7ヶ月間行われた[M.W.H.Rembang 371, 376; M.W., vol.VIa, 1de deel, 1909:140~141]。

1910年代半ばには、「若干の原住民は自前で営業しているが、大半は華人葉巻企業家のところで、提供する葉巻1000本当たりで計算される一定の賃金によって働く。営業規模は、毎日100人の労働者が従事する大作業場から、家で家内工業の形で行うものまで様々である。」[Jasper 1915:346]とあるように、生産のあり方はマニファクチャーから家内工業まで様々だった。

このうち、後者については、もう少し述べておこう。Jasper[1915:347]によると、これらは2つに大別できる。第1は、自己資金によって自ら職人を雇って製造した葉巻を、華人バイヤーに1,000本当たり平均6ギルダールで引き渡すという、ごく少数の独立小経営である。こうした企業家の1,000本当たり平均製造コストは、①職人賃金(4人で1日に1,000本を製造)1.80ギルダール、②充填材0.875ギルダール、③中巻葉(lembar djero)0.75ギルダール、④外巻葉(lembar djaba)0.80ギルダール、⑤木箱0.40ギルダール、⑥包装、商標用他の紙0.15ギルダール、合計では4.775ギルダールとなるから、利益は1,000本当たり1ギルダール程度だった。

第2の形は、一種の間屋制家内工業である。すなわち、仕事を家で行う点では上の例と同じだが、製造業者は原料を華人商人から受け取り、それで製造した葉巻を引き渡した時に1,000本につき一定額を受け取る。この場合には、原料引き渡しの際、充填材は予め重さを計り、中巻葉と上巻葉は数えてあるので、華人商人は葉巻が何本できるかをあらかじめ正確に知っている。また別の者は、華人作業所で中巻を行ったばかりの葉巻(いわゆるkasaran)を受け取り、家で最終加工、すなわち上巻きを行い、固定した賃金を受け取る。

このように見てくると、一般に葉巻製造においては、華人商人による原料煙草前貸しを

通じた支配が、強力に展開されていたということができよう。

この時期以降、この地域の葉巻製造がどのような形態でなされたかについては、史料が得られず不詳である。ただ、1930年代末の栗林源十郎の調査によれば、トゥバンには当時の葉巻製造四大工場の1つ Tieong Sing の工場があり[栗林 1941:133~134]⁽²¹⁾、華人経営の企業が引き続き生産を主導していたと考えられる。

(22) 四大工場の残り3つはマゲランにある Negresco (オランダ系資本、ジャワ内葉巻製造数量の過半数を占める)、クドゥスの Aroma、マゲランの Kaw Kwat Yee である。

(3) トゥバン産葉巻の販路

それでは、このようにして製造された葉巻はどこで消費されたのだろうか。まず Jasper [1915:346]は、「トゥバン県では葉巻製造業はこの20年間に初めて急成長したが、それは以前にはいつも煙草とトウモロコシ葉(あるいは砂糖椰子葉、または boejoek 椰子葉)を使って自分で巻いたストローチェを吸っていた原住民が、現在では非日常的な場、例えば集会、訪問、スラメタン、ダンスパーティー(najoebbans)などで、葉巻を軽視しなくなったからである。」と、1890年代半ばからの発展の要因の1つとして、地元の人々の葉巻消費が拡大したことを指摘している。

このように葉巻が手巻きストローチェの代替品として使用されるためには、その価格が安いことが必須の条件であると思われる。そして実際、既に述べたように、1890年代半ばに製造された葉巻は低価格であり、それゆえ農民の中での売れ行きがよかったのである。

しかし、この産業の発展を支えたのは地元消費だけではなかった。『福祉減退調査』によると、既に1900年代前半には製造されたトゥバン葉巻は県外から来る原住民ハジや華人に売られることもあり、バタヴィア、スマラン、スラバヤ、マラン、スラカルタ、マドゥラといったジャワ各地に加えて、さらにパダン、バンジャルマシン、シンガポールなどにまで送られて、1000本当たり2.20~7ギルダーで販売されていた。そしてその移輸出量は1895年の568kgから1903年には2,346kgに増加している[M.W. vol.VIa, 1e deel, 1909:140~141; M.W.H. Rembang:371, 372; M.W.L. Rembang:215]。このような域外への移輸出はその後も続き、「トゥバンの葉巻工場は、相変わらずバタヴィアとシンガポールのバイヤーからの活発な注文を受けている」[K.V.1911:204~206]、「トゥバン県で製造される葉巻は、バタヴィアとシンガポールに十分な販売先を持つ」[K.V.1913:164~165]とあるように、1910年代前半にも盛んだった。こうして、トゥバンは内地市場向けの安価な葉巻製造の中心地としての地位を確立していった。

おわりに

小論では、トゥバンにおける住民煙草産業の展開を追ってきた。ここではヨーロッパ市場向けの原料煙草栽培も強制裁培期から展開し、その「自由栽培」は変動は激しかったものの1870年代末までは盛んであった。しかし、これ以降は衰退し、1910年代前半の復活はあったが、この地域の栽培は基本的には内地市場向けに特化していった。

これらの栽培は水田裏作が主流であるが、畑地裏作のかなりを上るという特徴をもつ。綿密な栽培管理を行う、労働集約的な農業である点や、ケルフへの加工方法などは、以前に考察したケドゥーの場合と同様であった。

生産された原料煙草の流通は、クロソック、ケルフを問わず華人が支配していた。クロ

ソックは、彼らを通じてスラバヤのヨーロッパ人商社へ送られた。これに対して、ケルフは近隣地方へ行く他、ボルネオやシンガポールにまで送られた。また一部は、地元で製造される葉巻の原料に充てられた。

トゥバンの葉巻産業は 19 世紀と 20 世紀の転換期から大きく発展し、現地人も多数が企業主として参入した、その意味では植民地後期の数少ない住民工業の 1 つであった。生産様式を見ると、家内工業からかなりの規模の華人経営マニュファクチャーまで様々であるが、前者には華人の間屋制的支配も広範に見られるのが特徴であった。いずれにせよ、こうして製造された葉巻はその安さを武器に販路を拡げ、地元だけではなく外領やシンガポールにまで移輸出されたのであった。

このようにして、トゥバンは原料煙草の栽培から製品煙草製造に至るまでの過程を備えた、ジャワの煙草地帯の 1 つの中心として発展したのである。

第6章 植民地後期レンバン煙草の生産と流通をめぐって

はじめに

植民地後期のボジョネゴロ県、トゥバン県⁽¹⁾はジャワにおける原料煙草住民生産の最大の中心地の1つであり⁽²⁾、内地市場向け煙草とヨーロッパ市場向け煙草の双方を生産する地域として知られてきた。これまで、この地方の煙草に関しては強制裁培制度期の労働問題に関して述べた *Vrije arbeid*[1860]、*Toestand Rembang*[1862]、*Rees*[1864]や、*Tabak*[1925]に所収されるレンバン理事州に関する1923年の調査報告、1930年代のヴァージニア煙草の導入と栽培に触れた *Ploeg*[1940]などの研究があり、また *Penders*[1984]はボジョネゴロの経済史を叙述する中でその煙草栽培の意味にも触れている。これらは何れも貴重な成果だが、生産に大きな影響を及ぼす市況変化、他地域の原料煙草生産、ジャワ内の製品煙草生産と関連付けて論じる点では必ずしも十分ではなく、また流通に関する検討は弱い。

(1)両県は1928年まではレンバン県、プロラ県とともにレンバン理事州に属していたが、1929年以降はこの2県のみでボジョネゴロ理事州を形成した。その後、同理事州には34年にグレンク県とラモンガン県が加わり、35年からグレンク県は再び分離されたが、ボジョネゴロ、トゥバン両県の領域は基本的には変化していない。

(2)この地域の煙草のジャワ内における位置については植村[2004:表2～表4]、[2007a:表1]などで示したので詳述しないが、理事州毎の収穫面積データの得られる1874年以降を見るとレンバン理事州は常に上位3番目までに入ってブスキ、ケドゥーなどと首位を争っている。1930年代のボジョネゴロ理事州も同様である。

そこで小論では、これらの成果を踏まえつつ、この地方、特にボジョネゴロにおける原料煙草の栽培と流通が、ヨーロッパ市場における価格推移や、ジャワ各地での製品煙草産業の発展及びケドゥーを初めとする他産地との競争の中でどのように展開したかを、19世紀末以降の時期を対象に、可能な限り詳細に検討することにしたい⁽³⁾。

(3)トゥバン県における栽培と流通については既に植村[2007a]で論じたので、小論では必要に応じて触れる程度にとどめ、詳しくは論じない。

以下では先ずこの地方の煙草栽培の歴史を概観し、次いで生産の特徴を考察する。そして最後に流通の問題を検討したい。

I, レンバン煙草小史

1, 生産の発展

先ず、両県を含むレンバン理事州における収穫面積の推移を見よう。表6-1に示される5年平均をは、基本的には拡大傾向にある。ただ、いま少し詳しく見るとそれは1880年代後半～90年代前半、1910年代後半～20年代前半に顕著であるが、1890年代後半～1900年代前半には後退または停滞していることに気づく。またこれを表6-2により他の栽培中心地と比較すると、①1890年代後半～1900年代前半の後退・停滞が顕著である、②他地域が大きな伸びを示す1910年代前半に停滞している、③全般的に減少が大きい1910年代後半期にむしろ増加しており、1916～20年平均で見ても減少が他地域より小さい、④他地域が低迷する中で1920年代前半に大拡大している、という特徴を示している。次に表6-3で各年毎の推移を見ると、変動が極めて激しい時期がある。1879年、82年、89年、95年、1900年～01年、1917年の激減、逆に1896年や1924年の急増などが目に付く。

これらの背景全てを説明することは不可能だが、行論の中で可能な限り検討したい。

2. 内地市場向け煙草の生産

この地域で煙草栽培がいつ始まったかは不詳であるが、後述のようにこの地域が強制裁培制度の中心地となったことから考えても、遅くとも 19 世紀前半には広範に行われていたようだ。Elson は、「南レンバンのソロ河河岸沿いに繁栄していた国内煙草産業では、煙草生産者はしばしば煙草をまだ植わっている時に買付者に売る」という内容の、レンバン理事から総督宛の 1834 年 11 月 24 日付書簡を紹介し [Elson 1994:261]、1838 年にレンバンでは「非常に多くの煙草」がジャワ人の消費のためにソロ河沿いの肥沃な河岸で栽培されている、という報告書を引いている [ibid.:249]。

このような内地市場向け生産は、「1852 年を通じてかなり重要になり、レンバン理事州における消費税の増加から明らかなように年々増加している」 [K.V.1852:110] とあるように、1840 年代から 50 年代にかけて拡大した。ボジョネゴロ県の 1856 年栽培面積は約 7,340 バウに及び [K.V.1856:110 ; Bekking 1861:61]、同年の強制裁培やヨーロッパ市場向け自由栽培の面積を遙かに上回っていた [Bleeker 1850:46]。

そして「原住民市場向け煙草の自由栽培についても、報告は良好である。レンバンでは、海上経由の移出は 3,528 ピコルに達する。」 [K.V.1854:135] という記事や、ボジョネゴロ県で栽培長官が「海上経由だけでトゥバンからスムヌップ、バンカラン、バウエアンへ約 3000 ピコルの刻まれたジャワ煙草が移出されたことを考えると、原住民市場向け煙草の自由栽培は広範に、比較的大規模に行われていると見ることができる。」と述べていることを伝える報告 [K.V.1856:110~111] に示されるように、既にこの時期から大量に移出されていた。

このように、内地市場向け煙草は当初からこの地域の煙草栽培の中心を占めたのである。

3. ヨーロッパ市場向け煙草の生産

他方、この地域でヨーロッパ市場向け煙草の生産が始まったのは、強制裁培制度導入がきっかけだった。そしてその廃止後、それは「自由栽培」に受け継がれ、この地域の主要産業として前述の内地市場向け生産と並び立つことになった。

(1) 強制裁培制度

[強制裁培制度の導入]

レンバンで煙草の強制裁培が始まったのは 1833 年で、6 月 20 日付け命令第 2 号によりトゥバン県、ボジョネゴロ県において栽培の試行を進めるため 3,617.32 ギルダの支出が認められたが、失敗に終わった [Deventer 1866:396]。しかし政庁は同年 12 月 29 日の決定により、栽培長官に対しクラワン、ケドゥー、ブスキで各理事と協議の上、計 200 バウの土地を外国種煙草の栽培に当てることなどを指示し [ibid.:566]、その後も栽培は続けられた。表 6-4 に示されるようにそれは 1840 年代に入って本格化し、40 年代半ばにピークを迎えた。栽培面積は 48 年の飢饉を契機に激減した後、50 年代初～60 年代初には 1200 バウ程度で安定するが、63 年から急減して 65 年の 100 バウを最後に廃止された。

この制度の当初、政庁は栽培だけでなく加工・梱包まで担ったが、莫大な赤字が出たため、36 年から加工はオランダ人民間企業家に委ねられた。政庁側は必要な土地と労働力、そして乾燥小屋など主要施設建設のための融資提供を契約した [Penders 1984:13]。

39 年以降には、企業家は生産物を自由に処理できるようになった。40 年代に栽培が拡大するのはこのためであり、45 年段階で政庁とこのような契約を結んでいた民間企業は

37、うち 18 がレンバンで操業していた [Tabak 1925:4-5; 135]⁽⁴⁾。

(4)なお、この企業数は 1851 年にはジャワ全体で 14、レンバンは 10、煙草の強制栽培廃止が正式に決定された 63 年にはそれぞれ 9、6 だった [Tabak 1925:135]。

[強制栽培制度と農民]

栽培に参加した農民は 3～4 月の苗床造りから 11 月～1 月の収穫まで 8 ヶ月余り労働を強制され [Tabak 1925:135]、負担は重かった。Elson [1994:80-81] は、①栽培が長期にわたるので稲作に十分な時間が取れず、収量の落ちる早稲を栽培せざるを得ない、② 1840 年代初め以降の急拡大の結果、道路や加工小屋などのインフラ建設のための労役が強化され、③煙草栽培が乾燥小屋周辺に集中したため、農民は栽培のために遠距離を通わねばならなかった、④シーズン毎に米作のための水路再建が必要になった、⑤栽培が住民に過重な負担をかけているにもかかわらず、農民が受け取る支払額は極めて少なかった (レンバンでは 1845 年の 1 家族当たり栽培報酬は 12.45 ギルダーだったが、地稅額 14.74 ギルダーを下回っていた)⁽⁵⁾などの問題があったと指摘している。さらに、労働力の割当を委ねられた原住民首長による様々な不正も頻発した [Bekking 1861:9-11]。

(5)ただし家族当たり受取額は年によって異なる。例えば Bosch [1853:261] によれば 1845 年から 48 年はそれぞれ 13.50、11.54、10.83、12.91 ギルダーと推移している。なお、これらの問題点のいくつかは 1854 年の統治基本法施行後に改善されたようだ。Bekking [1861:17-18] によれば、労働を義務づけられたデサから遠距離に集中していた栽培を近隣で行うようにしたので、栽培者は毎日 10 パール以上の距離を畑まで往復する必要がなくなった、また倉庫までの距離を縮めるため大倉庫を解体して畑近くに小規模倉庫を建設したというから、(c)の問題は改善されたと考えられる。さらに Bekking の州理事着任 (1856 年) 前には、乾燥小屋建設のため補償支払いなしに住民の土地が収用されていたが、以降はこのために優先的に休閑地が利用されるようになり、予め占有者の同意を得て金銭補償が定められ、この費用は行政側の命令で契約者負担となった、農民は収穫した煙草を倉庫内につり下げる義務を免除された、といった改善が進められた。ただそうはいっても、1850 年代半ばに栽培長官が煙草の自由栽培は「栽培者に多くの利益をもたらす。彼らは自由で強制のない労働でバウ当たり 240-250 ギルダーを得るが、契約栽培の場合の強制労働は最高でも 120 ギルダー、平均すれば 87 ギルダーにしかない」 [K.V.1856:110-111] と述べ、Bosch [1853:46] が「自由意志による栽培はそれほど手をかけないでもバウ当たり 200-250 ギルダーの収入があったが、強制栽培では 75 ギルダーに過ぎない」と指摘するように、強制栽培の報酬は少なすぎた。逆に、1857 年 4 月 4 日付けの Staats-courant が「自由意志で煙草を作る農民は、煙草の生育期にあたる乾季に毎日の灌水のために水を汲むことができる河や泉の近くにある適地でのみ栽培を行う。日々繰り返されるいくつかの、彼にとっては時間がかかるが煙草の正しい生長に必要なちょっとした管理は、妻や子供に委ねることができ、これによって、彼は自分のデサから近くはない場所で強制労働で栽培しなければならない場合の 2～3 倍の広さに栽培することができる。」 [Vrijarbeid 1860:93] というように、自由栽培は強制栽培に比べて圧倒的に有利だったのである。

[住民の抵抗]

したがって栽培に対する住民の反発も強く、同時代の報告は理事州外への逃亡が頻発し

たことを伝えている [Hoëvell 1849, deel 1:132 ; Residentie Rembang 1845, 1849:406]。また、煙草栽培参加農民がより直接的な行動に出ることもあった。H.C.Bekking 理事(在職 1856-58 年)は次のように回想している。「私が 1856 年初にレンバンに着任する少し前に、契約者 M のために煙草を作らねばならなかった農民たちは集団で彼の家に赴いて、強制的な仕事をそれ以上することを拒否し、それを免除しないなら全員が妻子を連れて理事州から去るといって脅かした。この契約者は、そのようなムードの下では些細な出来事でも不測の事態に発展しかねないことを恐れて立ち去り、他方では当時の住民権力は契約者の負担でスラメタンを行った。それで事態は収まった。」「私がレンバン理事州の行政を始めた直後に、他の場所で行われている煙草の強制裁培に反対する別の示威行動が起こった。レヘントをはじめとする原住民首長や官吏の臨席の下で住民が働く煙草畑の監査が行われた時、農民全員が私の馬の前の地べたに座り、通常の敬意を示す挨拶 (Sembah) を行った。これらの人々は私が話しかけると、彼らに課せられた労働からの解放と、政府煙草栽培の重圧に対する保護を希望した。周到な調査と原住民首長・官吏との静かな協議の結果、私は住民の不満には根拠があり、それは数多くあることを確信した。」 [Bekking 1861:8-9]

[煙草強制裁培の廃止]

こうした中で、制度の末期近くには住民の栽培負担能力が不十分なため予定面積の栽培ができないケースも現れた。1858 年には 9 企業中の 5 企業が合計契約面積は 1000 バウだったのに、実際には 700 バウしか栽培できなかった [K.V.1858:103]。61 年栽培は契約面積 750 バウに対し実績は 555 バウ [K.V.1861:151]、62 年には 4 企業、契約面積 750 バウに対し 530 バウ [K.V.1862:179-180]、63 年には 1 企業 200 バウに対して 175 バウだった [K.V.1863:174]。

しかし、煙草の強制裁培廃止を促した決定的な理由は、この栽培が政庁に利益をもたらさなかったことにある。Soest [1860:63] によると、政庁と契約した企業家が入手できた煙草は比較的少量にすぎず、しかも質が悪くヨーロッパ市場での販売は困難だったので、彼らの多くは政庁に対して負債を抱えていたが、そのことは煙草地帯の農民の貧困とも相まって植民地剰余に悪影響を及ぼさざるを得なかった。こうして早くも 1846 年にはジャワでこの栽培に参加していた 37 企業中の 7 企業が消滅し、51 年には 14 企業が残るだけだったが、これらは合わせて 979,859 ギルダーという巨額の負債を政庁に対して抱えていた [Tabak 1925:4-5]。こうした中で 1863 年、政庁はこの栽培の廃止を決め、65 年のレンバンとジャパラでの栽培を最後に煙草の強制裁培制度は廃止された。

(2) 自由栽培の推移

[ヨーロッパ人経営農園の発展]

政庁の介入なしに企業が住民と契約を結んで煙草を栽培させ、ヨーロッパ市場へ輸出する「自由栽培」が登場したのは 1850 年代になってからだった [Tabak 1925:136]。Encyclopaedie [vol.4:232] によればこの方式はレンバンで始まったとされるが、管見の限りレンバンにおけるこれに関する具体的な記事の初出は 1852 年であり、「ヨーロッパ市場向け自由栽培も近年かなり増加し、政庁は適切な手段で奨励することにこれに努力している。レンバン理事州では 3 人の企業家がデサ首長・デサ住民と煙草栽培のための自由契約を締結し、この方式で 100 バウの栽培を行っている。」 [K.V.1852:110] とある。もともと、K.V. [1850:78] には「それ以外に、人々は可能な限り煙草栽培に自由栽培を適用しようとしている。彼らはその目的で住民に煙草種子を提供し、それは企業家の何らの介入なしに住民の手で播か

れ育てられる。その一方で、住民は生産物をその質に応じて1本当たり1.5~2 *duiten* で引き渡す。」とあり、前引の *Encyclopaedie* の記述が正しいとすれば、これがレンバンにおける自由栽培に関する最初の記事となる。

いずれにせよ、その後、1856年にはジャワ・マドゥラの「ほとんど全ての契約者が原住民との協定によってもヨーロッパ市場向け煙草をますます大量に作り、加工するようになってきている。レンバンのみでも本年、彼らはこの方法で623,503(アムステルダム)ポンドを得たが、前年を305,815ポンド上回った。また政庁と契約を結んでいない他の4企業は189,649ポンドを生産したが、前年より79,024ポンド多い。」[K.V.1856:110]と報告され、自由契約を結ぶ企業が増加していることに加え、強制裁培制度に参加していた企業も同様の契約を締結している。この方式による栽培の状況をまとめたのが、表6-6である。

表示のように、参加企業数は1867年までは増加の一途を辿った。Fasseur[1975:137]はその背景として、オランダにおける市場価格の高騰が1855年以降ジャワにおける煙草栽培ブームを招来したことを挙げている。

しかし、この時期が自由主義者として知られる *Duymaer van Twist* 総督の統治期(1851~56年)であり、煙草と砂糖の強制裁培制度から民間企業への移行に向けた最初の措置が取られたことも重要な発展要因だった。Elson[1994:149]によると、煙草におけるその移行はレンバンで最も強力に進められた。この地方では56年に任命され自由主義者として知られる *Bekking* 理事の下で、自由栽培は1856~58年に急速に発展し、58年には既に強制裁培面積の3倍を超えていた。その生産は同理事統治下の2年間に3倍近くに増え、バウ当たり収量は劣った(政庁煙草の栽培には、一般にずっと多くの手間がかけられた)にもかかわらず、1858年には強制裁培からの収穫の1.5倍となった⁽⁶⁾。その発展は *Bekking* の退任後も続き、表示のように67年にピークを迎えた。

(6)データは栽培監察官 *W.Canneman* の1859年12月7日報告(*Bijl.Hand.1863-64*, 1662)による。レンバンの民間煙草企業数は1856年の4から1858年には11に増加した。他に一部は自由栽培、一部は政庁栽培を行う企業が9軒あった[Fasseur 1975:137]。なお1857年段階では、*Staats-Courant*, 3 April 1857によると行政の仲介なしにヨーロッパ人企業家と原住民の間で自由意志により行われた契約栽培は1,057バウ、強制裁培は1,235バウだった[*Soest* 1860:64 ; *Tabakskultuur en vrije arbeid* 1857:339 ; *Bekking* 1861:62]。

[自由栽培の仕組み]

自由栽培は、K.V.[1861:*bijl.AA* ; 1862:*bijl.Z* ; 1863:*bijl.Y*]によると、1860年代初めには次のように進められた。農園主は住民個人と煙草の栽培・供出を口頭で契約し⁽⁷⁾、一般に前貸金を供与した。そして住民が収穫直後に煙草を供出すると、支払は質に応じて行われた。農園主は栽培用地を保有せず乾燥・加工小屋を持つだけで、煙草の供出はそこで行われたが、そのような小屋が理事州全体で62年に155軒、63年には234軒あった。加工などの各種作業は、日当制(16~25セント程度)や出来高払いで雇用されたクーリーの手で行われた。その雇用には大きな困難はなかったが、賃金が低い場合(1861年の *Soelang* 郡 *Gletengan* 農園)や、近隣 *デサ* の水田が肥沃で稲収量が多く煙草小屋で労働する必要がないような場合(1861年 *Sedan* 郡 *Mraijoon* 農園)、あるいは田植えや稲収穫時(1861年 *プロラ* 県の事例)には労働力不足が発生した。

(7)同様に東インド評議会^(議註)議員 *O.van Rees* の調査も、「企業家と栽培者との協定は、

デサぐるみではなく常に個人との間で結ばれる」ことを指摘している[Rees 1864:191]。口頭契約である理由は、Van Lawick van Pabst 理事によると、1850年代半ばまでは栽培者に一定本数の煙草の提供を義務付ける内容の書面による契約も結ばれていたが、義務付けを嫌った住民は煙草栽培を止めてしまったので、理事州全体で口頭契約のみに切り替えられた。そして企業家は関係デサの首長に予め通知して栽培者に前貸を供与したが、栽培者が信頼を裏切るとは殆どなかったという[Vrije arbeid 1860:96]。K.V. [1861:bijl.AA]によれば、この地方でなお契約書によっていたのは Wiedang 農園(トゥバン県 Rembes 郡)だけだった。

(補註)東インド評議会とは蘭領東インド総督の諮問機関であり、

さて、契約が個人との間で結ばれたことから明らかなように、栽培に参加するか否かは完全に農民の自由に委ねられていた。だから企業の乾燥・加工小屋近くに位置するにもかかわらず全く栽培していないデサも多く、また煙草栽培デサにおける栽培数や各デサの栽培者数は年毎にかなり変動した。農民の中には毎年栽培する者も、1年あるいはそれ以上の間隔を置く者も、1～2回栽培して止めてしまう者もいた[Rees 1864:191]⁽⁸⁾。

(8)もつとも、当時の自由主義への移行風潮の中で「自由栽培」は高く評価され、強制栽培廃止の根拠の1つとして主張された。Staats-Courant, 3 April 1857は「自由意志で煙草を栽培する農民は適地でのみ栽培するが、その土地は彼の居住地あるいはデサから離れてはおらず、作物が生育する乾燥期に毎日の灌水のため水を汲むことができる河または泉の近くである。いくつかの日々繰り返されるちょっとした世話は、時間がかかるが作物の正しい生育のためには不可欠であり、彼はそれを妻と子供にやらせることができる。そしてこれによって、彼はデサから少なからず遠くで強制労働によって栽培しなければならなかった時よりも、2～3倍の面積の栽培を実現し維持することが可能になる。」と述べ、これに基づいて現行の栽培契約延長は不要であると結論している[Bekking 1861:63-64]。

したがってこの栽培の発展には農民に対する経済的インセンティブが極めて重要であり、その盛衰は市況に大きく影響されたと考えられる。

[自由栽培企業の衰退]

この栽培は、表 6-6 の示す極めて高い凶作率から明らかなように、当時の技術水準や栽培管理システムの下では安定度が低かった⁽⁹⁾。そしてこうしたリスクに加え、60年代末からのヨーロッパにおける煙草安値は栽培を直撃した。表 6-5 に示されるように 1868年に参加企業数は 24 に減っているが、これは 3 企業が市場価格低下のため操業を中止したからだった[K.V.1869:115]。ヨーロッパの煙草価格は 71年には上昇に転じ、同年にはいったん放棄された企業の操業再開も見られたが[K.V.1872:149]、77年には再び安値を記録し、レンバンの企業の大半が赤字操業を迫られた[K.V.1878:192]。78年には状況はさらに悪化し、1企業が廃業、2企業が一時閉鎖に追い込まれ、残った企業も大半が操業を縮小し[K.V.1879:190]、79年には4企業が閉鎖された[K.V.1880:bijl.YY]。そして80年になるとほぼ全ての企業が栽培者との協定を止め、住民が自らの責任で栽培した煙草を買い上げるだけになった。この年のレンバン煙草の質は前年までよりも悪くはなかったが、ヨーロッパ市場では概して安値しか付かなかった[K.V.1881:177-179]。こうした中で、81年にはブロラ県で1企業が新設されたが[K.V.1882, bijl.DDD]、82年には2企業[K.V.1883, bijl.HHH]、83年に

は残る4企業が閉鎖され[K.V.1884, bijl.CCC]、レンバンに立地する自由栽培煙草企業は消滅した。これ以降、この地域にこの種の企業が登場することはなかった。

(9) 理事州全体では栽培の2/3が凶作となった1863年に関して、K.V.[1863:bijlY]は天候不順とともに維持管理の悪さにその原因を求めている。またK.V.[1861:bijl.AA]も、トゥバンでの1861年の栽培に関して「民間によって栽培される煙草の多くは凶作になるのが普通であるが、しばしば必要な世話がかけていることによる」と述べている。

また、企業閉鎖とも関連して1890年代初めには、レンバン理事州における煙草は「主に刻んで原住民市場向けに加工」され、「葉の形でヨーロッパへ輸送されるものは僅か」[K.V.1892:bijl.C]、「レンバンではこの栽培に従事するのは主にトゥバン、ボジョネゴロ県の農民である。そこで採れる収穫は、全て原住民市場向けである。」[K.V.1891:204]と指摘されるように、ヨーロッパ市場向け生産は一時的にほぼ姿を消すことになった⁽⁴⁰⁾。

(10) このようなヨーロッパ市場向け栽培衰退の原因について、Penders[1984:19]は「生産される煙草葉が質量ともに確実に後退したこと」を挙げ、それはヨーロッパ人企業家たちが直ぐに高利益を上げようとして、1870年代に煙草価格が1ポンド当たり1.30ギルダーという未曾有の高値を付けた時に(1860年代の平均は0.50ギルダーだった)、質や成熟度を考えず利用できる限りの葉を買い上げたことによって生じたと指摘する。同様にTabak[1925:136noot]も、自由栽培が良好な結果を出したので競争が激化し、高い前貸金が煙草の質を高めようとする農民の意欲を殺ぎ、また生産物の質の判断ができない者を多数含む買上商も質の悪い収穫に高値を付けた。加えて1875年、76年には凶作となり、政庁が食糧作物栽培を奨励したことも災いした。こうして自由栽培は縮小した、と述べている。こうした衰退がいつから始まったかは定かでないが、Waeij[1875:166~167]が「後にレンバンでは・・・多数のヨーロッパ人企業が大きな損失を出して煙草栽培から去った。ただトゥバンのRengelとボジョネゴロのPadanganだけが、小面積で質のよい煙草を産出できたが、この面積はそれによって大きな商業を行うにはあまりに重要性がなく、また土地は直ぐに枯渇した。」と述べていることから見ると、既に70年代前半には始まっていたと考えられる。

[買上げ方式への移行]

しかし、企業閉鎖後もヨーロッパ市場向け生産が完全になくなったわけではなかった。「レンバンでは立地企業がないが煙草の買上げがなされ、原住民市場向けでない部分はヨーロッパへ送られる」[K.V.1899:182~183]とあるように、買上げ商人を通じたルートが存在していたのである⁽⁴¹⁾。Gerlings[1937:456~457]によれば、20世紀初頭にレンバン煙草を輸出したのはスラバヤに本拠を置くMulder Redeker(後のKoloniale Tabak Import Mij.)とFraser Eatonなどで⁽⁴²⁾、これらと契約したレンバン在住の華人仲介業者が葉煙草の選別と買上げ、熟成とスラバヤへの輸送を担っていた⁽⁴³⁾。

(11) 同様の記述はK.V.[1900:149]にも見られる。

(12) ただし、『福祉減退調査』には「原住民によって、煙草がスラバヤのFraser EatonとボジョネゴロのH.J.J. Wamsteckerに提供される。」[M.W.H.Rembang:394]とあり、商社名が異なっている。

(13) このような域外の商社などによる煙草の買付けは既に1850年代末には活発に行われ、立地企業との間で激しい競争が展開されていた。Bekking[1861:76~77]は「競争

は数が増えた企業家相互間だけにとどまらない。スラバヤの主要商社や華人その他の商人は、毎年レンバンからかなりの量の煙草を買い上げる。1人のジャワ人商人についてのみ分かっているのは、彼が1858年に130,000ポンドの煙草をヨーロッパ市場向けに買い上げたことだ。スラバヤの商社 *Gebroeders van Delden* のある社員が言うところでは、この商社は同年、スラバヤに住むジャワ人から500,000ポンドのジャワ煙草葉を購入したが、このジャワ人はこの煙草を原住民マンドールの手でレンバン理事州とマランで生産者自身から買い上げさせたという。」と述べている。また、栽培者農民と商社とを仲介する華人商人の活動も、Twist 総督時代(1851~56年)の「内地立ち入り制限」が解除された後、1860年代初めには以下の史料が述べるように既に始まっていた。「今や華人は大量の煙草をスマラン、スラバヤの商社や特別な人たちに提供する引受人となった。この目的のため、彼らはこれらの商社や民間人と公証人が証明した契約を結び、一定期間に30万、40万、あるいは50万ポンドのヨーロッパ市場向けに加工された煙草を、15,000ギルダーまたは20,000ギルダーの前貸金を受け取る代わりに供出することを約束している。しかし、これらの華人は住民と同様に煙草の乾燥ができる小屋を1つも持っていない。彼らは協定に従って彼らのために栽培するジャワ人と接触もしない。しかし彼らは、協定された量の煙草を集める手段を見つけだせる。このために彼らはデサへ現金と阿片を持って赴く。これらの手段、特に阿片を巧みに利用することで、彼らは畑にある煙草を手中に収めることできる。企業家が25~30ギルダー払う1000本の煙草に対し彼らは10ギルダーしか使わないが、これに一定量の阿片を加えるのである。彼らの手にある呪われた阿片はかくも強力な手段なので、彼らは既にヨーロッパ人企業家が購入しその乾燥小屋に積み上げられている煙草を盗み出すよう、多数の農民や労働者を仕向けることが簡単にできる。この窃盗は当然住民にとってずっと利益多いものであり、他方で華人はこれを通じてそうでない場合にジャワ人が自分の家で彼らのために乾燥させる煙草より良質なものを入手するのだ。」

[*Toestand Rembang 1862:185~186*]

これ以降、レンバン煙草のヨーロッパ市場向け輸出は専らこのルートで行われることになり、輸出向け栽培は後述のように市場価格の高騰により再び盛んになるのである。

4. ヴァージニア煙草栽培の導入

この地域の煙草栽培の歴史を語る時に触れておくべき今一つの点は、1930年代にボジョネゴロがヴァージニア煙草栽培の中心地となったことである。

Broek[1949:544~545]によると、この時期にはシガレットが吸われるほぼ全ての国で、喫煙者の嗜好がますますヴァージニア煙草に向かいつつあった。こうした状況下で、外国産シガレット輸入関税引上げを契機に、シガレットをそれまでの輸入からジャワで大量に製造することへ方針転換した英米煙草会社 (*British American Tobacco Company : B.A.T.*) は、その原料としてヴァージニア煙草を生産することに踏み切ったのだった。

栽培の試行は1925年前後にブスキで始まり [ibid]、ボジョネゴロでの試験栽培は1928年、B.A.T.の姉妹会社のジャワ葉煙草会社 (*Java Tabaksblad Maatschappij*) の手で、県西部のデサ Maro と東部のデサ Kedoengadem の14ヘクタールの土地で開始された。そして29年から後者の地域を中心に本格的栽培が始まった⁽⁴⁴⁾。この年、B.A.T.はヴァージニア煙草の苗を農民に提供し、70ヘクタールの栽培が Kedoengadem 副郡の大半のデサと Kepoh 郡、Kepohkidoel 郡

の数デサ、Ngoempak 副郡の 1 デサで行われた [Gerlings 1937:459-460 ; Penders 1984:92-93]。

(14) Maro は収穫の多くがケルフに加工される煙草地帯にあり、ケルフの方がクロソックよりも払いが多いので、B.A.T.のクロソック用ヴァージニア煙草栽培は、当時一般的だった買上げ価格では広まらなかった。他方、Kedoengadem 周辺では主にクロソック加工が行われていたので、B.A.T.は事業を主にこの地区に集中し、そこではヴァージニア煙草の買付け価格をレンバンク・ロソックより高めに設定した [Gerlings 1937:459-460]。

もともと、栽培はようやく 33 年以降に急増した。その後の栽培面積は表 6-3 に示される通りだが⁽¹⁵⁾、B.A.T.の他に Faroka や Fraser Eaton など参入し、1940 年にはこの地方の煙草栽培面積の半分を占めるに至った。ヴァージニア煙草の栽培は他に王侯領、ジュンブルなどでも行われたが、1940 年段階でもボジョネゴロの栽培がジャワ・マドゥラの約 94%を占めていた [栗林 1941:102-103,106]。

(15) 正確にいうと、同表に掲げた以外に農民がシガレット会社と契約なしで行う「自由 (vrije) 栽培」があり、その面積は 1937 年には約 200 ヘクタール [I.V.1938:93]、38 年には数百ヘクタール [I.V.1939:102] に達した。

拡大の背景には、政庁の様々な施策があった。インドネシア内の機械製シガレット産業は、シガレット工場統制令 (Bedrijfsreglementeeringverordening sigarettenfabrieken 1935 : Stbl. No.427)^(補註)の施行命令 (1935 年 8 月) により、原料煙草の一定比率 (1940 年現在で 60%) を内地産煙草で満たさねばならなくなった。これが B.A.T.などがジャワでヴァージニア煙草栽培を促進する誘因の 1 つとなった [Ploeg 1940:625-626]。また 38 年 1 月には、ヴァージニア煙草などのアメリカ種やジャワ種のシガレット煙草に適した優良品種の種子を提供してシガレット煙草栽培を援助することを目的に、ボジョネゴロの Taloen に半官半民のクロソックセンターが設立された [I.V.1938:93; 1939:102; Ploeg 1940:626-628; 栗林 1941:103-105]。この他、後述する庶民金融銀行の融資など、栽培者に有利な条件もこの栽培拡大を支えた。

(補註)シガレット工場統制令

II、生産の特徴

1、生産方法の特徴

(1) 地域内栽培分布状況

先に 1830 年代にソロ河沿いで内地市場向け煙草の栽培が盛んだったことを述べたが、そこはそれ以降も一貫してこの地方の煙草の主産地だった。例えば 1850 年前後の時期の記事は「住民は自発的に原住民市場向け煙草を、主にソロ河河岸沿いで作っている」 [Hoëvell 1849, dl. 1:132]、1890 年経済調査の報告も「最上質の煙草はボジョネゴロ県、トゥバン県で、特にソロ河などのしばしば洪水が発生する河岸で作られる。」 [K.V.1892:bijl.C] と述べ、1920 年代前半にも「栽培は主にソロ河谷に集中し、そこから兩岸の丘陵傾斜地へと伸びている。これらの地域のほぼ全郡で、栽培は畑地でも水田でも行われる。最良の煙草は伐採した森林の肥沃な腐葉土、ソロ河や多くの支流の氾濫原でとれる。風避けされた屋敷地でも、しばしば良質な煙草がとれる。」 [Tabak 1925:137] と指摘される⁽¹⁶⁾。

(16) 同様の記事は Bleeker [1850:45]、Bosch [1853:410-411] にも見られる。

これは Walbeehm [1902:1061] が指摘するように河谷地域の土壌が肥沃なためだが、逆にいえばそれ以外の場所の土壌条件が悪いことを示している。Penders [1984:12] によれば、ボジ

ヨネゴロ地域では Pelem 郡と Baureno 郡の肥沃な河川平地を例外として、農地は概して質が悪く主に泥灰土からなり、強アルカリ性で磷酸に乏しい。大雨が降るとこの土は目詰まりして通気が悪くなり、稲は広範に根腐れを起こした。また乾季には土壌は急激に乾燥して直ぐにひび割れし、時に深さ 5 m にも達した。

煙草栽培適地がこのように偏在していた結果、レンバン理事州内では栽培は表 6-7 に示されるようにボジョネゴロ県、トゥバン県に集中し、その中でもソロ河から離れた郡では栽培はあまり盛んではなかった。

(2) 栽培用地と栽培時期

次に栽培用地と栽培時期を表 6-1 から見ると、①畑作も 19 世紀末にはかなりの比率を占めたが、基本的には水田裏作が卓越している(この点は植村[2005b]で検討したケドゥーでは畑地雨季作が比較的多いことと対照的である)、②全体に雨季作が徐々に減少し、乾季作が増加する傾向にある(この点はケドゥーの場合も同様だが、乾季作比率はレンバンの方が遙かに高い)、③耕地別に見ると、天水田での栽培が卓越している(全収穫面積の 49.6~66.1%が天水田)、という特徴がある。

これらのうち、特に③は他の煙草地帯と比べて際だっている。同時期の天水田の収穫比率はケドゥー 2.8~11.2%、ブスキ 0.0~1.0%、バニユマス 1.1~3.3%、ジャワ・マドゥラ全体でも 16.7~25.1%であり、レンバンでの天水田への集中は群を抜いて高いことがわかる⁽³⁷⁾。これは、後述する生産の不安定さの大きな原因の 1 つであったと考えられる。

(17) これは、天水田が圧倒的に多いというこの地方の耕地状況に規定されたものである。例えば 1890 年にはレンバン理事州の天水田は全耕地の 73.8%を占めるが、この比率はジャワ・マドゥラの理事州の中で最も高い。逆に流水灌漑田は 7.9%に過ぎず、マドゥラ 3.0%に次いで少ない。ちなみにジャワ・マドゥラ全体では天水田比率は 28.2%、流水灌漑田は 47.5%である。詳しくは K.V.[1891:bijl.QQ]を参照。

(3) 栽培スケジュール

次に、ボジョネゴロ県の栽培スケジュールを表 6-8 から見よう。県全体では作付は 6 月から本格化し、7~8 月がピークで 9 月頃まで続く。煙草栽培が盛んな 4 郡の中では Bodjonegoro 郡と Baoereno 郡で作付がやや遅いが大差はなく、基本的には乾季作付である。したがって収穫は雨季の到来とともに本格化し、11~12 月がピークで 1 月にはほぼ終わる。前稿で検討したトゥバン県の場合にはボジョネゴロに比べ作付期間がやや長く、4 月に始まり 5 月にかなりを植える。だから収穫開始も 2 ヶ月ほど早い[植村 2007:表 8, 9]。またケドゥーと比較すると、レンバンの作付期は全体に約 2 ヶ月遅く、収穫期もやや後ろにずれ込んでいる(ケドゥーに関しては植村[2005b:表 8, 9]を参照)。

以上に述べたのはいわゆるレンバン煙草の場合だが、ヴァージニア煙草の栽培スケジュールは一般に 2 ヶ月程度前倒しになり、3~4 月に播種し(最適の播種時期は 3 月中旬以後)、5~6 月に移植するのがふつう(最適の移植時期が 5 月または 6 月前半)だった。この煙草の場合、最上質のものを得るためには雨が来る前に収穫し終わらねばならないからだという[Gerlings 1937:468 ; 栗林 1941:105~106 ; Soejoed 1937:472, 473~474]。

(4) 栽培方法(加工まで)

先ずレンバン煙草について、Tabak[1925:138~141]の記述をもとに概観しよう(トゥバンにおける栽培方法については植村[2007a]を参照)。輪作は、水田乾季作では「煙草→米また

は裏作物→煙草」の順番がふつうだった。

農民は自分の苗床を造成し、自分の栽培から採取した種または土壌の状態が同じである近隣の土地での収穫から得た種を播く。苗床は畑地や屋敷地では2～3月、水田では4～5月に造成が始まる。移植はボジョネゴロではバウ当たり17,000本と密植するが、トゥバンでは可能な限りケルフに加工するため5,000～6,000本と少ない。肥料は大量の厩肥を用いるケドゥーとは対照的にほとんど使わず、苗床に灰、畑地の植穴にごく少量の厩肥を施すだけである。

収穫は葉摘みで、熟成度に応じて下の方から始められる。ケルフに加工する場合には2回に分け、1回目は砂葉(zandblad)と脚葉(voetblad)(クロソック用)を、その後残り(ケルフ用)を収穫する。クロソックを多く作りたい時には、収穫はクロソック用の砂葉、脚葉、中葉(middenblad)と、唯一ケルフにする最上葉(topbladeren)の4回に分けて行う。その後、クロソックに加工する場合は葉を天日乾燥し、そうでなければ収穫直後に生葉のまま椰子の葉で粗い目に編まれた籠に入れて販売するか、農民自身の手でケルフに加工する。加工方法はケドゥーの場合と同様だった。

次に、ヴァージニア煙草について見よう。輪作方式は畑地では、煙草はトウモロコシ、落花生、大豆や若いキャッサバのラブハン(laboehan:西モンスーン前)栽培の後に来る。水田では、西モンスーン稲の後⁽¹⁸⁾に作られた[Soejoed 1937:475]

(18) Bagchus [1929:103~104]によれば、レンバン理事州の稲収穫のピークは4～6月で、順に年間収穫面積の16.4%、41.7%、30.7%を占める。

レンバン煙草との最大の違いは、苗が買付会社の手で育てられ、農民に販売されたことである。栗林[1941:105~106]によると、1000本当たり18本ほどだった。B.A.T.の場合には、毎年アメリカ合衆国からヴァージニア煙草の種子を輸入⁽¹⁹⁾してそれから苗を育て、そこから得られた煙草は同社に売ることを条件に農民に供給していた[Soejoed 1937:474]。

(19)この理由はWanrooy[1940:635]によると、ヴァージニア煙草はジャワでは劣化し、栽培から取られた種子は劣った性質を受け継ぐと信じられているからである。

栽培に際しては企業側から様々な指示が出された。例えばB.A.T.は移植に際して、「中心間の距離が2mの畝に、先ず鋤(patjol)で植穴を掘る。すなわち1m間隔で2列にし、各列の苗と苗の間隔を70cmにする」[Wanrooy 1940:639]よう要求した⁽²⁰⁾。ヘクタール当たりの作付本数は11,000~12,000本だった。栽培は、買付け会社の技術員が現地に滞在して指導監督した。収穫も会社の指示に従って行われ、一部は青葉で、一部が耕作者が乾燥させた後に買い上げられた[栗林 1941:105~106; Ploeg 1940:625~626]。収穫された葉はクロソックに加工されるが、その方法は一般の煙草と同じだった⁽²¹⁾。

(20) Soejoed [1937:479]によるとややこれとは異なり、水田では畝の中心間隔は1.2~1.5m、畝と畝の間に幅と深さが20~25cmの排水溝を造ることが求められた。また水田でも畑地でも、土地は3~4回鋤をかけて土塊を砕くこと、その後を作る植穴は深すぎないこと、それぞれの植穴に排水溝に向かって出口を作ること、各畦には80~90cm間隔で2列に植えるが、列内での植穴と植穴の間隔は70~80cmにすることなどが指示された。

(21)加工法の詳細はSoejoed [1937:479]を参照。

(5)栽培の不安定

さて、収穫面積が年毎に極めて大きく変動することを見てきたが、その主な原因の1つは凶作の頻発にあった。レンバンでは強制栽培制度下の1840年代末～50年代初にかけて毎年のように早魃や豪雨による煙草の凶作が報告されているし[K.V.1849:219; 1850:77; 1851:131~132; 1852:109]、その後もそれは頻発した。例えば表6-3に従うと、1900年、01年の収穫面積は1899年と比べ激減しているが、Walbeehm[1902:1060]はこの3年間のトゥバン県、ボジョネゴロ県の収穫面積を水田、畑地に分けて表示している。表6-9はそれをもとに作成したものだが、水田作の減少が著しい。この理由については次により述べられる。「主な原因は、煙草ほど気象条件に影響される住民栽培はないということにある。1900年、1901年の気象条件は異常に悪かった。Djatirogoの監督官が駐在するWotsogoでは、1900年の5月、6月そして7月前半にまでも雨が続き(6月雨量は45mm)、水田が湿気を帯びていたため煙草苗の移植ができなかった。1901年も同様で、Wotsogoでは6月に109mmを越える雨が降った。7月末にかけて土地は次第に乾いていったが、この時には苗は移植するには成長しすぎていた。雨が土壌をそれほど湿潤にしない畑地の数字に対しては、この天候不順は表からも明らかなように、あまり影響を与えていない。」[Walbeehm 1902:1061]

この他にも、凶作記事は1908年[K.V.1909:237]、1909年[K.V.1910:205~207]、1910年[K.V.1911:204~206]、1926年[K.V.1927:170~171]、1930年[I.V.1931:122]、1936年[LL.1936:738]、1937年[LL.1937:812, 1750]、1938年[LL.1938:1772]など、枚挙に暇がない。原因としては豪雨や洪水による苗床の流失、早魃が挙げられている。

特に1930年代末の凶作は大規模だったようで、ボジョネゴロ理事州全体の凶作面積は37年8,700ヘクタール、38年2,000ヘクタール、39年2,800ヘクタールを記録し[LL.1939:720]、栽培面積(収穫面積+凶作面積)に占める比率(凶作率)は順に22.3%、8.1%、12.2%になる⁽²²⁾。

(22)1938年の凶作面積はLL.[1939:720]によると2,700ヘクタールであり、これに従えば同年の凶作率は11.0%になる。

それでは、この数値はどのように評価すべきだろうか。いまBagchus[1929:252*~255*]の数字にもとづいて、煙草栽培理事州の1920~25年平均栽培面積に対する凶作面積の比率を算出すると、次のようになる。

プリアンゲル 0.2%(凶作面積 8 バウ/栽培面積 4,508 バウ)、スマラン 1.1%(99/9,053)、レンバン 4.3%(1,972/45,626)、トゥバン県 3.2%(446/14,062)、ボジョネゴロ県 4.5%(1,137/25,541)、ケドゥー 0.4%(116/31,286)、ジョクジャカルタ 1.5%(52/3,442)、スラカルタ 2.0%(106/5,318)、クディリ 3.0%(312/10,395)、プスキ 0.4%(69/19,522)、パスルアン 0%(0/12,155)、バニユマス 0.3%(34/12,890)、マドゥラ 0.1%(9/7,044)。

レンバン理事州の異常な凶作率の高さは顕著であり、それは特にボジョネゴロ県で著しい。このことはソロ川流域の洪水の多さや、先に見た土壌条件の悪さ、天水田の卓越など、煙草栽培をめぐる条件がよくなかったことの当然の帰結だったといえよう。

2. ケルフとクロソック

これまで述べてきたように、この地域では内地市場向けケルフ煙草とヨーロッパ市場向けクロソックの両方を生産してきた。それでは両者は如何なる関係にあったのだろうか。

まず述べるべきは、理事州内で表6-10に示されるような地域差があることである。そしてTabak[195:141]によると、良質なケルフが得られる所ではクロソックの質が悪く、ケ

ルフの質が悪い所ではクロソックの質が良いという。

しかし、より重要なことは両者に互換性があり、価格によって農民がいずれかを選択したことである。Gerlings[1937:456]は「住民がボジョネゴロ理事州で古くから栽培してきた煙草は、市場では「レンバン煙草」として知られている。この栽培では、同じ栽培から刻み煙草も葉煙草も得られるが、それらはそれぞれラジャンガン(ケルフ)、クロソックとして商われる。そうすることによって、住民はその煙草をもしクロソック価格が低いときにはケルフに加工することができ、ケルフの価格水準が低下すれば直ぐにクロソック加工に移行することができる。」と述べている⁽²³⁾。

(23)同様の傾向は他地域でも見られた。例えば Landbouwatlas[1926:166]は、「ケドゥー平原ではクロソックが非常に重要になり始めているが、レンバンも大量に産出する。東ジャワではしばしばクロソックがケルフよりも重要である。両者は概して同じ比重を占める。クロソックが高値の時には、多くの煙草がケルフ加工から回される。安値の際には、刻みが大半を使用する。ケルフ煙草は長く保存可能だが、クロソックはそうでない。だからケルフ煙草は原料品として保存可能である。」と指摘している。

それではこの選択はどのように行われたのだろうか。Tabak[1925:137~138]は 1920 年代前半までの時期について、大要次のように述べている。すなわち、ヨーロッパ人煙草企業が消滅して以来、レンバンの栽培は主にケルフに向けられてきたが、第一次大戦直前とその前半期にオランダ市場でクロソック価格が高騰した結果クロソックが急増し、それまで 20,000 梱を越えなかったレンバン・クロソックのオランダ向け輸送量は 1912 年収穫 52,106 梱(価格は 1/2kg 当たり 11.75 セント)、1913 年収穫 52,288 梱(10 セント)、1914 年収穫 32,050 梱(15.5 セント)、1915 年収穫 142,200 梱(31 セント)を記録した。しかし、第一次大戦末期の船舶輸送の困難と食糧不足問題、そして不況による需要の少なさの結果、クロソックは再び減少した。ところが 1923 年にはクロソック需要が急拡大したので大量に生産され、「専門家からの情報では、現在、ほとんどの栽培でケルフにするのは最上葉 5~6 枚だけであり、残る約 75%はクロソックにする」状況だった。

出荷量には表 6-11 の数値と若干食い違うところもあるが、刊行された各時期の史料の記述を追ってもこの通りの説明になる⁽²⁴⁾。ただ、ここでは 2 つほど付け加えておきたい。

第 1 は船腹不足や食糧問題、不況によってクロソックが減少したとされる 1910 年代後半から 20 年代初めにかけて、農民がどのように対応したかという問題である。改めて表 6-3 でこの時期の収穫面積を見ると、価格が高騰した 15 年の次の 16 年も収穫はさらに拡大したが、17 年には激減している。しかし 18 年、19 年には 15 年の水準を上回り、その後もそれほど目立った減はなく 24 年に激増している。

(24)管見の限り公刊史料におけるこの問題に関する記述は決して多くはないが、1890 年については K.V.[1891:204;1892:bijl.C]、94 年は K.V.[1895:bijl.QQQ]、1909 年は K.V.[1910:205~ 207]、1910 年前後は Blink[1912:319~320]、1910 年代後半期は V.H.N.L.[1915:220;1919:134,252, 256]、K.V.[1916:233; 1917:235; 1918:229; 1919:263; 1920:256, 260~261, 299~300]、20 年代前半については V.H.N.L.[1921:195]、K.V.[1925:166~168]、Fruin[1923:352~353]、20 年代後半に関しては K.V.[1926:175~176; 1927:170~171; 1928:163~164]、Smits[1926/27:293, 295~296]、1930 年代については I.V.[1935:53~54; 1936:70; 1937:71~73, 87]、I.L.[1934:1221]、L.E.V.[4e kwrt.1934:334]などがある。以下の記述では、若干の未刊行史

料も利用した。

16年の拡大は、この年の前半までヨーロッパ市場におけるジャワ産煙草の高値が続いた結果、ジャワ全体でも栽培が15年の20万バウから16年には23万バウへとさらに拡大した)[Nota beperking 1918]ことから見て、容易に理解できる。作付時期にはなお高値が続いていたのである。またこの兩年には高値の影響により、トゥバン県では住民による煙草の輸出商業も活発だったと報告される[K.V.1916:233; 1917:235]。したがって、この年の栽培拡大を主導したのはクロソックであり、ケルフは減少した可能性がある。

しかし16年頃から船腹不足が次第に深刻になり、ドイツ、イギリスが輸入制限を実施した結果、ジャワ煙草の輸出は困難になって17年初めには大量の滞貨が発生し[V.H.N.L.1916:113~114,119; 1917:119]、政庁は2月には各理事州理事に煙草栽培縮小と他作物への転作の必要を指示するに至った[GS 1917 no.37x]。そして18年1月には、ますます深刻化する船腹不足と滞貨の累積から18年産煙草の船積みがほとんど不可能だと判断し、実際に生産縮小を指示した[GS 1918 no.2x]。こうして16年には23万バウあったジャワ・マドゥラの住民煙草収穫面積は17年134,000バウ、18年145,000バウ[Nota beperking 1918]、19年には140,072バウ[K.V.1920:256]へと大きく縮小した。

このような状況下で、レンバン理事州やその付近の煙草に大きな変化が生じたことは、次に掲げるS.J.S.の1916年第3四半期輸送報告が具体的に物語っている。

「S.J.S.沿線ではGrobogan(スマラン)とBloraにおける豊作で輸送が激増し、特にDjepon(ブロラ)とWirosariが極めて大量の煙草を搬出した。当初、価格は非常に良好で、ヨーロッパにおける需要は極めて大きく、屑煙草の輸出さえ利益をもたらした。しかし、煙草のオランダ向け輸出が制限されるというN.O.T.の声明が届いた後には、パッサール価格は1ピコル当たり20ギルダーから5ギルダーへと暴落した。」[S.J.S., D.R.V., 3e kwrt. 1916]

この地域では、16年後半に煙草価格が暴落したのである。加えてボジョネゴロ県やトゥバン県でも17年には煙草輸出が困難になり[K.V.1918:229]、これに対して「内務部によって住民に対して、輸出困難との関連で煙草を多く作りすぎないようにとアドバイスが行われた」が、「その影響は煙草栽培面積から明らかに看取される」[S.J.S., D.R.V., 3e kwrt. 1917]とあるように、政庁側から栽培縮小の働きかけが行われた。これが、レンバンの17年栽培が激減した背景だった⁽²⁵⁾。

(25)V.H.N.L.[1917:240~241]も、レンバンでは17年の東モンスーン季栽培が16年と比べてずっと少なかったのは、行政側からの栽培制限勧告と、雨が多くて土地耕起が困難になり、植えたばかりの苗が駄目になったからだという。また、この年には一般にケルフに対する需要が非常に大きく、価格は前年比50%増だったという。

ところが18年半ばからオランダでは原料煙草不足が深刻化し、8月頃からジャワ・クロソックの需要が拡大し価格が急騰した[V.H.N.L.1918:103~105]。そしてこの高値は19年も維持された[V.H.N.L.1919:134; K.V.1920:260~261]。またS.J.S.輸送報告によれば、1918年第3四半期にはケルフ煙草にも1ピコル当たり200ギルダー、以前の80~90ギルダーの倍以上という異常な高値が付いた。これはジャワ内でのシガーやシガレット製造が激増した結果、ケルフに対する需要が拡大したからだという[S.J.S., D.R.V., 3e kwrt. 1918]。第一次大戦で輸入が困難になった製品煙草を代替するものとして、この時期にケドゥーやレンバンなどを

中心に急発展した製品煙草製造業からの需要が急増した結果だと考えられる⁽²⁶⁾。加えて、この時期には後述するクドゥスのストローチェ産業の発展によるレンバン煙草の需要拡大もケルフの高値を支えたと思われる⁽²⁷⁾。同時に 18 年には「ボジョネゴロ県では船腹不足のためにクロソックの搬出が減った」[K.V.1919:263]ともいわれるから、この年の栽培面積の回復はケルフが牽引したと考えられよう。

(26) この時期のジャワ製品煙草産業の発展については、植村[2006:42~45]を参照。

(27) 1918 年にレンバン煙草がどれほどクドゥスのストローチェ産業へ供給されたかを示すデータは入手できなかったが、後に見るように 19 年には 520 トン余りが軌道輸送されており、このように推測することは十分可能だと思われる。

ところが船腹不足は煙草の輸出困難に加えてジャワの食糧問題を深刻化させ⁽²⁸⁾、政庁は再び煙草の栽培制限を構想することになる。政庁の 18 年 12 月 12 日付け覚書[Nota beperking 1918]は、クロソック市場の展望は良好なので、政庁が制限策を実施しないならば住民は輸出向け煙草が大規模に栽培されてきたブスキ、パスルアン、クディリ、レンバン、ケドゥーなどで、1919 年に煙草栽培を非常に大きく拡大し、食糧生産に悪影響が出るだろう、と懸念を表明している。そして、19 年産煙草の栽培が始まる 3 月に栽培制限が指示された[GS 1919 no.73x]。

(28) これについては植村[1998]、UEMURA[1999]を参照。

しかし、この年には「住民は煙草の栽培に適した全地方で、良好な価格見通しに刺激されて大面積の後期作煙草を作付けした。」[V.H.N.L.1919:252]とあるように、この政策は貫徹しなかった。レンバンとその周辺の煙草についても、S.J.S.輸送報告によれば「収穫は昨年と打って変わって豊作だった。加えて、この作物の栽培は現在支払われている異常な高値に特に影響を受けた。」「煙草の収穫は特別に豊作だった。他方、栽培面積は前年をずっと上回った。これは最近付けられている高価格と関連がある。1917 年収穫の搬出が同年 11 月にはほぼ終わったので、いま 1919 年 3 月には 1918 年収穫が精力的に搬出されている。」[S.J.S., D.R.V., 1e kwrt. 1919]という状況だった。19 年の栽培拡大にはこのような事情があったのであり、クロソック加工が増加したと推定される。

ところが 1921 年には不況の影響を受け、「レンバンでは、煙草栽培者は葉をクロソックにではなくケルフに加工する方がずっと有利だった。クロソック取引は、ここではほとんど停止した。」[V.H.N.L.1921:195]とあるように、ケルフが増加したと思われる。

次に 1924 年以降の事態の推移についても、30 年代半ばまで可能な限り検討しておこう。表 6-11 からレンバン・クロソックの価格の推移を見ると、23 年に急騰した後 24 年、25 年に大きく下がり、その後 30 年まではほぼ同一水準にあったが 31 年に暴落し、以後は低水準で終始している。23 年の急騰は投機によるものだったが[Smits 1926/27:295~296]、これが 24 年の栽培面積と 23 ~ 24 年のオランダ向け出荷量の激増を導いたことは間違いない。しかしこの投機はよい結果を出さず、クロソック価格が低下した結果、25 年には栽培面積、出荷量とも大きく減ることになった。こうした中でケルフの買上げ価格も 24 年には暴落して 1 ピコル当たり 30~80 ギルダーになり[K.V.1925:166]、25 年にも再び低下した[K.V. 1926:175~176]というから、少なくとも 24 年にはクロソック加工が主流だったと推定される。いずれにせよ、20 年代半ばについては Smits[1926/27:293]が「レンバン、パスルアンのようないくつかの地方ではほとんどクロソックだけを産するが、ケドゥーやマドゥラでは

ケルフ煙草が主流である。」と述べている所から判断する限り、クロソックが多かったようだ。20年代後半については史料がなく、何れが多かったかを推定するのは困難である。

恐慌期に入ると、レンバン・クロソック価格は31年に暴落した。これが32年の出荷量激減、32~33年の栽培縮小の原因だったと思われる。とすれば、クロソックの販路を十分に確保することは難しく、30年代前半にはケルフが多かったと考えられる。実際、34年には「ボジョネゴロではクロソックに対する需要が少なく、上質品のみが関心を集めた。それゆえ人々は他の年にもまして煙草をケルフに加工した。B.A.T.、Faroka シガレット工場の買上げは、ここでも市場を支えた。・・・住民ケルフ煙草の市場は、この時期の状況に鑑みるならばよい状態を保っていた。・・・ボジョネゴロでは本年はケルフ生産が極めて多かったが、主収穫時に価格が大幅に下降した。報告年の最終四半期にはキンタル当たりで1級品が14.60ギルダー、2級品8.10ギルダー、3級品4.05ギルダーで、前年よりずっと低かった。」[IL.1934:1221]とあるように、クロソックは減りケルフが増加した。

しかし、この史料の最後に述べられる年後半期のケルフ価格の大幅下落によって、翌年には変化が生じた。「レンバン煙草の価格は1935年、非常に低かった。緑葉の買上価格は前年を25~60%下回った。クロソック価格は100kg当たり1.25~7.50ギルダーであり、ケルフ煙草は2~25ギルダーだった。この非常に安いケルフ価格のため、多くの農民は煙草をクロソックにする方が利益が大きいと考えたので、その加工が激増した」[I.V.1936:70]のである。しかも、クロソックの販路はヨーロッパ市場だけではなくなった。「喜ばしい現象は、ジャワ・クロソックに対して国内煙草工場の関心が増加したことである。ボジョネゴロとマドゥラで買付を行っているB.A.T.の他に、本年はFarokaが市場に参入し、特にブスキで22,000ピコルの前期作煙草を買い付けた」[L.E.V.,4e kwit.1934:334]とあるように、34年からB.A.T.やFarokaなどのシガレット企業が原料煙草としてクロソックを本格的に買上げ始めたのである。このことも、クロソック加工の増加を支えたと考えられる。

以上見てきたように、住民は複雑な要因が絡み合って生じる価格の上がり下がり敏感に反応し、ケルフとクロソックを作り分けてきた。しかし、1930年代になるといま1つの選択肢、すなわち次に述べるヴァージニア煙草の栽培が本格化することになる。

3. ヴァージニア煙草拡大の意味

この煙草の栽培拡大の経緯と背景については既に述べたので、ここではそれが農民にとってどのような意味を持ったかを考えておきたい。結論を先取りすれば、この栽培は不況の続く1930年代にあってはとりわけ有利だった。

その第1の理由は、支払われる価格が有利だったことである。この煙草を導入するに際しジャワ葉煙草会社はKedoengademではレンバン・クロソックより高い値を生産者に払ったが[Gerling 1937:459]、価格はその後も一般のクロソックより高めに設定された。例えば1937年の100kg当たり価格はボジョネゴロ・ケルフ6.48~64.77ギルダー、レンバン・クロソック3~16ギルダー、ヴァージニア・クロソック5~40ギルダー、ヴァージニア煙草緑葉1.62~6.48ギルダー、レンバン煙草緑葉0.49~5.26ギルダーだった。しかもこの年は「レンバン・ケルフの価格上昇は、レンバン・クロソックより激しかったが、ヴァージニア煙草の価格は殆ど変わらなかった。この結果、ヴァージニア煙草に対する意欲はやや減退した。」[I.V.1938:79]とあり、価格差は縮まっているから、以前にはもっとヴァージニア煙草の方が有利だったと考えられる。また栗林[1941:105]も、近年の買上げ価格は平均5.5~6セン

ト/kgであるが、「農家の収入は乾季に栽培される他作物よりも遙かに多い」と述べている。

第2に、ヴァージニア煙草には「生産物の販売は巨大シガレット工場との供出契約により保証されている」[Ploeg 1940:626]とあるように、販売が安定していた。実際、「ヴァージニア煙草は B.A.T.により買い上げられ、この3年にはずっと量は少ないものの地域の買上者も買い上げている。彼らはレンバン煙草もヴァージニア煙草も買う。後者の煙草は未乾燥葉として、またクロソックとして買われる。地域の商人が付ける値段は B.A.T.より安いので、農民たちは出来る限り B.A.T.へ売ろうとする。自分で得た種(もとは B.A.T.の苗による)からヴァージニア煙草を栽培する農民が、その生産物を、B.A.T.のヴァージニア煙草を作っており B.A.T.の栽培カード(aanplantkaart)を持っている友人を通して、B.A.T.の倉庫へ販売のために供出させることさえある。こういった販売は供出量からみるとささやかだが、B.A.T.が競争者よりも高い価格を払っていることを示している。」[Gerlings 1937:465]というように、基本的には B.A.T.が高値で買い取ってくれたのである⁽²⁹⁾。

(29)もし B.A.T.が受取りを拒否するような粗悪品を生産した場合でも、「現在、農民がヴァージニア煙草を未熟なままで収穫した時、B.A.T.による買上げ拒否はもはや彼は完全な損失ではない。その場合、その産物を他の買上げ者に(ずっと安い価格ではあるが)売ることができるからだ。これにより B.A.T.の外側に粗悪なヴァージニア煙草の市場ができた。すなわちジャワのより小規模なシガレット製造業者たちであり、彼らがこの粗悪品を加工するのだ。」[Gerlings 1937:461]とあるように、販売は可能だった。ただし 1938 年からは法令で一般買付けが禁止され、耕作者の売渡し相手は苗供給者に限定された[栗林:108~109]。

第3に、栽培者は庶民金融銀行から有利な条件で融資を受けることができた。ヴァージニア煙草の栽培では最初の摘葉は米収穫の3ヶ月後に行われ、その間の農民の収入はごく僅かなので、ポジョネゴロ県銀行が B.A.T.の栽培者に対して煙草 1000 本当たり 1.5 ギルダの基準で融資を実施することが同行と B.A.T.の間で取り決められたのである。この場合、利子支払いは B.A.T.が負担し、B.A.T.は葉の買上げ時期に煙草供出者に対して払うべき金額の一部を支払い、残りを銀行に融資の返済分として預け入れて、この融資の徴収に協力したという[Gerling 1937:460~461 ; Penders 1984:93~94]。

このように 1933 年以降クロソック輸出が激減し、またクドウス市場を喪失するという状況下で、ヴァージニア煙草はそれに代わる貴重な収入源だったといえよう。

III, レンバン煙草の流通

1. 販売先とその変化

この地域で生産されるクロソックは、一貫してスラバヤ経由でオランダへ輸出されたが、その量は表 6-11 に示した通りである。他方、内地市場は多様で、時期により変化した。そこで移出先の概要をつかむため、公刊史料の記述から表 6-12 を作成した。

特徴的なことは、①ジャワ内では中・東部が主たる市場で、バトゥール煙草やケドゥー煙草とは違って西ジャワには送られておらず、②外領への移出が盛んだがボルネオが中心で、バトゥール煙草のようにスマトラへは送られていない、つまり西の方には市場を持っていないこと⁽³⁰⁾、③ B.A.T.、Faroka などのシガレット工場への原料供給、そして、④クドウスのストローチェ産業との関わり、であろう。

(30)ケドゥー、バトゥールなど中ジャワ山間地域産の煙草の流通については、別稿で詳しく論じる予定である。

これらのうち、①は中ジャワ山間部産煙草との間で地理的位置関係や道路、水路、後には鉄道などの交通手段の利用可能性の違いなどが原因となって、一種の市場分割が自ずとできていたからだと考えられる。また②はレンバンがプラウ就航の中心地の1つであり⁽³¹⁾、ボルネオとの関係が従来から密だったことが背景にあらう。③については既に触れたので、以下では④についてやや詳しく述べてみたい。

(31)例えば Bleeker[1850:46]は、レンバン理事州の「商業は重要性がないわけではない。1846年の商船隊は小さな船以外にバーク船が14艘、ブリグ型帆船が1艘、スクーナー5艘で、合計1,465ラスト(lasten)になる。この船腹容量はバタヴィア、スマラン、スラバヤを除くジャワの他理事州の商船隊を遙かに上回る。商船隊の総船腹容量が1841年に947ラスト、1836年には僅か531ラストだったことと思えば、近年、レンバンの商業は拡大したといえる。煙草、コーヒー、砂糖、カネール、チーク材が主要移出品であり、ガンビルが主要移入品である。」と述べている。なお引用中のラストは2トンに等しい。

クドゥスでストローチェ製造が始まったのは通説によれば1880年頃で、初期の状況は不詳だが、1910年代後半には大きく発展した⁽³²⁾。そしてこの産業は「大量の煙草をストックする必要もない。定期的にマゲラン、スマラン、ボジョネゴロなどの商人から供給されるからだ。」[Tabak 1925:197]とあるように、主にケドゥーやスマラン、レンバン産の煙草を原料に用いた。これらは産地の最寄り駅からS.J.S.を経由してクドゥスへ運ばれたと思われるが、Mangoenkoesoemo[1929:31]はS.J.S.文書に依拠して1919~28年の発駅別クドゥス向け輸送量を鉄道会社毎に3分して表にまとめている。それを産地別に組み直して作成したのが表6-13である。

(32)このことの証拠となるのが、S.J.S.の1910年代の輸送記事にクドゥスへの煙草輸送増加を示す記事が目立ち始めることである。例えば1915年第4四半期報告(S.J.S.,D.R.V., 4e kwrt.1915)は「クドゥスの産業は大量の煙草をケドゥーから受け取った」、16年第3四半期報告(S.J.S.,D.R.V., 3e kwrt.1916)には「トゥマングンとマゲランから、大量の煙草がクドゥスへ統治のストローチェ工場のために送られた。」とある。

原料煙草の産地は大きく(a)ケドゥー、(b)レンバン、(c)北海岸(特にスマラン近郊)に三分できるが、先ずクドゥスへの輸送量合計の変動の大きさが目立つ。いまその背景全てを説明はできないが、26、27年の増加はライバルである機械製シガレットが用いる巻紙に輸入関税が課せられた結果、その生産が一時的に後退し、クレテックの増産を導いたことの反映だと思われる⁽³³⁾。28年の減は、もう1つの重要原料のザンジバル産丁字が凶作で価格が異常に値上りしたため、クドゥスの生産が減少したことと関係があらう⁽³⁴⁾。次に産地比率を見るとケドゥーがほぼ7割、レンバンが2割弱から3割を占めている。

(33)特に1927年の増加が目立つが、これはこの年にクドゥスのストローチェ産業が大発展したからだという。Jaarverslag S.J.S.[1927:5]を参照。

(34)これについてはさしあたり植村[2006]を参照。

さてクドゥスへ輸送されるレンバン煙草の量は、1927年までは増減はあるものの増加傾向にあった。ところがMangoenkoesoemo[1929:30-31]は、20年代末にはクドゥスの産業に

どってレンバン産煙草の意義は低下しているとも指摘している。そして 30 年代半ばになると、「ボジョネゴロ県やトゥバン県から来る煙草は今ではもうクレテック産業では使われない。品質が設定された要求を満たさないことに加え、とりわけケドゥー煙草が安いからだ。前者の煙草はクドゥスでは噛み煙草としてか、あるいは自分でストローチェを巻き、巻くべき煙草の質をそれほど気にしない人に小売りされる。」[Soenario 1935:16]とあるように、ケドゥー煙草によって完全に凌駕され、クレテック原料としては使用されなくなった。

このことの意味はレンバン煙草の総生産量に占めるクドゥス向け輸送量の比率が不明なので確定し難いが、ともかくレンバン煙草は別の捌け口が必要になったことを意味した。

2. 煙草の買上げシステム

では、煙草は生産者からどのようにして買上げられたのだろうか。1920 年代初めのレンバンでは、生産者の販売には①自由市場(パッサール)で売る、②企業家・買上者(ngider)のところへ搬入する、③デサを訪れる買上者の仲介者(ウェリジョ welidjo)に売る、という 3 つの方法があったが、収穫の大半は①によって商われた[Tabak 1925:150]⁽³⁵⁾。

(35) Walbeehm [1902:1065]によれば、トゥバン県では①で売られるのは劣等品だけで、家計に現金の必要があるかないかに応じて母や妻の手で売られた。他方、良質のものは保存して買上げ者が来るのを待ったという。

こうした買上げに際してケドゥーなどでは一般的だった前貸は、「以前には頻繁に行われたようだが、栽培者が現在多くをクロソックにも加工しており、煙草はラジャンガン用としての価値が下がり前貸し供与者のリスクがあまりに大きくなったので、大きく減少した。」[Tabak 1925:149]とあり、20 年代初めにはほとんど行われていなかった。レンバンでは、ほぼケルフ加工に特化していたケドゥーとは異なりクロソックをも製造していたことが、この差となったのである⁽³⁶⁾。

(36) 対照的に庶民金融銀行の融資は盛んで、トゥバン銀行は 1924 年に約 7 万ギルダを 900 人ほどに貸し付けていた(1 人当たり平均 75 ギルダ、ただしこれらが全て煙草栽培のためだとは限らない)。またボジョネゴロ県銀行も次のような金額を貸し付けている(同様に全て煙草栽培のためだとは限らない)。1923~24 年の減少は煙草価格高騰のためだったという。詳しくは Tabak [1925:150]を参照。

年	ギルダ	年	ギルダ	年	ギルダ	年	ギルダ	年	ギルダ
1915	94,626.5	1917	119,899	1919	161,619	1921	188,131.5	1923	34,992.5
1916	160,091.5	1918	105,092.5	1920	206,131.5	1922	152,743	1924	30,538

以下では、こうした買上げの実態をクロソックとケルフに分けて、いま少し詳しく検討してみたい。

(1) クロソック

クロソック買上げに従事したのは華人を中心とする仲介商人で、煙草は彼らの手を通して輸出商社へ送られた。Beteekenis [1915:338]によれば、トゥバン県でこれに従事する最大規模の商人は県都、Rengel と Bangilan に住み、スラバヤのヨーロッパ人輸出商社と取引していた。1930 年の理事覚書によれば、華人買上商は供出された葉をヨーロッパ人商社のために倉庫で乾燥させ包装した後、蘭印鉄道会社(Nederlandsch-Indische Spoorweg Maatschappij、以下 N.I.S. と省略)でスラバヤへ送っていた[MvO Bodjonegro-Toeban 1930:11]。30 年代末のボ

ジョネゴロでは、華人買上商最大手の Liem Tjhioe Hiok (Bowerno 在住)は、この地方の華人が扱うレンバン煙草の7割を取り扱っていたという[栗林 1940:92]。もっとも、「クロソック煙草は栽培者の家でウェリジョの手によって彼の華人ボスのために買い上げられ、華人買上商の倉庫かヨーロッパ人買上商の熟成倉庫へ運ばれる。ここで周知の加工が行われる。」[Tabak1925:151]と述べられるように、実際の買付けはその手先の仕事だった⁽³⁷⁾。

(37) 買上げ商にはジャワ人もいた。トゥバン県では M.W.L.Rembang[:213,215]によるとハジも参入している。

他方、これらの華人からレンバン煙草を受け取るスラバヤの代表的な商社が Fraser Eaton であり、同社は 1910 年にトゥバン県 Rengel 郡に乾燥倉庫 2 軒を建設している [K.V.1911:204~206]。また 20 年代初めには、ほぼ全てのヨーロッパ人買上げ企業が煙草買上げのためにレンバンで 1 つの組織を立ち上げ、栽培が盛んな地域の東部を中心に倉庫を建設し、煙草を船積み可能な形に加工していたが、最大のヨーロッパ人買上商社(これは Fraser Eaton のことであろう=植村)は倉庫 79 軒を使用していた [Tabak 1925:138]。同社は 30 年代末にも、Klomp 植民地煙草輸入会社 (Kol.Tabak Imp.Mij.v/h G.Klomp)、煙草輸出入会社 (Tobak Expt Imp. Mij.) とともにレンバン煙草を取り扱う代表的商社だった [栗林 1940:92]。

(2) ケルフ

ケルフの取引は、「主に華人が支配している。しかし Bodjonegoro 県では多数の裕福なハジも参入している。」[K.V.1892:bijl.C]、「煙草は全て原住民市場向けに加工され、華人と原住民の手で買い上げられる。ヨーロッパ人買上者はいない。」[K.V.1895:bijl.QQQ]とあるように、華人が支配的な地位を占め⁽³⁸⁾、ジャワ人商人も参入しているが、クロソックと異なってヨーロッパ人の関与はない。

(38) 華人の活動が盛んだったことは、1910 年代初め頃ボジョネゴロに大華人居住区があり、住民煙草を買い上げる華人商人が居住していた [Blink 1912:320] ことから明らかである。従来、華人はデサへの立入を禁じられていたが、Walbeehm [1902:1065]によれば、レンバンでは 11 月~2 月の煙草買上げ期には特別に通行許可書が発給されたという。

これらの商人の中には、レンバン外から買付けに来る者も見られた。例えば K.V. [1870:173] はスラバヤと東端地方から、K.V. [1873:277] はスラバヤとグリッセから商人がソロ河を遡って来ると述べる。それだけではなく、レンバン煙草がボルネオに販路を持つことと関連して、19 世紀にはバンジャル商人もジャティロゴまでやって来て一度に 20,000 ギルダーを超える煙草を買い付けることもあり、世紀転換期頃にもラセムまで来てそこで華人商人から買付を行っていたという [Walbeehm 1902:1065, 1067]⁽³⁹⁾。また 1920 年代にはクドゥスへの輸送増加を反映して、ストローチェ企業家自らが買上げに乗り出すことも見られた。Vleming [1925:220] は「クドゥスの周知の原住民ストローチェの企業家も、かなりの部分が華人である。その原料は大量にレンバンからも、彼ら自身の買上者の手で、華人商人から、あるいは農民から直接購入される。」と指摘している⁽⁴⁰⁾。

(39) ただしこれ以降には、バンジャル人商人が買付けに直接来ることはなくなったようだ。MvO [Bodjonegro-Toeban 1930:11] は、ケルフ煙草は「大量に華人商人の手でボルネオ、すなわちバンジャルマシンとバリクパパンへ移出される。」と述べている。

(40) 同様のことは MvO [Bodjonegro-Toeban 1930:11] にも述べられている。同史料ではこ

の他、ソロやスマランの煙草商人も買上げに参入しているという。

3. 輸送手段とその変化

最後に、煙草が何によってどのようなルートで運ばれたかについて、可能な限り考えておきたい。ケルフの外領向け海上輸送は、19世紀からスラバヤ経由とラセム経由で行われていた。前者については K.V.[1892:bijl.C]にケルフの「輸出は主にスラバヤ経由でシンガポール(そこでは他の煙草、中でもかつてパダンから運ばれてきていた種類を市場から駆逐した)、バンジャルマシン、ポンティアナックなどに向かう。」という記事がある。後者については上述のように、以前は自らレンバン煙草買上げに来ていたバンジャル人商人が、20世紀初頭にはラセムで華人商人から買うようになったというから、彼らが産地に近いラセム港からプラウで輸送した可能性が高い。また、後にはスマラン港から送られた可能性もある。Fruin[1923:353~354]はケルフ煙草の主要輸出港としてスマランとチェリボンを挙げ、レンバンをスマランの後背地の1つとしている。

次にスラバヤ向け輸送は、N.I.S.が1902年3月1日にスラバヤから Bodjonegoro まで、1903年2月1日に Tjepoe までの営業を開始⁽⁴¹⁾して以降は、少なくともその沿線に位置するソロ河沿いの重要な産地(Bodjonegoro、Kalitidoe、Padangan、Tjepoe など)の煙草はこの鉄道の Goendih・Soerabaja 線(以下 G/S 線と略記)による輸送が主流になったと思われる。例えば M.W.V.[Rembang:483]は、ボジョネゴロ県では住民の鉄道利用が増えており、それで移出されるのは主に煙草だという。また S.J.S.輸送報告によると1916年第1四半期には前年同期に比べて同線による輸出向け煙草輸送が激増したが、その大半(約730トン)はG/S線が不通になったので Goendi から S.J.S.線で振替輸送したことによるという[S.J.S., D.R.V., 1e kwrt. 1916]。このことは大量の煙草がG/S線を通してスラバヤへ運ばれていたことを示唆しているが、V.E.T.[1924 II:68]はG/S線の煙草輸送量として1913年クロソック5,930トン、未加工葉煙草62トン、ケルフ3,316トン、1920年14,831トン、1,951トン、5,892トン、1924年10,321トン、2,759トン、5,018トンという数字を挙げている⁽⁴²⁾。

(41) 鉄道・軌道各線の開業年月日、営業キロについては、Reitsma[1928:115~124]を参照。

(42) この数字が果たしてスラバヤ向け輸送量を示しているのか否かについては、N.I.S.文書を見ると疑問がないわけではないが、詳細な検討は今後の課題にしたい。

N.I.S.線開通以前のスラバヤ向け輸送ルートには、(a)内陸部の産地から荷車で北海岸に運び、そこからプラウで海上輸送、(b)産地からソロ河をプラウで輸送、(c)スラバヤまで道路輸送、という3つの可能性が考えられるが⁽⁴³⁾、現在のところ、これらを十分論証できるだけの史料が得られておらず、今後の課題にしたい。

(43) なお、トゥバン県 Bangilan、Djatirogo は N.I.S.の Bodjonegoro・Djatirogo 線沿線であるが、この路線開業は1919年5月1日だから、それ以前は(a) Bodjonegoro まで道路輸送してそこで N.I.S.に積んだ、(b) Bodjonegoro まで道路輸送してソロ河プラウに載せた、(c)北海岸へ出て、沿岸プラウでスラバヤへ海上輸送した、の3つの可能性がある。またトゥバン県 Rengel 郡、Singgahan 郡は南端がソロ河に接しており、河川プラウで輸送した可能性が高い。

クドゥス向け輸送に関しては、表6-13で見たように1919年以降にはN.I.S.とS.J.S.による大量輸送が行われているが、両会社文書を見てもそのルートの確定は困難である。ただラセム産煙草に関しては、S.J.S.が既に1900年にラセム・クドゥス間を結んでいるのでそれ

で輸送されたと考えて間違いないだろう。またそれ以前には、大郵便道を使った荷車輸送だったと思われる。次に Padangan や Tjepoe の煙草は、Tjepoe から S.J.S.で Blora に至り、少なくとも当初はそこから Wirosari・Poerwodadi・Demak を経由してクドゥス方面へ輸送されたとと思われる。このルートの全通は 1901 年 11 月 1 日であるが、S.J.S.の年次報告書には「煙草輸送は Blora-tjepoe 線の開通以来、大きく発展した」[Jaarverslag S.J.S.,1901:18]、「Tjepoe およびスマラン・チェリボン蒸気軌道(Semarang Cheribon Stoomtram Maatschappij)沿線から来る煙草の輸送はなお常に発展している」[Jaarverslag S.J.S.,1902]という記事が見える。Kalitidoe の煙草も、その地理的位置からすると同じ可能性が強い。その後、1903 年 2 月 1 日にブローラからレンバン経由でクドゥスに向かうルートが開通したが、Tjepoe 駅発の煙草輸送が新ルートに移ったか否かは不明である。

また Bangilan、Djatirogo 産の煙草は、S.J.S.がラセムから Djatirogo まで路線を延ばした 1919 年 2 月 20 日以降は、Djatirogo 駅からこの線を利用してクドゥスに向かったと考えられ、クドゥスから最も遠い Kapas、Soemberredjo、Bodjonegoro 産煙草は当初は Tjepoe・Blora 経由で輸送され、1919 年 5 月 1 日の N.I.S.・Bodjonegoro・Djatirogo 線開業以降は Djatirogo で N.I.S.から S.J.S.へ積み替えて、Lasem、Rembang 経由でクドゥスへ輸送した可能性が高いが、十分な史料の裏付けはなく、現時点では推測の域を出るものではない。

ただいずれにせよ、N.I.S.や S.J.S.が荷車やプラウという在来の輸送手段を凌駕して、レンバン煙草輸送の主力になっていったことは、両社の輸送報告に散見される鉄道と在来輸送手段の輸送量の差から見ると、確かだと思われる。しかし、1930 年代になると鉄道輸送には新たなライバルが登場した。トラック輸送である。

貨物輸送をめぐるトラックとの競争に関する記事が S.J.S.輸送報告に登場する最初は管見の限り 1924 年第 1 四半期であり、トラックはスマラン・デマック、スマラン・クドゥス間で定期運送を行っており、時々スマランからプルウオダディへも貨物を運んでいると報告されるが[S.J.S., R.V., 1e kwrt. 1924]、この段階では競争の対象は砂糖輸送であり、煙草に関してはトラックはまだ競争相手としては認識されていない。煙草輸送における競争が深刻化するのは 1930 年上半期であり、S.J.S.のクドゥス向け煙草輸送が減った原因の 1 つとしてケドゥーからの原料煙草のトラック輸送が挙げられている[S.J.S., R.V., 1e halfjaar 1930]。もっとも、これ以降の報告書の記述を追っていくと、この問題は 1931 年 9 月 1 日から N.I.S.と協議の上で同社の Djocja-Willem I 線からクドゥス向けの煙草輸送に特別運賃が導入され[S.J.S., R.V., 1e Negenmaanden 1931]、翌年初めには基本的に解決したと報告される[S.J.S., R.V., 1e kwrt. 1932]。そして、それ以降は原料煙草輸送に関する限りトラックとの競争についての記事は見えないから、S.J.S.のレンバン煙草輸送は軌道が独占的な地位を占め続けたと考えられる。

これとは対照的に、G/S 線のスラバヤ向け輸送では問題は遙かに深刻だった。N.I.S.の年次報告におけるトラックとの競争関連記事の初出は 1932 年で、「煙草輸送は 18%後退した。ケドゥー産とレンバン産の輸出向け煙草と G/S 線沿線の原住民市場向け刻み煙草は大量にトラックに移った。」[N.I.S., Verslag 1932:10]とある。これ以降の輸送報告の記事を拾っていくと、N.I.S.の輸送減のうち最も深刻なのが G/S 線によるスラバヤ向けクロソック輸送であり、トラック輸送の拡大もその大きな原因だったことがわかる。例えば 1933 年報告はヨーロッパ市場向け煙草の輸送が前年の 22,757 トンから同年に 20,204 トンへと 2,553 トン

減ったことについて、「王侯領煙草のスマランへの輸送はほぼ変わっていない。この減少はほぼ全てがレンバンからのクロソック輸出後退のせいである。加えて、報告年の最終四半期にはトラックが鉄道輸送の一部を奪ったことにもよる。」[N.I.S., Overzicht Vervoer, 1933]と述べ、34年第1四半期報告は、この煙草の輸送が前年同期と比べ2,386トン減ったのは「G/S間諸駅からスラバヤに向けたレンバン・クロソックの輸送が恐ろしく減少した」のが主要な原因であり、トラックの攻勢によって鉄道は数百トンの輸送を奪われたと述べている[ibid., 1e kwrt. 1934]⁽⁴⁴⁾。

(44)同様の記事は34年3月報告(トラックが300トン、G/S線が400トン輸送)[ibid., 1934]、4月報告(トラックはほぼ1/3を輸送)[ibid., April 34]などにも見える。

N.I.S.はこれに運賃引下げで対抗した。34年12月報告は「鉄道輸送を確保、復活、あるいは防衛するため、運賃引下げは1934年を通じて連続的に必要だった。これは主として輸入品、クロソックとケルフ煙草の輸送に関わることである。」と述べている。しかし「1km当たり2〜3 1/3セントという極めて安い運賃にもかかわらず、トラックも報告月には活動を活発化し、かなり大量に輸送を確保した。特にG/S線東部では、戻り荷として木材と煙草を運ぶことによって、トラック輸送はわれわれに打撃となった。」[ibid., December 1934]とあるように、トラックの攻勢を阻むことは難しかった。

35年には競争はN.I.S.有利に展開したようだが、翌年2月にはトラックが再び勢いを取り戻し[ibid., Februari 1936]、その後も例えば39年上半期には「トラックとの競争の結果、・・・G/S線からスラバヤへの輸送は600トン減った」[ibid., 1e en 2e kwrt. 1939]とあるように、トラックとの激しい競争は続いた⁽⁴⁵⁾。

(45)同様の記事は36年3月[ibid., Maart 1936]、同年第1四半期[ibid., 1e kwrt. 1936]、37年第1四半期[ibid., 1e kwrt. 1937]、1937年上半期[ibid., 1e en 2e kwrt. 1937]、38年第1四半期[ibid., 1e kwrt. 1938]、38年上半期[ibid., 1e en 2e kwrt. 1938]にも見える。

このように、1930年代になると煙草の輸送はとりわけG/S線においてトラックの激しい攻勢に曝され、鉄道輸送はそのシェアを奪われていったのであった。

おわりに

最後にこれまで述べてきたこの地方の煙草の栽培と流通の特徴を、改めて簡単に振り返っておきたい。

この地方では早くから内地市場向け煙草の生産が行われてきたが、強制裁培制度を経てそれとヨーロッパ市場向け煙草生産が並び立ち、住民は価格動向によってそれらを作り分けてきた。この地方の農業条件は決して良好ではなかったが、ソロ河流域を中心に煙草栽培は主要な産業に成長し、植民地当局は20世紀初めにはそれを「住民栽培(volkscultuur)」として認識していた[K.V.1907:242]⁽⁴⁶⁾。

(46)煙草栽培面積が全耕地面積に占める比率(1916~20年平均)は、トゥバン県では4.6%でトウモロコシ(51.4%)、水稻(47.1%)、キャッサバ(8.1%)、落花生(6.5%)に次いで5番目、ボジョネゴロ県では8.9%で水稻(57.4%)、トウモロコシ(33.9%)、キャッサバ(17.7%)に次いで4番目である[Landbouwatlas 1926:staat III]。また1920~25年平均では、トゥバン県では8.4%であるが、これはトウモロコシ(54.2%)、水稻(49.4%)、キャッサバ(14.1%)について落花生(8.4%)と並ぶ4番目、ボジョネゴロ県では15.2%で水稻(58.1%)、トウモロコシ(30.9%)、キャッサバ(17.7%)に次いで4番目である[Bagchus

1929:105]。両県では煙草は主要食糧作物を除けば最も重要な栽培だった。ちなみにジャワ・マドゥラ全体の 1916~20 年平均では煙草は 1.5%であり、水稻(43.7%)、トウモロコシ(25.2%)、キャッサバ(9.5%)、陸稲(6.1%)、その他の豆(3.6%)、サツマイモ(3.5%)、落花生(2.9%)、大豆(2.4%)の次にくる。またレンバン理事州全体では煙草は 4.6%であり、水稻(51.0%)、トウモロコシ(45.4%)、キャッサバ(11.0%)、その他の豆(5.4%)、落花生(4.9%)に次ぐ。

この地方の煙草は既に 19 世紀半ばには相当量が域外に移輸出されていたが、華人商人やヨーロッパ人輸出商社が大きな役割を果たし、またプラウによる海上輸送や整備が進んだ道路網がそれを支えていた。19 世紀末以降の鉄道・軌道の開通は、こうした在来の輸送手段を凌駕するとともに移出をさらに拡大させたが、これが栽培の拡大傾向の背景にあったと考えられる。しかし、この発展を牽引した鉄道・軌道は 1930 年代になるとトラックという新しいライバルの挑戦を受けねばならなかった。

この地方の煙草の主要な内地市場は群島東部にあり、ケドゥーなど中ジャワ山間部の煙草とは一種の「棲み分け」が成立していた。しかし、クドゥスにおけるストローチェ産業の発展によって両者はそこでは本格的なライバル関係に入ることになる。1930 年代になるとこの競争には決着が付き、レンバン煙草は撤収を余儀なくされた。世界恐慌下のクロソック輸出不振とも相俟って、この地方の煙草の生産と流通には新たな展開が必要になったが、そうした時にヴァージニア煙草が導入されてその生産が拡大したことは、この地方の農村経済にとって極めて重要な意味を持ったと考えられよう。ただ、それがどのような内容だったのかを明らかにするためには、この地方の社会経済の全面的な検討が必要である。これらは、今後の課題にしたい。

第 7 章 植民地後期における中部ジャワ山間煙草の流通をめぐって

はじめに

中ジャワ山間部に位置するバニユマス理事州バンジャルヌガラ県、ケドゥー理事州トゥマングン県、ウォノソボ県、マゲラン県は、植民地後期には内地市場向けケルフ煙草の最大の産地の 1 つだった。これらの地域の生産がどのように展開していたかについては植村[2005 ; 2008a]で論じたが、生産されたケルフ煙草がどこへどのように運ばれていったかについては検討課題として残しておいた。

これまでこの点を最も包括的に論じているのは Fruin[1923b:353~354]であり、この地域のケルフ煙草の移輸出について次のように述べている。

合計産出量と比較すると、外国輸出は極めて少ない。年に数百トン、金額では数万ギルダーにすぎず、せいぜい生産の数パーセント、近年はほぼ 1%程度である。

ジャワのケルフ煙草の主要輸出港はスマランとチェリボンであり、それより少ないのがタンジュンプリオクである。スマランは後背地として煙草地帯のレンバン、サラチガ、ケンダル、ケドゥーを擁し、チェリボンは(セラユダル軌道のおかげで)ウォノソボとバトゥール、カランコバルの一部を持つ。しかしなお常にバトゥール煙草の多

く(おそらく半分以上)は、山越えでプカロンガンへ運ばれ、そこからチェリボンとスマランへ輸送される。以前、セラユダル(Serajodjal)蒸気軌道開設前には(この軌道は1900年にバンジャルヌガラまで、1917年にウォノソボまで全線竣工)、ウォノソボの収穫も(クーリーによって!)ディエン高原越えでプカロンガンへ運ばれ、そこからさらに船積みされた(スマラン・チェリボン線は1899年竣工)。したがって『福祉減退調査』によれば、プカロンガンは当時重要な煙草集散地、煙草港だった[M.W., vol.Va:151; M.W., vol.VIa:177 noot]。煙草関税(tabaksaccijns)が非常に重かったので、煙草は当時非常に評判がよかったプカロンガン煙草としてランク付けできるようにし、そのようなものとして関税を課すことが可能なようにするために、スマランからプカロンガンへそこからの船積みのために運ばれた。軌道開設と関税廃止(1887年)によって、プカロンガンの煙草取引上の意義は減少した。

ここでは①ケルフ煙草のほとんどは内地市場向けであり、②従来、バトゥールやウォノソボで生産された煙草はクーリーの手でディエン高原を越えて北海岸のプカロンガンへ運ばれ、そこから船で各地に輸送されていたが、③セラユダル蒸気軌道の開通によって、ウォノソボの煙草はこの軌道を経由してチェリボンへ運ばれることになり、プカロンガンの地位が低下した、④バトゥール煙草は1920年代になってもその多くが旧来のディエン高原越えルートで輸送されている、という点が述べられている。

Fruin のこの記述はその限りで間違いはないが、以下の記述からも明らかになるようにこの地域の煙草地帯の西部に偏りすぎており、これで全てが尽きているわけではない。小論では、改めてこの地域で生産される煙草の流通経路がどのように変遷し、その原因は何であったかを考えてみたい。結論を先取りしていえば、流通経路には大きな変化が生じた契機が2つあった。第1は世紀転換期頃以降に鉄道・軌道が煙草産地と沿岸、消費地を結んだことであり、第2はケドゥスにおけるクレテック・ストローチェ産業の発展だった。これらにより、19世紀末ごろまで続いた従来の輸送コースは大きく代わることになる。以下では、先ず従来の流通経路を明らかにし、次いで鉄道開通の影響を検討し、最後にストローチェ産業発展の影響について述べたい。

I. 従来の流通経路

1. 1810年代の流通経路

この地域で生産される煙草の流通についての最も早い史料は、管見の限りでは1810年代のRaffles[1817:134~135]の次の記述である。

煙草は原住民によって tombáku あるいは sáta と呼ばれ、ごく一般的に栽培される。しかし輸出向けに広範に生産されるのは、中部のケドゥーとバニユマスだけである。・・・バンタムはバニユマスから、プカロンガンからこの港を小さな船で訪れる原住民商人の手で供給される。ケドゥー産煙草はスマランへ人力で運ばれるが、そこは一大輸出港である。

この史料に出てくるケドゥーとバニユマスが、筆者が前稿で述べた郡レベルの産地のどこに該当するかは不詳であるが、Raffles がジャワ統治に当たった時にジョクジャカルタ理事を務めた Crauwfurd は、ジャワの煙草の主な産地は「この島の中心部に向かう Kadu, Ladok、及び Banyumas の肥沃な谷と、そこに見られる高い山々の麓に集中している」[Crauwfurd

1920, vol.1:407]と指摘しており、恐らくはケドゥー理事州北部トゥマングンの北西付近、ウオノソボ、およびセラユ河谷のバンジャルヌガラ周辺であろうと思われる⁽¹⁾。

(1) Fruin [1923b:373]は、Raffles のいうバニユマスとは「Batoer と、おそらくは Kedjadar をも」指しているという。しかし、植村 [2008a]でも述べたように Batoer でや Kedjadar の栽培はそれほど古くはなく、Crawfurd が河谷や山麓を挙げていることからそうではないと考えられる。

Crawfurd はその移輸出先についても「ジャワはそれ自身に対する供給の他に、ボルネオ、スマトラ、マレー半島、セレベスと香料群島へ大量に輸出している。総輸出量は 500 万ポンド (lbs) に達する。」と述べ、さらに「ジャワ煙草は商業流通に出現する時、華人の手で加工されるが、彼らはそれを非常に綺麗に数オンス中国紙で包み、彼らの商標 (seals) をスタンプする。一定数が籠に入れられ 20 個単位で売られるが、1 個の重さは 1,100 ポンドである。内陸関税 (inland duties) を払い、人が困難な道を 60~70 マイル担いで行う輸送の重いコストを差し引いた後のスマラン市場での値段 (cost) は最下級品が 112 ポンド (cwt) 当たり 40 スペインドル、すなわち 18 シリング 4 ペンス、2 級品が 80 スペインドル、すなわち 36 シリング 8 ペンス、1 級品が 120 スペインドル、すなわち 55 シリングであると見積もられる。」 [Crawfurd 1820., vol.3:416~417] と、煙草がスマラン市場へ出されたことを指摘している⁽²⁾。

(2) Fruin [1923b:349~351]によれば、Crawfurd は 1812 年の未刊行報告書でも、煙草はケドゥーでは米に次ぐ主要産物であり、毎年 300 万ポンド余り (約 1,400 トン) がスマランへ運ばれ、そこからさらに販売されており、質の劣るものはジャワ内に残り主にバタヴィアと西ジャワへ向けられ、よりよい品質のものは海峡へ、最上品は南セレベスへ向かったこと、スマランへの輸送はすべてクーリーによって行われ、corge 当たり 8 ドルかかったことを指摘しているという。

両者の記述から見ると、1810 年代の中ジャワ山間部産煙草の流通経路には、(a) バニユマス理事州北部からプカロンガンを経由して海上輸送で西ジャワ・パンテンに輸送される、(b) ケドゥーから大量にスマラン港までクーリーに担がれて運ばれ、そこから海上経由でバタヴィアと西ジャワ、さらにはボルネオ、スマトラ、マレー半島、セレベスと香料群島などへ移輸出される、という 2 つがあったと考えられる。

それではこのルートは、それ以降、どのように変化したのか、あるいは代わらなかったのだろうか。

2, 1830~40 年代の搬出ルート

1820 年代におけるこうした煙草搬出ルートを示した史料は得られなかったが、30 年代、40 年代については Elson [1994] が Arsip Nasional Indonesia 所蔵の地方文書などに依拠して、次のように指摘している。すなわち 30 年代については Algemeen Jaarlijksch Verslag 1831 などの記述から「ケドゥー農村地域からの煙草は近隣地域や地方市場からより高次の流通経路まで販売され、群島全域に送られるためにプカロンガン港へ運ばれた」⁽³⁾ [Elson 1994:256]、また Algemeen Jaarlijksch Verslag 1835 に依拠して、「プカロンガンでは南部諸理事州からの煙草移出は一組の華人が支配しており、「彼らはそのカピタンを通じて、Batur, Kedu, Banjumas の原住民首長から多くの協力を得ている」と報告される」 [Elson 1994:259] と述べ、40 年代に関しては 1842 年 10 月 26 日付けバゲレン理事の総督宛書簡をもとに「ルドック (Ledok)

では、華人がプカロンガンその他からやって来て、作物への前貸あるいはそれを織物と交換することによって煙草を手に入れようとするために、ルドックの煙草生産地帯に2ヶ月あまり滞在すると報告された。」 [Elson 1994:467 noot 134]、また *Algemeen Jaarlijksch Verslag, Pekalongan 1843* に依拠して「1843年、南部の諸理事州バゲレン、バニユマス、ケドゥーからプカロンガンに流れ込む煙草の大半は、獣の背中に乗せたりクーリーが担いだりして山岳地帯を越える。」 [Elson 1994:254] という。

(3)ただし、この部分は厳密には1830年代のみに関する記述ではない。Elsonは引用部分に対する註(84)で *Politiek Verslag 1867* をも典拠に挙げている。

このように Elson の記述にはスマラン向けに輸送されたという記事はなく、専らプカロンガンが中継地として挙げられている。しかし、このことをスマラン向け輸送が行われなかったことの反映と見ることができるか否かは、現時点では判断がつかない。1810年代には Craufurd に従えばスマランへ毎年1,400トンもの煙草が運ばれており、また次に述べる1850年代にもスマラン、プカロンガンの両ルートが使われているからである。

3, 1850年代

1850年代に入ると K.V.に煙草の流通関係記事が現れるが、中ジャワ山間部産煙草に関するものはない。ここでもやはり Elson の記述が手がかりとなる。Elson は *Nota tabak Kadoe 1856* に依拠して「ケドゥーでは、住民煙草はスマラン、プカロンガンから来る華人商人によって買い上げられたが、ジャバラからくるジャワ商人によっても買い上げられた。」 [Elson 1994:265] と述べている。

Elson が依拠したこの史料の該当部分は、次のような内容である。

「煙草は Samarang と Pekalongan から来る華人の手で、ここで栽培者から買い上げられ、一部は Ambarawa を経て Samarang へ、また Bedjen と Kendal を越えて Pekalongan へ搬出される。Japara からジャワ人商人が来るが、彼らは2級品3級品の煙草を買い上げる。

輸出はシンガポール、スマトラ、ボルネオ、マカッサルに向けられる。

ケドゥー理事州の煙草栽培は3,328バウに上ると推定され、県(afdeeling)毎の生産量は推計次のようである。

Magelang 県4,000 ピコル	(240 ton)		
Probolinggo 県 ⁽⁴⁾12,000 ピコル	(720 ton)	マゲラン県	960 トン
Prapuk 県300 ピコル	(18 ton)		
Jetties 県 ⁽⁵⁾40,000 ピコル	(2,400 ton)	トゥマングン県	2,418 トン
合計56,000 ピコル	(3,360 ton)		」

この文書そのものには日付が付されていないが、1856年9月18日付の栽培部長(Direkteur van Kultures)から総督宛書簡 No.3440/9 の中に含まれているので、1850年代半ばのものだと考えてよい。なお、この史料に現れる乾燥法に関する記述では「天日乾燥」しか出てこないから、製造される煙草はペペアンであると考えられる。これは植村[2005a]で述べたケドゥー内の地域による加工方法の差とも一致する。ここから分かるいま1つの点は、旧ケドゥー理事州南部の煙草はまだ開発が十分には進んでいないことである。また注目すべきは、ジャバラへという東向きの輸送が初めて登場することである。もっとも、それは2級品3級品に留まっており、未だ主要な輸送ルートとしては現れていない。

(4) Probolinggo は 1845 年の行政区画では Magelang 県南東の郡であり [Bleeker 1850II:221]、当時 Magelang 県には 8 郡が含まれたので、後に南部が独立した県になったと考えられる。したがってこの史料に出てくる Magelang 県は 45 年段階の同名の県の北部か？

(5) Djetis と Prapag (Prapak) は 45 年行政区画では Temanggoeng 県に含まれる郡、この 2 つは、Temanggoeng 県を指すと考えられる。

他方、バンジャルヌガラ県産煙草は、以下に掲げる当時の同県副理事 A.D.Bosch の覚書にあるように、基本的にプカロンガンへ運ばれた。

「10 月 11 月になると、買い上げ者(たいていは華人)がデサにやってきて、価格の点で折り合いが付くと・・・

(中略)

大半の煙草は陸路を Pekalongan のクーリー、すなわちブジャン(自由意志によるクーリー)の手で Pekalongan へ運ばれるが、彼らはクーリー賃金として雨季には 1 ギルダーを、東モンスーン季には 80 セントを一度に受け取る。

次いでこの煙草は Pekalongan から海上経由で Batavia や Samarang に輸送されるが、ほとんどは前者向けである。

既に述べたように、三等品は滅多に移出用として販売されることはなく、この煙草はたいていパッサールやワルンで域内消費用として売られる。」 [Bosch 1856]

なお、この文書では乾燥は直火によって行われるから、製造されるのはガランガンである。またこのプカロンガン向け輸送経路は、産地の位置から考えると Batoer 経由(ディエン高地)越えであろうと思われる。

かくして 50 年代の主要な煙草輸送ルートには、①ケドゥーからアンバラワ経由でスマランに向かい、そこからシンガポール、スマトラ、ボルネオ、マカッサルへ移輸出される、②ケドゥーから Soendoro 山や Praoe 山の東側を通って Bedjen、Kendal を経由してプカロンガンへ至る道、③バンジャルヌガラ県からディエン高地を越えてプカロンガンに至り、そこからバタヴィアへ送られるコース、の 3 つがあったということになる⁽⁶⁾。

(6) Wonosobo (Ledok) 産煙草については、これらの史料に記事がないので軽々に判断はできないが、地理的な位置から考えておそらくは③のルートで搬出されたと思われる。

これらのうち、①では先に述べたラッフルズの時代とは異なって、おそらく荷車が使われたであろうと推定される。Bleeker [1850-II:224-225] によると、このルートはマゲランから Ambarawa、Bawen を経由してスマランへ向かう幹線道路に当たり、遅くとも 1840 年代末には整備が進んでいたと思われるからだ。また②は「私は前章で既にわれわれが旅行をした Wonosobo から Temanggoeng を経由して Magelang に至る道路について記述したが、そこでは Parakan から北に向かい、Lempoeijang 郡を抜け、Djamboe 山地を經由して Kendal 地方へ向かい、そこで Selokaton を過ぎた後、Weleri 付近でバタヴィア・スマラン間の郵便道に合流する道については触れなかった。これによっても、中ジャワ内陸部へ入り込むことが可能なのである。」 [ibid.]⁽⁷⁾といわれるルートを使ったと考えられる。もっとも、この道を荷車が通れたか否かはわからない。

(7) この道は、スマラン理事州ケンダル県から南部に向かう 2 本の道の 1 つであり、「Weleri から Selokaton と Soekoredjo を經由して Kadoe へ向かい、そこで Wonosobo から Sindoro 山と Soembing 山の間を抜けて Magelang の郵便道路へ向かって延びている馬車

道と合流」していた[Bleeker 1850-I:13]。

唯一輸送方法に言及がされている③のコースは、バニユマスからウォノソボに向かう車道のバンジャルヌガラから数えて paal 33 の地点から北上する歩道(voetpad)で、馬車(rijtuig)の通行には向かないが馬で登ることは容易だったと、Bleeker [1850-II:142~143]が述べた道を使ったと思われる⁽⁸⁾。

(8)もっともディエン高原越えには、この他にも Wonosobo を起点とするルートがあったようで、それを使った可能性もある。Bleeker[1850-II:155]によると、この高原にある Dieng 小村から Wonosobo までは 16 palen の距離だったという。

4, 1860 年代 70 年代

1860 年代については、61 年に関する史料[K.V.1862:182]と 68 年に関する史料[K.V.1869:116]が得られたが、前者ではケドゥー理事州の栽培の中心である Kadoe、Lempoeijang、Probolinggo 郡の煙草が「理事州外から来る者も含んだ華人に買い上げられ、ボルネオ、スマトラ、シンガポールに送られる。この煙草の多くの部分は、Batoer と Sidaijoe を越えてプカロンガン市へも運ばれ、さらにそこから海上経由でバタヴィアとバンタムの市場に向かう。」とある。ここから読みとれるのは、ケドゥー煙草の多くはプカロンガン経由で西ジャワ向けに移出されているが、同時にそれとは別ルートで外領向け移出が行われていたことであり、それがスマラン経由だった可能性は極めて大きいと思われる。

後者の史料では上述の 3 郡に加えて Rameh 郡も主要産地として挙げられているが、特に Kadoe 郡と Lempoeijang 郡の煙草が理事州内外から来る華人によって買い上げられ、移出されるという。その場合、「これら買上商人は大半がプカロンガンから来るが、800 人に上る。……Kadoe 郡と Lempoeijang 郡だけでも煙草の売上げは年に 100 万ギルダーになると計算される。これらは大半がプカロンガン、もしくはスマランへ移出される。」と、指摘される⁽⁹⁾。

(9)ここに出てくる郡や村の位置は Bleeker[1849-II:270 ; 1850 II:220~221]などからいくらかの推測可能である。Batoer は地図 1 に示された通りである。Sidaijoe はプカロンガン理事州バタン県 Sidaijoe 郡の郡庁所在地で郡の中央に位置し、Batoer と Dieng へ向かう道路で Soebah、Kali Salak、及び Banjoemas と繋がっているという。Kadoe 郡はおそらく地図 1 の Kedoe 周辺であり、当時はトゥマングン県に属していたと考えられる。

Lempoeijang 郡は同県北西部、Probolinggo 郡と Rameh 郡はマゲラン県南東部に位置し、前者はメラピ山西麓、後者はジョクジャカルタへ向かう道路沿いにあった。

このように、ケドゥー産煙草がスマラン、プカロンガン双方へ運ばれていたのであるが、この状況は 70 年代前半にも続いていた。K.V.[1871:160]によると、プカロンガンへ向かうのはガランガン煙草、スマランへ向かうのはペペアン煙草であるが、K.V.[1873:204]はトゥマングン県からはスマランとプカロンガンの双方へ、Poerbolinggo 県の煙草は Moentilan の華人に売られ、その手でスマランへ運ばれるとしている。ただしここに挙げられる Poerbolinggo 県は、その位置などから考えると Probolinggo 県の誤りであろう。

こうした記述から判断すると、この時期にはケドゥー煙草はトゥマングン県からガランガンがプカロンガンへ運ばれ、トゥマングン県と Probolinggo 県、すなわち後のマゲラン県に相当する地域で製造されるペペアンがスマランへ運ばれていたと考えることが出来る。また、両者のルートと比較するとプカロンガン経由の方が輸送量がより多かったように思

われる。

5, 1880~90年代の輸送ルート

1880年代の輸送ルートについては史料を入手することができなかったが、90年代に関しては史料が比較的多く、それらから判断すると北海岸向けルートではやはりプカロンガン経由が多かったようだ。

先ずこれらの産地の中で、バンジャルヌガラ県、特にその中心地の **Batoer**、**Karangobar** や、当時のバゲレン理事州に属したウォノソボで生産された煙草は、ほぼ例外なしにプカロンガンへ運ばれた。いくつかの史料を挙げておこう⁽¹⁰⁾。

① 1890年

「**Bandjarnegara** 県からプカロンガン、そしてそこからさらにバタヴィア、バンタム、クラワン、チェリボンに向かう煙草移出も非常に重要である。なおよい値が付くからである。」 [K.V.1891:bijl.PPP]

「(バゲレン理事州では)煙草は至る所で、大なり小なり自家消費のために栽培される。**Ledok** 県では重要な栽培に拡大したが、そこから住民はかなりの利益を得ている。生産物はそこでプカロンガンの華人によって買い上げれる。」 [KV 1892:bijl.C, Bagelen]

「煙草は華人によって理事州内山間部と、隣接するバニユマス、バゲレン、ケドゥーで買い上げられ、そこから **juk** すなわち荷馬や車でプカロンガンとバタンに運ばれ、さらにそこから大半が海路でバタヴィアに送られる。煙草とコプラの取引は、1890年、非常に利益が大きかった。」 [KV 1892, bijl.C, Pekalongan]

② 1892年

「(プカロンガンでは)ディエン地方とウォノソボからは大量の煙草が運ばれる。煙草取引はほとんど全て華人の手による」 [K.V.1893:bijl.SSS]

③ 1895年

「唯一の重要移出品は、バトゥールとカラン・コバルの近辺で栽培されている原住民市場向け煙草である。これは大量にプカロンガンを経て、バニユマス煙草が望まれるプリアンゲルへ供給するためにチェリボンへ向かい、またバタヴィアへ向かう。」 [Delden 1895]

④ 1896年

「プルウォケルト副理事はしばらくの間、バニユマス理事とともにディエンに滞在したので、私はバトゥールにおける煙草栽培と、われわれの路線がバンジャルヌガラまで完成した時のその輸送の可能性について、可能な限り多くの情報を得て欲しいと求めた。その結果は私に伝えられたが、それは年に 32,000 ピコルの煙草がバトゥール周辺からプカロンガンへ運ばれており、その輸送は恐らくわれわれの路線に移るだろうというものだった。現在既に1人の華人が、バンジャルヌガラに倉庫を建てるために、バトゥールに住むことを考えている。」 [Byvanck 1896]

(10)ここに掲げた他にも、K.V.[1892:bijl.C, **Banjoemas** ; **Bagelen** ; 1895:bijl.QQQ]などに同様の記述が見られる。

しかし、プカロンガンには当時のケドゥー理事州(トゥマンゲン県とマゲラン県)からの煙草も運ばれていた。例えば 1890年には(a)「煙草は **Batoer (Banjoemas)**、ケドゥー、バゲレンから大量に運ばれるが、主に華人の手で商われ、よい利益がある。」 [K.V.1891:bijl.PPP]、

(b)「煙草は華人によって理事州内山間部と、隣接するバニユマス、バゲレン、ケドゥーで買い上げられ、そこから *juk* すなわち荷馬や車でプカロンガンとバタンに運ばれ、さらにそこから大半が海路でバタヴィアに送られる。内陸部のスルジョ (Soerdjo) には何人かの華人煙草商人が定住している。」[K.V.1892:bijl.C, Pekalongan]とあり、95年に関しては「(原住民市場向け煙草の取引は)華人によって行われるが、プカロンガンでは意味が大きい。買い上げ者はこの商品を主として Batoer (バニユマス)、Wonosobo (バゲレン)、ケドゥーから入手し、これらの煙草は大半が西に位置する諸地方へ輸送される」[K.V.1896:bijl.QQQ]といわれる。

この時期、ケドゥー煙草は「ほとんどがスマラン、プカロンガン、チェリボン、バタヴィアへ、さらにパンダン、シンガポール、中国にまで輸出される。生産物の1ピコル当たり平均価格は一級品 f40、中級品 (*middelmatige soort*) と下級品 (*inferieure soort*) は f20、f6 を越えない。」[KV 1892:bijl.C, Kedoe]とあるように、スマランへも運ばれていたが、「(ケドゥー理事州では)主要商品は相変わらず煙草と米である。煙草には、1893年よりよい価格が付いたが、主にプカロンガンへ輸出された。」[K.V.1895:bijl. QQQ]とあるように、主要にはプカロンガンへ運ばれていたのである⁽¹⁴⁾。

(11)同様の史料は K.V.[1896:bijl.QQQ]にも見られる。なお既に掲げた史料の中に見られたように、1890年にはプカロンガン理事州のバタンにも運ばれているが、ここでは「(プカロンガンでは 1893年の商業は前年と比べ不振だったが)なお若干の意味があるのは、バタン県における華人の手による煙草の買い上げ」[KV 1894:bijl.SSS]であるといわれるように、華人が煙草商業を展開していた。

6. プカロンガン・ルートの優位

[プカロンガンへの経路]

それではプカロンガンへはどのルートを使って、煙草が運ばれたのだろうか。改めて考えてみよう。

小論では既に、①ケドゥーから Soendoro 山や Praoe 山の東側を通って Bedjen、Kendal を経由してプカロンガンへ至る道(1850年代)、②バンジャルヌガラ県からディエン高地を越えてプカロンガンに至るコース(1850年代)、③ケドゥーから Batoer と Sidajoe を越えてプカロンガン市へ(1860年代)、を挙げてきたが、この他に、1890年代頃には④ケドゥー (Paraän, Ngadirdjo) から Selokaton (Kendal)、Tersono、Limpoeng、Soebah、Batang を経てプカロンガンに至るコース、⑤ウォノソボから Dieng を越えて Bawang 経由でプカロンガンに至るルート、⑥パトゥールから Bandar/Hasin 沿い道路を通ってプカロンガンに至るコースが使われていた。このうち④での輸送はクーリーと荷馬によって行われ、⑤の場合は主として馬、⑥は険しい地形のためにクーリーだけが従事した [Pekalongan, 6 October 1895 (Tabaksvervoer, Dossier 1953, Archief S.D.S., ARA)]。さらに20世紀初には⑦ウォノソボから Bandar Sidajoe を経てプカロンガンへ煙草が送られ [Jaarverslag S.C.S.1901]、⑧ウォノソボで作られた畑作煙草がバタンとプカロンガンから来る華人商人に買い上げられ、彼らがウォノソボの町に所有する倉庫で選された後、クーリーが担いでディエン山地を越えて Kalisak まで運ばれ、そこから荷車でバタンとプカロンガンに向かうというルート [M.W.H. Kedoe:364] もあった。

[プカロンガン・ルートの優位とその理由]

ところで不思議なのは、しばしば引用された Bleeker の旅行記によれば、これらの産地

からの輸送路はスマラン向けはよく整備がされており荷車の通行も可能であり、実際に「スマランに向けられるケドゥー煙草は、以前は荷車 (grobak) で直接スマランに輸送された。」[S.C.S. Jaarverslag 1907]のに対して、プカロンガン向けはこれまで述べてきたように険しい山道を人夫または馬の背に荷を載せて運ばねばならなかったのに⁽¹²⁾、なぜプカロンガン・ルートがこれほどまでに利用されたかである。

(12)プカロンガン理事州では、1890年に至っても山間部の輸送はほぼ全て荷担ぎクーリーや荷馬に頼らねばならなかった。ただ、プカロンガン市から Bandar までとそれに沿って Tombo 農園までが、馬車または牛車で輸送が可能だった [K.V.1892:bijl.C]。

考えられる理由はいくつかあるが、主要にはこれまで見てきたようにこの地域の煙草はこの段階では東へ向かって送られることはなく、大半が西ジャワ向けだったので、より西よりのプカロンガンへ運ぶ方が都合がよかつたのではなかろうか。

[煙草集散地プカロンガンの発展]

この結果、19世紀のプカロンガンは煙草の一大集散地として発展した。そしてこの発展を初期に担ったのは、ジャワ人商人だった。この点について M.W.E. [Pekalongan:47, noot (3)]は、「以前から、プカロンガン県(特にプカロンガン市)は、原住民が資本を集めようとして来たところとして知られる。中には非常に大規模な(例えば数トン)者もあり、既に30年前に市内で原住民の瀟洒な石造りの家があることにそれは示される。これは当時、プカロンガンが集散地であった煙草の取引のせいであったが、現在でも程度は小さくなったがなおそうである。」と述べている。また Fruin [1923b:373]は、『福祉減退調査』所収のプカロンガン県レヘント報告 [M.W.,vol.VIa:177 noot]にもとづいて、「そこには以前2人の原住民大煙草商人がおり、彼らは4万~5万ギルダールの資本で旧ケドゥー、ウォノソボ、Batoer で買い上げて、チェリボン、インドラマユ、バタヴィアで販売していたが、息子達の代に販売は15,000~20,000ギルダールに低下し、1887年になると彼らはもう取引を行っていなかった。これらの原住民商人は、華人を雇っていた。」と述べている。

Fruin が依拠した原史料は、次のようである。

「当時、ジャワ人の大規模煙草取引が2件あり、それぞれの取引は2人の兄弟の手で40,000~50,000ギルダールの運転資本で行われていた。煙草はケドゥー、ウォノソボ、バトゥールで買い上げられた。最も儲けが大きい2級品はチェリボンとインドラマユで、1級品はバタヴィアで販売された。これらの取引のそれぞれは最終的にはこの経営者の1人の息子によって続けられたが、彼はもう1人の共同経営者の娘と結婚した。よく起こるように、そしてとりわけジャワ人社会ではそうであるが、息子たちは(1人はハジである)父親たちのようには対処できなかつた。年間取引額は15,000ギルダール、20,000ギルダールへと低下した。1887年頃には、彼らはもう取引を止めており、1890年頃には貧乏になっていた。5番目の大商人(een vijfde groothandelaar)はハジであり、なお非常に富裕だが、1895年以來、彼はもう煙草を扱っておらず、他の取引を行っている。

この年以來、プカロンガンではジャワ人による煙草の卸商業(groothandel)は存在していない。おそらく、当地の煙草商業の全般的な衰退(これについては先に言及した)に際して、なおその取引を利益を上げて続けることができているのは、華人だけである。実際、この原住民はこの困難な業務のために、華人を雇用していた。」

もつとも、彼らの煙草取引からの撤退はプカロンガンの集散地としての地位を低めた訳ではなかった。先に引いた 1890 年の (b) から明らかなように、彼らに代わって華人商人がそれを担ったからである。1907 年の S.C.S. 年次報告によれば、プカロンガンで営業する大規模華人輸送業者は、当地には倉庫があり、経験豊かな選別者がいると表明しており [Verslag S.C.S.1907]、長年にわたって培った煙草輸送をめぐるノウハウもまた、この町の集散地としての位置をその後も支えたと考えられる。

[プカロンガンから西への輸送とその方法]

それでは、このようにしてプカロンガンを初めとする北海岸へ運ばれた煙草は、従来そこからどのようにして西へ運ばれていたのだろうか。既に見たように Raffles [1817:134~135] はプカロンガンから小さな船でバンタムへ輸送されると述べていたが、海上輸送は 1860 年代 [K.V.1862:182]、90 年代 [K.V.1892:bijl.C, Pekalongan] にも報告されている。もつとも陸上輸送も行われてきたようで、次の史料はそれを具体的に述べている。

「プカロンガンからチェリボン、バンドンへのさらなる輸送は一部は陸上、一部は海上で行われる。陸上輸送には荷馬車 (paardenkarren) が使われるが、これは 40 krandjangs からなる 1 kodi 以上を積むことができる。プカロンガンからチェリボンへの輸送費は kodi (= 40 大 krandjangs) 当たりで東モンスーン季には 8 ギルダー、西モンスーン季には 10 ギルダーである。プカロンガンからバンドンへの輸送費は kodi (= 40 大 krandjangs) 当たりでそれぞれ 25 ギルダー、30 ギルダー、kodi (= 40 toemboes = 小 krandjangs) 当たりでそれぞれ 15 ギルダー、20 ギルダーである。

バタヴィア向けの煙草輸送は、完全に海上輸送だけである。これにはプラウが使われ、40 krandjangs からなる kodi (大) 当たり 3 ギルダーか 5 ギルダー、40 toemboes からなる kodi (小 krandjangs) 当たり 2 ギルダーか 4 ギルダーが払われる。

プカロンガンからチェリボンへの海上輸送には、40 大 kr. からなる kodi 当たり 3 ギルダーか 4 ギルダー、40 toemboes (小 kr.) からなる kodi 当たり 2 ギルダーか 3 ギルダーが払われる。

1892~94 年の海上輸送は以下のようなものである。

		1892 年	1893 年	1894 年
陸上 輸送	krandjangs	7,972 = 199.3 kodi	120,993 = 3,024.825 kodi 775	9,137 = 228.415 kodi
	toemboes	12,001 = 300.025 kodi	9,870 = 246.75 kodi	12,260 = 306.5 kodi
	合計	19,972 = 499.3 kodi	130,863 = 3,271.575 kodi 1,022	21,397 = 534.925 kodi
海上 輸送	krandjangs	28,606 = 716.4 kodi	38,127 = 953.175 kodi	33,740 = 843.5 kodi
	toemboes	26,429 = 660.725 kodi	24,951 = 623.775 kodi	13,985 = 349.625 kodi
	合計	55,085 = 1,377.125 kodi	63,078 = 1,576.95 kodi	47,725 = 1,193.125 kodi
総計	75,058 = 1,876.42 kodi	193,941 = 4,848.525 kodi 2,599	69,122 = 1,728.05 kodi	

(引用者註：原史料は表になっていないが、わかりやすくするためにこの形にした。表

中のイタリックで表した数字は、インクによる手書きの原史料に鉛筆書きで書き足された訂正である)

"krandjang"と"toemboe"という呼び名の違いは煙草の質に関するものではなく、包装の仕方に関するものである。より望まれる包装法にしたがって、煙草は krاندjangs、すなわち大きな籠、あるいは toemboe、すなわち小さな籠に入れて運ばれる。」

[Pekalongan, 6 October 1895 (in Tabaksvervoer, Dossier 1953, Archief S.D.S., ARA)]

プカロンガンからチェリボン、バンドンへの輸送にはプラウの他に荷馬車も使われ、バタヴィア向けは全てプラウによること、また海上輸送の方が大きく上回っていることがわかる。このように、従来、北海岸沿いの西向き輸送の主力はプラウであり、プカロンガンはその積出港として大きな役割を果たしてきたのだった。

しかし、このような流通経路はジャワ各地で鉄道、蒸気軌道が営業を開始することによって変化を見せる。次章では、そうした動きを見ていくことにする。

II、鉄道・軌道開通による煙草流通経路の変化 (鉄道路線図)

1、スマラン・チェリボン蒸気軌道 (Semarang Cheribon Stoomtaram Maatschappij、以下 S.C.S. と省略)の開通 (1899 年)による変化

S.C.S.は 1885 年 8 月 25 日にテガル (Tegal)ースラウィ (Slawi)間 14km が営業開始したのを皮切りに徐々に路線を伸延し、1899 年 2 月 1 日にスマランーチェリボン本線が全通した。この間、1897 年 5 月 2 日にはスマランと東のジョアナを結ぶスマラン・ジョアナ蒸気軌道 (S.J.S.)との相互乗り入れのために連絡線を建設し、また蘭印鉄道会社 (N.I.S.)のスマラン・王侯領線 (ジョクジャカルタが終点)とも連絡した。さらに同社は 1901 年 12 月 29 日にはカディパテン線 (チェリボンーマジヤルンカ県 Kadipaten 糖業 : 47km)の営業を開始した⁽¹³⁾。

(13) 以下での鉄道・軌道開通関係記事は、特に断りがないかぎり、Reitsma [1928:115~124]による。

S.C.S.の開通は、ジャワ北海岸沿いの西向き煙草輸送において先に述べたプラウや荷車のシェアを奪うことになった。本線開通の約 6 ヶ月後に同社がバタンで行った調査では、ウォノソボからそこへ内陸道路を使って運ばれてくる煙草は、「チェリボン自体へ向けられものは軌道で運ばれるが、スメダンのようにチェリボンより先 (西側)へ向かうものは、なお常に荷車 (grobak)で運ばれていることである。」[Maandrapport S.C.S.1899-09]というような状況でだった。このように S.C.S.は早くもチェリボン向け輸送を手にとめたのである。

それ以降の S.C.S.とプラウとの煙草輸送をめぐる競争状況は、表 7-1 から窺うことができる。ここから直ちに、1900 年代初めにはプラウの輸送はなお全体の 1/4 強を占めていたが、直ぐに 1/10 以下に減少し、軌道のシェアが圧倒的になったことが分かる。

このような S.C.S.による輸送増加の背景には、1899 年 9 月の月例輸送報告の「(煙草の発送者に対して軌道の運賃をもう一度説明し)荷車 (grobak)の運賃と比較した後には、バタンから煙草 (ウォノソボなどの産)が荷車でチェリボンへ運ばれたことはない。」[S.C.S., Maandrapport September 1899]とあるように、同社による輸送業者への働きかけがあった。さらに同社はウェレリに 1 人の華人エージェントを置き、そこへ運ばれてくるケドゥー煙草を可能な限り軌道にもたらすよう活動させた。この結果、1900 年にはここで S.C.S.に提供

されるケドゥー煙草が前年より 840 トン増加したという [Jaarverslag S.C.S.1900]⁽⁴⁴⁾。

(14)この煙草がどの道を通して Weleri に至ったかは不詳であるが、おそらくは先に触れた古くからある Parakan から Bedjen、Soekoredjo を経由するルートが選ばれたと推測される。

また先に挙げた 1899 年 9 月の輸送報告が問題にしていた「チェリボンより西」への輸送についても、1902 年 7 月の輸送報告に「(華人 Lim Tam Sek とのカディパテン経由プリアンゲルとの通し輸送を) バタンとプカロンガンの煙草商人は利用するだろう。現在まで、煙草はこれらの地方からプリアンゲルへ完全に荷車で運ばれてきた。」[Maandrapport Juli 1902]とあり、カディパテン線経由プリアンゲル向け輸送実現の見通しが立ったことが述べられている。実際、それ以降の同線経由の煙草輸送を各月の輸送報告から瞥見すると、1902 年 8 月にはスメダン向け煙草 40,298kg [Maandrapport Aug. 1902]、10 月 1,550kg [Maandrapport Oct. 1902]、12 月には煙草など 19,717kg、バンドン向け煙草など 2,495kg [Maandrapport Dec. 1902]、1903 年 2 月にはスメダン向け煙草など 16,124kg、バンドン向け 6,496kg [Maandrapport Febr. 1903]、3 月スメダン向け煙草など 23,025kg、バンドン向け煙草など 4,777kg [Maandrapport Maart 1903]、と S.C.S.は着実に輸送を行っている。こうして S.C.S.は Lim との契約締結後は、7 月報告における見通し通り、荷車輸送との競争で本格的に優位に立つことができたと思われる⁽⁴⁵⁾。

(15)ただし、このルートはカディパテンから先は荷車輸送だった。したがって S.S.西部線のチェリボン・チカンペック (Tjikampek) 間が 1912 年に開通して、以前から営業していたチカンペック・バンドン間と繋がったことによって、このルートの利用が減った可能性もあるが、現在のところは十分な史料を集めることができず判断できない。

2. 国鉄 (Staats Spoorweg、以下 S.S.と略記) 西部線伸延 (1894 年) の影響

以上に述べたジャワ北海岸沿いコースによる煙草の西ジャワ向け輸送は、以下に述べる様々な路線の開通によって大きな影響を受けることになった。その最初は、S.S.西部線の開通である。

同線は 1887 年 7 月 20 日からクトアルジョ (Koetoardjo)ープルウオレジョ間 12km の営業を開始し、ジョクジャ (Djocja)ーチラチャップ (Tjilatjap) 間 176km も開業した。また、1894 年 11 月 1 日に同線のタシクマラヤ (Tasikmalaja)ークスギハン (Kesoegihan) 間 118km が開通したことによって、ジョクジャからバタヴィアまでが南岸ープリアンゲル経由で 1 本に繋がった。これによって中ジャワ山間部産煙草のこのルートによる西ジャワ向け輸送が可能になったが、この影響は次のような形で現れた。

後述するセラユダル蒸気軌道会社 (Serajoedal Stoomtram Maatschappij、以下 S.D.S.と省略) 線のバンジャルヌガラまでの営業開始 (1898 年 5 月 18 日) を 10 ヶ月後に控えた 1897 年 8 月、同社の建設部長 (chef van den aanleg) ベイバンク (J.N.Byvanck) はウォノソボ、バトゥール、カラコバルを訪問し、バンジャルヌガラ伸延後の S.D.S.による煙草輸送について主だった商人たちと懇談しているが、その際にわかったのはこの地域の主要な移出品である煙草の一部がプルウオレジョ (Poerworedjo) へ輸送されているということだった。ベイバンクからハーグ本社取締役役に宛てられた 1897 年 8 月 25 日付け書簡 No.590/D193 は次のように述べている。

「ウォノソボ・プルウォレジョ間の距離はウォノソボ・バンジャルヌガラ間より遙かに遠いにもかかわらず、煙草輸送をバンジャルヌガラへ引き寄せるにはなおいくらかの困難がある。

荷車はプルウォレジョからウォノソボへ政庁の貨物を運び、戻りに煙草を積む。これによって、輸送費はかなり安くなる。他方、ウォノソボ・バンジャルヌガラ間にはほとんど交通がなく、そうした交通を発展させるためには時間が必要である。ウォノソボ向け搬出品の大半はプカロンガンから、あるいは直接にスマランから来るが、多分その一部はマオスとバンジャルヌガラ経由の道を選んでいる。」[Byvanck 1897]

すなわち、ウォノソボ煙草が荷車で南に下ってプルウォレジョから S.S.西部線で西へ向かうというルートができていたのである。そしてこのルートがその後も利用されていたことは、I.M.[1902:294]所収の次の記事から明らかになる。

「刻み煙草商人(大半が華人)は、本年、前年ほど多くの煙草をウォノソボから確保できないことを恐れているが、それは現地の不作のせいではなく、プルウォレジョの有名な華人煙草商人をボスにしてバタヴィアの数十人の華人が、ウォノソボで煙草を買い付けるために資本金 15,000 ギルダーで会社を形成したからである。この煙草は近年、バタヴィアで非常に人気が高い。これまでこの煙草は全てプカロンガン市の華人煙草買付け者達によって買い上げられ、彼らのエージェントの仲介でバタヴィアで販売されていた。

ウォノソボの煙草栽培者は普通、ジャワ正月の数日前にジュラガンと一緒にプカロンガンへ来て、彼らから提供すべき刻み煙草の代わりに現金とバティック布からなる前貸しを受け取っていた。しかし、本年は前貸しを要求するためにプカロンガンへ来たのは若干名に過ぎなかった。大半の者が既に新しい会社から現金を受け取っているのは、確実である。現在では、バタヴィアの華人煙草商人たちは自らウォノソボで、したがって生産者から直接に、従来よりずっと安く煙草を買い付けている。」

これによれば、ウォノソボの煙草は従来はプカロンガンの華人商人の手で、前貸しによって生産者から独占的に買い上げられてプカロンガン経由でバタヴィアに運ばれていたのだが、1902年にはその取引にプルウォレジョとバタヴィアの華人商人の連合グループが参入し、シェアの一部を奪ったのである。それまでは、バタヴィアの商人たちはプカロンガン商人を介してこの煙草を高値で入手していたのであるが、生産者から直接に安く購入することによって利益を拡大することを図ったと思われる。そして、この煙草はこうした経緯からすると、プルウォレジョ経由で西ジャワへ運ばれたと考えてよい。こうしたルートができたことは、従来の北海岸沿いルートの輸送を減らすことになったと思われる。

3, セラユダル蒸気軌道(Serajoedal Stoomtram Maatschappij、以下 S.D.S.と省略)のバンジャルヌガラまでの営業開始(1898年)

次に挙げるべきは、S.D.S.が 1898年5月18日にバンジャルヌガラまでの営業を開始した結果、ウォノソボ煙草の一部が同線を使って輸送されるようになったことである。

先に同社の建設部長 J.N.Byvanck のウォノソボ、バトゥール、カランコバル訪問について触れたが、この時に懇談したバトゥールの商人たちは彼の書簡[Byvanck 1897]によれば「バタヴィア向けの煙草を我々の軌道で運ぶなど問題外である、とりわけ現在、海上輸送の移出関税が廃止されたからだ(註)」と言ったという。Byvanck はさらに続けて「50kg の煙草

をバトゥールからプカロンガンへ輸送するには1ピコル当たり 1.25 ギルダールもしくは 2.50 ギルダールかかり、それより少ない金額で煙草をバンジャルヌガラへ運ぶクーリーを集めることは、不可能なままであろう。バトゥール・プカロンガン間の距離は 26 パールであり、バトゥール・バンジャルヌガラ間は 27 パールである。プカロンガンからバタヴィアへの輸送には1ピコル当たり 0.50 ギルダール前後が払われるが、これに対して我々の軌道には勝ち目がない。プルウォケルトがテガルと結ばれた時、テガルとチェリボンに向けられる煙草は初めて我々の軌道を選ぶであろう。石油のような運び上げる商品もプカロンガンから来る。戻り荷としての石油1箱の輸送には、0.40 ギルダール払われるだけだ。」と、商人たちが S.D.S.利用に消極的なのはコスト高が原因であると述べている。バトゥールの場合には、この地域の煙草産地の中で最も北海岸に近いこともあって、従来通りに山間道路を通過してプカロンガンへ輸送する方が有利だったのである。

しかし、それより南部に位置するウォノソボで生産される煙草の場合には、表 7-2 に示されるようにバンジャルヌガラまで道路を使って輸送され、そこから S.D.S.を經由して S.S.西部線に積み替えられて西ジャワへ輸送されるようになった。この結果、ディエン高原を越えてプカロンガンにもたらされる煙草は減少したと考えられる。

4. ケドゥー煙草地帯への蘭印鉄道会社 (Nederlandsch-Indisch Spoorweg Maatschappij、以下 N.I.S.と省略)線伸延(1907年)の影響

N.I.S.は王侯領のプランテーション生産物をスマラン港まで輸送する役割を担って建設されたジャワ最初の鉄道であり、1867年にスマラン・タンゲン(Tangoeng)間が開通したのを皮切りに、1872年にはジョクジャカルタまで路線が伸び、さらに 73年にはジョクジャカルタ線のクドゥン・ジャティ(Kedoeng Djati)とウィレム I 世(Willem I)を結ぶ 37 km が開通した。その後、同社はスラバヤへも線路を延ばすことになったが、中ジャワ山間部の煙草地帯へは、1898年にジョクジャカルタ・マゲラン間 47km が開通、1903年にはマゲラン・スチャン(Setjang)間 10km、1905年にはスチャン・ウィレム I 世間 27km、1907年には1月3日にスチャン・トゥマングン間 14km、7月1日にトゥマングン・パラカン間 13km が開通している。この結果、マゲラン、トゥマングン、パラカンで生産される煙草をスチャン、ウィレム I 世、クドゥン・ジャティを經由してスマランへ鉄道で輸送することが可能になった。

この結果、「N.I.S.のスチャン・パラカン線開通後、ケドゥー煙草の輸送にとってやや別の状況が生じた。パラカンの煙草は以前にはンガディジョ(Ngadiredjo)とブジェン(Bedjen)経由でウェレリ(Weleri)へ来ていたが、今や N.I.S.経由でスマランへ行く。プカロンガンとチェリボンへ向かう部分は、スマランで我々の線に来る。これにより我々は 1907年、N.I.S.から 432 トン受け取ったが、1906年は 45 トンだけだった。ウェレリから我々は 1,805 トンを輸送したが、1906年は 2,220 トンだった。ウェレリで失った 400 トンは、明らかにパラカン煙草で、N.I.S.を經由してスマランで我々の線に来たのである。」[S.C.S. Jaarverslag 1907]とあるように、このルートを使った北海岸向け鉄道輸送が激増し、従来の山越えによるウェレリ向け輸送が激減した。表 7-3 は 1910 年までの状況を示したものであるが、この報告に述べられた事態が一時的なものではなかったことを示している⁽¹⁶⁾。

(16)もっとも 1912 年の報告は、「N.I.S.からスマランで受け取った煙草が増加したが、これらはバタン、プカロンガン、チェリボン向けだった。ウェレリからの発送量も増

加した。」[Jaarverslag S.C.S., 1912]と、N.I.S.との通し輸送の発展とともに、ウェレリからの発送増加をも指摘している。ただ、これはおそらく山越えで運ばれてきたケドゥー煙草が増加したのではなく、地元産煙草が増加したからであろう。ケンダル県では、ウェレリとケンダルの間でかなりの栽培があり、これらは産地名をとってトゥロコ (Troeko) 煙草と呼ばれていた。またケンダル県山間部のスロカトン (Selokaton) 周辺でも畑作煙草が生産されたが、これもウェレリへ運ばれていたようだ。そしてこれらの煙草は 1900 年 2 月の段階ではウェレリからかなり大量に荷車でスマラン、デマック、クドゥスへ、つまり東向きに運ばれていたが [Maandrapport Februari 1900]、『福祉減退調査』の段階になると、この煙草は「近接するバタンとプカロンガン、さらにバタヴィアとシンガポールにまで移出される」[M.W.L. Semarang:215]とあるように、西向きに輸送されている。この場合、バタヴィア、シンガポール向け輸送はプカロンガン港からではなく、S.C.S.でチェリボンまで輸送してチェリボン港から行われていた [Broersma 1907:24]。この煙草が S.C.S.の輸送量の中でかなりの部分を占めたことは、例えば 14 年報告が「ウェレリ周辺とウォノソボにおける不作のために、S.C.S.内輸送も S.J.S.や N.I.S.との間の輸送も減少した。」[Jaarverslag S.C.S., 1914]と、ウェレリ周辺の煙草の不作をも輸送減の要因に挙げていることから推測できる。その他、プカロンガン理事州バタン県のバワン (Bawang)、スバ (Soebah) でも栽培が盛んであり、これらはバタンもしくはプカロンガンで S.C.S.に積まれた可能性が高い。

またこのことは、S.C.S.の西向き輸送における発送基地としてのスマランの地位を飛躍的に高めることになった。いま、この路線の開通前後の時期のスマランからの発送量を表示すると、表 7-4 のようになる。1907 年を境にして、スマランからの発送量が激増していることが一目瞭然である。このことが、表 7-1 に示されるスマランからの発送量の 1905-09 年平均、1910-14 年平均の数値を引き上げたのである。

ただし、プカロンガンの地位はこれによつてはほとんど変化しなかったようだ。この時期、表示のようにプカロンガンからの発送量はむしろ増加傾向にある。これにはもちろん先に挙げたように、S.C.S.沿線で獲れる煙草の増加も貢献していると思われるが、基本的にはスマランに運ばれてくる煙草とプカロンガンに来る煙草が、産地を異にしていたことが原因だったと思われる。先にも触れたように後者はバトゥール煙草が主体だったのであり、その輸送はこの時期にもなお山越えで行われていたのである。

5. ウォノソボへの S.D.S.線伸延 (1917 年 6 月) の影響

これについては、小論冒頭に掲げた Fruin [1923b:353-354] が、それまでディエン高原越えでプカロンガンへ運ばれていたウォノソボ煙草が、この新しい路線を経由してチェリボンへ向かうようになったことを既に指摘しているが、ここではその事情をいま少し詳細に眺めてみたい。

この線が営業開始する直前の 1917 年第 1 四半期の S.C.S.輸送報告に、次のような記事がある。

「N.I.S.との直接輸送における後退⁽⁴⁷⁾は、パラカンからバタンとプカロンガン向けの煙草輸送で生じた。ウォノソボの商人たちは以前には彼らの煙草のほぼ全部をバタンとプカロンガンで倉庫に保管し、そこからバタヴィアとセランに輸送していたが、彼らは今やますますウォノソボに倉庫を建て始めている。これはとりわけ、バンジャルヌ

ガラ・ウォノソボ線が開通すればなお増加し、その後にはそこから直接目的の駅に輸送されるようになるであろう。こうしたことは、S.C.S.線経由の煙草輸送を減少させるだろう。」[Vervoersrapport van den Chef der 4e Afdeeling over het 1e kwartaal 1917]

(17)この報告の前半部分によれば、前年同時期比 409 トン減である。

ここからわかることは、①バタンやプカロンガンは従来、N.I.S.を通過してスマランで S.C.S.に積み替えられて西向きに輸送される(ウォノソボ)煙草の集散地であったこと、②しかし、ウォノソボの煙草商人たちは S.D.S.線開通を見越して、開通前から煙草輸送ルートの切替に向けた準備を行っていたことである⁽¹⁹⁾。

(18)なお、1916年の S.C.S.年次報告書[Jaarverslag S.C.S. 1916]によれば、N.I.S.との直接輸送はこの年にも前年比で 250 トン減っており、このような準備が既に始まっていたのかもしれないが、詳細は不明である。ちなみに同年の S.C.S.の総輸送量は、この年次報告に従えば 5,146 トンで前年比 697 トン増、各線区の輸送で増加したのは S.J.S.との直接輸送 186 トン、S.S.西部線との直接輸送 259 トン、S.C.S.線区内の輸送 370 トン、逆に減少したのが N.I.S.との直接輸送の他に S.S.西部線経由の継続輸送(D.V.)で 111 トンだった。煙草栽培は S.C.S.沿線が大きく拡大したと指摘されており、それが N.I.S.でスマランへ来る煙草の減少にもかかわらず、S.C.S.の輸送を増加させたと考えられる。

そして Fruin[1923b:271]によると、ウォノソボ県 **Kedjadar** 副郡では「この副郡には荷車(voertuigen)が通れる道はないが、それでもここは孤立しているわけではない。煙草はもっとも僻遠のデサから Garoeng まで数時間かければ担いでくることができ、そこからは状態のいい 5 パールの長さの馬車道(rijweg)で、セラユダル軌道が通るウォノソボまで運ぶ。」という状況が 20 年代初めにはできあがっていた。すなわち、これらの煙草はそれまでのように山越えて北海岸(プカロンガン、バタン)へ運んだり、パラカンから N.I.S.でスマランまで運び、そこから S.C.S.に積み替えて西向きに輸送するのではなく、ウォノソボから S.D.S.でプルウォケルトへ出て、そこから国鉄西部線を使ってチェリボンへ輸送されるようになったというのである⁽¹⁹⁾。

(19)なお、S.S.西部線は 1912 年 6 月 3 日から Tjikanpek・チェリボン間の営業を開始しており、これによってこの時からチェリボンはバタヴィアと鉄道で結ばれることになっていた。したがって、これらの煙草がチェリボンからさらに西へ輸送された可能性が高い。

もっとも、S.D.S.の煙草輸送量を表 7-5 から見ると、ウォノソボ開通にもかかわらず 1917~18 年にはむしろ大きく減っている。それはこの時期にはジャワにおける食糧危機発生の可能性が大きく、植民地政庁が農民に対して煙草の栽培制限を強力に勧めたことと関係が深いと思われる⁽²⁰⁾。実際、この時期には、表 7-6 に示される通り、この地域の煙草収穫面積は大きく減っている。

(20)これについては植村 1998 を参照。

いずれにせよ、表 7-1 と表 7-4 から明らかなように 17 年以降、たちまちスマランから S.C.S.で輸送される煙草が激減し、1920 年代以降にはここからの発送はほんの少なくなってしまった。スマランは、西向き輸送の基地としての地位を喪失したのである。

しかし、対照的にプカロンガンの地位には表 7-1、表 7-4 から見る限り、この段階でもそれほど大きな変化はない。その背景には(a)プカロンガン近隣の煙草栽培が引き続き

拡大したこと、(b)バトゥール産煙草が相変わらず山越えでプカロンガンに輸送され続けていた、という2つの事情があったと考えられる。

(a)については、表7-10に示したプカロンガン理事州における煙草収穫面積の拡大から明らかであり、多言を要しないと思われる。そこで、以下ではこの時期のバトゥールの状況を、S.D.S.の輸送周旋人(de Agent voor het Vervoer)が1917年6月20~23日に実施した職務旅行の同月26日付け報告書[Rapport Batoer 1917]にもとづいて検討し、(b)の問題を考えてみたい。同報告によると、バトゥールの町には17人の華人大商人が住み、5つのグループを形成しているが、各グループ毎に代理人をバンジャルヌガラに置いていた⁽²¹⁾。

(21) 5つのグループは① Tan Ting Tjioe、Tan Ting Kiat、Tan Gian Tong、Tan Ting Lan、② Oei Ing Hin、The Ko Beauw、Tji Ioe Ti、③ Tjioe Tjong Sioe、Tjioe Tjong Loij、④ Go Kioe Ting、Lin Tji Siang、Oei Kong In、Lim Tiang Djian、Tji Soeij Tjiang、⑤ Tjang Tjong Sem、Tjang Tjong Hi、Tjang Tjong Tikであり、①と②の代理人は Si Hiang Ing、③は Tjioe Kong Djin、④は Tji Boen Tjan、⑤は Njo Tjioe Hongであった。①グループの Tan Ting Tjioe が、華人ライテナント(Luitenant)、すなわち華人社会のまとめ役だった。

Batoer 郡は人口 47,000 人(うち華人 854 人)、耕地は水田 2,179 バウと畑地 15,649 バウで、水田は高度の低い地域に分布し、住民はほとんどトウモロコシだけで生活しているので、米はこの水田からの収穫で十分であり、米移入はない。畑地には煙草約 8,000 バウ、トウモロコシその他の裏作物約 7,649 バウが作られていた。

煙草は Karangobar 郡(約 3,000 バウ)と、Leksono 郡の Watoemalem 副郡(約 6,000 バウ)でも栽培され、それらは Batoer でも販売される。3地区の合計栽培面積は 17,000 バウであり、煙草のバウ当たり収量は 1,000ellers すなわち 200 rigens (1 eller は 42 cm × 25 cm × 2 cm のシート1つ)であるから、合計収量は $17,000 \times 200 \text{ rigens} = 3,400,000 \text{ rigens}$ すなわち 8,500 koddie (1 koddie = 600 rigens = 約 0.9 トン)となる。この 8,500 koddie のうち、約 4,000 koddie がバトゥールの華人に買い上げられ、そのうちの 2,500 koddie はプカロンガンとテガルへ、1,500 koddie は西ジャワ(バタヴィア、セラン、ランカスピトゥン、チレゴン)へ向かうが、西ジャワ向け 1,500 koddie の中の 900 koddie はシンゴメルト(Singomerto)とバンジャルヌガラ経由、600 koddie はプカロンガン経由で輸送されている。プカロンガンが西ジャワ向け通し輸送(doorvoer)のために受け取る 600 koddie のうち、S.C.S.線、S.S.線で運ばれるのは 50 koddie 程度にすぎず、550 koddie は海上をプラウで輸送されている⁽²²⁾。

(22) この数字は明らかに表7-4に掲げた S.C.S.の統計と食い違っているが、その理由などの詳細はわからない。

Batoer から西ジャワに向けての煙草の輸送費はシンゴメルトとバンジャルヌガラ経由の鉄道輸送の方がプカロンガン経由よりも安いにもかかわらず⁽²³⁾、煙草の一部がプカロンガン経由で送られるのは、S.D.S.駅まで搬出するためのクーリーが不足しているからだという。バトゥールには荷担ぎ人夫がおらず、バトゥール・バンジャルヌガラ間の貨物輸送はシンゴメルト近くの新サ・バンタルワル(Bantarwaroe)の荷担ぎ人夫によって行われる。荷馬(koeda oembal)での輸送は、煙草の馬の汗がついた時、商品の質が落ちるから行われていなかった。

(23) バトゥールから煙草輸送のクーリー賃金も、バンジャルヌガラまでが koddie 当たり 14 ギルダーであるのに対して、プカロンガンまでは 18 ギルダーと高かった。

以上がこの報告の大要であるが、バトゥールの町は近隣産も含めた煙草の集散地であり、その取引に携わっていた華人商人たちはこの3地区で獲れる煙草 8,500 koddie (=約 7,650 トン)の半分近くの 4,000 koddie を取引しており、そのうちで S.D.S.によって西ジャワへ運ばれるのは 900 koddie (22.5%)に過ぎず、3,100 koddie (=約 2,790 トン)が山越えでプカロンガンへ運ばれ、そこから最終仕向地へ向かっていたこと、S.D.S.による輸送の方がコストがかからないにもかかわらず以上のような状況が見られる原因はクーリー不足であること、などがわかる。要するに、バトゥールと南部との間の交通インフラの整備がなお進んでおらず、そのことがプカロンガン経由の輸送を存続させていたのである。

この報告によると、この時に S.D.S.輸送周旋人と会合を持った華人商人たちは、同席したバニユマス地方評議会議長から、シンゴメルト・バトゥール間の道路を荷車輸送に適したように改修することを請願したらどうかと勧められ、この請願は郡長がこの会議の直後に作成し、華人たちに署名のために渡されたという。

以上に2, 3, 5で述べた輸送の発展は、北海岸沿いの西ジャワ向け輸送を減少させるものであった。そしてそれは特に一度は西向き輸送基地の地位を占めたスマランからの発送を激減させることになった。しかし、プカロンガンは、Blink [1912:319-320]が「1897年の煙草税 (accijns op de tabak) 廃止と、南部の輸送手段改善によって、プカロンガン港は以前のような程度で唯一の原住民煙草集散地ではなくなった。またプカロンガン以外の華人が以前よりもその商業に参入するようになった。プカロンガンの華人居住区の倉庫が空であることが、それを示している。現在では原住民煙草を買い付ける華人買い上げ商人がバタンや、バトゥール(ディエン高原、ボジョネゴロ)の大華人居住区、パラカンにも見られる。」というように、確かに唯一の集散地ではなくなったが、依然としてかなりの煙草を発送し続けた。そしてそれを支えたのが、なお山越えでそこへ運ばれてくる大量のバトゥール産煙草だった⁽²⁴⁾。

(24) Fruin [1923b:373]は、「現在もなお Rangkas Betoeng からの報告によると、そこでは商業は主に華人の手にあるにもかかわらず、プカロンガン出身の原住民煙草商人が何人かいる。Pandeglang 県銀行支配人の G.V.Rhemrev 氏によれば、煙草を他地域から直接に取り寄せる原住民はいない。それを試みた1人のハジは、華人との競争に敗れ去った。彼の考えでは、中間商人として華人に対抗できる原住民はいない。華人はこれらの原住民を小売りに使用している。」と述べており、バンテンでは1920年代初めにもプカロンガンから来る煙草がなお多く売られていたことが分かる。また、政庁もこのプカロンガン経由の輸送を発展させようとしたようだ。バニユマス理事の1922年の引継覚書によると、「Bandjarnegara と Pekalongan 理事州の間の連絡車道の工事も着手された。(しかし)提起された経費節減のために、工事は中止されねばならなかった。この道を通してディエン高地の煙草地帯へのアクセスができる。財政事情が好転すれば、工事が継続されることが望ましい。」[Memori Residen Banyumas (M.Zandveld), 4 Juli 1922, in Memori Serah Jabatan 1921-1930 (Jawa Tengah), Jakarta 1977:144]とあり、このルートの整備が試みられている。

なお、この他、1918年5月に S.C.S.のパラプラン支線(1886年開通)がプルプク(Proepoek)まで伸びて S.S.と連絡することになった結果、ここを経由する S.S.との間の煙草輸送が拡大した。その様子は表7-11に示した通りであるが、経由地の位置から

考えて「引渡」の煙草はプリアンゲル方面へ向かったと考えられる。しかし、「受取」についてはどこで生産された煙草が最終的にどこへ向かったのかは、データを得ることができなかつた。今後の検討課題にしたい。

III. クレテック・ストローチェ産業発展の影響

1. クレテック・ストローチェ産業の発展と原料煙草

植民地期ジャワのストローチェ産業の中で最も重要なクレテック・ストローチェ産業は19世紀末にクドゥスで始まり、第一次世界大戦後に大発展するとともに、東ジャワにも広まっていった。そして、クドゥスにおけるこの産業の最大の原料煙草供給者がケドゥーだった。Mangoenkoesoemo[1929:29]は「ケドゥーはクドゥスにとって最大の煙草供給者である。1927年にクドゥスへ運ばれた煙草の総量(6,184.15トン)のうち、ケドゥーは4,653.70トン、75%以上を占める。ケドゥーの煙草供給者の中ではトゥマンガングンが頂点に立ち、これにムンティラン、マゲラン、克蘭ガン(Kranggang)、パラカンと続き、最後にブラバック(Blabak)が来る。」と述べている。

表6-13はMangoenkoesoemo[1929:31]が載せるS.J.S.の煙草輸送表を加工したものであるが、ここからは、①表示の時期(1919~8年)にはクドゥスへの原料煙草輸送は基本的に増加傾向にあること、②ケドゥー煙草のシェアは基本的には拡大しつつあること、③ケドゥーの中ではトゥマンガングン産煙草が圧倒的に多いこと、④しかし、ムンティラン産煙草が急速にシェアを拡大していること⁽²⁵⁾、がわかる。

(25)Mangoenkoesoemo[1929:32]によれば、ムンティラン産煙草とトゥマンガングン産煙草は喫味に違いがあり、前者の方が重いという。

この表に掲げられた時期以降の動向については、植村[2007c]で述べたように1920年代末には最大のライバルだったレンバン煙草の意義が低下し、30年代半ばにはクドゥス市場は完全にケドゥー産煙草が制圧したので、ケドゥー煙草のクドゥス向け輸送はますます増加したと考えられる。またこれに加えて、東ジャワのストローチェ産業の原料として用いられる煙草も「主としてケドゥーから運ばれるが、少量はマドゥラ、ボジョネゴロからも来る」[Mangoenkoesoemo 1931:9]とあるように、ケドゥー煙草が太宗を占めた。

2. 輸送ルートとその変化

クドゥス向けのケドゥー煙草輸送は、各産地からN.I.S.のDjocja-Willem I線を通ってスチヤン、ウィレムI世、クドゥンジャティ(Kedoengdjati)駅を経由してスマランに至り、そこからS.J.S.に積み替えてクドゥスへ至ったと考えられる。そしてこの結果、20年代には表7-8に示されるように、同線からS.J.S.へ引き渡される煙草の量が大きく増えている⁽²⁶⁾。

(26)S.J.S.の輸送した原料煙草はこれだけではない。スマラン経由で行われるS.C.S.沿線、とりわけケンダル、ウェレリ付近で作られるTroeko煙草の輸送は古くからかなりの量に及んだし、ボジョネゴロ産煙草はN.I.S.からTjepoe、Kradenanを経由してS.J.S.にもたらされ、またDjeponからクドゥスへ向けての輸送も担った。加えてS.J.S.沿線で産出する煙草が東向き(Djeponからスラバヤ、ボジョネゴロなど)、西向き(プルウオダディからスマランなど)に輸送された。

他方、東ジャワのストローチェ産業中心地のブリタル、クディリ、トゥルンアグンへはおそらくDjocja-Willem I線を南下してジョクジャを経由してスラカルタ(ソロ)までN.I.S.で

運び、そこで S.S.に積み替えられた(表 7-8 の「S.S.ソロ以東へ：ソロ経由」がこれに当たる)と考えられる。その輸送量はとりわけ 1920 年代後半期に急増している。

これらは、やはり S.J.S.を使ってクドゥスへ運ばれるレンバン煙草とも相俟って、表 7-9 に示される S.J.S.の煙草総輸送量の 1910 年代後半からの急増の原因にもなったと考えられよう。

ところが、このような S.J.S.の輸送に 1920 年代末ごろから強力なライバルが出現した。トラック輸送である。S.J.S.輸送報告を読むと、このころから様々な商品輸送でトラックが S.J.S.の輸送シェアを脅かしているという記事が散見するようになるが、ケドゥーの煙草についてこの問題に関する記述が初めて登場するのは 1930 年上半期報告であり、「(煙草輸送量の減少は)ストローチェ販売減少とクドゥスのストローチェ商人が煙草の使用量を減らしたことによる。この後退はさらに、ケドゥーからこの商品を完全に自動車だけでクドゥスに輸送しようと努力しているトラックとの競争とも関係がある。」と述べられる。そして翌 31 年上半期報告にも「(煙草の)この輸送減は、不況によるストローチェの販売減の結果であり、さらにトラックの競争のせいである」と指摘される。

もちろん、S.J.S.側もこのようなトラックの攻勢に対して手をこまねいていたわけではない。同年 1~9 月期輸送報告によれば、同社は 9 月 1 日に N.I.S.と協議の上で Djocja-Willem I 線からクドゥスまでの輸送のための特別運賃を導入している。そしてこれは効果があったようで、1932 年第 1 四半期報告は、「煙草の輸送はストローチェ製造業の縮小の結果減少した」と述べつつも、「トラックの競争は、1931 年 9 月 1 日に導入された特別運賃の結果、もうそれほど深刻ではなくなった。」と状況を分析している。しかし、問題がこれで片づいた訳でなかったことは、1933 年第 1 四半期報告が「クドゥスにおけるストローチェ輸送の後退は、煙草輸送をも減退させた。さらにトラックとの競争もあった。」と述べていることからあきらかである。したがって、表 7-9 や表 7-11 に示される S.J.S.の 1930 年代の輸送量減少はもちろん恐慌の影響を考える必要はあるが、その数字がそのままクレテック産業の動向を反映しているわけではない。

いずれにせよ、クドゥスと東ジャワのストローチェ産業の発展によって、中部ジャワ山間部、とりわけケドゥー東部で生産される煙草は初めて本格的に東に向かって輸送されるようになったのである。

3. ケドゥー理事州内における生産への影響

このような東向き輸送の増加は、ケドゥー理事州内の生産のあり方にも影響を及ぼした。ケドゥー理事の 1933 年の引継覚書に「ペペアン煙草は、ストローチェ産業、シガレット産業へ向かう。ガランガン煙草は西ジャワへ行く。」[Memorie van Overgave van J. van Pelt, Resident van Kedoe, 22 Juli 1933:83]と述べられるように、一般にクレテック・ストローチェの原料として用いられるのはペペアン煙草であり、ガランガン煙草は西ジャワへ送られる。それでは、中ジャワ山間部の煙草地帯では何れに加工がなされていたのだろうか。改めて整理してみよう。

先ずバニユマス理事州北部の主産地パトゥールについては、Fruin[1923a:269, 292~293; 1923b:355~356, 365]や Tabak[1925:156]の記述から、全てペペアンであることが分かる。これはこの地域が高度の高い山地であるから、当然であろう。

次にケドゥー理事州では、先に引いた Mangoenkoesoemo[1929:29]はペペアン煙草主産地

として第1にトゥマングンを挙げ、これに次ぐ産地としてムンティラン、マゲラン、クラガン、パラカン、ブラバックがあるという。Soerario[1935:16]が挙げる産地も、ブラバックの名が落ちていることを除けば、全く同じである。

そのトゥマングン県内の状況については、「ガランガン煙草は県西部で製造され、ペペアン煙草は南部で作られる」[Mangoenkoesoemo 1929:30]と指摘される。同様に Fruin[1923a:269, 301]によれば、この県では Temanggoeng 郡の Temanggoeng 副郡と Tembarak 副郡で煙草の全収穫を天日乾燥するという。これに対して Stenvers[1915:16]によれば、同県 Parakan 郡でも最下層の葉は全てペペアンに加工され、他の価値の低いペペアン煙草とともにススル(soesoer)すなわち噛み煙草用に売られるというから、この郡ではガランガン加工が主流であったといえる。最後に M.W.H.[Kedoe:382]は、トゥマングン県では「ペペアン煙草は Pringsoera 郡、Temanggoeng 郡で最も盛んに製造され、ガランガン煙草は主として Paraan 郡で加工される。」という。

次にウォノソボ県に関しては、Heijden[1935:565]が Kaliwiro 副郡では若干のデサでペペアン煙草が作られていたが小規模だったと述べているから、この県では基本的にガランガンが作られていたとみてよい。

これらを総合すると、ペペアン煙草はケドゥー理事州東部地域で、ガランガン煙草はケドゥー理事州西部からバトゥールに至る地域を中心に作られており、両者のおおよその境界はパラカン郡辺りにあって、ここではともに製造されていたということになる。

したがってケドゥスを初めとするクレテック産業への輸送増は、主としてケドゥー理事州東部の生産を刺激したと考えられる。そしてそれは、トゥマングン県ではケドゥスのクレテック産業が急速に拡大した結果、ペペアンの製造が増加しガランガンが減少した[Mangoenkoesoemo 1929:30]という形をとって現れたのであった。

おわりに

小論ではケドゥーとバニユマス北部で生産される煙草が、どこへどのように流通したかを時間軸に沿って検討し、その変化および変化を引き起こした契機が何かを述べてきた。それを簡単にまとめるならば、ケルフ煙草のジャワ内流通は、クレテック・ストローチェ産業の発展以前には中ジャワ内陸部産は北海岸経由西向きであり、その意味では主としてスマランより東側で消費されたレンバン・ボジョネゴロ産と内地市場を分割する状況があった。こうした中で 19 世紀末から次第に鉄道・軌道の建設が進んだ結果、西向き輸送における北海岸ルート的位置が徐々に低下していった。そして、1910 年代後半頃からケドゥスをはじめとするクレテック・ストローチェ産業が大きく発展したことによって、ケドゥー煙草の一部は東向きに輸送されることになったが、このことは従来の市場分割状況を崩し、ケドゥー煙草が優位に立つ状況を創り出したのだった。筆者が前稿で検討したボジョネゴロにおけるヴァージニア煙草栽培拡大は、この競争に敗れたボジョネゴロ側の 1 つの対応であったのかもしれない。

残された課題も多いが、とりわけ以下の点を挙げておきたい。第1は、ケドゥー煙草の東向き移出が増加した 1920 年代に、表 7-6 から明らかなようにケドゥー理事州の収穫面積は増加していないことを、どう解釈するかという点である。ケドゥー煙草の西向き輸送が減少した可能性を考える必要があるが、もしそうだとすれば西ジャワの原料煙草事情

に何が生じたのだろうか？カウン・ストローチェが減産になったのか、そして中ジャワ産クレテック・ストローチェが西ジャワにも進出したのであろうか？あるいはケドゥー煙草の代替品として、プカロンガンやプリアンゲルにおける原料煙草生産が促進されたのであろうか？第2は、北海岸沿い流通の減少がこの地域の商業構造に与えた影響をどう考えるかという問題である。これによって、従来の煙草集散地であったプカロンガン、ウェレリなどの華人商人は、どのような影響を受けたのであろうか？そして第3は、先にも少し触れたが、ケドゥー煙草の東向き移出がボジョネゴロ・レンバン煙草に与えた影響をどのように考えるかという点である。

これらの点については、現時点では十分な史料を確保しえておらず、明確な答えを出すことができないが、いずれ検討してみたい。

[引用文献目録] incomplete

1, 未刊行文書

GS 1917 no.37x : Rondschrijven van 1ste Gouv.-Secretaris aan den Residents van no.37x, 8 Febr. 1917, mr 56g/17, Vb 9-4-18-27

GS 1918 no.2x : Gouv.-Secretaris aan den Residents van no.2x, 2 Jan. 1918, mr 24g/18, Vb 18-10-19-23

GS 1919 no.73x : Telegram van 1ste Gouv. -Secretaris aan den Resident vanno.73x, 12 Maart 1919, mr 242g/19, Vb 18-10-19-23

N.I.S., Overzicht Vervoer : Overzicht van het vervoer op alle lijnen..... , ARA, Archief van Nederlandsch Indische Spoorweg Maatschappij, toegang nr. 2.20.10, in Doos 487

Nota beperking 1918 : Nota nopens de beperking van den aanplant..., 12 Dec.1918, mr 242g/19, Vb 18-10-19-23

S.J.S. 1918-3 : Samarang-Joana Stoomtram Maatschappij, 4de Afdeling. Driemaandelyksch Rapport over het vervoer (3de kwartaal 1918), ARA, toegang nummer 2.20.18

S.J.S., D.R.V. : S.J.S., 4e afdeling, Driemaandelyksch-rapport over het vervoer, ARA, Archief van Samarang Joana Stoomtram Maatschappij, toegang nr. 2.20.18

S.J.S., R.V. : S.J.S., 4de Afdeling. Rapport over het vervoer betreffendeARA, Archief van Samarang Joana Stoomtram Maatschappij, toegang nr. 2.20.18

2, 刊行史料、研究論文など

赤崎雄一 2000 : 「1918年クドゥスの反華人暴動に関する一考察」(『史學研究』227号)

深見純生 1991 : 「ジャワ島の地方行政区画－歴史的概観－」(『東洋史研究』50-2)

国際日本協会 1939 : 『世界原料品・食糧品統計書』、国際日本協会

栗林源十郎 1941、『蘭領東印度に於ける煙草事業調査書』、協同煙草株式会社

植村泰夫 1983 : 「煙草栽培とブスキ農村」(『南方文化』第10輯)

植村泰夫 1997 : 『世界恐慌とジャワ農村社会』、勁草書房

植村泰夫 1998 : 「1910年代末～20年食料問題とジャワ社会」(『東洋史研究』57-3)

植村泰夫 2001 : 「植民地期インドネシアのプランテーション」(『岩波講座 東南アジア史 6』、岩波書店)

植村泰夫 2004 : 「サマラン・ジョアナ蒸気軌道と稲米流通」(『広島東洋史学報』第9号)

- 植村泰夫 2005A : 「植民地後期ケドゥーにおける内地市場向け煙草の生産構造」『広島東洋史学報』第 10 号
- 植村泰夫 2005B : 「植民地後期ケドゥーにおけるヨーロッパ市場向け煙草栽培に関する覚書」『広島大学文学研究科論集』65 巻
- 植村泰夫 2005a : 「植民地後期ケドゥーにおけるヨーロッパ市場向け煙草栽培に関する覚書」(『広島大学大学院文学研究科論集』65 巻)
- 植村泰夫 2005 : 「植民地後期ケドゥーにおける内地市場向け煙草の生産構造」(『広島東洋史学報』第 10 号)
- 植村泰夫 2005a : 「植民地後期ジャワ住民煙草産業史研究序説」(『文化交流史比較プロジェクト研究センター報告書』2 号)
- 植村泰夫 2005b : 「植民地後期ケドゥーにおける内地市場向け煙草の生産構造」(『広島東洋史学報』第 10 号)
- 植村泰夫 2006 : 「植民地後期ジャワ製品煙草研究序説」(『広島東洋史学報』第 11 号)
- 植村泰夫 2007a : 「植民地後期トゥバンにおける住民煙草産業」(『文化交流史比較プロジェクト研究センター報告書』4 号)
- Atlas 1938 : *Atlas van Tropisch Nederland, Batavia*
- Bagchus, C.W., 1929: *Maandgemiddelden en Bouwgrondoccupanties per district van de negen belangrijkste Inlandsche Landbouwgewassen op Java en Madoera in de jaren 1920 tot en met 1925 (Mededeelingen van het Centraal kantoor voor de Statistiek, no.65)*, Weltevreden.
- Bekking, H.C., 1861 : *De Ontwikkeling der Residentie Rembang*, Rotterdam
- Beteekenis Tabakscultuur 1915 : "De Beteekenis van de Tabakscultuur en Bereiding in de Afdeeling Toeban", *Tijdschrift voor het Binnenlandsch Bestuur*, dl.49
- Bleeker, P., 1850 : "Fragmenten eener Reis over Java", *Tijdschrift voor Neerlandsch-Indië*, 1850-1, 2
- Bleeker, P. 1850-II : "Fragmenten eener Reis over Java", *Tijdschrift voor Neerlandsch Indië*, 1850-II
- Blink, H., 1912 : "Tabak, tabakscultuur, tabakshandel en tabaksindustrie der aarde", *Tijdschrift voor economische en sociale geografie*, vol.3,
- Burger, D.H., 1975: *Sociologisch-Economische Geschiedenis van Indonesia*, Hague
- Bosch, W., 1853 : "De tabaks-kultuur en de welvaart der bevolking", *Tijdschrift voor Nederlandsch Indië*, 1853-I
- Broek, P.J.van sder, 1949 : "Bevolkingstabak", in Hall, C.J.J.van & C. van der Koppel (eds), *De Landbouw in de Indische Archipel*, Deel IIB, 's-Gravenhage
- Castles, Lance 1967: *Religion, Politics, and Economic Behavior in Java: The Kudus Cigarette Industry*, Yale Univ. Southeast Asia Studies
- C.E.I., vol.1 : *Changing Economy in Indonesia, vol.1 Indonesia's Export Crops 1816-1940*, 1975
- C.E.I., vol.8 : *Changing Economy in Indonesia, vol.8, Manufacturing Industry 1870-1942*, 1988
- C.E.I., vol.12a : *Changing Economy in Indonesia, vol.12a, General Trade Statistics 1822-1940*, 1991
- C.E.I., vol.14 : *Changing Economy in Indonesia, vol.14, The Cultivation System, Java 1834-1880*, 1993, Amsterdam
- Chef van aanleg 1897 : Chef v/d aanleg aan de Directie der Serajoedal Stoomtram Maatschappij, 's Gravenhage, C.H., Poerwokerto, 25 Augustus 1897, No.590/ D 193 (in Tabaksvervoer, Dossier 1953,

Archief SDS, ARA)

- Crawfurd, J. 1820: *History of the Indian Archipelago*, vol.1~3, Edinburgh
- Deventer, S. van 1866 : *Bijdragen tot de Kennis van het Landelijk Stelsel op Java*, dl.1, Zalt-Bommel
- Deventer, S. van, 1866 : *Bijdragen tot de kennis van het Landelijk Stelsel op Java*, dl 2, Zaltbommel
- Diëng-Vlakte 1890: "De Diëng-Vlakte", (*Tijdschrift voor het Binnenlandsch-Bestuur*, vol.4)
- Elson, R.E., 1994 : *Village Java under the Cultivation System 1830 ~ 1870*, Sydney
- Encyclopaedie : *Encyclopaedie van Nederlandsch Oost-Indië*, Tweede Druk, Deel 4, 1921, 's-Gravenhage en Leiden
- Enkele gedeelten Banjoemas 1924 : "Enkele gedeelten der Residentie Banjoemas. (Gegevens ontleend aan mededeelingen van het Binnenlandsch bestuur en aan plaatselijk onderzoek) ", in *Verslag van den Economischen Toestand der Inlandsche Bevolking*. 1924, deel II,
- Fasseur, C., 1975 : *Kultuurstelsel en Koloniale Baten, De Nederlandse exploitatie van Java 1840-1860*, Leiden.
- Fruin, Th., 1923a : "Een en ander over de tabakscultuur voor de Inlandsche markt in de regentschappen Bandjarnegara, Wonosobo, Temanggoeng en Magelang", *Blaadje voor het Volkscredietwezen*, 11-9
- Fruin, Th., 1923b : "Kerftabak op Java", *Koloniale Studien*, 7-2
- Fruin, Th.A., 1930: "Iets over de Kretekstrootjes-Industrie" (*Blaadje voor het Volkscredietwezen*, 1930, No.10)
- Gegevens Nijverheid 1916 : *Gegevens betreffende de Nijverheid in Nederlandsch-Indië I*, 1916, Batavia
- Gerlings, C., 1937 : "Achteruitgang in de Kwaliteit van Krosok in de Residentie Bodjonegoro" (*Landbouw* 13)
- Hak, J.C. 1927 : "Uit de Dagboek van de Ambtenaren der Centrale Kas, Ambtenaar J.C.Hak te Wonosobo, Nov.1927", *Blaadje voor het Volkscredietwezen* 1928, no.4
- Hanusz., Mark 2000 : *Kretek: the culture and heritage of Indonesia's clove cigarettes*, Jakarta.
- Hasselman, C.J., 1914 : *Algemeen Overzicht van de Uitkomsten van het Welvaart Onderzoek, gehouden op Java en Madoera in 1904-1905*, 's-Gravenhage.
- Heijden, R.W. van der, 1935: "Rapport betreffende de Tabakscultuur in het Regentschap Wonosobo en de Credietvoorziening der Tabaksplanters", *Volkscredietwezen*, 1935
- Hoëvell, W.R.van, 1849 : *Reis over Java, Madura en Bali in het Midden van 1847*, Eerste Deel, Amsterdam
- Hoogesteger, J.H., 1932: "De tabaksaccijns" (*E.W.*1932)
- Hoogesteger, J.H., 1933a: "De opbrengst van tabaksaccijns" (*E.W.*1933)
- Hoogesteger, J.H., 1933b: "Een en ander over de sigarettenindustrie in Nederlandsch-Indië" (*E.W.*1933, 20 Oct.)
- Hoogesteger, J.H., 1933c: "De tabaksaccijns" (*E.W.*1933) 1490~1492
- Hoogesteger, J.H., 1934: "Tabaksaccijns en tabaksverbruik" (*E.W.*1934)
- Hoogesteger, J.H., 1935: "Tabaksaccijns en tabaksverbruik in Neerlandsch-ndië" (*E.W.*1935)
- Houben, Vincent J.H., 1994 : *Kraton and Kumpeni, Surakarta and Yogyakarta, 1830-1870*, Leiden
- I.L 1934 : *Inlandsche Landbouw in 1934*, n.d., n.p.
- I.M. : *De Indisch Mercur*
- I.V. : *Indisch Verslag* 1931 ~ 1942
- Jaarverslag S.J.S. : *Samarang-Joana Stoomtram-Maatschappij, Verslag over het jaar*, 's-Gravenhage
- Jasper, J.E., 1915 : "De Beteekenis van de Tabakscultuur en Bereiding in de Afdeeling Toeban", *Tijdschrift*

- voor *het Binnenlandsch Bestuur*, vol.49
- Jonge, H.de, 1982 : "Middleman and Commercialization: the Tobacco Traders on the Island Madura" (in *Papers of the Dutch-Indonesian Historical Conference held at Lage Vuursche, The Netherlands 28-27 June 1980*)
- Jonge, H.M.Ch. de, 1984: *Juragans en Bandols, Tussenhandelaren op het Eiland Madura*, Nijmegen
- Jonge, H. de, 1988: *Handelaren en Handelangers, Ondernemerschap, Economische Ontwikkeling en Islam in Madura*, Foris Publications
- Kat Angelino 1929 : *Verslag betreffende eene door den inspecteur bij het kantoor van arbeid P.De Kat Angelino op de Vorstenlandsche tabaksondernemingen gehouden Enquete* (Publicatie No. 5 van het Kantoor van Arbeid), Weltevreden.
- K.V. : *Koloniaal Verslag 1848 ~ 1930*
- Landbouwatlas 1926 : *Landbouwatlas van Java en Madoera*, dl.II, Weltevreden
- L.E.V., 4e kwrt. 1934 : *Landbouweconomisch Verslag over het 4e kwrt. 1934* (*Economisch Weekblad 1935*)
- Mangoenkoesoemo, Darmawan 1929 : *Bijdragen tot de kennis van de kretek-strootjes-industrie in het regentschap Koedoes*, (Departement van Landbouw, Nijverheid en Landbouw, Mededeelingen van de Afdeling Nijverheid, No.6), Weltevreden
- Mangoenkoesoemo, Darmawan 1931: *De ontwikkeling van de kretek-strootjes-industrie in de provincie Oost-Java*, Batavia
- Memori Gubernur Java Tengah 1930: *Memori Gubernur Java Tengah* (P.J. van Gulik), Juni 1930, in *Memori Serah Jabatan 1921-1930 (Jawa Tengah)*
- Memori Residen Cirebon 1930: *Memori Residen Cirebon* (C.J.A.E.T. Hiljee), 3 Juni 1930, in *Memori Serah Jabatan 1921-1930 (Jawa Barat)*
- Memori Residen Semarang : *Memori Residen Semarang* (P.J. Bijleveld), 2 Juni 1930, in *Memori Serah Jabatan 1921-1930 (Jawa Tengah)*
- MvO Bodjonegro-Toeban 1930 : *Memori Residen Bojonegoro-Tuban* (C.E.Croes), '7 Mei 1930, in *Arsip Nasional Republik Indonesia, Penerbitan Sumber-Sumber Sejarah No.10, Memori Serah Jabatan 1921-1930 (Jawa Timur dan Tanah Kerajaan)*, Jakarta 1978
- M.W., vol.Va : *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, Va, Overzicht van de Uitkomsten der Gewestelijke Onderzoekingen naar de Landbouw....*, 1908, Weltevreden
- M.W. vol.VI^a : *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, VI^a, Overzicht van de Uitkomsten der Gewestelijke Onderzoekingen naar den Inlandschen Handel en Nijverheid en daaruit Gemaakte Gevolgtrekkingen*, Batavia 1909
- M.W. vol.VI^a, dl.1; *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, VI^a, Overzicht van de Uitkomsten der Gewestelijke Onderzoekingen naar den Inlandschen Handel en Nijverheid en daaruit Gemaakte Gevolgtrekkingen*, Batavia 1909
- M.W. vol.VI^b, dl.2: *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, VI^b, Overzicht van de Uitkomsten der Gewestelijke Onderzoekingen naar den Inlandschen Handel en Nijverheid en daaruit Gemaakte Gevolgtrekkingen, 2de deel, Bijlagen*,

Batavia 1909

- M.W.E. Banjoemas : *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, Samentrekking van de Afdeulingsverslagen over de Uitkomsten der Onderzoekingen naar de Economie van de Desa in de Residentie Banjoemas*, 1907, Batavia
- M.W.H. Banjoemas : *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, Samentrekking van de Afdeulingsverslagen over de Uitkomsten der Onderzoekingen naar Handel en Nijverheid in de Residentie Banjoemas*, 1907, Batavia
- M.W.I. Banjoemas : *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, Samentrekking van de Afdeulingsverslagen over de Uitkomsten der Onderzoekingen naar de Irrigatie in de Residentie Banjoemas*, 1907, Batavia
- M.W.L. Banjoemas : *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, Samentrekking van de Afdeulingsverslagen over de Uitkomsten der Onderzoekingen naar den Landbouw in de Residentie Banjoemas*, 1907, Batavia
- M.W. Veelt. Banjoemas : *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, Samentrekking van de Afdeulingsverslagen over de Uitkomsten der Onderzoekingen naar de Veeteelt in de Residentie Banjoemas*, 1907, Batavia
- M.W.I. Kedoe : *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, Samentrekking van de Afdeulingsverslagen over de Uitkomsten der Onderzoekingen naar den Irrigatie in de Residentie Kedoe*, 1907, Batavia
- M.W.L.Kedoe : *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, Samentrekking van de Afdeulingsverslagen over de Uitkomsten der Onderzoekingen naar den Landbouw in de Residentie Kedoe*, 1907, Batavia
- M.W.E. Pekalongan : *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, Samentrekking van de Afdeulingsverslagen over de Uitkomsten der Onderzoekingen naar de Economie van de Desa in de Residentie Pekalongan*, 1908, Batavia
- M.W.H.Rembang : *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, Samentrekking van de Afdeulingsverslagen over de Uitkomsten der Onderzoekingen naar Handel en Nijverheid in de Residentie Rembang*, 1906, Batavia
- M.W.L.Rembang : *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, Samentrekking van de Afdeulingsverslagen over de Uitkomsten der Onderzoekingen naar den Landbouw in de Residentie Rembang*, 1906, Batavia
- M.W.V.Rebang : *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, Samentrekking van de Afdeulingsverslagen over de Uitkomsten der Onderzoekingen naar het vervoerwezen in de Residentie Rembang*, 1906, Batavia
- N.I.S., Verslag 1932 : *Nederlandsch-Indische Spoorweg-Maatschappij, Verslag over het jaar 1932*
- Ontwikkeling Nijverheid 1917: *De Ontwikkeling van de Ned.-Indische Nijverheid gedurende den Oorlog*, 1917, Batavia
- Oorscot, H.J. van, 1956: *De ontwikkeling van de nijverheid in Indonesië*, Van Hoeve
- Overzicht Ontwikkeling Inlandsche Nijverheid 1930 : *Overzicht van de Ontwikkeling van de Inlandsche Nijverheid in de Laaste Jaren [1926-1930]*, n.p., n.d. (Bibliotheek A. 4362, Departement van Kolonien)

- Padmo, Soegijanto 1994: *The Cultivation of Vorstenlands Tobacco in Surakarta Residency and Besuki Tobacco in Besuki Residency and Its Impact on the Peasant Economy and Society: 1860-1960*, Yogyakarta
- Penders, C.L.M., 1984 : *Bojonegoro:1900-1942, A History of Endemic Poverty in North-East Java*,
- Ploeg, J.van der 1940 : "De Beteekenis van de Teelt van Sigarettentabak op Java", *Landbouw*, XVI, no.11
- Raffles, T.S., 1817 : *History of Java*, 2 vols.
- Rapport 1935 : "Rapport betreffende de Tabakscultuur in het regentschap Wonosobo en de Credietvoorziening der Tabaksplanters", *Volkscredietwezen*, XXIII (1935) :564 ~ 632
- Rapport Batoer 1917 : Rapport betreffende een dientreis naar Batoer van de Agent voor het Vervoer, W.H.J. Morpey, dd.26 Juni 1917 (in Tabaksvervoer, Dossier 1953, Archief SDS, ARA)
- Rapport Nijverheid 1904: *Rapport van den directeur van onderwijs, eeredienst en nijverheid betreffende de Maatregelen in het belang van de Inlandsche Nijverheid op Java en Madoera*, I, 1904
- Rapport Tabakscultuur Wonosobo 1935 : "Rapport betreffende de Tabakscultuur in het Regentschap Wonosobo en de Credietvoorziening der Tabaksplanters", *Volkscredietwezen*, 1935
- Rees, O.van 1864 : "De reaktie en de vrije en gedwongen tabakskultuur in Rembang", *Tijdschrift voor Neerlandsch Indië*, 1864-I
- Reid, A, 1985 : "From Betel-Chewing to Tobacco-Smoking in Indonesia" (*The Journal of Asian Studies*, vol.XLIV, no.3)
- Reijden, B. van der, 1934: *Rapport betreffende eene gehouden enquête naar de arbeiderstoestanden in de industrie van strootjes en inheemsche sigaretten op Java, deel 1 West-Java*, Bandoeng
- Reijden B. van der, 1935: *Rapport betreffende eene gehouden enquête naar de arbeiderstoestanden in de industrie van strootjes en inheemsche sigaretten op Java, deel 2, Midden-Java*, Bandoeng
- Reijden B. van der, 1936: *Rapport betreffende eene gehouden enquête naar de arbeiderstoestanden in de industrie van strootjes en inheemsche sigaretten op Java, deel 3, Oost Java*, Bandoeng
- Reitsma, S.A., 1928 : *Korte Geschiedenis der Nederlandsch-Indische Spoor- en Tramwegen*, Weltevreden
- Residentie Rembang 1845, 1849 : "De residentie Rembang in het jaar 1845", *Tijdschrift voor Neerlandsch Indië*, 1849-I
- Segers, W.A.I.M., 1982: "De strootjesindustrie in Nederlandsch-Indië; een reddingsboei voor een bevolkings-economie in nood. Onderzoek naar het economisch belang van de strootjesindustrie voor de Indonesische bevolking in de periode 1919-1942." Doctoraalscriptie Rijksuniversiteit, Leiden
- Sigarettenfabrikatie 1934: "Sigarettenfabrikatie" (*E.W.* 1934)
- Smits, M.B., 1926/27 : "Iets over de positie der Inlandsche kerftabak", *Landbouw*, jrg.1926-1927
- Soejoed, M. 1937 : "De Cultuur van Virginia-Tabak in e Residentie Bodjonegoro", *Landbouw*, XIII, no.10
- Soenario 1935 : "De kretekstrootjes-industrie in het regentschap Koedoes (Onderzoek gehouden in November 1934)", *Volkscredietwezen* 1935
- Soest, G.H. van 1860 : "De vrije arbeid in Rembang", *Tijdschrift voor Neerlandsch Indië*, 1860-II
- Stenvers, W. 1915 : "De Cultuur en Bereiding van Tabak voor de Inlandsche Markt in Oud-Kedoe", *Pemimpin Pengoesaha Tanah*, no.9/10
- Stbl. : Staatsblad van Nederlandsch-Indië.
- Tabak 1925 : *Tabak, Tabakscultuur en Tabaksproducten van Nederlandsch-Indie*, Weltevreden

- tabakskultuur 1857 : "De tabakskultuur en de vrije arbeid", *Tijdschrift voor Neerlandsch Indie*, 1857-1
- Tabakskultuur en vrije arbeid 1857 : "De tabakskultuur en de vrije arbeid", *Tijdschrift voor Neerlandsch Indië*, 1857-I
- Toestand Rembang 1862 : "De toestand der residentie Rembang", *Tijdschrift voor Neerlandsch Indië*, 1862-I
- UEMURA, Yasuo 2000 : "Food Problem and the Javanese Society from end of 1910's to 1920 ", *Lembaran Sejarah* , 3-1
- UEMURA Yasuo 2002 : "Tobacco Cultivation in Besuki under the Great Depression" (*Hiroshima Interdisciplinary Studies in the Humanities*, vol.1)
- Verhooging 1940: "Verhooging van den tabaksaccijns" (*E.W.* 1940)
- Verslag Garoeng 1906 : "Verslag over de Tabakskultuur in het District Garoeng der Residentie Kedoe", *Teysmannia*, vol.XVII
- V.E.T. 1924 II : *Verslag van den Economischen Toestand der Inlandsche Bevolking, 1924*, deel II , n.d., n.p..
- V.H.N.L. : *Verslag omtrent Handel, Nijverheid en Landbouw van Ned.-Indie*, 1913~1930
- Vleming, J.L.1925 : *Het Chineesche zakenleven in Nederlandsch-Indië*, Weltevreden
- Volkstelling 1930 : *Volkstelling 1930, Dl. III: Inheemsche bevolking van Oost-Java*, 1934, Batavia
- Vries, E. de, 1935: "Bedrijfsgeglementeering van de sigaretten- industrie", (*E.W.* 1935 No.37, 13 Sept. 1935)
- Vrije arbeid 1860 : "De vrije arbeid bij de tabaks-kultuur in Rembang, volgens den heer van Lawick van Pabst en volgens den heer Rochussen", *Tijdschrift voor Neerlandsch Indië*, 1860-I
- Vrije tabaks-kultuur 1860 : "De vrije tabaks-kultuur op Java", *Tijdschrift voor Neerlandsch Indië*, 1860-I
- Waeij, H.W.van : "De residentie Rembang", *Tijdschrift voor Neerlandsch Indië*, 1875-II
- Walbeehm, A.H.J.G., 1902 : "De Inlandsche tabakskultuur in Rembang", *De Indische Gids* 1902 II
- Wanrooy, G.J., 1940 : "Onderzoek inzake de cultuur van Virginia-tabak in de residentie Bodjo- negoro en de richting waarin dit werk zich verder zal dienen te ontwikkelen", *Landbouw* 16
- Werkum, H.D.van,1937 : "Het strootjes-rapport Oost-Java", *Koloniaal Tijdschrift* 1937
- Wildering, J.F., 1924 : Memori Residen Rembang (J.F.Wildering) , 6 Augustus 1924
- Zandveld, M. 1922 : Memori Residen Banyumas (M.Zandveld) , 4 Juli 1922, in *Memori Serah Jabatan 1921-1930 (Jawa Tengah)*, Jakarta 1977

表J-1 インドネシア各州人口

州	1971年	1980年	1990年	1995年	2000年
ナングロ・アチェ	2,008,595	2,611,271	3,416,156	3,847,583	3,930,905
北スマトラ	6,621,831	8,360,894	10,256,027	11,114,667	1,649,655
中スマトラ	2,793,196	3,406,816	4,000,207	4,323,170	4,248,931
リアウ	1,641,545	2,168,535	3,303,976	3,900,534	4,957,627
ジャンビ	1,006,084	1,445,994	2,020,568	2,369,959	2,413,846
南スマトラ	3,440,573	4,629,801	6,313,074	7,207,545	6,899,675
ブンクル	519,316	768,064	1,179,122	1,409,117	1,567,432
ランブン	2,777,008	4,624,785	6,017,573	6,657,759	6,741,439
バンカ・ブリトン島	-	-	-	-	900,197
ジャカルタ特別区	4,579,303	6,503,449	8,259,266	9,112,652	8,389,443
西ジャワ	21,623,529	27,453,525	35,384,352	39,206,787	35,729,537
中ジャワ	21,877,136	25,372,889	28,520,643	29,653,266	31,228,940
ヨグヤカルタ特別区	2,489,360	2,750,813	2,913,054	2,916,779	3,122,268
東ジャワ	25,516,999	29,188,852	32,503,991	33,844,002	34,783,640
バンテン	-	-	-	-	8,098,780
バリ	2,120,322	2,469,930	2,777,811	2,895,649	3,151,162
西ヌサ・トゥンガラ	2,203,465	2,724,664	3,369,649	3,645,713	4,009,261
東ヌサ・トゥンガラ	2,295,287	2,737,166	3,268,644	3,577,472	3,952,279
西カリマンタン	2,019,936	2,486,068	3,229,153	3,635,730	4,034,198
中カリマンタン	701,936	954,353	1,396,486	1,627,453	1,857,000
南カリマンタン	1,699,105	2,064,649	2,597,572	2,893,477	2,985,240
東カリマンタン	733,797	1,218,016	1,876,663	2,314,183	2,455,120
北スラウエシ	1,718,543	2,115,384	2,478,119	2,649,093	2,012,098
中スラウエシ	913,662	1,289,635	1,711,327	1,938,071	2,218,435
南スラウエシ	5,180,576	6,062,212	6,981,646	7,558,368	8,059,627
東スラウエシ	714,12x	942,302	1,349,619	1,586,917	1,821,284
ゴロンタロ	-	-	-	-	835,044
マルク	1,089,565	1,411,006	1,857,790	2,086,516	1,205,539
北マルク	-	-	-	-	785,059
パプア	923,44x	1,173,875	1,648,708	1,942,627	2,220,934
インドネシア	119,208,229	147,490,298	179,378,946	194,754,808	206,264,595
ジャワ	76,086,327	91,269,528	107,581,306	114,733,486	121,352,608
ジャワの比率	63.8	61.9	60.0	58.9	58.8

表J-2 インドネシア各州人口密度

州	1971年	1980年	1990年	1995年	2000年
ナングロ・アチェ	36	47	62	69	76
北スマトラ	93	118	145	157	158
中スマトラ	56	68	80	87	99
リアウ	17	23	35	41	52
ジャンビ	22	32	45	53	45
南スマトラ	33	45	61	70	74
ブンクル	24	36	56	66	79
ランブン	83	139	181	200	191
バンカ・ブリトン島	-	-	-	-	56
ジャカルタ特別区	7,762	11,023	12,495	13,786	12,635
西ジャワ	467	593	765	848	1,033
中ジャワ	640	742	834	867	959
ヨグヤカルタ特別区	532	609	678	920	980
東ジャワ	576	690	814	706	726
バンテン	-	-	-	-	936
バリ	381	444	500	521	559
西ヌサ・トゥンガラ	109	135	167	181	199
東ヌサ・トゥンガラ	48	57	68	75	83
西カリマンタン	14	17	22	25	27
中カリマンタン	5	6	9	11	12
南カリマンタン	45	55	69	77	69
東カリマンタン	4	6	9	11	11
北スラウエシ	90	111	130	139	132
中スラウエシ	13	18	25	28	35
南スラウエシ	71	83	9	104	129
東スラウエシ	26	34	49	57	48
ゴロンタロ	-	-	-	-	68
マルク	15	19	25	28	26
北マルク	-	-	-	-	25
パプア	2	3	4	5	6
インドネシア	62	77	93	101	109

Source: 1971, 1980, 1990, 2000 Population Census, and 1995 Intercensal Population Census
(<http://www.bps.go.id/index.shtml>)

表 J-3 主要輸出品構成比(%)

	1880~89 年平均	1890~99 年平均	1900~09 年平均	1910~19 年平均	1920~29 年平均	1930~39 年平均
ゴム	0.2	0.2	1.1	8.0	17.2	17.6
スパイス	4.2	2.8	3.4	2.3	1.9	2.7
コーヒー	26.0	21.7	6.6	3.8	3.7	3.4
コプラ	0.2	2.3	6.1	6.3	5.9	6.0
砂糖	34.3	30.8	30.1	29.2	28.3	12.1
煙草	10.5	16.7	13.9	8.2	6.5	5.9
茶	1.0	1.1	2.1	3.6	4.5	7.0
石油製品	0.0	1.9	6.3	17.0	13.3	19.1
錫・錫鉱石	4.9	5.3	6.6	6.1	5.1	6.3

表註：数字は輸出総額に占める
%
出所：C.E.I., vol.12a:table 6B より
算出

表 J-4 インドネシアの輸出先構成比

輸出先	1874~79 年平均	1880~89 年平均	1890~99 年平均	1900~09 年平均	1910~19 年平均	1920~29 年平均	1930~39 年平均
オランダ	60.5	40.0	38.1	32.1	20.4	16.5	18.7
イギリス	14.3	18.8	7.9	3.2	10.2	7.6	6.7
その他のヨーロッパ	1.8	6.2	4.4	6.5	7.4	10.0	10.6
ヨーロッパ合計	76.6	65.1	50.4	41.7	38.0	34.1	36.1
アメリカ	6.8	4.3	7.5	7.4	9.3	12.0	15.1
中国/香港/マカオ	0.5	3.1	8.9	8.3	7.5	7.0	5.4
インド(含セイロン)	0.0	0.1	0.6	6.4	10.1	9.9	5.2
日本(含台湾)	0.0	0.0	0.2	4.1	5.8	6.2	4.3
シンガポール・マラヤ	11.9	21.7	23.1	24.7	19.7	21.5	19.5
その他のアジア	0.8	1.2	0.3	0.3	1.4	1.5	2.6
アジア合計	13.2	26.1	33.2	43.9	44.0	46.0	37.0
オーストラリア	3.3	2.2	1.7	2.0	2.9	3.0	4.1
アフリカ	0.1	2.1	7.1	5.0	4.9	3.7	2.9
輸出総額(1,000ギルダー)	184,553	187,403	208,135	321,484	810,597	1,556,259	676,083

出所：C.E.I., Vol.12a:table 4B より計算。

表 1-1 ジャワ・マドゥラ煙草収穫面積(バウ)

1874~79 年平均	65,534 (100)	1910~14 年平均	234,653 (358)
1880~84 年平均	87,899 (134)	1915~19 年平均	171,639 (262)
1885~89 年平均	114,442 (175)	1920~24 年平均	167,985 (256)
1890~94 年平均	125,582 (192)	1925~29 年平均	205,878 (314)
1895~99 年平均	136,536 (208)	1930~34 年平均	201,983 (308)
1900~04 年平均	159,066 (243)	1935~40 年平均	192,412 (294)
1905~09 年平均	192,027 (293)		

表 1-2 各時期煙草収穫面積(バウ)

理事州	1874/79	1880/84	1885/89	1890/94	1895/00	1901/04	1905/09	1910/15
バンタム	6	5	2	11	24	42	34	136
クラワン	7	15	25	24	2	0	0	110
プリアンゲル	3,570	4,241	6,614	4,621	8,095	10,428	15,223	14,078
西ジャワ計	3,583	4,261	6,641	4,656	8,121	10,470	15,257	14,324
チェリボン	200	356	542	583	834	1,013	1,111	1,200
テガル	389	631	646	1,059	1,421			
プカロンガン	604	488	615	656	700	2,609	3,469	6,096
スマラン	1,560	5,547	6,316	9,125	8,877	7,549	7,561	11,056
ジャバラ	554	606	425	464	585			
バニユマス	6,854	8,852	13,045	11,534	17,164	13,780	15,453	17,545
バゲレン	3,352	6,047	5,561	7,041	8,469			
ケドゥー	8,435	9,289	12,758	15,748	13,895	25,118	30,667	44,025
マディウン	1,356	1,686	1,637	1,689	3,235	3,454	4,107	3,839
クディリ	5,622	7,806	9,983	9,293	9,888	10,698	12,554	8,483
レンバン	12,899	14,590	18,928	23,059	21,195	25,949	26,740	29,467
中ジャワ計	41,825	55,898	70,456	80,251	86,263	90,170	101,662	121,711
スラバヤ	2,416	4,374	4,267	5,291	4,585	4,375	3,919	6,351
パスルアン	4,798	3,591	3,815	3,216	3,505	12,027	15,233	20,280
プロボリンゴ	1,824	3,279	4,318	3,202	3,008			
ブスキ	10,321	15,852	22,996	25,790	27,196	39,634	51,111	65,896
バニユワンギ	630	152						
マドゥラ	148	583	1,937	3,076	3,323	8,836	8,117	8,058
東ジャワ計	20,137	27,831	37,333	40,575	41,617	64,872	78,380	100,585
合計	65,534	87,899	114,442	125,582	135,799	165,804	192,027	236,261

表註：王侯領、私領地を除く。
バニユワンギは 1882 年
にブスキに編入、1900
年にテガルはプカロンガ
ンに、ジャバラはスマラ
ン、プロボリンゴはパス
ルアン、バゲレンはケド
ゥーに編入。
出所：K.V.1875~1916 の数字より
作成

表1-3 理事州別煙草年平均収穫面積(バウ)

理事州	1916~20年		1921~27年
	収穫面積	耕地比	収穫面積
バンテン	1 (0.0)	-	41 (0.0)
バタヴィア	187 (0.1)	-	448 (0.2)
プリアングル	4,947 (3.3)	0.5	5,175 (2.6)
西ジャワ計	5,135 (3.4)		5,664 (2.9)
チェリボン	1,423 (1.0)	0.3	2,249 (1.1)
プカロンガン	7,002 (4.7)	1.5	7,334 (3.7)
スマラン	9,643 (6.5)	1.2	9,353 (4.8)
レンバン	26,004 (17.4)	4.6	46,293 (23.6)
バニユマス	13,312 (8.9)	2.8	12,918 (6.6)
ケドゥー	32,509 (21.8)	5.3	32,973 (16.8)
中ジャワ計	89,893 (60.2)		111,120 (56.6)
ジョクジャカルタ	3,761 (2.5)		3,552 (1.8)
スラカルタ	4,339 (2.9)		5,851 (3.0)
王侯領計	8,100 (5.4)		9,403 (4.8)
マディウン	3,331 (2.2)	0.6	6,349 (3.2)
スラバヤ	4,808 (3.2)	0.9	7,006 (3.6)
マドゥラ	6,175 (4.1)	1.1	7,307 (3.7)
クディリ	9,081 (6.1)	2.3	11,749 (6.0)
パスルアン	11,567 (7.7)	1.8	13,638 (7.0)
ブスキ	11,270 (7.5)	2.7	23,961 (12.2)
東ジャワ計	46,232 (31.0)		70,010 (35.7)
合計	149,360 (100)		196,195 (100)

出所: Bagchus 1929:43

表1-4 住民煙草収穫面積が全耕地の10%を超える郡

郡(理事州・県)	栽培面積 (バウ)	対耕地 比
Batoer(バニユマス理事州バンジャルネガラ県)	7,669	41.1%
Garoeng(ケドゥー理事州ウオノソボ県)	6,005	29.6%
Parakan(ケドゥー理事州トゥマンゲン県)	5,726	22.0%
Temangoeng(ケドゥー理事州トゥマンゲン県)	2,360	21.1%
Tamanan(ブスキ理事州ボンドウオソ県)	4,310	20.1%
Tempoh(パスルアン理事州ルマジャン県)	4,931	19.8%
Karangobar(バニユマス理事州バンジャルネガラ県)	3,272	17.1%
Tjandiroto(ケドゥー理事州トゥマンゲン県)	2,739	11.6%
Wonosobo(ケドゥー理事州ウオノソボ県)	1,404	11.0%
Moentilan(ケドゥー理事州マゲラン県)	2,677	10.9%
Weleri(スマラン理事州ケンダル県)	1,985	10.7%
Pelem(レンバン理事州ボジョネゴロ県)	3,041	10.4%
Ngoempak(レンバン理事州ボジョネゴロ県)	3,576	10.2%
Bawang(プカロンガン理事州バタン県)	1,802	10.0%

出所: Landbouwatlas 1926:staat II

表1-5 住民煙草収穫面積が全耕地の4%を超える県

県(理事州)	栽培面積 (バウ)	対耕地 比
バンジャルヌガラ県(バニユマス理事州)	10,964	11.8%
トゥマンゲン県(ケドゥー理事州)	11,490	11.4%
ボジョネゴロ県(レンバン理事州)	14,875	8.9%
ウオノソボ県(ケドゥー理事州)	10,112	8.8%
ルマジャン県(パスルアン理事州)	7,752	7.4%
ボンドウオソ県(ブスキ理事州)	7,157	6.3%
マゲラン県(ケドゥー理事州)	8,301	6.2%
トゥバン県(レンバン理事州)	7,612	4.6%
バタン県(プカロンガン理事州)	2,615	4.0%

表註: セラン県、パンデグラン県(バンタム)、バタヴィア県(タンゲランを除く)、バイテンゾルフ県、シダルジョ県は住民煙草栽培なし

出所: Landbouwatlas 1926:144

表1-6 ジャワ・マドゥラ理事州別住民煙草収穫面積(バウ)

理事州	1931~35年 平均	1936~40年 平均	理事州面積増減
バンテン	54 (0.0)	45 (0.0)	
バタヴィア	483 (0.2)	430 (0.2)	33年 100.0km ² 減
パイテンゾルフ	561 (0.3)	483 (0.2)	
プリアンゲル	6,985 (3.3)	7,801 (3.8)	
西ジャワ計	8,082 (3.8)	8,759 (4.2)	
チェリボン	2,465 (1.2)	1,814 (0.9)	
プカロンガン	5,583 (2.6)	5,125 (2.5)	
スラマラン	10,666 (5.0)	9,500 (4.6)	33年 44.1km ² 増
ジャバラ・レンバン	4,992 (2.3)	4,639 (2.2)	33年 50.4km ² 減
バニユマス	12,623 (5.9)	12,137 (5.9)	36年 791.8km ² 減
ケドゥー	37,886 (17.7)	41,825 (20.2)	33年 6.2km ² 、36年 791.7km ² 増
中ジャワ計	74,214 (34.8)	75,041 (36.3)	
ジョクジャカルタ	6,018 (2.8)	7,245 (3.5)	
スラカルタ	7,124 (3.3)	7,034 (3.4)	
王侯領計	13,142 (6.2)	14,279 (6.9)	
スラバヤ	2,852 (1.3)	2,732 (1.3)	35年 768.6km ² 増
ボジョネゴロ	40,407 (18.9)	37,658 (18.2)	35年 768.7km ² 減
マディウン	9,239 (4.3)	10,446 (5.1)	35年 423.2km ² 増
クディリ	11,865 (5.6)	10,058 (4.9)	35年 423.2km ² 減
マラン(プロボリンゴ)	13,892 (6.5)	14,389 (7.0)	33年併合
ブスキ	31,717 (14.9)	19,949 (9.7)	
マドゥラ	8,079 (3.8)	13,393 (6.5)	
東ジャワ計	118,051 (55.3)	108,625 (52.6)	
合計	213,489 (100)	206,703 (100)	

出所：I.V.1932~1935:tabel 194、I.V.1936~1941:tabel 193 より作成

表1-7 ジャワ・マドゥラの丁字輸入量

	総輸入量		スラバヤ		スマラン	
	kg		kg	%	kg	%
1919年	351,827	100	35,565	10	311,581	89
1920年	184,640	53	17,774	10	164,016	89
1921年	537,250	153	24,751	5	477,119	89
1922年	645,356	183	40,584	6	601,493	93
1923年	591,326	168	24,064	4	564,845	96
1924年	822,856	234	53,381	6	767,165	93
1925年	1,329,034	378	139,243	10	1,182,876	89
1926年	1,947,112	553	249,192	13	1,686,568	87
1927年	3,032,645	862	496,239	16	2,483,133	82
1928年	3,111,766	884	779,615	25	2,304,177	74
1929年	2,235,267	635	581,124	26	1,625,223	73
1930年	3,038,292	864	885,210	29	2,104,310	69
1931年	5,173,284	1470	1,482,851	29	3,684,357	71
1932年	2,051,484	583	758,041	37	1,256,339	61
1933年	3,542,427	1007	1,400,197	40	2,103,140	59
1934年	5,037,044	1432	1,566,829	31	3,383,995	67
1935年	4,349,757	1236	1,915,963	44	2,381,003	55
1936年	5,415,526	1539	2,260,978	42	3,094,890	57
1937年	4,409,858	1253	1,501,382	34	2,786,469	63
1938年	5,703,038	1621	2,008,434	35	3,668,166	64
1939年	8,658,526	2461	3,334,894	39	5,260,135	61
1940年	7,060,187	2007	2,811,383	40	4,223,012	60

表註：1919~25年重量は純重量、26年以降は粗重量

出所：Segers, 1982:Tabel IA

表1-8 理事州別ストローチェ製造所数

	1929年	1930年	1931年	1932年	1933年	1934年
バンタム	-	-	-	-	-	n.a.
バタヴィア	13	14	16	17	25	n.a.
バイデンゾルフ	10	12	11	13	8	n.a.
プリアンゲル	36	41	46	46	34	n.a.
チェリボン	6	4	10	-	9	n.a.
西ジャワ計	65	71	83	76	73	n.a.
ジャバラ・レンバン	66	79	105	195	269	n.a.
スマラン	13	33	71	113	129	n.a.
プカロンガン	4	6	14	35	67	n.a.
バニユマス	15	28	50	60	31	n.a.
ケドゥー	32	40	56	66	78	n.a.
中ジャワ計	130	186	296	469	574	n.a.
王侯領	93	120	168	245	288	n.a.
クディリ	49	71	99	136	203	146
マディウン	13	20	37	56	113	121
ボジョネゴロ	9	17	25	45	58	35
スラバヤ	23	35	51	81	149	99
マラン	6	12	24	45	93	48
東ジャワ計	100	155	236	366	616	449
ジャワ・マドゥラ合計	388	532	783	1156	1551	449

出所：Reijden
1934:110,1936:119

表1-9 1939年現在の機械製紙巻煙草生産企業

企業名	工場所在地
N.V. Handels verenigin "Industria", "Dieng", ○	Batavia
Sigaretten Fabriek "Serajoe"	Garoet
The Kian Boen Buitenzorgsche Tobaksindustrie ×	Buitenzorg
Sigaretten Fabriek Boegirsredjo	Pekalongan
B.A.T. Co. Ltd., N.V. ○	Semarang, Cheribon, Soerabaja
N.V. Trio Sam Hien Kongsie	Koedoes
N.V. Tot Exploitatie van Cigarettenfabriek "Faroka" ○	Malang
Tio Swie Lian, Soerabajasche Sigarettenfabriek	Soerabaja
Sigarettenfabriek Kwa Song Khoen	Soerabaja
N.V. Handel Mij., Sampoerna ○	Soerabaja
Sigarettenfabriek the Djie Siang	Toeban
Sigarettenfabriek "Indonesia" Handel merk "Marikangan"	Solo
Nanyang Bros. Tobacco Co.	Batavia
West Java Tabakindustrie Comgagnie ×	Batavia

出所：栗林 1941
:122~123

(○は四大会社、×は廃業)

表2-1 植民地後期主要製品煙草概観

製品煙草の種類	原料	備考
シガ		
輸入シガー		
ジャワ産シガー	主にジャワ産クロソック	
シガ		
輸入シガレット		
ジャワ産シガレット		White、クレテック・シガレット、クレンバック・シガレット/手作りと機械生産
スト		
ロー		
チェ		
カウン・ストローチェ (kawoeng strootje)	ケルフ、巻葉に砂糖椰子若葉	西ジャワ(プリアンゲル)が主産地
ロコッ・ワンゲン (rokok wangen) / (ロコッ・ディコ) (rokok diko)	ケルフ、巻葉にニッパ椰子葉、安息香、大黄など添加	王侯領で製造、ディコは最初の製造者 Wirodiko に因んだ名称
クレテック・ストローチェ (kretek strootje)	ケルフ、巻葉にクロボット (klobot: 乾燥したトウモロコシ穂軸の包葉)、丁字入り	最も発展し、西ジャワ除くジャワ全域で製造、クドゥスとブリタル、トゥルンアゲンが中心
シヤグ		工場製刻み、パイプ煙草などに利用
手巻き煙草・ストローチェ	ケルフ	

表註：ストローチェ (storootje) はオランダ語で、本来の意味は「麦藁」。ここでは「藁煙草」とでもいうべき意味で、外巻に紙以外を使用した煙草をこのように呼んだ。

出所：栗林 1941, Reijden 1934, 1935, 1936, Soenario 1935, Darmawan Mangoenkoesoemo 1929 などから作成

表 2-2 各種製品煙草の生産量・輸入量一覧

年	シガレット輸入量(億本)			シガレット生産量(億本)			丁字輸入量(1000トン)			ストローチェ生産量(億本)	シガー輸入量(トン)		
	合計	ジャワ・マドゥラ	外領	合計	機械生産	手作り	合計	スマラン	スラバヤ		合計	ジャワ・マドゥラ	外領
1909	0.84	0.21	0.63										
1910	1.51	0.35	1.16										
1911	2.13	0.42	1.71				21.2	8.9	11.6				235
1912	2.81	0.62	2.19				11.0	8.9	1.5				258
1913	4.11	0.97	3.14				24.6	18.8	5.5		455.7		289
1914	4.79	1.38	3.41				29.4	21.5	6.4		459		
1915	6.39	1.87	4.53				42.8	31.2	9.6		403.7		
1916	7.92	2.38	5.54				50.6	44.4	4.4		396.6		
1917	11.56	2.66	8.90				45.5	42.8	1.5		287.7		
1918	15.45	4.63	10.81				29.3	24.7	3.9		285		
1919	21.61	7.87	13.74				35.2	31.2	3.6	14	354		
1920	28.29	11.30	16.99				18.5	16.4	1.8	17	174		
1921	44.09	20.54	23.35	4			53.7	47.7	2.5	14	293	149	144
1922	41.69	21.97	19.72	4			64.5	60.1	4.1	14	243	120	123
1923	45.40	25.63	19.77	8			59.1	56.5	2.4	18		126.7	
1924	45.10	23.36	21.73	15.24	14.04	1.20	82.3	76.7	5.3	21			
1925	37.11	12.52	24.59	35			132.9	118.3	13.9	27			
1926	20.16	6.76	13.41	62			194.7	168.7	24.9	33			
1927	16.07	6.10	9.97	76			303.3	248.3	49.6	52			
1928	15.60	5.75	9.85	79			311.2	230.4	78.0	72	388.9		
1929	16.14	5.59	10.55	109		8.25	223.5	162.5	58.1	64.945	497.2		
1930	14.02	4.95	9.07	95		7.80	303.8	210.4	88.5	66.735	776.5		
1931	10.57	4.11	6.46	91	84	6.75	517.3	368.4	148.3	64.225			
1932	4.40	2.53	1.87	84	79	5.30	205.1	125.6	75.8	56.667			
1933	1.57	0.96	0.61	84.25	77.63	6.62	354.2	210.3	140.0	79.510	103		
1934	1.93	1.23	0.70		71.88	9.15	503.7	338.4	156.7	107.580	119		
1935	1.68	0.93	0.75	93.4	61.2	32.2	435.0	238.1	191.6	97.0	113		
1936	1.86	0.85	1.01	107.0	57.4	49.6	541.6	309.5	226.1	106.3	138		
1937	3.04	1.59	1.45		78		441.0	278.6	150.1	135.4			
1938	5.18	3.52	1.65		69		570.3	366.8	200.8	124.0			
1939	2.76	0.96	1.80	153	77		865.9	526.0	333.5	151			
1940	2.71	0.75	1.95	150.72	86.02	64.70	706.0	422.3	281.1	99.54			

表註：1924,29,30年手作りシガレット生産にはクローブ・シガレット含む

出所：ストローチェ生産量 1929~34年は Reijden 1936:141, 142、1936年は I.V. 1937:143、1939年は栗林 1941:119、シガレット輸入量の 1909,1910年は Tabak 1925:bijl.XXII より計算、シガレット生産量の 1939年機械生産は栗林 1941:119、シガー輸入の 1911~13年は V.H.N.L.1913:144、1914~17年は V.H.N.L.1917:196、1918年は V.H.N.L.1918:bijl.II、1919~22年は V.H.N.L.1922:148、1923年は V.H.N.L.1923:179、1928~30年は V.H.N.L.1930:380~382、1933~36年は I.V.1936:42、他は C.E.I., vol.8:table XVII

表 2-3 各地方におけるストローチェ産業の発生

理事州	発生場所・発生年	出所
バンテン	ストローチェ産業なし	Reijden 1934:52~53
バタヴィア	ブルワカルタ 1911 年	Reijden 1934:56~57
バイテンゾルフ	1910~15 年の間	Reijden 1934:67
プリアンゲル	バンドン 1905 年、ガルット 1908 年、タシクマラヤ 1910 年	Reijden 1934:76~77
チェリボン	1929 年以前?	Reijden 1934:96~98, 109~110
プカロンガン	プマラン 1920 年	Reijden 1935:108~109
スマラン	1919 年	Reijden 1935:86~87
ジャバラ・レンバン	クドウス 1900 年以前、ジャバラ 1929 年、パティ 1921 年、レンバン 1926 年、プロラ 1928 年	Reijden 1935:6~7
バニユマス	不詳(クレンバック・シガレットは 1925 年)	Reijden 1935:124~125
ケドゥー	マゲラン、ムンティラン 1900 年前後	Reijden 1935:139~140
スラカルタ	ソロ 1897 年、カランアニヤル 1906 年、スラゲン 1908 年、クラテン 1911 年、ボヨラリ 1916 年、ウォノギリ 1920 年	Reijden 1935:152~153
ジョクジャカルタ	ジョクジャカルタ 1914 年、バントール 1919 年、アディクルト 1924 年、クロンプロゴ 1927 年	
クディリ	ブリタル 1909 年、トゥルンアゲン 1922 年、クディリ 1911 年、ンガンジュック 1915 年	Reijden 1936:5~6
マディウン	マディウン 1915 年、ポノロゴ 1916 年、マゲタン 1930 年、ンガウィ 1931 年	Reijden 1936:74
ボジョネゴロ	ボジョネゴロ 1927 年	Reijden 1936:85
スラバヤ	家内工業生産は 1900 年頃、賃労働生産はスラバヤ 1928 年、シドアルジョ 1924 年、モジョケルト 1927 年、ジョンバン 1921 年	Reijden 1936: 95~96
マドゥラ	バラットダヤ(スムヌップ県) 1930 年	
マラン	家内工業生産は歴史が古い、賃労働生産は 1924/25 年頃	Reijden 1936:106
プロボリンゴ		
ブスキ		

表 2-4 シガー・シガレット輸入額の推移(100 万ギルダー)

時期	ジャワ・マドゥラ	外領	合計	時期	ジャワ・マドゥラ	外領	合計
1870 年代後半	2,409	900	3,309	1910 年代前半	2,185	3,132	5,317
1880 年代前半	2,800	1,215	4,015	1910 年代後半	8,826	17,865	26,691
1880 年代後半	2,324	1,154	3,478	1920 年代前半	16,890	18,747	35,637
1890 年代前半	1,673	1,267	2,940	1920 年代後半	18,430	18,052	36,482
1890 年代後半	1,722	1,407	3,129	1930 年代前半	9,601	6,105	15,706
1900 年代前半	1,059	1,114	2,173	1930 年代後半	4,267	3,793	8,060
1900 年代後半	1,257	1,328	2,585				

出所: C.E.I., vol.12a: table 5B

表 2-5 1915 年末現在葉巻・紙巻煙草工場

理事州	工場数	労働者数	
		総数	工場当たり
バンタム			
バタヴィア			
プリアンゲル	1	50	50.0
チェリボン	1	30	30.0
西ジャワ計	2	80	
プカロンガン			
バニユマス	2	21	10.5
ケドゥー	24	893	37.2
スマラン	10	506	50.6
レンバン	13	198	15.2
ジョクジャカルタ			
スラカルタ	9	95	10.6
中ジャワ計	58	1,739	
クディリ			
マディウン			
スラバヤ	5	46	9.2
パスルアン	5	115	23.0
ブスキ			
マドゥラ			
東ジャワ計	10	161	
ジャワ・マドゥラ	70	1,954	27.9

出所: Gegevens Nijverheid 1916:bijlage

表 2-6 1924~25 年ジャワ・マドウラ月別各種煙草輸入状況 (100kg)

	煙草と嗅ぎ煙草		シガー		シガレット	
	1924 年	1925 年	1924 年	1925 年	1924 年	1925 年
1 月	600	1,333	104	93	3,271	813
2 月	1,020	610	104	84	2,748	793
3 月	711	832	113	125	2,379	1,020
4 月	887	1,173	107	101	1,741	1,741
5 月	768	1,421	129	89	3,037	508
6 月	1,043	993	92	136	2,875	1,244
7 月	875	1,044	104	122	2,400	1,561
8 月	1,378	1,581	99	127	1,002	1,133
9 月	977		68		1,126	
10 月	878		66		879	
11 月	1,024		72		1,023	
12 月	933		88		888	
1-8 月	7,282	8,987	852	877	19,453	8,813

出所：Tabak 1925:Bijlage XXIV (209)

表 2-7 煙草用紙関税収入の推移 (ギルダー)

年	関税総額	ボビン関税	ボビン以外	機械製シガレット製造本数
1927	2,986,377	2,459,604 (82.4%)	526,773 (17.6%)	56 億本
1928	4,877,954	2,931,131 (60.1%)	1,946,823 (39.9%)	67 億本
1929	5,594,644	3,639,420 (65.1%)	1,955,224 (34.9%)	83 億本
1930	6,207,563	4,412,106 (71.1%)	1,795,457 (28.9%)	100 億本

表註 (原註)：機械製シガレット製造本数の推定は、輸入関税が 1000 本当たり f0.44 として計算

出所：Hoogesteger 1933b:667

表 2-8 理事州別ストローチェ生産一覧 (100 万本)

	1929 年	1930 年	1931 年	1932 年	1933 年	1934 年
バタヴィア	18.5	19.5	17.5	18.5	14.5	n.a.
バイテンゾルフ	17	13	9	10.5	2	n.a.
ブリアンゲル	170	148	118	86	47	n.a.
チェリボン	n.a.	n.a.	4	n.a.	2	n.a.
西ジャワ計	208.5	182.5	148.5	115	131	205
ジャバラ・レンバン	3,675	3,495	2,875	2,165	3,500	5,300
スマラン	275	360	405	295	500	510
プカロンガン	26	49	66	93	256	317
バニユマス	32	42	83	80	74	83
ケドゥー	179	162	167	154	320	400
王侯領	169	179	194	210	280	310
中ジャワ計	4,356	4,287	3,790	2,997	4,930	6,920
内シガレット	350	330	335	300	520	785
クディリ	2,100	2,310	2,560	2,500	2,730	3,715
マディウン	60	75	90	105	172	208
ボジョネゴロ	30	44	54	115	210	125
スラバヤ	560	545	440	335	370	395
マラン	5	10	15	30	70	105
東ジャワ計	2,755	2,984	3,159	3,085	3,552	4,548
内シガレット	475	450	340	230	140	130
合計	6,494.5	6,673.5	6,422.5	5,667.0	7,951.0	10,758.0

表註：西ジャワ各理事州の 1933 年欄は上半期のみの数値
中ジャワ計と東ジャワ計には手作りシガレット含む。合計には含まない。

出所：Reijden 1934:58, 69, 79, 99, 110 ; 1935:170 ; 1936:120, 142

表 2-9 クドゥスから各地へのストローチェ輸送量合計 (トン)

年	1919 年	1920 年	1921 年	1922 年	1923 年	1924 年	1925 年	1926 年	1927 年	1928 年
輸送量	1,723.85	2,032.50	1,790.15	1,796.70	2,405.90	2,685.85	3,116.60	3,729.65	5,457.95	6,496.00

原註：1921~22 年の減少は不況の影響による

出所：Darmawan Mangoenkoesoemo 1929:44

表 2-10 シガレットの種類別売上高 (小売り：1,000 ギルダー)

年	内地産シガレット		外国産シガレット		合計		
	手作り	機械製	手作り	機械製			
1936	6,403	22.2%	20,022	69.4%	2,023	7.0%	28,837
1937	8,404	22.8%	25,748	69.9%	2,395	6.5%	36,852
1938	10,421	27.4%	24,787	65.2%	2,724	7.2%	38,005
1939	11,162	27.2%	28,066	68.5%	1,743	4.3%	40,971

出所：Verhooging 1940 : 1294

表 2-11 手作りシガレットの賃労働生産(100 万本)

年	中ジャ ワ北岸	バニユ マス・ケ ドゥー	王侯領	スラバ ヤ	合 計
1929	152.0	186.0	12.0	475.0	825.0
1930	135.0	177.0	20.0	450.0	780.0
1931	100.0	202.0	33.0	340.0	675.0
1932	57.0	180.0	63.0	230.0	530.0
1933	52.0	310.0	160.0	140.0	662.0
1934	150.0	385.0	250.0	130.0	915.0

原註：手作りシガレットの西ジャワの生産は無視してよい程度。
出所：Reijden 1936:142

表 2-12 1939 年現在の機械製紙巻煙草生産企業

企業名	工場所在地
N.V. Handels vereniging "Industria", "Dieng" ○	バタヴィア
Sigaretten Fabriek "Serajoe"	ガルット
The Kian Boen Buitenzorgsche Tabaksindustrie ×	バイテンゾルフ
Sigaretten Fabriek Boegisredjo	プカロンガン
B.A.T. Co. Ltd., N.V. ○	スマラン、チェリボン、スラバヤ
N.V. Trio Sam Hien Kongsie	クドゥス
N.V. Tot Exploitatie van Cigarettenfabriek "Faroka" ○	マラン
Tio Swie Lian, Soerabajasche Sigarettenfabriek	スラバヤ
Sigarettenfabriek Kwa Song Khoen	スラバヤ
N.V. Handel Mij., Sampoerna ○	スラバヤ
Sigarettenfabriek The Djie Siang	トゥバン
Sigarettenfabriek "Indonesia" Handel merk "Marikangan"	スラカルタ
Nanyang Bros. Tobacco Co.	バタヴィア
West Java Tabakindustrie Comgagnie ×	バタヴィア

(○は四大会社、×は廃業)

出所：栗林 1941：122～123

表 2-13 理事州別ストローチェ製造所数

	1929 年	1930 年	1931 年	1932 年	1933 年	1934 年
バンタム	-	-	-	-	-	n.a.
バタヴィア	13	14	16	17	25	n.a.
バイテンゾルフ	10	12	11	13	8	n.a.
プリアンゲル	36	41	46	46	34	n.a.
チェリボン	6	4	10	-	9	n.a.
西ジャワ計	65	71	83	76	73	n.a.
ジャパラ・レンバン	66	79	105	195	269	n.a.
スマラン	13	33	71	113	129	n.a.
プカロンガン	4	6	14	35	67	n.a.
バニユマス	15	28	50	60	31	n.a.
ケドゥー	32	40	56	66	78	n.a.
中ジャワ計	130	186	296	469	574	n.a.
王侯領	93	120	168	245	288	n.a.
クティリ	49	71	99	136	203	146
マディウン	13	20	37	56	113	121
ボジョネゴロ	9	17	25	45	58	35
スラバヤ	23	35	51	81	149	99
マラン	6	12	24	45	93	48
東ジャワ計	100	155	236	366	616	449
ジャワ・マドゥラ合計	388	532	783	1156	1551	

出所：Reijden 1934:110, 1935:168, 1936:119

表 2-14 1930 年代製品煙草価格の変化

地域	種別	年	価格	出所	
ブリアンゲル	カウン・ストローチェ	1932	小売 10 本包 f0.02, f0.025, f0.03	Reijden 1934: 81~82	
		1934	小売 10 本包 2 個 f0.02, f0.025, f0.03		
プカロンガン	ストローチェ	1929~31	卸し 1000 本 f1.15~f1.35、ワルン価格 25 本包 f0.03~f0.04	Reijden 1935: 111~112	
		1932	卸し 1000 本 f0.65~f0.80、ワルン価格 25 本包 f0.02~f0.025		
		1933	小売 5~10 本入り袋 f0.01、時に f0.005、3 袋 f0.02/f0.025、		
		上半	卸し 25 袋平均 f0.175(通常品)、小売 f0.08~0.1(obraal strootje*)		
ジャパ・レンバン	大型ストローチェ	1929	卸し 1000 本 f3.60、小売 f4.40	Reijden 1935:14	
		1930	卸し 1000 本 f3.40、小売 f4.20		
		1931	卸し 1000 本 f3.20、小売 f3.80		
		1933	卸し 1000 本 f3.00、小売 f3.60		
	中型ストローチェ	1929	卸し 1000 本 f3.00、小売 f3.60		
		1930	卸し 1000 本 f2.70、小売 f3.30		
		1931	卸し 1000 本 f2.50、小売 f3.00		
		1933	卸し 1000 本 f2.25、小売 f2.80		
	小型ストローチェ	1929	卸し 1000 本 f2.50、小売 f3.00		
		1930	卸し 1000 本 f2.20、小売 f2.60		
		1931	卸し 1000 本 f2.00、小売 f2.50		
		1933	卸し 1000 本 f1.75、小売 f2.20		
	ストローチェ	1933 初	小売 10 本包 f0.02、4 本包、5 本包 f0.01		Reijden 1935:15
		1933 中	小売 5~10 本包 f0.01(中味の質、大きさ落とす)		
1933 上		卸し 1000 本 f1.85/f1.90~f0.65/f0.70、平均 f1.25(29 年比 50%低下)			
バニユマス	クレンバック・シガレット	1929	卸し 1000 本平均 f4.25(上級品)、f2.10(下級品) ワルン平均価格 50 本包 f0.25(上級品)、f0.12(下級品)	Reijden 1935: 126~127	
		1932	卸し 1000 本平均 f3.50(上級品)、f1.40(下級品) ワルン平均価格 50 本包 f0.20(上級品)、f0.09(下級品)		
		1933	卸し、小売とも 29 年水準へ復帰		
			小売 10 本包 f0.05(上級品)、f0.025(下級品)、2 本包 f0.01(上級品)、4 本包 f0.01(下級品)		
王侯領	ロコッ・ワングン	1929	卸し 1000 本平均 f1.20、ワルン価格 20 本包 f0.03	Reijden 1935:156	
		1933	卸し 1000 本平均 f0.80、小売 8~10 本包 f0.01		
クディリ	ストローチェ	~1932	卸し 1000 本(50 本包/25 本包) f2~f1.25、 小売 50 本包 f0.11/f0.12、25 本包 f0.06~f0.035	Reijden 1936:9~10	
		1933~	卸し f0.01 包を 200 包で f1.60~f1.50、 小売 4~15 本包 f0.01、3 本包 f0.025		
マディウン	ストローチェ	~1931	卸し 1000 本 f1.60~f2(25 本包)、小売 25 本包 f0.05~f0.06	Reijden 1936:76	
グリッセ県	ロコッ・ジャワ	1932	小売 20~25 本包 f0.01	Reijden 1936: 87~88	
		1933	小売 12~16 本包 f0.01		
		1934	小売 18~20 本包 f0.01		
スラバヤ・マドゥラ	ストローチェ	~1932	小売 50 本包 f0.075~f0.10、25 本包 f0.04~f0.05、 卸し 1000 本 f1.25~f1.60	Reijden 1936: 97~98	
		1933	小売 4~8 本包 f0.01		
		1934	小売 6~12 本包、15 本包 f0.01		
マラン	ストローチェ	~1932	小売 25 本包 f0.06、10 本包 f0.025、5 本包 f0.01	Reijden 1936:108	
		1933	小売 4 本包 f0.01、5 本包 f0.01、6 本包 f0.01		
		1934	小売 12 本包 f0.01、8 本包(平均) f0.01		
	ヨーロッパ産シガレット	1928	1000 本当たり輸入価格 f6.9**	I.V.1931: 205~206	
		1929	1000 本当たり輸入価格 f6.8**		
		1930	1000 本当たり輸入価格 f6.9**		

表註：史料に記載の価格の中で、変化が分かるものを選んで掲載した。f はギルダーを示す。

* 質が悪く、極めて安く売られるストローチェ。

**1000 本当たり重量を 1kg として、輸入総額を輸入総量で割って算出。

表3-1 各時期煙草收穫面積

理事州	1874/79	1880/84	1885/89	1890/94	1895/00	1901/04	1905/09	1910/15
バンタム	6	5	2	11	24	42	34	136
クラウン	7	15	25	24	2	0	0	110
プリアンゲル	3,570	4,241	6,614	4,621	8,095	10,428	15,223	14,078
チェリボン	200	356	542	583	834	1,013	1,111	1,200
テガル	389	631	646	1,059	1,421			
プカロンガン	604	488	615	656	700	2,609	3,469	6,096
スマラン	1,560	5,547	6,316	9,125	8,877	7,549	7,561	11,056
ジャバラ	554	606	425	464	585			
レンバン	12,899	14,590	18,928	23,059	21,195	25,949	26,740	29,467
スラバヤ	2,416	4,374	4,267	5,291	4,585	4,375	3,919	6,351
パスルアン	4,798	3,591	3,815	3,216	3,505	12,027	15,233	20,280
プロボリンゴ	1,824	3,279	4,318	3,202	3,008			
ブスキ	10,321	15,852	22,996	25,790	27,196	39,634	51,111	65,896
バニユワンギ	630	152						
バニユマス	6,854	8,852	13,045	11,534	17,164	13,780	15,453	17,545
バゲレン	3,352	6,047	5,561	7,041	8,469			
ケドゥー	8,435	9,289	12,758	15,748	13,895	25,118	30,667	44,025
マディウン	1,356	1,686	1,637	1,689	3,235	3,454	4,107	3,839
クディリ	5,622	7,806	9,983	9,293	9,888	10,698	12,554	8,483
マドゥラ	148	583	1,937	3,076	3,323	8,836	8,117	8,058
合計	65,534	87,899	114,442	125,582	135,799	165,804	192,027	236,261

単位：バウ
 表註：王侯領、私領地を除く。
 バニユワンギは1882年にブスキに編入、1900年にテガルはプカロンガンに、ジャバラはスマラン、プロボリンゴはパスルアン、バゲレンはケドゥーに編入。
 出所：K.V.各年の数字から計算

表3-2 煙草收穫面積：1916~20年平均、1920~25年平均と1925~29年平均(バウ)

理事州	1916~20年平均			1920~25年平均			1925~29年平均	
	收穫面積	比率	対全耕地比%	收穫面積	比率	対全耕地比%	收穫面積	比率
バンタム	1	0.0	0.0	17	0.0	0.0	93	0.0
バタヴィア	187	0.1	0.0	377	0.2	0.0	518	0.2
チェリボン	1,423	1.0	0.3	2,224	1.2	0.5	2,210	1.0
プリアンゲル	4,947	3.3	0.5	4,508	2.5	0.4	5,948	2.8
西ジャワ	6,558	4.4	0.3	7,126	3.9	0.3	8,769	4.1
プカロンガン	7,002	4.7	1.5	7,357	4.0	1.6	7,363	3.5
スマラン	9,643	6.5	1.2	9,053	4.9	1.1	9,641	4.6
レンバン	26,004	17.4	4.6	45,626	24.9	8.0	48,476	22.9
バニユマス	13,312	8.9	2.8	12,890	7.0	2.6	61,812	29.2
ケドゥー	32,509	21.8	5.3	31,286	17.1	5.0		
ジョクジャカルタ	3,759	2.5	2.1	3,442	1.9	2.0	n.a.	-
スラカルタ	4,341	2.9	0.7	5,318	2.9	0.8	n.a.	-
マディウン	3,331	2.2	0.6	5,873	3.2	1.0	7,888	3.7
中ジャワ	99,901	66.9	2.3	120,845	65.9	2.8	135,180	63.8
スラバヤ	4,808	3.2	0.9	6,186	3.4	1.1	8,033	3.8
マドゥラ	6,175	4.1	1.1	7,044	3.8	1.2	7,606	3.6
クディリ	9,081	6.1	1.7	10,395	5.7	1.9	12,349	5.8
パスルアン	11,567	7.7	1.8	12,155	6.6	1.8	13,606	6.4
ブスキ	11,270	7.5	2.7	19,522	10.7	3.8	29,616	14.0
東ジャワ	42,901	28.7	1.5	55,302	30.2	1.9	71,210	33.6
ジャワ・マドゥラ	149,360	100	1.5	183,273	100	1.8	211,857	100

出所：Bagchus 1929:42、K.V.1929,bijl.T、K.V.1930,bijl.Sから計算。

表3-3 ジャワ・マドゥラ理事州別住民煙草収穫面積(バウ)

理事州	1931~35年 平均	1936~40年 平均	理事州面積増減
バンテン	54(0.0)	45(0.0)	
バタヴィア	483(0.2)	430(0.2)	33年100.0km ² 減
バイテンゾルフ	561(0.3)	483(0.2)	
プリアンゲル	6,985(3.3)	7,801(3.8)	
チェリボン	2,465(1.2)	1,814(0.9)	
プカロンガン	5,583(2.6)	5,125(2.5)	
スマラン	10,666(5.0)	9,500(4.6)	33年44.1km ² 増
ジャパラ・レンバン	4,992(2.3)	4,639(2.2)	33年50.4km ² 減
パニユマス	12,623(5.9)	12,137(5.9)	36年791.8km ² 減
ケドゥー	37,886(17.7)	41,825(20.2)	33年6.2km ² 、36年791.7km ² 増
ジョクジャカルタ	6,018(2.8)	7,245(3.5)	
スラカルタ	7,124(3.3)	7,034(3.4)	
スラバヤ	2,852(1.3)	2,732(1.3)	35年768.6km ² 増
ボジョネゴロ	40,407(18.9)	37,658(18.2)	35年768.7km ² 減
マディウン	9,239(4.3)	10,446(5.1)	35年423.2km ² 増
クディリ	11,865(5.6)	10,058(4.9)	35年423.2km ² 減
マラン(プロボリンゴ)	13,892(6.5)	14,389(7.0)	33年併合
プスキ	31,717(14.9)	19,949(9.7)	
マドゥラ	8,079(3.8)	13,393(6.5)	
合計	213,489(100)	206,703(100)	

出所: I.V.1932~1935:tabel 194、I.V.1936~1941:tabel 193 より作成

表3-4 ケドゥー理事州各郡・県煙草栽培面積と対耕地比

郡・県	M.W.調査1903年		1916~20年平均		1920~25年平均	
	収穫面積	対耕地比	収穫面積	対耕地比	収穫面積	対耕地比
Magelang	823	5.7	626	7.5	614	5.8
Bandongan	1,905	9.1	1,356	7.0	1,741	8.7
Tegalredjo	1,445	6.5	985	5.7	922	5.1
Grabag	336	1.8	1,090	6.1	849	4.8
Moentilan	2,063	8.1	2,677	10.9	2,755	11.2
Salam	125	1.0	759	5.2	1,131	7.9
Salaman	483	1.6	808	2.6	1,079	3.1
マゲラン県	7,180	5.0	8,301	6.2	9,091	6.5
Temangoeng	2,035	9.1	2,360	21.1	2,775	24.6
Kaloran	547	2.8	241	1.0	182	0.9
Pringsoerat	164	0.9	424	2.9	279	1.8
Parakan	3,265	16.9	5,726	22.0	4,715	18.2
Tjandiroto	2,556	14.9	2,739	11.6	2,608	10.8
トゥマンガン県	8,567	8.8	11,490	11.4	10,559	10.8
Poerworedjo		0.0	20	0.1	10	0.1
Loano	56	0.3	3	-	-	0.0
Tjangkrep	75	0.3	40	0.2	68	0.3
Koetoardjo	188	1.5	16	0.1	13	0.1
Kemiri	99	0.8	107	0.8	91	0.6
Pitoeroeh	635	6.1	329	2.4	527	3.9
Poerwodadi	10	0.1	2	-	4	0.0
ブルウオレジョ県	1,063	1.0	517	0.4	713	0.6
Keboemen	122	1.1	801	6.5	96	0.8
Alihan	350	1.8	380	1.8	591	2.8
Koetowinangoen	68	0.5	329	2.2	475	3.2
Premboen	118	0.7	389	3.1	515	3.0
Karanganjar	67	0.5	49	0.3	142	0.9
Gombong	38	0.3	33	0.2	58	0.4
Rowokele	0	0.0	34	0.2	26	0.2
Pedjagoan	29	0.2	44	0.2	56	0.3
Poering	55	0.4	30	0.2	86	0.5
クブメン県	847	0.6	2,089	1.5	2,045	1.4
Wonosobo	950	5.4	1,404	11.0	1,012	7.3
Garoeng	4,000	13.2	6,005	29.6	5,532	29.1
Leksono	780	3.1	1,335	7.3	1,258	6.3
Sapoeran	950	3.9	1,255	5.8	989	4.5
Broeno	10	0.1	55	0.3	13	0.1
Ngadisono	110	0.6	58	0.2	74	0.3
ウォノソボ県	6,800	5.1	10,112	8.8	8,878	7.6
ケドゥー理事州	24,456	4.0	32,509	5.3	31,286	5.0

単位: 面積はバウ、
表註: 行政区画は1920年
段階のもので、30年
代初とは異なってク
トアルジョ県はなく、
そこに属する郡はク
ブメン県に含まれて
いる。また、表示の
Rowokele 郡は M.W.
段階では Banjoe-
modal、Ngadisono 郡
は Kaliwiro と同一た
として作成した。耕
地面積は1920年数
値。

出所: Landbouwatlas 1926:
Staat I, III; Bagchus
1929:123; M.W.L.
Kedoe:bijl.2

表 3-5 旧ケドゥーにおける煙草収穫面積の推移

年平均		水田			畑地			合計		
		第1作物	第2作物	合計	第1作物	第2作物	合計	第1作物	第2作物	合計
1874	バウ	48	5,190	5,237	984	2,213	3,197	1,032	7,402	8,435
~79	%	0.6	61.5	62.1	11.7	26.2	37.9	12.2	87.8	100.0
1880	バウ	0	3,849	3,849	5,337	103	5,440	5,337	3,952	9,289
~84	%	0.0	41.4	41.4	57.5	1.1	58.6	57.5	42.5	100.0
1885	バウ	5	8,719	8,724	3,829	205	4,035	3,834	8,924	12,758
~89	%	0.0	68.3	68.4	30.0	1.6	31.6	30.1	69.9	100.0
1890	バウ	565	7,416	7,981	5,665	2,103	7,768	6,229	9,519	15,748
~99	%	3.6	47.1	50.7	36.0	13.4	49.3	39.6	60.4	100.0
1895	バウ	773	7,645	8,418	4,245	1,352	5,596	5,018	8,997	14,015
~99	%	5.5	54.5	60.1	30.3	9.6	39.9	35.8	64.2	100.0

表註：「第1作物」は1e gewas, 「第2作物」は2e gewas の訳。
出所：K.V.各年記事より作成

表 3-6-1 旧バゲレンにおける煙草収穫面積の推移

年平均		水田			畑作			合計		
		第1作物	第2作物	合計	第1作物	第2作物	合計	第1作物	第2作物	合計
1874	バウ	124	1,004	1,128	1,446	778	2,224	1,569	1,783	3,352
~79	%	3.7	30.0	33.7	43.1	23.2	66.3	46.8	53.2	100.0
1880	バウ	159	1,354	1,514	2,530	2,003	4,533	2,690	3,357	6,047
~84	%	2.6	22.4	25.0	41.8	33.1	75.0	44.5	55.5	100.0
1885	バウ	15	910	925	4,270	365	4,636	4,286	1,275	5,561
~89	%	0.3	16.4	16.6	76.8	6.6	83.4	77.1	22.9	100.0
1890	バウ	98	1,295	1,393	4,630	1,014	5,643	4,727	2,308	7,035
~94	%	1.4	18.4	19.8	65.8	14.4	80.2	67.2	32.8	100.0
1895	バウ	175	1,622	1,797	5,966	824	6,790	6,142	2,445	8,586
~99	%	2.0	18.9	20.9	69.5	9.6	79.1	71.5	28.5	100.0

表註：表作は1ste gewas、裏作は2de gewas の訳
出所：K.V.各年記事より作成

表 3-6-2 ウォノソボ県煙草栽培面積

年	畑地	比率	水田	比率	合計
1931	10,761	90.4	1,146	9.6	11,907
1932	11,247	91.6	1,034	8.4	12,281
1933	11,077	91.7	1,000	8.3	12,077
1934	9,581	92.0	833	8.0	10,414
1935	10,439	88.9	1,299	11.1	11,738

表 3-7 ケドゥー理事州における煙草収穫面積の推移

年平均		水田			畑作			合計		
		第1作物	第2作物	合計	第1作物	第2作物	合計	第1作物	第2作物	合計
1874	バウ	171	6,194	6,365	2,430	2,991	5,421	2,602	9,185	11,787
~79	%	1.5	52.5	54.0	20.6	25.4	46.0	22.1	77.9	100
1880	バウ	159	5,203	5,362	7,868	2,105	9,973	8,027	7,309	15,336
~84	%	1.0	33.9	35.0	51.3	13.7	65.0	52.3	47.7	100
1885	バウ	21	9,629	9,650	8,100	571	8,671	8,120	10,200	18,320
~89	%	0.1	52.6	52.7	44.2	3.1	47.3	44.3	55.7	100
1890	バウ	663	8,711	9,374	10,294	3,116	13,410	10,956	11,827	22,783
~94	%	2.9	38.2	41.1	45.2	13.7	58.9	48.1	51.9	100
1895	バウ	949	9,458	10,407	10,210	3,026	13,236	11,159	12,484	23,643
~99	%	4.0	40.0	44.0	43.2	12.8	56.0	47.2	52.8	100
1900	バウ	629	11,002	11,631	9,264	3,436	12,700	9,892	14,437	24,329
~04	%	2.6	45.2	47.8	38.1	14.1	52.2	40.7	59.3	100
1905	バウ	828	14,087	14,915	8,521	7,220	15,741	9,350	21,306	30,656
~09	%	2.7	46.0	48.7	27.8	23.6	51.3	30.5	69.5	100
1910	バウ	1,550	12,750	14,300	24,651	5,075	29,726	26,200	17,825	44,025
~15	%	3.5	29.0	32.5	56.0	11.5	67.5	59.5	40.5	100

K.V.各年記事より作成

表 3-8 月別煙草作付面積(1920~25年平均、バウ)

	ケドゥー理		マゲラン県		トゥマング		ウォノソボ	
	事州		ン県		ン県		ン県	
1月	356	1.1	157	1.7	-	0.0	162	1.8
2月	1,037	3.3	285	3.2	-	0.0	750	8.4
3月	2,752	8.7	421	4.7	52	0.5	2,274	25.3
4月	4,862	15.4	518	5.8	1,156	10.8	3,173	35.3
5月	5,555	17.6	615	6.8	3,088	28.9	1,498	16.7
6月	7,628	24.2	2,254	25.0	3,353	31.4	728	8.1
7月	6,045	19.2	3,081	34.2	1,970	18.4	235	2.6
8月	2,251	7.1	1,145	12.7	787	7.4	43	0.5
9月	702	2.2	346	3.8	211	2.0	16	0.2
10月	102	0.3	72	0.8	13	0.1	4	0.0
11月	51	0.2	17	0.2	26	0.2	5	0.1
12月	217	0.7	89	1.0	36	0.3	88	1.0
雨季	4,515	14.3	1,041	11.6	127	1.2	3,283	36.6
乾季	27,043	85.7	7,959	88.4	10,565	98.8	5,693	63.4
合計	31,558	100	9,000	100	10,692	100	8,976	100

出所：Bagchus 1929:254~257 より計算

表 3-9 月別煙草収穫面積(1920~25年平均、バウ)

	ケドゥー理		マゲラン県		トゥマング		ウォノソボ	
	事州		ン県		ン県		ン県	
1月	1,291	4.1	489	5.4	702	6.6	84	1.0
2月	188	0.6	17	0.2	112	1.1	40	0.5
3月	14	0.0	3	0.0	2	0.0	8	0.1
4月	6	0.0	3	0.0	-	0.0	-	0.0
5月	38	0.1	19	0.2	-	0.0	14	0.2
6月	302	1.0	159	1.7	-	0.0	128	1.5
7月	650	2.1	268	2.9	2	0.0	270	3.1
8月	1,691	5.4	597	6.6	32	0.3	845	9.6
9月	4,748	15.2	783	8.6	328	3.1	2,763	31.3
10月	7,734	24.8	1,451	16.0	2,612	24.7	2,661	30.1
11月	9,428	30.2	3,443	37.9	3,972	37.6	1,713	19.4
12月	5,080	16.3	1,857	20.4	2,797	26.5	328	3.7
雨季	23,735	76.1	7,260	79.9	10,197	96.6	4,834	54.8
乾季	7,435	23.9	1,829	20.1	362	3.4	3,992	45.2
合計	31,170	100	9,089	100	10,559	100	8,826	100

出所：Bagchus 1929:254~257 より計算

表 3-10 ケドゥー煙草5郡の月別煙草作付面積(1920~25年平均、バウ)

	Garoeng		Temanggoeng		Parakan		Moentilan		Tjandiroto	
	畑作		水田作		水田作		水田作		水田作	
耕地比	29.1%		24.6%		18.2%		11.2%		10.8%	
1月	29	0.5	-	0.0	-	0.0	-	0.0	34	1.3
2月	370	6.6	-	0.0	-	0.0	-	0.0	-	0.0
3月	1,389	24.9	-	0.0	14	0.3	-	0.0	38	1.4
4月	2,271	40.7	165	5.9	294	6.2	10	0.4	688	25.4
5月	882	15.8	772	27.4	1,312	27.5	80	2.9	938	34.6
6月	428	7.7	639	22.7	1,813	38.0	798	29.1	774	28.6
7月	129	2.3	791	28.1	902	18.9	1,281	46.7	153	5.6
8月	15	0.3	389	13.8	302	6.3	450	16.4	33	1.2
9月	7	0.1	59	2.1	99	2.1	84	3.1	14	0.5
10月	3	0.1	-	0.0	4	0.1	41	1.5	2	0.1
11月	-	0.0	-	0.0	23	0.5	-	0.0	1	0.0
12月	51	0.9	-	0.0	3	0.1	1	0.0	33	1.2
雨季	1,842	33.0	-	0.0	44	0.9	42	1.5	108	4.0
乾季	3,732	67.0	2,815	100.0	4,722	99.1	2,703	98.5	2,600	96.0
合計	5,574	100	2,815	100	4,766	100	2,745	100	2,708	100

出所：Bagchus 1929:254~257 より計算

表 3-11 ケドゥー煙草 5 郡の月別煙草収穫面積 (1920~25 年平均、バウ)

	Garoeng 畑作		Temanggoen g 水田作		Parakan 水田作		Moentilan 水田作		Tjandiroto 水田作	
耕地比	29.1%		24.6%		18.2%		11.2%		10.8%	
1月	57	1.0	355	12.8	242	5.1	76	2.8	50	1.9
2月	3	0.1	49	1.8	20	0.4	-	0.0	-	0.0
3月	7	0.1	-	0.0	-	0.0	-	0.0	-	0.0
4月	-	0.0	-	0.0	-	0.0	-	0.0	-	0.0
5月	2	0.0	-	0.0	-	0.0	-	0.0	-	0.0
6月	-	0.0	-	0.0	-	0.0	-	0.0	-	0.0
7月	5	0.1	-	0.0	-	0.0	2	0.1	-	0.0
8月	247	4.5	-	0.0	3	0.1	13	0.5	28	1.1
9月	1,892	34.3	66	2.4	127	2.7	73	2.6	113	4.3
10月	1,989	36.1	508	18.3	1,084	23.0	495	18.0	971	37.2
11月	1,055	19.2	1,081	39.0	1,919	40.7	1,496	54.3	829	31.8
12月	252	4.6	716	25.8	1,320	28.0	600	21.8	617	23.7
雨季	3,363	61.0	2,709	97.6	4,585	97.2	2,667	96.8	2,467	94.6
乾季	2,146	39.0	66	2.4	130	2.8	88	3.2	141	5.4
合計	5,509	100	2,775	100	4,715	100	2,755	100	2,608	100

出所：Bagchus 1929:254~257 より計算

図

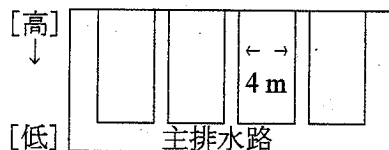


表 3-12 Kedjajar 副郡における煙草葉の名称と収量(リゲン)、価格(ギルダー)

デサ Kedjajar				デサ Koeripan		
名称	バウ当たり 収量	リゲン当 たり価格	バウ当 たり収入	名称	バウ当たり収量	
					最良地	非灌漑地
H tjelingkrik	50	7.5~12.5	375~625	rampasan	120	72
pragelan 1	60	4 ~ 5	240~300	tenggahan	36	12
pragelan 2	80		320~400	oeroetan	36	18
oeroetan	40	1	40	ampadan	72	30
D ampadan	70	0.5	35	合計	264	132
合計	300					

表註：リゲンは竹で編んだトレイで、この上で刻んだ煙草を天日乾燥させる。
ただし、ここでは数量単位。

表 3-13 水田作煙草地帯の葉の名称

上	枚数	葉の名称		用途その他
		Moentilan 郡	Temanggoeng 郡	
	3~4	kitir	kitir No.1 または No.2	良質の葉の時は kapala と同じよう加工
	3~1	kapala	kapala No.1	最上質の煙草 (tabak No.1) に加工
	0			
	2~3	pipilan	tambaan No.2	2 級品煙草に加工
	3~4	koeningan	rampalan No.3	
下	2~3	rewasan	tengahan No.4	
	2~4	kapalan	ampadan No.5	Parakan 郡では噛み煙草 (soesoer) 用

表 3-14 各地域・各種煙草の価格一覧(ギルダー)

地域・種類・年	価格
Kedjajar・最上質畑作ガランガン煙草 1 級品・1922 年	7.50/リゲン=375/ピコル
Kedjajar・最上質畑作ガランガン煙草 1 級品・1921 年	12.50/リゲン=625/ピコル
最上質ペペアン煙草・1922 年	70~100/ピコル
最上質ペペアン煙草・1921 年	140/ピコル~
Kedjajar・最下層葉原料のガランガン煙草・1922 年	25/ピコル
Temanggoeng・最下層葉原料のペペアン煙草煙草・1922 年	10/ピコル
Moentilan・最下層葉原料のペペアン煙草煙草・1922 年	5~10/ピコル
Kedjajar の良好な煙草デサ・ガランガン煙草平均価格・1922 年	80~125/ピコル
Temanggoeng の良好な煙草デサ・ペペアン煙草平均価格・1922 年	40~60/ピコル
Moentilan の良好な煙草デサ・ペペアン煙草平均価格・1922 年	40~60/ピコル

出所：Fruin 1923b:370~371 より作成

表 3-15 Kedjadjar 副郡における煙草のパウ当たり収量(リゲン)と粗収入(ギルダール)

デサ	土地種別	収量	粗収入
Kedjadjar	畑地の 1/9 : 最良地	250~300	1,000
	畑地の 1/5 : 灌漑できない土地	150	
	畑地の 2/3 : 毎年栽培は不可		
Koeripan	畑地の 1/4 : 良質地	200~300	400 以下
	畑地の 3/4	160 以下	
Tieng	一部の最優良地		1,000 超
Tambi	一部の最優良地		1,000 超

出所 : Fruin 1923a:277-278 より作成

表 3-16 デサ Koeripan、Kedjajar におけるパウ当たり煙草生産費(ギルダール)

	デサ Koeripan	デサ Kedjadjar
苗	自家生産	
土地耕起	家族労働とサンバタンによる	50(大土地占有者の場合)
移植	家族労働による	家族労働による
肥料代	不明	15~18 60(大土地占有者の場合)
草刈り賃金	不明	12.5/年
除草	50	46~47
脇芽除去等	家族労働による	家族労働による
収穫	食事のみ	
刻み	17 日労働 = 9 + 67 食	35~50 日労働 = 26.25~35.5 + (210~300) 食
乾燥	出来高払い(2ct/rigen) = 1	5~6 晩労働 = 3.75~4.5 + (30~36) 食
薪代	5	30~36
合計	65 +	216~ 233+ (240~336) 食 = 216~ 233+ 24~57.12 = 240 ~ 290

表註 : デサ Koeripan の畑地は 100 リゲン生産の平均的な栽培で計算
 デサ Kedjadjar の畑地は灌漑可能な最良地(250~300 リゲン生産)で計算
 Kedjadjar では仮に食事代を一食 17 セント(根拠は Fruin[1923a:312]が載せる
 デサ Mendoet の野菜と米の食事 12 人分が 2 ギルダール)と仮定すると、40.8~
 57.12 ギルダール、現金支払いと合わせても 257~290 ギルダール、あるいは一食
 10 セント(根拠は Fruin[1923a:314]が載せる desa Mendoet の刻み職人の食事
 2 人分が 20 セント)と仮定すると、24~33.6 ギルダール、現金支払いと合
 わせても 240~267 ギルダール。

表 3-17 トウマングン県における煙草栽培の収入(ギルダール)

デサ	煙草の種類	粗収入	純収入
Moedal	ペペアン	水田 330、畑地 ± 320	水田 100~160 畑地 90~120
Modjotengah	ガランガン	水田 340~400(250 リゲン) + 25~50(下 層葉から作るペペアン分) = 360~425	100~150
Gembjang	ガランガン	1,045(ルラーの最良水田、275 リゲン) 500~800(他の最良水田、ペペアン含む)	250~500

表註 : デサ Gembjang のルラーの粗収入は 22 年価格の 1 リゲン当たり 3.80 ギルダ
 ールにより算出されている。また純収入は全ての作業を賃労働で行うとして
 算出されている。

出所 : Fruin 1923a:306~307 より作成

表3-18 Moentilan 郡における煙草栽培の収支(ギルダー)

バウ当たり生産費		デサ Bodjong	デサ Mendoet
苗購入		6.60	
土地耕起	犁かけ	9~9.60	
	鋤作業	4.60	
	植床造り	28.80~33.60	
	植床鋤がけ	20	
	畝立て	2.4	
	小計	64~70	27
施肥	購入費用	1~1.50	1~1.50
	水田への運搬	2.50	2.50
	施肥作業	1.20	1.20
	小計	2.50~5	2.50~5
植付け	3.50	2(サンバタン食費)	
補植	1.20	-	
除草(植床清潔維持)	55	10	
芽、先端摘み	4 + 1.20	-	
耕作費合計	140~ 150	45~ 50	
加工費	63	15	
総経費	200 超	60~ 65	
バウ当たり粗収入(1922年)	良田 270~370	3級水田 125~150	
バウ当たり純収入	60.70 ~ 160	60~ 90	

表註：Bodjong の事例はタバサンを行う大土地占有者の栽培で、全ての作業に賃労働を使用。加工費にはタバサンによる購入費用含む。Mendoet の事例では多くの作業が家族労働、もしくはサンバタンで行われている。

出所：Fruin[1923a:311~316]より計算

表3-19 1930年代半ばウォノソボ県における煙草生産費(ギルダー)

	経費項目	サンバタンによる場合	賃労働使用の場合
苗床関係	竹購入	1.00	1.00
	アランアラン購入	1.30	1.30
	小計	2.30	2.30
土地耕作関係	土地耕起	3.60	6.30
	植穴造り	0.60	0.60
	厩肥購入	6.00	6.00
	肥料運搬	0.40	2.50
	植穴への施肥	0.30	0.30
	植付け	0.32	0.32
	苗購入費	5.00	5.00
	小計	16.22	21.02
作物維持管理	除草等	4.60	8.05
収穫・加工	小計	20.33	23.45
計		43.45	54.82
労働者食費	トウモロコシ	10.55	2.96
合計		54.00	57.78

出所：Heijden 1935:576~583

表3-20 トウマンゲン県における借地料一覧(ギルダー)

デサ	煙草用	稲作用
Modjotengah (Kedoe 副郡)：中等地	80~100	10~12
Moedal：水田	50	25
Moedal：畑地	25	
Gembjang：煙草+トウモロコシ、1等水田	300	
Gembjang：煙草+トウモロコシ、2等水田	200	
Gembjang：米2回		50
Gembjang：煙草+トウモロコシ、灌漑可能畑	100~200	

出所：Fruin 1923a:302

表3-21 ウォノソボ県における煙草各種葉の土地肥沃土別収量(リゲン)

葉の名称	最良地	
	・良地	劣等地
Ampadan	48	30
Oeroetan, Tengahan	36	24
Tenggokan, Rampasan	120	60
合計	204	114

出所：Heijden 1935:576~577

表 4-1 バニユマス理事州各郡・県煙草栽培面積と対耕地比

郡・県	M.W.調査 1903 年			1916~20 年 平均		1920~25 年 平均		1920 年耕地面積				合計
	収 穫 面積	対耕 地比	耕 地 面積	収 穫 面積	対耕 地比	収 穫 面積	対耕 地比	水田		乾地		
								面積	比率	面積	比率	
Banjoemas	134	1.8	7,559	62	0.4	78	0.5	3,965	26.9	10,752	73.1	14,717
Soekaradja	359	3.6	9,937	286	1.7	310	1.8	9,259	54.5	7,731	45.5	16,990
Poerworedjo	88	0.9	9,555	78	0.4	46	0.2	7,393	34.6	13,960	65.4	21,353
Kaliredjo	37	0.3	11,879	7	0.0	12	0.1	8,539	44.1	10,842	55.9	19,381
バニユマス県	617	1.6	38,930	433	0.6	446	0.6	29,156	40.2	43,285	59.8	72,441
Poerwokerto	264	2.6	10,082	2	0.0	52	0.3	9,737	51.6	9,115	48.4	18,852
Adjibarang	70	0.6	10,892	10	0.0	33	0.1	8,885	33.8	17,389	66.2	26,274
Djamboe	307	2.6	11,658	405	1.5	422	1.6	9,933	36.5	17,251	63.5	27,184
ブルウオケルト県	641	2.0	32,632	417	0.6	508	0.7	28,555	39.5	43,755	60.5	72,310
Poerbolinggo	880	4.4	19,824	746	2.7	706	2.6	14,075	51.1	13,451	48.9	27,526
Kertanegara	114	0.9	13,054	400	1.7	297	1.3	8,542	37.2	14,415	62.8	22,957
Tjahjana	56	0.3	16,713	17	0.0	17	0.1	7,595	25.3	22,455	74.7	30,050
ブルボリンゴ県	1,050	2.1	49,591	1,163	1.4	1,020	1.3	30,212	37.5	50,321	62.5	80,533
Singomerto	0	0.0	13,801	2	0.0	10	0.0	7,639	27.4	20,240	72.6	27,879
Bandjar	0	0.0	13,628	21	0.1	32	0.1	7,796	28.8	19,313	71.2	27,109
Karangkoobar	3,585	29.2	12,260	3,272	17.1	3,285	17.2	3,110	16.3	15,940	83.7	19,050
Batoer	8,526	67.8	12,580	7,669	41.1	7,200	38.6	2,145	11.5	16,507	88.5	18,652
バンジャルスガラ県	12,111	23.3	51,905	10,964	11.8	10,527	11.4	20,690	22.3	72,000	77.7	92,690
Tjelatjap	48	0.4	12,523	29	0.1	81	0.3	9,588	29.9	22,511	70.1	32,099
Adiredjo	15	0.1	22,500	24	0.1	53	0.1	23,313	60.2	15,420	39.8	38,733
Madjenamg	5	0.1	6,900	97	0.4	84	0.4	5,661	24.2	17,764	75.8	23,425
Pegadingan	90	0.6	15,504	134	0.3	130	0.3	8,519	21.7	30,803	78.3	39,322
Dajeuhloehoer	20	0.3	6,286	51	0.2	41	0.2	3,921	19.3	16,374	80.7	20,295
チュラチャップ県	178	0.3	63,713	335	0.2	389	0.3	51,002	33.1	102,872	66.9	153,874
バニユマス理事州	14,543	10.4	140,234	13,312	2.8	12,890	2.7	159,615	33.8	312,233	66.2	471,848

単位：面積はバウ

表註：耕地面積は 1903 年については M.W.L. Banjoemas: Bijl.1 より算出、1916~20 年平均、1920~25 年平均は 1920 年数値。

表 4-2 バニユマス理事州煙草収穫面積

平均	水田作計		畑作計		合計	
	バウ	%	バウ	%		
1874~79 年	表 作	293	4.3	903	13.2	1,196
	裏 作	5,121	74.7	537	7.8	5,658
	合計	5,414	79.0	1,440	21.0	6,854
1880~84 年	表 作	71	0.8	4,761	53.8	4,832
	裏 作	3,833	43.3	187	2.1	4,020
	合計	3,904	44.1	4,948	55.9	8,852
1885~89 年	表 作	98	0.8	7,708	59.1	7,806
	裏 作	5,061	38.8	178	1.4	5,239
	合計	5,159	39.5	7,886	60.5	13,045
1890~94 年	表 作	57	0.5	8,925	77.4	8,983
	裏 作	2,355	20.4	196	1.7	2,551
	合計	2,412	20.9	9,123	79.1	11,534
1895~99 年	表 作	104	0.6	12,748	77.0	12,851
	裏 作	3,396	20.5	318	1.9	3,714
	合計	3,499	21.1	13,065	78.9	16,564
1900~04 年	表 作	34	0.2	11,778	78.2	11,812
	裏 作	2,741	18.2	503	3.3	3,245
	合計	2,775	18.4	12,282	81.6	15,057
1905~09 年	表 作	58	0.4	10,461	67.7	10,520
	裏 作	1,952	12.6	2,982	19.3	4,933
	合計	2,010	13.0	13,443	87.0	15,453
1910~14 年	表 作	164	0.9	14,347	79.7	14,511
	裏 作	2,130	11.8	1,355	7.5	3,484
	合計	2,294	12.7	15,702	87.3	17,995
1915~19 年	合計				13,667	
1920~24 年	合計				12,730	
1925~27 年	合計				13,449	
1931~34 年	合計				12,522	
1935~40 年	合計				12,284	

単位：バウ

表註：1928~1930 年は行政区画変更のため、バニユマス理事州のみに関する数字が得られず、除外した。

出所：1874~1915 年の各年面積は K.V.1875:Bijl.KK、K.V. 1876:Bijl.NN、K.V.1877:Bijl.MM、K.V. 1878~79:Bijl.OO、K.V.1880:Bijl.RR、K.V.1881: Bijl.SS、K.V.1882:WW、K.V.1883:Bijl.ZZ、K.V.1884~85:Bijl.VV、K.V.1886~87:Bijl.TT、K.V.1888:Bijl.YY、K.V.1889~90:Bijl.RR、K.V.1891:Bijl.SS、K.V.1892:Bijl.WW、K.V.1893: Bijl.ZZ、K.V.1894:Bijl.YY、K.V.1895:Bijl.XX、K.V.1896:Bijl.WW、K.V.1897:Bijl.VV、K.V.1898:Bijl.QQ、K.V.1899:Bijl.OO、K.V.1900 :Bijl.NN、K.V.1901:Bijl.OO、K.V.1902:Bijl.MM、K.V.1903:Bijl.LL、K.V.1904:Bijl.MM、K.V.1905~ 06:Bijl.KK、K.V.1907~08:Bijl.NN、K.V.1909: Bijl. GG、K.V.1910~13:Bijl.FF、K.V.1914:Bijl.GG、K.V.1915:Bijl.FF、K.V.1916:Bijl.GG、1916~27 年は Bagchus 1929:43、1931~40 年は I.V.1932~1935:tabel194、I.V.1936~1941:tabel 193 のヘクター表示をバウに換算した。

表 4-3 煙草郡における煙草とトウモロコシの月別作付、栽培、収穫面積(1920~25年平均、バウ)

	Karangkobar 郡						Batoer 郡					
	煙草			トウモロコシ			煙草			トウモロコシ		
	作付	栽培	収穫	作付	栽培	収穫	作付	栽培	収穫	作付	栽培	収穫
1月	148	464	35	786	7,563	2,239	385	514	100	443	9,075	1,519
2月	774	1,148	87	1,456	6,897	2,122	1,219	1,733	0	691	7,592	2,174
3月	820	1,953	15	1,118	6,802	1,213	2,218	3,951	0	903	6,067	2,428
4月	710	2,655	8	1,012	7,471	343	1,857	5,807	1	763	5,537	1,293
5月	425	3,042	38	450	7,641	280	936	6,720	23	438	5,142	833
6月	100	2,938	204	776	7,948	469	364	6,891	193	414	4,938	618
7月	23	2,347	614	1,316	7,941	1,323	142	6,413	620	894	5,021	811
8月	37	1,451	933	2,037	8,646	1,332	17	5,531	899	1,642	5,697	966
9月	37	910	578	1,477	8,355	1,768	7	3,853	1,685	2,250	7,397	550
10月	108	531	487	1,698	9,546	507	0	2,168	1,685	1,945	9,042	300
11月	5	271	265	1,096	10,022	620	71	844	1,395	1,105	9,881	266
12月	9	259	21	476	9,655	843	55	300	599	737	9,861	757
雨季	1,864	4,626	910	6,630	50,485	7,544	3,948	9,510	7,457	5,824	51,518	7,444
乾季	1,332	13,343	2,375	7,068	48,002	5,515	3,323	35,215	3,403	6,401	33,732	5,071
合計	3,196	17,969	3,285	13,698	98,487	13,059	7,271	44,725	7,200	12,225	85,250	12,515

表註：「栽培」は当月に耕地上にある作物の面積。「収穫」には凶作面積をも含む

出所：Bagchus 1929: 74~75, 254~255

表 4-4 バンジャルヌガラ県各郡とトゥマンゴン県煙草郡の主要作物栽培状況比較

地域	1920~25年平均栽培面積(収穫面積+凶作面積、バウ)									
	水稲	陸稲	トウモロコシ	キャッサバ	サツマイモ	落花生	大豆	その他の豆	煙草	主要作物計
Singomerto	6,298	166	9,130	2,049	319	734	180	90	10	18,976
	33.2%	0.9%	48.1%	10.8%	1.7%	3.9%	0.9%	0.5%	0.1%	100%
Bandjar	10,169	2	20,348	1,580	159	123	6	164	32	32,583
	31.2%	0.0%	62.4%	4.8%	0.5%	0.4%	0.0%	0.55	0.1%	100%
Karangkobar	2,436	-	13,059	1,643	1,041	28	3	366	3,235	21,811
	11.2%	0.0%	59.9%	7.5%	4.8%	0.1%	0.0%	1.7%	14.8%	100%
Batoer	1,649	-	12,515	1,318	475	7	-	337	7,200	23,501
	7.0%	0.0%	53.3%	5.6%	2.0%	0.0%	0.0%	1.4%	30.6%	100%
バンジャルヌガラ県	20,552	168	55,052	6,590	1,994	892	189	957	10,477	96,871
	21.2%	0.2%	56.8%	6.8%	2.1%	0.9%	0.2%	1.0%	10.8%	100%
トゥマンゴン県 (ケドゥー理事州)	30,221	207	34,535	6,627	3,243	576	10	1,065	10,559	87,043
	34.7%	0.2%	39.7%	7.6%	3.7%	0.7%	0.0%	1.2%	12.1%	100%
Temangoeng (トゥマンゴン県)	4,810	0	3,916	113	151	0	1	1	2,775	11,767
	40.9%	0.0%	33.3%	1.0%	1.3%	0.0%	0.0%	0.0%	23.6%	100%
Parakan (トゥマンゴン県)	9,957	0	5,412	1,216	1,096	364	0	609	4,715	23,369
	42.6%	0.0%	23.2%	5.2%	4.7%	1.6%	0.0%	2.6%	20.2%	100%
Tjandiroto (トゥマンゴン県)	6,276	6	8,066	2,276	800	67	8	39	2,608	20,146
	31.2%	0.0%	40.0%	11.3%	4.0%	0.3%	0.0%	0.2%	12.9%	100%

出所：Bagchus 1929:114, 123 より作成

表 4-5 バンジャルヌガラ県における牛馬飼育状況一覧

県・郡・副郡	家族数	牛頭数		馬頭数		
		合計	1 家族 当たり	合計	1 家族 当たり	
バニユマス県	54,569	29,018	0.5318	885	0.0162	
プルウォケルト県	49,991	36,192	0.7240	1,021	0.0204	
プルボリンゴ県	61,965	37,709	0.6086	926	0.0149	
バンジャルヌガラ県	40,968	31,063	0.7582	2,387	0.0583	
シン ゴメ ルト 郡	バンジャルヌガラ副郡	4,037	3,563	0.8826	80	0.0198
	バワン副郡	3,656	5,125	1.4018	29	0.0079
	マドゥココ副郡	3,214	2,870	0.8930	32	0.0100
	プリギ副郡	1,862	1,411	0.7578	34	0.0183
	郡計	12,769	12,969	1.0157	175	0.0137
バン ジャ ル 郡	ワナディ副郡	2,448	2,339	0.9555	21	0.0086
	バンジャルマンガ副郡	2,314	2,235	0.9659	33	0.0143
	プングルラン副郡	3,290	3,397	1.0325	38	0.0116
	グダス副郡	1,192	1,213	1.0176	34	0.0285
	ラキット副郡	2,623	2,202	0.8395	16	0.0061
郡計	11,867	11,386	0.9595	142	0.0120	
カラ ンコ バル 郡	カランコバル副郡	2,435	1,928	0.7918	179	0.0735
	カリプリン副郡	2,320	554	0.2388	248	0.1069
	ワナヤサ副郡	3,268	1,000	0.3060	606	0.1854
	郡計	8,023	3,482	0.4340	1,033	0.1288
バト ウー ル 郡	バトゥール副郡	3,679	410	0.1114	909	0.2471
	パグンタン副郡	1,895	1,804	0.9520	38	0.0201
	プジャワラン副郡	2,738	1,012	0.3696	90	0.0329
	郡計	8,309	3,226	0.3883	1,037	0.1248
チュラチャップ県	59,860	40,544	0.6773	531	0.0089	
バニユマス理事州	267,353	174,526	0.6528	6,449	0.0241	

出所：M.W.Veeltt. Banjoemas, bijl.2

表 5-1 1916~20 年平均住民煙草収穫面積が全耕地の 4%を越える県

県(理事州)	栽培面積	耕地比
バンジャルヌガラ(バニユマス)	10,964	11.8%
トゥマングン(ケドゥー)	11,490	11.4%
ボジョネゴロ(レンバン)	14,875	8.9%
ウオノソボ(ケドゥー)	10,112	8.8%
ルマジャン(パスルアン)	7,752	7.4%
ポンドウォソ(ブスキ)	7,157	6.3%
マゲラン(ケドゥー)	8,301	6.2%
トゥバン(レンバン)	7,612	4.6%
バタン(プカロンガン)	2,615	4.0%

単位：バウ

出所：Landbouwatlas 1926, dl.2:144

表 5-2 レンバン理事州各郡・県煙草栽培面積と対耕地比

郡・県	M.W.調査 1903 年				1916~20 年平均				1920~25 年平均			
	収穫面積バウ			耕地 比	収穫面積バウ			耕地 比	収穫面積バウ			耕地 比
	乾季作	雨季作	合計		乾季作	雨季作	合計		乾季作	雨季作	合計	
Rembes	2,983	100	3,083	7.9	20.5	779	3.0	2.6	1,132	2.5	3.9	
Djenoe	678	142	820	2.1	7.6	907	3.5	4.2	1,324	2.9	5.6	
Rengel	2,875	200	3,075	7.9	17.7	2,488	9.6	6.6	6,147	13.5	16.5	
Djatirogo	1,127		1,127	2.9	10.8	1,011	3.9	5.4	1,759	3.9	9.3	
Bantjar	271		271	0.7	1.7	444	1.7	1.5	375	0.8	1.3	
Singahan	2,361		2,361	6.0	16.9	1,983	7.6	6.7	3,325	7.3	11.3	
トゥバン県	10,295	442	10,737	27.5	12.9	7,612	29.3	4.6	14,062	30.8	8.4	
ボジョネゴロ県			20,385.5	52.2	23.0	14,875	57.2	8.9	25,541	56.0	15.2	
レンバン県			1,007.5	2.6	2.5	478	1.8	0.5	739	1.6	0.7	
プロラ県			3,905	10.0	6.9	3,039	11.7	2.2	5,284	11.6	3.9	
レンバン理事州			39,035	100.0	14.0	26,004	100.0	4.6	45,626	100.0	8.0	
ジャワ・マドゥラ			179,254			156,997			179,776			

表註：耕地面積は 1903 年については M.W.L. Rembang: Bijl.1 より算出、1916~20 年平均、1920~25 年平均は 1920 年数値をもとにした。なお、ジャワ・マドゥラの数値のうち、1903 年は王侯領での栽培面積を含んでいない。

出所：M.W.L. Rembang: bijl.2, Landbouwatlas 1926: Staat I, III, Bagchus 1929:105

表 5-3 1859~63 年トゥバン県の自由栽培煙草企業一覧

郡	農園名		1859 年	1860 年	1861 年	1862 年	1863 年
Rengel	de Geurige Plant	栽培面積 (収穫面積)			300	490 (400)	400
		生産高	219,600	88,328	61,488	198,128	未定
	Onderneming te Rengel (Pontjo)	栽培面積 (収穫面積)			48	60 (45)	120
		生産高	48,800	65,392	26,059	29,280	未定
Rembes	Wiedang	栽培面積 (収穫面積)			200	230 (220)	320 (150)
		生産高	158,600	14,640	9,760	122,000	68,320
	不詳	栽培面積 (収穫面積)					100 (9)
		生産高	0	0	0	9,760	1,806
Djatirogo	Cuba	栽培面積 (収穫面積)			260	300 (300)	450 (75)
		生産高	73,688	39,040	25,376	219,600	3,123
Singahan	Nicot	栽培面積 (収穫面積)			351	270 (270)	600 (80)
		生産高	146,888	90,280	56,404	195,200	30,744
	Onderneming te Singahan	栽培面積 (収穫面積)			260	30 (30)	150
		生産高	0	0	7,027	14,640	10,736
トゥバン県合計		栽培面積 (収穫面積)			1,419	1,380 (1,265)	2,140 (314)
		生産高	647,576	297,680	186,114	788,608	114,729

単位：面積はバウ、生産高は原史料のアムステルダム・ポンドから Kg に換算した。
出所：K.V.1861, bijl.AA ; 1862, bijl.Z ; 1863, bijl.Y

表 5-4 トゥバン県における輸出向け煙草買い上げ企業

企業名	1875 年	1876 年	1877 年	1878 年	1879 年	1880 年	1881 年	1882 年
de Geurige Plant	124,000	100,000	75,000	閉鎖				
Widang	n.a.	59,000	63,000	一時閉鎖	閉鎖			
Pontjo	n.a.							
Cuba	148,800	90,000	205,429	85,000	閉鎖			
Nicot	272,800	425,000	486,433	200,000	18,459	150,000	150,000	閉鎖
合計	545,600	674,000	829,862	285,000	18,459	150,000	150,000	0

単位：kg

出所：K.V.1876:bijl.TT;1878:bijl.VV;1879:bijl.XX;1880:bijl.YY;1881:bijl.YY;1882:bijl.DDD;1883:bijl.HHH

表 5-5 トゥバン煙草の移輸出

年	ラジャンガン	クロソック
1910	302,191	114,573
1911	233,300	263,630
1912	242,209	333,287
1913	215,429	299,877
1914	247,483	34,690
1915	239,967	72,400

単位：kg

表註：ラジャンガンは内地市場向けで、海上経由の移出数値。1915 年は 10 月 5 日までの数字。

出所：Jasper 1915:345

表 5-6 レンバン理事州における煙草収穫面積の推移

年平均	水田			畑地			合計			
	表作	裏作	合計	表作	裏作	合計	表作	裏作	合計	
1874~79 年	バウ	12	9,557	9,569	2,136	1,195	3,331	2,148	10,752	12,899
	%	0.1	74.1	74.2	16.6	9.3	25.8	16.7	83.4	100.0
1880~84 年	バウ	18	8,375	8,392	3,481	2,717	6,198	3,498	11,092	14,590
	%	0.1	57.4	57.5	23.9	18.6	42.5	24.0	76.0	100.0
1885~89 年	バウ	21	10,705	10,726	3,665	4,538	8,202	3,685	15,243	18,928
	%	0.1	56.6	56.7	19.4	24.0	43.3	19.5	80.5	100.0
1890~94 年	バウ	45	13,874	13,919	3,518	5,622	9,140	3,563	19,496	23,059
	%	0.2	60.2	60.4	15.3	24.4	39.6	15.5	84.5	100.0
1895~99 年	バウ	1	14,166	14,167	1,118	7,210	8,328	1,119	21,377	22,495
	%	0.0	63.0	63.0	5.0	32.1	37.0	5.0	95.0	100.0
1900~04 年	バウ	510	16,733	17,243	954	5,500	6,454	1,464	22,233	23,698
	%	2.2	70.6	72.8	4.0	23.2	27.2	6.2	93.8	100.0
1905~09 年	バウ	101	19,479	19,580	634	6,487	7,121	734	25,966	26,700
	%	0.4	73.0	73.3	2.4	24.3	26.7	2.7	97.3	100.0
1910~15 年	バウ	43	20,725	20,768	550	8,150	8,700	593	28,875	29,467
	%	0.1	70.3	70.5	1.9	27.7	29.5	2.0	98.0	100.0

表註：表作は 1e gewas、裏作は 2de gewas の訳
出所：K.V.各年記事より作成

表 5-7 1889~1901 年 Toeban、Bodjonegoro 県住民煙草栽培面積(バウ)

	1899 年			1900 年			1901 年		
	水田	畑地	合計	水田	畑地	合計	水田	畑地	合計
Toeban	5,378	3,861	9,239	2,425	2,916	5,341	1,881	2,486	4,367
	58.2	41.8	100.0	45.4	54.6	100.0	43.1	56.9	100.0
Bodjonegoro	10,375	3,215	13,590	6,012	3,640	9,652	7,262	1,887	9,149
	76.3	23.7	100.0	62.3	37.7	100.0	79.4	20.6	100.0
計	15,753	7,076	22,829	8,437	6,556	14,993	9,143	4,373	13,516
	69.0	31.0	100.0	56.3	43.7	100.0	67.6	32.4	100.0

出所 : Walbeehm 1902:1060 より作成

表 5-8 トゥバン県各郡の月別煙草作付面積(1920~25 年平均、バウ)

	トゥバン県		Rembes		Djenoe		Rengel		Djatirogo		Bantjar		Singgahan		レンバン 理事州	
	面積	割合	面積	割合	面積	割合	面積	割合	面積	割合	面積	割合	面積	割合	面積	割合
1月	20	0.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	20	1.1	0	0.0	0	0.0	55	0.1
2月	4	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	4	0.1	25	0.1
3月	122	0.9	1	0.1	18	1.4	27	0.4	0	0.0	0	0.0	76	2.2	139	0.3
4月	868	6.2	125	11.4	392	29.6	307	5.0	10	0.6	34	9.0	0	0.0	961	2.1
5月	1,486	10.5	103	9.4	358	27.0	773	12.5	107	6.1	97	25.6	48	1.4	2,228	4.8
6月	2,517	17.8	103	9.4	184	13.9	1,747	28.3	212	12.1	110	29.0	161	4.7	8,393	18.2
7月	2,951	20.9	233	21.2	123	9.3	1,704	27.6	291	16.6	71	18.7	529	15.6	14,508	31.5
8月	3,081	21.8	335	30.5	221	16.7	1,300	21.1	489	27.9	28	7.4	708	20.9	11,681	25.3
9月	2,214	15.7	169	15.4	23	1.7	302	4.9	422	24.1	10	2.6	1,288	37.9	5,369	11.6
10月	345	2.4	8	0.7	5	0.4	3	0.0	1	0.1	10	2.6	318	9.4	1,636	3.5
11月	394	2.8	21	1.9	0	0.0	0	0.0	145	8.3	18	4.7	210	6.2	657	1.4
12月	109	0.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	55	3.1	1	0.3	53	1.6	452	1.0
雨季	994	7.0	30	2.7	23	1.7	30	0.5	221	12.6	29	7.7	661	19.5	2,964	6.4
乾季	13,117	93.0	1,068	97.3	1,301	98.3	6,133	99.5	1,531	87.4	350	92.3	2,734	80.5	43,140	93.6
合計	14,111	100	1,098	100	1,324	100	6,163	100	1,752	100	379	100	3,395	100	46,104	100

出所 : Bagchus 1929:252~255 より計算

表 5-9 トゥバン県各郡の月別煙草収穫面積(1920~25 年平均、バウ)

	トゥバン県		Rembes		Djenoe		Rengel		Djatirogo		Bantjar		Singgahan		レンバン 理事州	
	面積	割合	面積	割合	面積	割合	面積	割合	面積	割合	面積	割合	面積	割合	面積	割合
1月	1,520	11.2	126	11.6	14	1.1	162	2.8	208	12.5	27	7.2	983	29.6	4,550	10.4
2月	154	1.1	3	0.3	5	0.4	0	0.0	21	1.3	1	0.3	124	3.7	530	1.2
3月	26	0.2	5	0.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	21	0.6	309	0.7
4月	1	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.1	0	0.0	0	0.0	254	0.6
5月	1	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.0	25	0.1
6月	19	0.1	2	0.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	17	4.5	0	0.0	49	0.1
7月	365	2.7	17	1.6	163	12.5	159	2.7	0	0.0	23	6.1	3	0.1	461	1.1
8月	1,125	8.3	13	1.2	509	39.0	509	8.7	31	1.9	60	16.0	3	0.1	1,466	3.4
9月	1,751	12.9	44	4.1	369	28.3	1,111	18.9	47	2.8	85	22.7	95	2.9	3,340	7.7
10月	2,888	21.2	145	13.4	66	5.1	1,860	31.7	434	26.1	86	22.9	297	8.9	7,481	17.1
11月	3,389	24.9	456	42.1	127	9.7	1,329	22.7	450	27.1	55	14.7	972	29.2	14,833	34.0
12月	2,377	17.5	272	25.1	53	4.1	734	12.5	471	28.3	21	5.6	826	24.8	10,356	23.7
雨季	10,354	76.0	1,007	93.0	265	20.3	4,085	69.7	1,584	95.2	190	50.7	3,223	96.9	38,059	87.2
乾季	3,262	24.0	76	7.0	1,041	79.7	1,779	30.3	79	4.8	185	49.3	102	3.1	5,595	12.8
合計	13,616	100	1,083	100	1,306	100	5,864	100	1,663	100	375	100	3,325	100	43,654	100

出所 : Bagchus 1929:252~255 より計算

表 5-10 トゥバン県耕地状況

郡/県	1925 年末現在耕地面積(バウ)				
	水田	畑地	乾地	全耕地	
Rembes (Toeban?)	15,528	53.6	13,466	46.4	28,994
Djenoe	7,405	31.4	16,202	68.6	23,607
Rengel	19,699	52.8	17,617	47.2	37,316
Djatirogo	10,280	54.5	8,577	45.5	18,857
Bantjar	11,187	39.0	17,486	61.0	28,673
Singgahan	18,459	62.6	11,029	37.4	29,488
トゥバン県	82,558	49.5	84,377	50.5	166,935
ボジョネゴロ県	102,695	61.2	64,983	38.8	167,678
レンバン県	47,208	45.8	55,931	54.2	103,139
ブアラ県	75,804	56.3	58,909	43.7	134,713
レンバン理事州	308,265	53.8	264,200	46.2	572,465

出所 : Bagchus 1929:105

表 6-1 レンバン理事州煙草収穫面積(バウ)

年平均	水田作						畑作						合計		
	流水灌漑田		天水田		水田作計		常畑		非常畑		畑作計				
1874~79年	表作	0	0.0	12	0.1	12	0.1	2,130	16.5	6	0.0	2,136	16.6	2,148	16.7
	裏作	1,084	8.4	8,473	65.7	9,557	74.1	1,192	9.2	3	0.0	1,195	9.3	10,752	83.4
	合計	1,084	8.4	8,485	65.8	9,569	74.2	3,322	25.8	9	0.1	3,331	25.8	12,899	100
1880~84年	表作	0	0.0	18	0.1	18	0.1	3,371	23.1	110	0.8	3,481	23.9	3,498	24.0
	裏作	918	6.3	7,457	51.1	8,375	57.4	2,524	17.3	193	1.3	2,717	18.6	11,092	76.0
	合計	918	6.3	7,474	51.2	8,392	57.5	5,895	40.4	303	2.1	6,198	42.5	14,590	100
1885~89年	表作	0	0.0	21	0.1	21	0.1	2,097	11.1	1,568	8.3	3,665	19.4	3,685	19.5
	裏作	1,343	7.1	9,362	49.5	10,705	56.6	4,538	24.0	0	0.0	4,538	24.0	15,243	80.5
	合計	1,343	7.1	9,383	49.6	10,726	56.7	6,634	35.0	1,568	8.3	8,202	43.3	18,928	100
1890~94年	表作	0	0.0	45	0.2	45	0.2	3,518	15.3	0	0.0	3,518	15.3	3,563	15.5
	裏作	802	3.5	13,072	56.7	13,874	60.2	5,622	24.4	0	0.0	5,622	24.4	19,496	84.5
	合計	802	3.5	13,117	56.9	13,919	60.4	9,140	39.6	0	0.0	9,140	39.6	23,059	100
1895~99年	表作	0	0.0	1	0.0	1	0.0	1,118	5.0	0	0.0	1,118	5.0	1,119	5.0
	裏作	1,999	8.9	12,167	54.1	14,166	63.0	7,210	32.1	0	0.0	7,210	32.1	21,377	95.0
	合計	1,999	8.9	12,168	54.1	14,167	63.0	8,328	37.0	0	0.0	8,328	37.0	22,495	100
1900~04年	表作	0	0.0	510	2.2	510	2.2	954	4.0	0	0.0	954	4.0	1,464	6.2
	裏作	2,292	9.7	14,441	60.9	16,733	70.6	5,500	23.2	0	0.0	5,500	23.2	22,233	93.8
	合計	2,292	9.7	14,951	63.1	17,243	72.8	6,454	27.2	0	0.0	6,454	27.2	23,698	100
1905~09年	表作	0	0.0	101	0.4	101	0.4	634	2.4	0	0.0	634	2.4	734	2.7
	裏作	1,922	7.2	17,557	65.8	19,479	73.0	6,487	24.3	0	0.0	6,487	24.3	25,966	97.3
	合計	1,922	7.2	17,658	66.1	19,580	73.3	7,121	26.7	0	0.0	7,121	26.7	26,700	100
1910~15年	表作	0	0.0	43	0.1	43	0.1	550	1.9	0	0.0	550	1.9	593	2.0
	裏作	2,701	9.2	18,024	61.2	20,725	70.3	8,120	27.6	30	0.1	8,150	27.7	28,875	98.0
	合計	2,701	9.2	18,067	61.3	20,768	70.5	8,670	29.4	30	0.1	8,700	29.5	29,467	100
1916~19年	合計													34,711	
1920~24年	合計													43,345	
1925~27年	合計													46,088	
1930~34年	合計													44,592	
1935~40年	合計													37,672	

表註：表作(雨季作)は 1ste gewas、裏作(乾季作)は 2de gewas の訳。各欄右の数字は各時期の水田作と畑作の合計(太字で表示)に対する比率を示す。1930~34年、1935~40年はボジョネゴロ理事州の数値。
出所：1915年まではK.V.各年記事、1916~27年はBagchus[1929:43]、1930年以降はI.V.各年記事より作成。

表 6-2 ジャワ・マドゥラ主要産地における煙草収穫面積(バウ)の推移

時期	レンバン		ケドゥー		ブスキ		ジャワ・マドゥラ(王侯領除く)	
	収穫面積	前期比	収穫面積	前期比	収穫面積	前期比	収穫面積	前期比
1874~79年平均	12,899	100	11,787	100	10,951	100	65,534	100
1880~84年平均	14,590	113	15,336	130	16,004	146	87,899	134
1885~89年平均	18,928	130	18,320	119	22,996	144	114,442	130
1890~94年平均	23,059	122	22,783	124	25,790	112	125,582	110
1895~99年平均	22,495	98	23,643	104	27,196	105	135,799	108
1900~04年平均	23,698	105	24,330	103	39,634	146	165,804	122
1905~09年平均	26,700	113	30,656	126	51,111	129	192,027	116
1910~14年平均	28,233	106	44,324	145	64,282	126	235,160	122
1910~15年平均	29,467	110	44,025	144	65,896	129	236,261	123
1915~19年平均	34,711	118	34,455	78	24,157	37	171,639	73
1916~20年平均	26,004	88	32,509	74	11,270	17	141,260	60
1920~24年平均	43,345	167	30,952	95	18,738	78	176,604	103
1925~27年平均	46,088	106	35,096	113	27,871	149	209,370	119
1921~27年平均	46,293	178	32,973	101	23,961	213	186,792	132
1930~35年平均	40,407	87	37,886	115	31,717	132	200,347	107
1936~40年平均	37,658	93	41,825	110	19,949	63	192,424	96

表註：レンバンの1930~35年平均、1936~40年平均はボジョネゴロ理事州データ。
出所：1874~1915年と1928~29年はK.V.各年データ、1916~27年はBagchus 1929:43、1930年以降はI.V.各年データを用いて計算した。

表 6-3 レンバン理事州における各年煙草収穫面積

年	バウ	年	バウ	年	バウ	年	バウ	内ヴァージニア種
1874年	9,757	1892年	29,594	1910年	21,331	1928年	n.a.	20
1875年	13,140	1893年	29,819	1911年	27,707	1929年	n.a.	197
1876年	19,757	1894年	25,847	1912年	33,064	1930年	58,665	282(0.5)
1877年	10,505	1895年	9,853	1913年	29,570	1931年	50,451	n.a.
1878年	17,876	1896年	35,294	1914年	29,495	1932年	40,145	246(0.6)
1879年	6,361	1897年	23,006	1915年	35,637	1933年	26,661	n.a.
1880年	11,764	1898年	20,089	1916年	41,894	1934年	47,039	1,268(2.7)
1881年	16,501	1899年	24,235	1917年	19,828	1935年	37,741	1,831(4.9)
1882年	8,969	1900年	14,694	1918年	37,367	1936年	33,724	3,521(10.4)
1883年	15,484	1901年	11,356	1919年	39,756	1937年	42,677	5,493(12.9)
1884年	20,232	1902年	34,987	1920年	30,938	1938年	31,789	9,577(30.1)
1885年	13,158	1903年	35,894	1921年	33,365	1939年	28,356	n.a.
1886年	18,618	1904年	21,557	1922年	29,609	1940年	51,745	26,197(50.6)
1887年	15,357	1905年	32,881	1923年	45,886			
1888年	32,524	1906年	32,099	1924年	76,929			
1889年	14,983	1907年	26,665	1925年	45,203			
1890年	10,881	1908年	23,903	1926年	51,654			
1891年	19,154	1909年	17,954	1927年	41,406			

表註：1930~40年はボジョネゴロ理事州の数値

出所：1915年までと1925~27年はK.V.各年記事、1920~24年はBagchus[1929:43]、1930年以降はI.V.各年記事より作成。ヴァージニア煙草面積はGerlings[1937:459~460]、栗林[1914:106]、Penders[1984:92~93]、Ploeg[1940:626]も参照した。

表 6-4 レンバンにおける煙草の強制裁培制度

年	栽培面積 バウ	参加家族数		年	栽培面積 バウ	参加家族数	
		総数	バウ 当たり			総数	バウ 当たり
1834	10(200)			1850	1,265(1,774)	14,001	11.1
1835	10(100)			1851	1,379(1,856)	8,885	6.4
1836	101(244)			1852	n.a.(2,086)	13,301	
1837	259(654)	3,352	12.9	1853	n.a.(2,180)	12,014	
1838	361(714)	3,679	10.2	1854	1,254(1,783)	10,726	8.6
1839	745(1,091)	6,194	8.3	1855	1,155(1,660)	9,563	8.3
1840	797(1,154)	6,846	8.6	1856	1,255(1,784)	10,739	8.6
1841	845(1,237)	6,082	7.2	1857	1,124(1,663)	9,820	8.7
1842	1,072(1,474)	6,822	6.4	1858	1,255(1,793)	9,724	7.7
1843	1,406(1,624)	8,530	6.1	1859	1,255(1,794)	9,709	7.7
1844	1,976(2,749)	12,060	6.1	1860	1,255(1,783)	11,030	8.8
1845	2,218(3,737)	14,263	6.4	1861	1,175(1,519)	9,563	8.1
1846	2,008(4,170)	13,228	6.6	1862	1,063(1,437)	8,738	8.2
1847	2,151(4,027)	14,238	6.6	1863	924(1,199)	7,741	8.4
1848	570(1,421)	6,647	11.7	1864	563(609)	4,590	8.2
1849	880(1,360)	10,417	11.8	1865	100(129)	800	8.0

表註：栽培面積欄の()は、ジャワ・マドゥラ全体の面積

出所：1834年はDeventer 1866:739、1852,53年の()内数字はC.E.I., vol.1:table 13、他はC.E.I.,vol.14:table A17, table B9

表 6-5 レンバンにおけるヨーロッパ市場向け煙草の自由栽培

年	強制栽培参加企業		自由企業		合計		栽培面積 バウ	出所
	軒数	生産量 (ピコル)	軒数	生産量 (ピコル)	軒数	生産量 (ピコル)		
1852			3				100	K.V.1852:110
1853								
1854			3					K.V.1854:135
1855		2,542	4	885	13	3,427		K.V.1856:110 ; 1857:129;
1856		4,988	4	1,517	13	6,505		Soest 1860:64; Bekking
1857		11,259	4	3,944	13	15,203	1,057	1861 :60~62
1858		n.a.	11		20			Fasseur 1975:137
1859			7		16	19,786		K.V.1861:bijl.AA
1860	9	6,448 ¹⁾	10	6,994	16	13,442		K.V.1861:153
1861	5	4,109	13	5,177	18	9,286		
1862					23	32,928		K.V.1862:181
1863					23	6,622 ²⁾	5,289	K.V.1863:175; 1864:160,
1864					23	30,937	6,185	bijl. X; Tabak 1925:135
1865					23	25,829	3,952	K.V.1865:183, bijl.Z
1866	強制栽培終了		23	33,500	23	33,500	4,705	K.V.1866:156,bijl.CC ;
1867			27	23,888	27	23,888	4,775	K.V.1869:115
1868			24	17,202	24	17,202	3,552	K.V.1869:115
1869			13	23,890	13	23,890	4,301	K.V.1870:113~114
1870			13	4,600	13	4,600	2,726	K.V.1871:160
1871			10	12,360	10	12,360	1,976	K.V.1872:149
1872			13	23,086 ³⁾	13	23,086 ³⁾		K.V.1873:203~204
1873				31,048		31,048		K.V.1874:183
1874								
1875			13	15,287 ⁴⁾	13	15,287 ⁴⁾		K.V.1876:bijl.TT
1876			10	22,736	10	22,736		K.V.1878:bijl.VV
1877			10	23,396	10	23,396		K.V.1879:bijl.XX
1878			7	11,598	7	11,598		
1879			5	1,024	5	1,024		K.V.1880:bijl.YY
1880			5	5,344	5	5,344		K.V.1881:bijl.YY
1881			6	6,852	6	6,852		K.V.1882:bijl.DDD
1882			4	1,967	4	1,967		K.V.1883:bijl.HHH
1883			0	0	0	0		K.V.1884:bijl.CCC

表註：「強制栽培参加企業」軒数は、それと並行して「自由栽培」をも実施している企業数を示す。レンバン理事州の強制栽培 参加企業は合計 9 軒。

- 1) 6 企業データ、2) 21 企業データ、3) K.V.1874:183 では 36,710 ピコル、4) 11 企業データ。

表 6-6 1861~63 年レンバン理事州各県自由栽培煙草栽培・収穫面積

	1861 年面積			1862 年面積			1863 年面積		
	栽培	収穫	凶作率	栽培	収穫	凶作率	栽培	収穫	凶作率
レンバン	443	228	48.5	397	213	46.3	750	105	86.0
トゥバン	1,119	n.a.	-	1,394	1,265	9.3	2,140	817	61.8
ボジョネゴロ	1,346	n.a.	-	2,225	1,716	22.9	1,681	669	60.2
プロラ	257	67	73.9	462	298	35.5	718	121	83.1
レンバン理事州	3,165	-	-	4,478	3,492	22.0	5,289	1,712	67.6

表註：原史料の小数点以下の数値は四捨五入した。

出所：K.V.1861, bijl.AA ; 1862, bijl.Z ; 1863, bijl.Y

表 6-7 レンバン理事州各郡・県煙草栽培面積と対耕地比

郡・県	福祉減退調査 1903 年				1916~20 年平均				1920~25 年平均			
	収穫面積			耕地 比	収穫面積			耕地 比	収穫面積			耕地 比
	乾季作	雨季作	合計		バウ	耕地 比	バウ		耕地 比	バウ	耕地 比	
Rembes	2,983	100	3,083	7.9	20.5	779	3.0	2.6	1,132	2.5	3.9	
Djenoe	678	142	820	2.1	7.6	907	3.5	4.2	1,324	2.9	5.6	
Rengel	2,875	200	3,075	7.9	17.7	2,488	9.6	6.6	6,147	13.5	16.5	
Djatirogo	1,127	0	1,127	2.9	10.8	1,011	3.9	5.4	1,759	3.9	9.3	
Bantjar	271	0	271	0.7	1.7	444	1.7	1.5	375	0.8	1.3	
Singahan	2,361	0	2,361	6.0	16.9	1,983	7.6	6.7	3,325	7.3	11.3	
トゥバン県	10,295	442	10,737	27.5	12.9	7,612	29.3	4.6	14,062	30.8	8.4	
Bodjonegoro	2,032	0	2,032	5.2	10.2	3,252	12.5	8.7	6,058	13.3	16.3	
Baoereno	823.5	300	1,123.5	2.9	6.8	2,419	9.3	8.5	5,040	11.0	17.7	
Pelem	8,005	0	8,005	20.5	38.5	3,041	11.7	10.4	5,927	13.0	20.3	
Padangan	1,874	30	1,904	4.9	26.1	1,065	4.1	6.8	1,198	2.6	7.7	
Tambakredjo	2,564	144	2,708	6.9	37.1	1,522	5.9	6.9	1,996	4.4	9.1	
Ngoempak	4,412	201	4,613	11.8	27.3	3,576	13.8	10.2	5,322	11.7	15.1	
ボジョネゴロ県	19,710.5	675	20,385.5	52.2	23.0	14,875	57.2	8.9	25,541	56.0	15.2	
レンバン県	975.5	32	1,007.5	2.6	2.5	478	1.8	0.5	739	1.6	0.7	
ブアラ県	3,813	92	3,905	10.0	6.9	3,039	11.7	2.2	5,284	11.6	3.9	
レンバン理事州	37,794	1,241	39,035	100	14.0	26,004	100	4.6	45,626	100	8.0	

表註：耕地面積は1903年についてはM.W.L. Rembang: Bijl.1より算出、1916~20年平均、1920~25年平均は1920年数値をもとにした。なお、ジャワ・マドウラの数値のうち、1903年は王侯領での栽培面積を含んでいない。

出所：M.W.L. Rembang: bijl.2, Landbouwatlas 1926: Staat I, III, Bagchus 1929:105*

表 6-8a ボジョネゴロ県各郡の月別煙草作付面積(1920~25年平均、バウ)

	ボジョネ ゴロ県		Bodjo- negoro		Baoereno		Pelem		Padangan		Tambak- redjo		Ngoempak		レンバン 理事州	
1月	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	55	0.1
2月	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	25	0.1
3月	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	139	0.3
4月	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	11	0.5	0	0.0	961	2.1
5月	287	1.1	12	0.2	43	0.3	71	1.2	13	1.1	48	2.4	130	2.4	2,228	4.8
6月	4,397	17.0	1,156	19.0	521	10.4	939	15.5	233	19.2	457	22.6	1,091	20.1	8,393	18.2
7月	9,537	36.9	2,272	37.3	1,807	36.0	2,649	43.8	386	31.8	702	34.7	1,721	31.7	14,508	31.5
8月	7,288	28.2	1,622	26.6	1,236	24.7	1,903	31.4	409	33.7	463	22.9	1,655	30.5	11,681	25.3
9月	2,706	10.5	379	6.2	991	19.8	417	6.9	173	14.3	109	5.4	637	11.7	5,369	11.6
10月	1,160	4.5	652	10.7	88	1.8	24	0.4	0	0.0	198	9.8	198	3.6	1,636	3.5
11月	203	0.8	0	0.0	153	3.1	50	0.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	657	1.4
12月	239	0.9	0	0.0	205	4.1	0	0.0	0	0.0	34	1.7	0	0.0	452	1.0
雨季	1,602	6.2	652	10.7	446	8.9	74	1.2	0	0.0	232	11.5	198	3.6	2,964	6.4
乾季	24,215	93.8	5,441	89.3	4,568	91.1	5,979	98.8	1,214	100	1,790	88.5	5,234	96.4	43,140	93.6
合計	25,817	100	6,093	100	5,014	100	6,053	100	1,214	100	2,022	100	5,432	100	46,104	100

出所：Bagchus 1929:252*~255*より計算

表 6-8b ボジョネゴロ県各郡の月別煙草収穫面積(1920~25年平均、バウ)

	ボジョネ ゴロ県		Bodjo- negoro		Baoereno		Pelem		Padangan		Tambak- redjo		Ngoempak		レンバン 理事州	
1月	2,741	11.2	853	14.1	819	18.1	298	5.5	98	8.5	313	16.4	360	6.8	4,550	10.4
2月	272	1.1	95	1.6	47	1.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	130	2.4	530	1.2
3月	229	0.9	216	3.6	13	0.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	309	0.7
4月	221	0.9	221	3.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	254	0.6
5月	1	0.0	1	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	25	0.1
6月	1	0.0	0	0.0	1	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	49	0.1
7月	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	461	1.1
8月	59	0.2	4	0.1	6	0.1	0	0.0	1	0.1	0	0.0	48	0.9	1,466	3.4
9月	1,111	4.6	457	7.6	156	3.4	247	4.5	59	5.1	45	2.4	147	2.8	3,340	7.7
10月	3,333	13.7	817	13.5	449	9.9	870	16.0	210	18.2	436	22.9	551	10.4	7,481	17.1
11月	9,299	38.1	2,345	38.8	1,600	35.4	1,618	29.7	414	35.8	695	36.4	2,627	49.4	14,833	34.0
12月	7,137	29.2	1,041	17.2	1,432	31.7	2,413	44.3	373	32.3	419	22.0	1,459	27.4	10,356	23.7
雨季	23,011	94.3	5,367	88.7	4,360	96.4	5,199	95.5	1,095	94.8	1,863	97.6	5,127	96.3	38,059	87.2
乾季	1,393	5.7	683	11.3	163	3.6	247	4.5	60	5.2	45	2.4	195	3.7	5,595	12.8
合計	24,404	100	6,050	100	4,523	100	5,446	100	1,155	100	1,908	100	5,322	100	43,654	100

出所：Bagchus 1929:252*~255*より計算

表 6-9 1889-1901 年トゥバン県、ボジョネゴロ県住民煙草栽培面積(バウ)

	1899 年			1900 年			1901 年		
	水田	畑地	合計	水田	畑地	合計	水田	畑地	合計
トゥバン県	5,378	3,861	9,239	2,425	2,916	5,341	1,881	2,486	4,367
指数	100	100	100	45	76	58	35	64	47
ボジョネゴロ県	10,375	3,215	13,590	6,012	3,640	9,652	7,262	1,887	9,149
指数	100	100	100	58	113	71	70	59	67
計	15,753	7,076	22,829	8,437	6,556	14,993	9,143	4,373	13,516
指数	100	100	100	54	93	66	58	62	59

出所: Walbeehm 1902: 1060

表 6-10 レンバン理事州内におけるケルフとクロソックの地域的偏差

ケルフの多い地域	クロソックの多い地域	出所
トゥバン県東南部 Rengel 郡の Rengel、Prambonwetan	トゥバン県東部 Djenoë 郡、Rembes 郡	Beteekenis 1915:331
トゥバン県 Rengel 郡(特に Prambon 副郡)、Djenoë 郡、Bangilan 郡(Djatirogo?)、Senori 郡(Singgahan 副郡)、ボジョネゴロ県 Bodjonegoro 郡、Malo 郡(Ngoempak 郡?)	ボジョネゴロ県 Baereno 郡、Soember-redjo 郡(Pelem?)、Kapas 郡(Bodjonegoro?)、Tambakredjo 郡、Pandangan 郡、ブロラ県 Djepon 郡、Randoeblaton 郡	Tabak 1925:138

表註: イタリック表示の郡は Bagchus [1929]、Landbouwatlas [1926]、Volkstelling 1930 の何れにも郡としての表示がない。1920 年頃に同名の副郡が再編によって郡に昇格し、1930 年までには再び再編によって副郡となった可能性もあるが、詳細は不明である。

表 6-11 レンバン・クロソックのオランダ市場出荷量と 1/2kg 当たり価格

収穫時期	出荷量(梱)	価格(セント)	ジャワ・マドゥラ比(%)	収穫時期	出荷量(梱)	価格(セント)	ジャワ・マドゥラ比(%)
1910 年	14,898	13.5		1926 年	89,825	16.25	
1911 年	24,540	13.75	6.6	1927 年	75,877	17	
1912 年	51,404	11.75	13.6	1928 年	84,285	15	
1913 年	52,288	10	19.0	1929 年	48,300	14	
1914 年	31,871	15.5	15.5	1930 年	98,200	15	
1915 年	142,200	31	28.6	1931 年	92,000	7.5	
				1932 年	28,000	8	
1920 年	37,085	19		1933 年	33,000	9	
1921 年	26,155	18		1934 年	42,000	7	23.5
1922 年	29,191	21.5		1935 年	26,000	7	17.4
1923 年	83,274	30.75		1936 年	46,000	10	24.9
1924 年	138,839	23		1937 年	41,000	8	21.5
1925 年	60,575	17		1938 年	27,500	11	27.7

表註: 「ジャワ・マドゥラ比」はレンバン煙草がジャワ・マドゥラ産クロソックのオランダ市場出荷量に占めた比率。1934~38 年生産は Kediri/Rembang 合計。

出所: V.H.N.L.1913:96; 1914:129; 1915:102; 1924:108; 1925:103; 1927:145; 1928:130; 1930:222; Tabak 1925:137, 238~239; Broek 1938:550 ~553, 556 より作成。

表 6-12 レンバン産原料煙草の移出先一覧

時期	移出先	出所
1856 年	スムヌップ、バンカラシ、バウエアン	K.V.1856:110~111
1863 年	地元シガー工場	K.V.1863:177
1869 年	スラバヤ、東端地方	K.V.1870:173
1872 年	スラバヤ、グリッセ	K.V.1873:277
1890 年	シンガポール(スラバヤ経由)、バンジャルマシン、ポンティアナック、マドゥラ、ジャバラ	K.V.1891:204; K.V.1891:bijl.PPP; K.V.1892:bijl.C
1891 年	一部はマドゥラへ	K.V.1891:204
1892 年	バンジャルマシン(大半)、カエリ(Kajeli:ブル島)、周辺諸理事州	K.V.1893:bijl.SSS
1893 年	周辺諸理事州、バンジャルマシン、カエリ	K.V.1894:bijl.SSS
19 世紀末~20 世紀初	トゥバン産は大半が外領(バンジャルマシン)向け	Walbeehm 1902:1067
1903 年頃	東インド全域、バンジャルマシン、シンガポール、マドゥラ、スラバヤ、マラン、スラカルタ、周辺理事州、ボルネオ	M.W.L.Rembang:213; 215; M.W.H. Rembang:394
1904 年	スラバヤ	K.V.1905:232~233
1905 年	スラバヤ、バンジャルマシン	K.V.1906:226
1910 年	周辺理事州、バンジャルマシン	K.V.1911:204~206
1920 年代前半	スラバヤ、クドゥス、ケドゥー、スマラン、ジョクジャ、ソロ、トゥバン	Vleming 1925:202,220; Tabak 1925:83~84,150~151, 197
1920 年代後半	クドゥス(減少)、バンジャルマシン、バリクパパン、ソロ、スマラン	Mangoenkoesoemo 1929:30~31; MvO Bodjonegoro-Toeban 1930:11
1934 年	B.A.T.、Faroka シガレット工場(ジャワ・クロソック買い上げ)	L.V.4e kwrt.1934:334
1930 年代半ば	クドゥス・クレテックから撤退	Soenario 1935:16

表 6-13 クドゥス向け輸送量(トン)

発駅	1919年		1920年		1921年		1922年		1923年		1924年		1925年		1926年		1927年		1928年	
Magelang*	154.45	5.4	217.04	6.0	163.15	4.6	121.20	5.1	182.20	6.1	131.85	3.8	219.40	6.0	190.70	4.4	433.95	7.0	176.35	5.1
Kranggan*	127.95	4.5	266.75	7.4	199.25	5.7	188.75	7.9	286.95	9.6	229.95	6.6	247.50	6.8	293.15	6.7	341.45	5.5	240.90	6.9
Temanggoeng*	1,376.20	47.9	2,095.30	58.0	2,085.30	59.3	1,106.70	46.6	1,362.30	45.8	1,903.75	54.3	1,663.90	45.5	1,842.15	42.3	2,622.60	42.4	1,004.10	28.9
Moentilan*	108.50	3.8	32.80	0.9	96.65	2.7	118.30	5.0	314.60	10.6	348.20	9.9	524.20	14.3	634.75	14.6	1,039.60	16.8	642.65	18.5
Parakan*	8.60	0.3	16.45	0.5	13.00	0.4	7.25	0.3	3.55	0.1	7.35	0.2	15.55	0.4	38.90	0.9	193.75	3.1	269.85	7.8
Blabak*	0.70	0.0	5.50	0.2	3.90	0.1	4.25	0.2	8.30	0.3	8.50	0.2	40.25	1.1	21.15	0.5	22.35	0.4	8.00	0.2
ケドゥ煙草計	1,776.40	61.8	2,633.84	72.9	2,561.25	72.9	1,546.45	65.1	2,157.90	72.5	2,629.60	75.0	2,710.80	74.2	3,020.80	69.4	4,653.70	75.3	2,341.85	67.3
Padangan*	60.95	2.1	101.05	2.8	88.65	2.5	77.55	3.3	49.00	1.6	56.95	1.6	58.05	1.6	83.35	1.9	198.00	3.2	129.05	3.7
Kalitidoe*	45.90	1.6	75.90	2.1	49.40	1.4	45.30	1.9	76.70	2.6	60.00	1.7	141.75	3.9	109.55	2.5	84.70	1.4	22.10	0.6
Kapas*	22.00	0.8	135.95	3.8	129.20	3.7	99.35	4.2	43.10	1.4	9.65	0.3	237.40	6.5	308.60	7.1	183.50	3.0	259.45	7.5
Soemberredjo*	2.10	0.1	-	0.0	0.70	0.0	29.00	1.2	18.65	0.6	30.25	0.9	4.85	0.1	133.60	3.1	35.45	0.6	94.55	2.7
Bodjonegoro*	28.05	1.0	44.90	1.2	42.05	1.2	43.65	1.8	21.50	0.7	4.30	0.1	13.50	0.4	74.75	1.7	128.65	2.1	60.00	1.7
Bangilan*	140.20	4.9	132.00	3.7	237.40	6.8	314.70	13.2	383.10	12.9	425.80	12.1	177.45	4.9	332.40	7.6	272.05	4.4	76.70	2.2
Ngabean*	-	0.0	-	0.0	-	0.0	-	0.0	-	0.0	-	0.0	5.50	0.2	23.75	0.5	137.40	2.2	95.40	2.7
Lasem**	188.05	6.5	109.15	3.0	91.90	2.6	89.90	3.8	90.35	3.0	63.10	1.8	44.35	1.2	38.75	0.9	108.60	1.8	35.95	1.0
Djatirogo**	7.05	0.2	22.50	0.6	14.05	0.4	30.75	1.3	30.85	1.0	23.80	0.7	10.25	0.3	52.25	1.2	55.35	0.9	4.50	0.1
Tjepoe**	26.75	0.9	104.60	2.9	67.05	1.9	8.60	0.4	7.15	0.2	9.15	0.3	21.20	0.6	22.25	0.5	59.80	1.0	35.75	1.0
レンバン煙草計	521.05	18.1	726.05	20.1	720.40	20.5	738.80	31.1	720.40	24.2	683.00	18.2	714.30	19.5	1,179.25	27.1	1,263.50	20.4	813.45	23.4
その他の煙草計	575.45	20.0	252.51	7.0	233.25	6.6	90.85	3.8	98.30	3.3	194.25	5.5	229.25	6.3	155.20	3.6	266.96	4.3	323.65	9.3
合計	2,872.90	100	3,612.40	100	3,514.90	100	2,376.10	100	2,976.60	100	3,506.85	100	3,654.35	100	4,355.25	100	6,184.16	100	3,478.95	100

表註：レンバン煙草とは、発駅がレンバン理事州内(1927年の行政区分による)にあるものを合計した。元表にある「その他のN.I.S.駅」、「その他のS.J.S.駅」(これらは本表では「その他の煙草計」に含めた)にはレンバン理事州内駅が含まれる可能性も否定できないが、数値は少ないのでおおよその傾向を見るには支障はないと思われる。

* はN.I.S.線、**はS.J.S.線の駅であることを示す。TjepoeはN.I.S.線の駅でもあるが、元表の分類に従ってS.J.S.線に含めた。

出所：Mangoenkoesoemo 1929:31

表 7-1 北海岸における S.C.S. とプラウの煙草輸送

		スマランから				プカロンガンから				テガルから				チェリボンから				合計	S.C.S. 煙草総輸送量(トン)
		プカロンガン	テガル	チェリボン	小計	スマラン	テガル	チェリボン	小計	スマラン	プカロンガン	チェリボン	小計	スマラン	プカロンガン	テガル	小計		
1901-04 年平均	軌道	1,363	9,873	27,825	39,061	5,673	3,993	120,778	130,444	2,237	100	28,263	30,600	850	898	2,274	4,022	204,126	2,293
	プラウ	2,100	4,519	42,088	48,707	0	738	22,138	22,876	0	0	998	998	400	0	194	594	73,174	8.9%
	合計	3,463	14,393	69,913	87,769	5,673	4,730	142,916	153,319	2,237	100	29,260	31,597	1,250	898	2,468	4,616	277,300	
1905-09 年平均	軌道	196,068	4,210	369,200	569,478	3,990	10,020	165,244	179,254	110	370	1,060	1,540	2,160	810	5,490	8,460	791,940	3,013
	プラウ	210	310	23,016	23,536	26	0	59,582	59,608	0	0	284	284	184	0	224	408	83,836	26.3%
	合計	196,278	4,520	392,216	593,014	4,016	10,020	224,826	238,862	110	370	1,344	1,824	2,344	810	5,714	8,868	875,776	
1910-14 年平均	軌道	436,710	8,320	614,120	1,059,150	13,430	43,040	320,810	377,280	190	1,500	1,630	3,320	3,780	14,800	7,970	26,550	1,480,310	4,006
	プラウ	10	962	50	1,022	12	0	67,130	67,142	0	0	20,854	20,854	138	0	642	780	89,798	37.0%
	合計	436,720	9,282	614,170	1,060,172	13,442	43,040	387,940	444,422	18,124	1,500	22,484	42,108	3,918	14,800	8,612	27,330	1,570,108	
1915-19 年平均	軌道	158,470	51,350	315,320	525,140	1,690	96,610	638,580	736,880	15,410	20,510	2,100	38,020	37,530	78,690	7,390	123,610	1,423,650	5,234
	プラウ	0	166	30	196	1,980	0	87,504	89,484	0	0	994	994	15,168	1,170	12,726	29,064	113,722	27.2%
	合計	158,470	51,516	315,350	525,336	3,670	96,610	726,084	826,364	15,410	20,510	3,094	39,014	52,698	79,860	20,116	152,674	1,537,372	
1920-24 年平均	軌道	6,780	6,170	10,760	23,710	2,060	82,410	446,720	531,190	880	810	660	2,350	11,480	5,010	6,090	22,580	579,840	6,375
	プラウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9.1%
	合計	6,780	6,170	10,760	23,710	2,060	82,410	446,720	531,190	880	810	660	2,350	11,480	5,010	6,090	22,580	579,840	
1925-30 年平均	軌道	13,400	14,875	31,433	59,708	992	52,683	308,650	362,325	450	900	433	1,783	3,467	925	4,025	8,417	432,242	4,956
	プラウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	93	7	100	100	8.7%
	合計	13,400	14,875	31,433	59,708	992	52,683	308,650	362,325	450	900	433	1,783	3,467	1,018	4,032	8,517	432,342	

出所：S.C.S.各月の Maandrapport から作成

表7-2 バンジャルヌガラ経由 SDS 輸送量

商品	1898年*	1899年	1900年	1901年	1902年
Batoer 煙草	-	-	-	-	-
Wonosobo 煙草	164	389	442	348	372

単位：トン

*は5月18日以降

出所：M.W.H. [Banjoemas:Bijlage 3]

表7-3 N.I.S.スマラン経由とウェレリ経由の煙草輸送量(トン)

	1906年	1907年	1908年	1909年	1910年
N.I.S.・スマラン経由	45	432	1,432	1,390	1,590
ウェレリ経由	2,220	1,805	1,213	ほぼ0	約267

出所：S.C.S. Jaarverslag 1907; 1908; 1909; 1910 より作成

表7-4 スマラン、プカロンガンからの煙草発送量の推移(kg) : 1905~24年

	スマランから				プカロンガンから				
	プカロンガン	テガル	チェリボン	合計	スマラン	テガル	チェリボン	合計	
1905年	軌道	2,900	1,600	12,400	16,900	750	2,750	172,070	175,570
	ブラウ	0	0	77,500	77,500	120	0	160,980	161,100
	合計	2,900	1,600	89,900	94,400	870	2,750	333,050	336,670
1906年	軌道	6,240	1,900	83,550	91,690	400	12,900	142,400	155,700
	ブラウ	200	60	14,960	15,220	0	0	46,790	46,790
	合計	6,440	1,960	98,510	106,910	400	12,900	189,190	202,490
1907年	軌道	74,450	5,500	304,450	384,400	550	5,350	179,300	185,200
	ブラウ	400	140	20,200	20,740	0	0	51,140	51,140
	合計	74,850	5,640	324,650	405,140	550	5,350	230,440	236,340
1908年	軌道	484,550	4,650	699,500	1,188,700	13,850	6,550	166,650	187,050
	ブラウ	300	1,350	830	2,480	10	0	20,200	20,210
	合計	484,850	6,000	700,330	1,191,180	13,860	6,550	186,850	207,260
1909年	軌道	412,200	7,400	746,100	1,165,700	4,400	22,550	165,800	192,750
	ブラウ	150	0	1,590	1,740	0	0	18,800	18,800
	合計	412,350	7,400	747,690	1,167,440	4,400	22,550	184,600	211,550
1910年	軌道	428,700	14,400	771,150	1,214,250	8,850	64,650	292,900	366,400
	ブラウ	0	4,600	0	4,600	0	0	7,870	7,870
	合計	428,700	19,000	771,150	1,218,850	8,850	64,650	300,770	374,270
1911年	軌道	177,700	7,650	828,550	1,013,900	9,300	29,700	229,650	268,650
	ブラウ	0	0	0	0	0	0	6,570	6,570
	合計	177,700	7,650	828,550	1,013,900	9,300	29,700	236,220	275,220
1912年	軌道	445,100	6,300	608,400	1,059,800	35,150	36,400	300,500	372,050
	ブラウ	0	0	0	0	0	0	8,530	8,530
	合計	445,100	6,300	608,400	1,059,800	35,150	36,400	309,030	380,580
1913年	軌道	607,000	6,350	506,850	1,120,200	250	40,850	341,600	382,700
	ブラウ	50	0	0	50	60	0	960	1,020
	合計	607,050	6,350	506,850	1,120,250	310	40,850	342,560	383,720
1914年	軌道	525,050	6,900	355,650	887,600	13,600	43,600	439,400	496,600
	ブラウ	0	210	250	460	0	0	311,720	311,720
	合計	525,050	7,110	355,900	888,060	13,600	43,600	751,120	808,320
1915年	軌道	291,050	10,200	563,150	864,400	1,300	99,050	448,500	548,850
	ブラウ	0	830	150	980	740	0	278,750	279,490
	合計	291,050	11,030	563,300	865,380	2,040	99,050	727,250	828,340
1916年	軌道	278,600	7,000	447,350	732,950	1,500	107,050	681,850	790,400
	ブラウ	0	0	0	0	0	0	0	0
	合計	278,600	7,000	447,350	732,950	1,500	107,050	681,850	790,400
1917年	軌道	92,250	9,350	323,800	425,400	1,050	113,850	1,050,15	219,915
	ブラウ	0	0	0	0	0	0	20,950	20,950
	合計	92,250	9,350	323,800	425,400	1,050	113,850	1,071,10	222,010
1918年	軌道	127,650	56,400	237,400	421,450	3,350	99,050	512,000	614,400
	ブラウ	0	0	0	0	0	0	116,800	116,800
	合計	127,650	56,400	237,400	421,450	3,350	99,050	628,800	731,200
1919年	軌道	2,800	173,800	4,900	181,500	1,250	64,050	500,400	565,700
	ブラウ	0	0	0	0	9160	0	21,020	30,180
	合計	2,800	173,800	4,900	181,500	10,410	64,050	521,420	595,880
1920年	軌道	3,400	3,000	4,100	10,500	5,850	75,950	546,900	628,700
	ブラウ	0	0	0	0	0	0	0	0
	合計	3,400	3,000	4,100	10,500	5,850	75,950	546,900	628,700
1921年	軌道	4,850	3,950	8,300	17,100	700	94,900	538,850	634,450
	ブラウ	0	0	0	0	0	0	0	0
	合計	4,850	3,950	8,300	17,100	700	94,900	538,850	634,450
1922年	軌道	8,600	13,200	22,750	44,550	1,050	74,200	416,950	492,200
	ブラウ	0	0	0	0	0	0	0	0
	合計	8,600	13,200	22,750	44,550	1,050	74,200	416,950	492,200
1923年	軌道	6,200	7,150	7,950	21,300	750	81,800	378,000	460,550
	ブラウ	0	0	0	0	0	0	0	0
	合計	6,200	7,150	7,950	21,300	750	81,800	378,000	460,550
1924年	軌道	10,850	3,550	10,700	25,100	1,950	85,200	352,900	440,050
	ブラウ	0	0	0	0	0	0	0	0
	合計	10,850	3,550	10,700	25,100	1,950	85,200	352,900	440,050

出所：各時期のS.C.S.のMaandrapportから作成

表7-5 S.D.S.煙草輸送量(トン)

年	合計	うちS.S.へ引継	年	合計	うちS.S.へ引継
1895			1920	6,560	4,979 (75.9%)
1896	90*		1921	4,928	
1897	306		1922	4,275	
1898	676		1923	4,629	
1899	1,000		1924	5,781	
平均	661		平均	5,235	
1900	1,013	846 (83.5%)	1925	5,373	
1901	685	572 (83.5%)	1926	5,515	
1902	955	769 (80.5%)	1927	6,858	
1903	1,234	826 (66.9%)	1928	6,444	
1904	1,336	958 (71.7%)	1929	6,131	
平均	1,045	794 (76.0%)	平均	6,064	
1905	1,368	932 (68.1%)	1930	5,730	
1906	2,103	1,807 (85.9%)	1931	5,133	
1907	2,370	1,812 (76.5%)	1932	4,727	
1908	2,864	2,435 (85.0%)	1933	3,931	
1909	2,112	1,837 (87.0%)	1934	3,263	
平均	2,163	1,765 (81.6%)	平均	4,557	
1910	2,529	2,114 (83.6%)	1935	3,161	
1911	3,860	3,330 (86.3%)	1936	3,671	
1912	5,532	5,023 (90.8%)	1937	3,838	
1913	5,182	4,450 (85.9%)	1938	4,277	
1914	3,971	3,319 (83.6%)	平均	3,737	
平均	4,215	3,647 (86.5%)			
1915	5,867	5,023 (85.6%)			
1916	8,096	6,904 (85.3%)			
1917	4,648	3,543 (76.2%)			
1918	3,387	2,796 (82.6%)			
1919	7,857	4,947 (63.0%)			
平均	5,971	4,643 (77.8%)			

* は下半期のみの数字

出所: S.D.S., Jaarverslagen van de chef der exploitatie...
各年所収の数字

表7-6 バニユマス、ケドゥー理事州煙草収穫面積

年	バニユ マス	ケドゥ ー	合計	年	バニユ マス	ケドゥ ー	合計
1910	20,429	40,672	61,101	1920	13,574	29,234	42,808
1911	19,945	47,987	67,932	1921	11,815	27,842	39,657
1912	16,804	53,832	70,636	1922	12,847	28,480	41,327
1913	16,209	38,386	54,595	1923	11,910	29,542	41,452
1914	16,595	40,742	57,337	1924	13,507	39,661	53,168
平均	17,996	44,324	62,320	平均	12,731	30,952	43,682
1915	15,289	42,532	57,821	1925	13,625	32,165	45,790
1916	14,648	45,870	60,518	1926	12,139	31,484	41,639
1917	11,825	27,964	39,789	1927	14,583	43,623	56,222
1918	13,945	28,673	42,618	1928			58,101
1919	12,630	27,236	39,866	1929			58,925
平均	13,667	34,455	48,122	平均			52,532

出所：1910~15年はK.V.各年数字、1916年以降はBagchus 1929:43

表7-8 N.I.S.・Djocja-Willem I線からのケルフ煙草他線向け輸送(トン)

年	S.C.S.へ		S.J.S.へ		S.S.へ(ジョ クジャ経由)		S.S.ソロ以东へ				合計
							ソロ経由	スラバヤ、バ バット経由			
1921	225	5.2	1,793	41.2	1,821	41.9	511	11.7	0	0.0	4,350
1922	228	5.9	1,423	36.9	1,856	48.1	354	9.2	0	0.0	3,861
1923	150	3.1	1,945	40.2	2,319	48.0	420	8.7	0	0.0	4,834
1924	125	2.2	2,700	48.2	2,247	40.1	527	9.4	0	0.0	5,599
1925	70	1.4	2,602	52.4	1,643	33.1	650	13.1	0	0.0	4,965
1926	21	0.4	2,818	50.8	1,928	34.7	781	14.1	4	0.1	5,552
1927	n.a.	-	n.a.	-	n.a.	-	n.a.	-	n.a.	-	n.a.
1928	11	0.1	4,222	56.7	1,868	25.1	1,334	17.9	6	0.1	7,441
1929	21	0.3	3,598	55.4	1,525	23.5	1,348	20.8	2	0.0	6,494
1930	6	0.1	2,175	37.7	1,884	32.7	1,692	29.3	9	0.2	5,766
1931	28	0.5	2,090	37.5	1,821	32.7	1,637	29.4	1	0.0	5,577

出所：Nederlandsch-Indische Spoorweg-Maatschappij, Statistieke Opgaven van den Dienst van Beweging en Handelszake, in Jaarverslag N.I.S.

表7-9 S.J.S.とS.C.S.の煙草輸送(トン)

年	S.J.S.	S.C.S.	年	S.J.S.	S.C.S.	年	S.J.S.	S.C.S.
1897年	1,002		1898年	1,141	9	1899年	1,117	902
1900年	942	1,383	1915年	4,930	4,449	1930年	6,588	3,664
1901年	1,465	1,825	1916年	5,875	5,146	1931年	5,664	2,355
1902年	2,053	2,751	1917年	5,011	5,223	1932年	3,214	851
1903年	2,056	2,642	1918年	4,615	4,092	1933年	1,803	898
1904年	2,130	2,864	1919年	7,329	7,262	1934年	1,996	1,015
5年平均	1,729	2,293	5年平均	5,552	5,234	5年平均	3,853	1,757
1905年	1,815	2,384	1920年	9,497	7,231	1935年	2,554	616
1906年	2,581	3,312	1921年	5,697	6,661	1936年	3,055	1,482
1907年	2,220	3,161	1922年	3,729	5,395	1937年	3,723	1,793
1908年	2,666	3,680	1923年	4,847	6,468	1938年	3,580	1,939
1909年	2,440	2,530	1924年	7,742	6,122	1939年	3,681	2,197
5年平均	2,344	3,013	5年平均	6,302	6,375	5年平均	3,319	1,605
1910年	1,837	3,278	1925年	7,968	5,548			
1911年	2,041	3,303	1926年	6,765	4,594			
1912年	2,819	4,230	1927年	8,144	4,500			
1913年	2,759	4,914	1928年	8,949	5,189			
1914年	3,917	4,304	1929年	8,452	4,948			
5年平均	2,675	4,006	5年平均	8,056	4,956			

出所：各年次報告書

表7-10 プカロンガン理事州煙草収穫面積

年	バウ	年	バウ	年	バウ
1900	2,121	1910	5,814	1920	7,653
1901	2,607	1911	5,604	1921	5,549
1902	2,336	1912	6,786	1922	7,956
1903	2,844	1913	5,810	1923	6,801
1904	2,649	1914	6,294	1924	7,874
平均	2,511	平均	6,062	平均	7,167
1905	3,128	1915	6,267	1925	8,321
1906	3,266	1916	6,300	1926	7,263
1907	3,189	1917	9,955	1927	7,572
1908	3,515	1918	6,297	1928	6,706
1909	4,249	1919	4,757	1929	6,954
平均	3,469	平均	6,715	平均	7,363

出所：1900-15年はK.V.各年数字、1916年以降はBagchus 1929:43

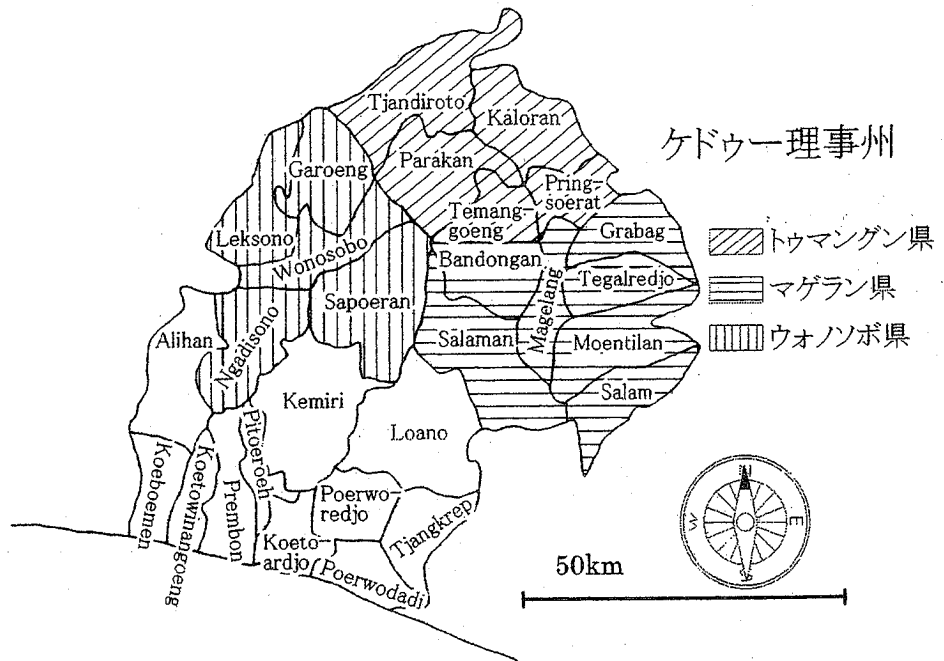
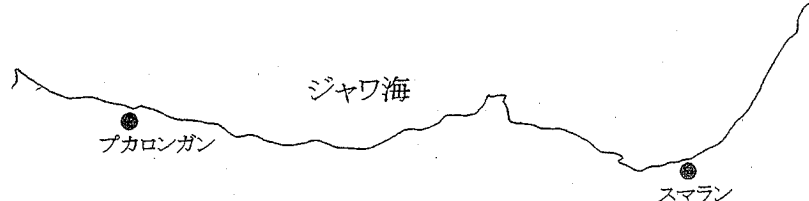
表7-11 S.C.S.と他社線との煙草輸送(トン)

年	S.C.S. 線区 内	直接輸送						継続輸送				その他	合計		
		S.J.S.		N.I.S.		S.S. via Ch.		S.S. via Ppk.		N.I.S. via S.J.S.					
		受取	引渡	受取	引渡	受取	引渡	受取	引渡	受取	引渡				
1918年								1,198							4,092
1919年								1,776		3,170					7,262
1920年	2,162	19	227	507	55	34	1,813	1,034	1,303	71	4	2		7,231	
1921年	1,583	1	168	418	57	27	2,028	820	1,547	11	0	1		6,661	
1922年	1,328	4	75	447	2	47	1,804	562	1,107	18	1	0		5,395	
1923年	1,576	1	130	355	5	35	1,668	822	1,876	0	0	0		6,468	
1924年	1,527	1	168	307	27	32	1,580	756	1,693	1	32	0		6,124	
5年平均	1,635	5	154	407	29	35	1,779	799	1,505	20	7	1		6,376	
1925年	1,095	0	122	153	25	18	1,722	1,252	1,161	0	0	0		5,548	
1926年	896	12	143	25	6	7	1,460	781	1,264	0	0	0		4,594	
1927年	1,211	1	220	51	4	19	885	703	1,406	0	1	0		4,501	
1928年	1,058	2	370	28	7	18	949	668	2,084	0	0	6		5,190	
1929年	863	5	480	84	24	21	1,139	857	1,459	15	1	0		4,948	
5年平均	1,025	4	267	68	13	17	1,231	852	1,475	3	0	1		4,956	
1930年	694	1	322	48	8	51	997	571	973	0	0	0		3,664	
1931年	350		145	37	46	11	690	287	779	1	1	0		2,354	
1932年	96	22	72	61	13	10	402	14	161	0	0	0		851	
1933年	187	5	35	182	13	20	283	29	123	20	0	0		887	
1934年	542	3	18	65	23	15	190	66	94	1	0	0		1,015	
5年平均	374	6	118	79	21	21	512	193	426	4	0	0		1,754	
1935年	315	2	24	30	16	18	61	40	105	5	0	0		616	
1936年	845	11	113	45	12	20	67	98	147	0	1	0		1,482*	

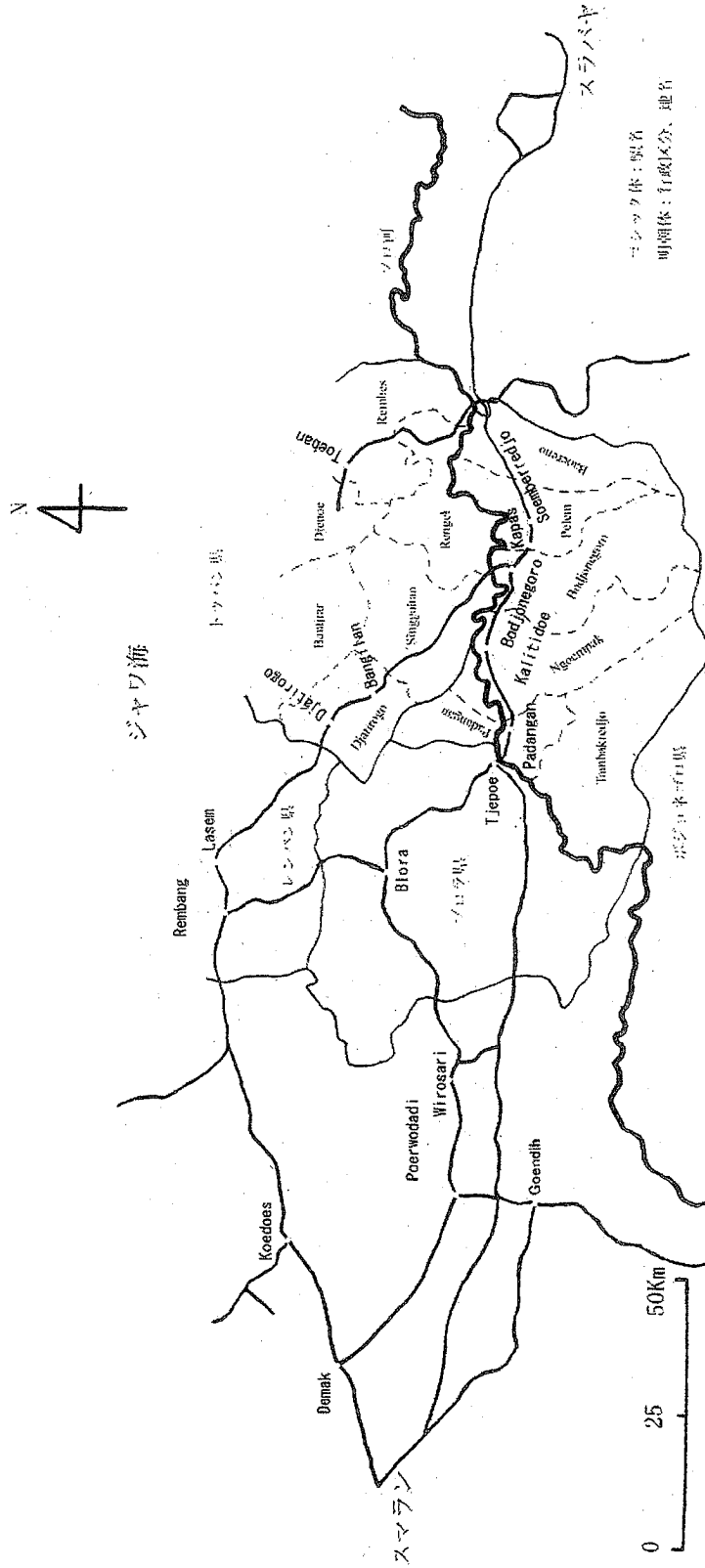
表註：直接輸送は Rechtstreeksch Verkeer、継続輸送は Doorgaande Verkeer の訳。
via Ch.はチェリボン経由、via Ppk.は Poerpoek 経由。

* 表示の他に、S.D.S.→S.C.S.(via Ppk.)122がある。合計には含まれる。

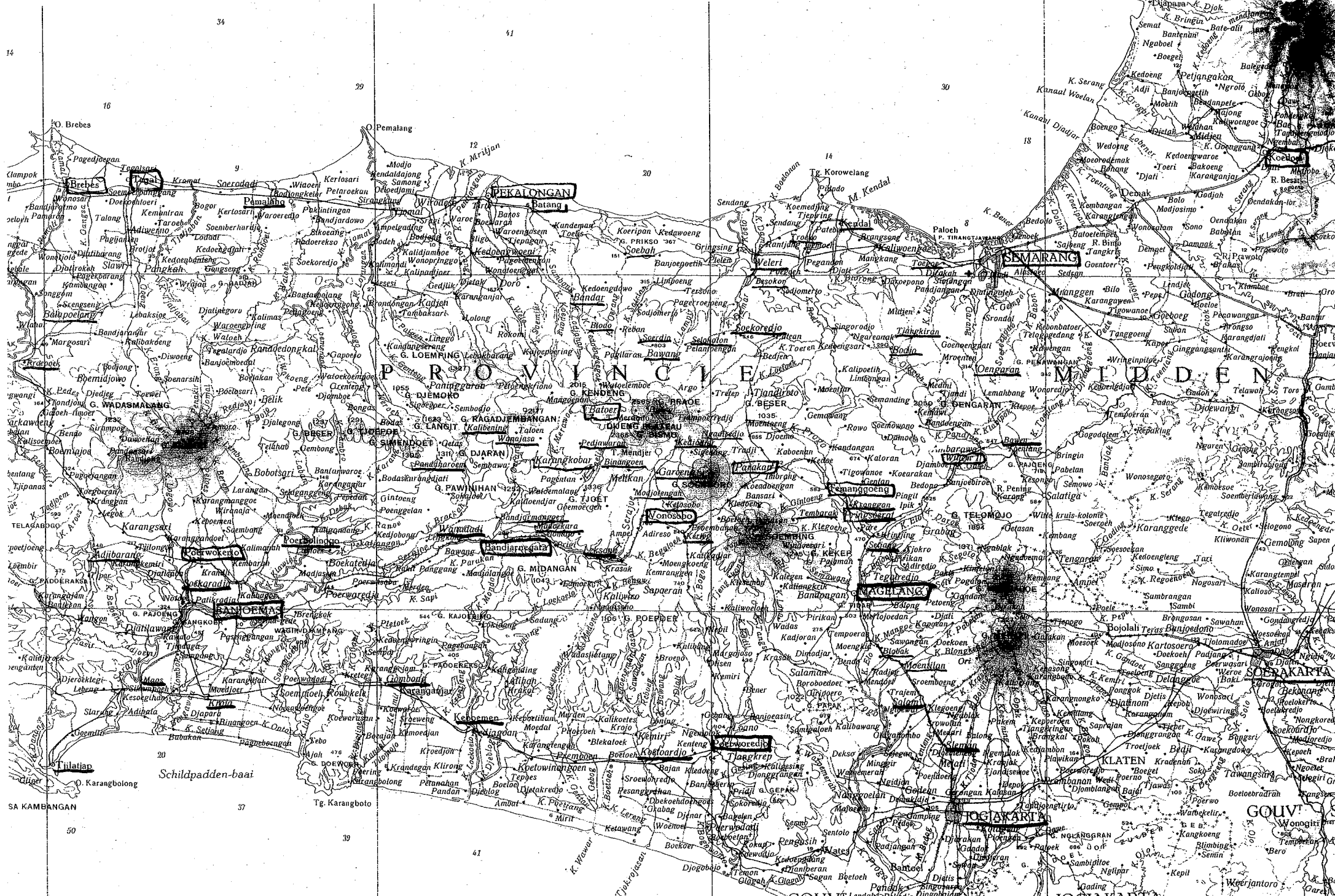
出所：S.C.S.各時期の四半期輸送報告。



植民地後期レンバン煙草の生産と流通をめぐって(植村)



レンバン煙草関連地図



14

34

41

30

16

29

20

18

O. Brebes

O. Pematang

K. Mrijan

Tg. Korowelang

SEMARANG

PEKALONGAN

Batang

SEMARANG

M I D D E N

P R O V I N C I E

G. KENDEN

G. BERAOE

G. BESER

G. BENGARAN

G. WADASMARANG

SA KAMBANGAN

Schildpadden-baai

Tg. Karangboto

G. MIDANGAN

G. SOERABOEN

G. TELOMOJO

G. KARANG

G. KARANGGEDE

G. SOENAKARTA

50

20

37

41

39

GOUV. SO